

能美市
小松市

西任田遺跡、
島遺跡2、中ノ庄遺跡2

2025

石川県
（公財）石川県埋蔵文化財センター

能美市
西任田遺跡、中ノ庄遺跡2

小松市
島遺跡2

2025

石川県教育委員会
（公財）石川県埋蔵文化財センター

にしとうだ なかのしょう
西任田遺跡、中ノ庄遺跡 2

2 0 2 5

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財) 石川県埋蔵文化財センター



2a区全景（北を望む）



2a区（上空から、右側が北東方向）



2b区（上空から、右側が北東方向）



5a区全景（南を望む,北東から）



5a区（上空から、右側が北東方向）



6a区（上空から、右側が北東方向）

例 言

- 1 本書は西任田遺跡、中ノ庄遺跡（2・3次）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県能美市西任田町、中庄町、五間堂町地内である
- 3 調査原因は北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、令和元（2019）年度から令和6（2024）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。現地調査では、空中写真測量図化作業等の関連作業を日本海航測株式会社に委託し実施した。
- 5 調査に係る費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社が負担した。
- 6 現地調査は令和元（2019）年度、令和2（2020）年度に実施した。期間・面積・担当グループ・担当者（当時）は下記のとおりである。

令和元年度

期 間 令和元年5月15日～同年12月17日

面 積 1,460㎡

担当課 調査部 特定事業調査グループ

担当者 白田義彦（課長補佐）、中家正之（専門員）

令和2年度

期 間 令和2年4月20日～同年6月25日

面 積 1,150㎡

担当課 調査部 特定事業調査グループ

担当者 熊谷葉月（主幹）、寶珍貴史（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は令和3年度～令和4年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 8 報告書の作成・編集・刊行は令和5・6年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。執筆分担は以下のとおりであり、編集・刊行は山川が行った。図版類の作成は、端と山川とで行い、遺物の写真撮影は池田拓が行った。

第1章 端 猛（特定事業調査グループリーダー） 第2章 新美祥人夢（国関係調査グループ主事）
第3章、第5章 山川史子（国関係調査グループリーダー） 第4章 パレオ・ラボ（竹原弘展・藤根 久・米田恭子・小林克也）
- 9 調査および報告書刊行には下記の機関、個人の協力を得た（敬称略）。

能美市教育委員会、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、株式会社パレオ・ラボ、日本海航測株式会社、久田正弘、藤田邦雄、和田龍介
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。

(1)方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。

(2)水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。

(3)出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

- (4)遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を、木製品の砂トーンはコゲ（炭化）を表す。また石器の使用痕、擦痕には15%のアミをかけた。
- (5)遺構の名称は、下記の略記号に番号（算用数字）を付し表記した。
- S I：竪穴建物、S B：掘立柱建物、S K：土坑、S D：溝、P：柱穴・小穴、S X：その他（不
明確遺構等）
- (6)引用文献、参考文献は章単位で記載している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 試掘調査の状況	2
第3節 調査の経過	4
第4節 整理等作業の経過	5
第2章 遺跡の位置と環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 調査の方法と成果	11
第1節 調査の方法	11
第2節 1a 区の遺構と遺物	11
第3節 2a・2b 区の遺構と遺物	14
第4節 5a 区の遺構と遺物	41
第5節 6a 区の遺構と遺物	52
第6節 7a 区の遺構と遺物	70
第7節 8a・8b 区の遺構と遺物	77
第4章 自然科学的分析	88
第1節 木製品の樹種同定	88
第2節 漆器の塗膜分析	94
第3節 石器の石材同定	98
第5章 総 括	102

報告書抄録・写真図版

挿 図 目 次

第1図	北陸新幹線（金沢・福井間）概略図	1	第34図	5区全体図（2）	43
第2図	試掘調査柱状図	2	第35図	5a区調査区土層断面図	44
第3図	試掘調査箇所位置図	3	第36図	5区SE01、P01・03・04・07 遺構図	45
第4図	能美市以南で調査した遺跡	4	第37図	5a区P 07～12、SD 03 遺構図	47
第5図	遺跡の位置	6	第38図	5a区P 13～15 土層断面図	48
第6図	周辺の遺跡	10	第39図	5区SB 01（1）平面図、柱穴エレベーション	49
第7図	調査区位置図	12	第40図	5a区SB 01（2）、SD 05 遺構図	50
第8図	1a区平面図・土層断面図	13	第41図	5a区P 21～24 遺構図	51
第9図	2区全体図（1）	15	第42図	5a区遺構出土遺物	52
第10図	2区全体図（2）	16	第43図	6区主要遺構配置図、SD10土層断面図	53
第11図	2区SB 02 遺構図	17	第44図	6a区-A（SD26・28）遺構図	54
第12図	2区SB 02 南北方向柱穴エレベーション・土層断面図	18	第45図	6a区SD 11	55
第13図	2区SB 02 東西方向柱穴エレベーション・土層断面図	19	第46図	6a区-B（P 110・113）遺構図	57
第14図	2区SB 03 遺構図	20	第47図	6a区-C（SD 10、P 111）	58
第15図	2区SB 06 遺構図	22	第48図	6a区-D～E（SD 27・29・31、P 93）遺構図	59
第16図	2区SB 06 南北柱列土層断面図	23	第49図	6a区-E～F（SI01周辺1）遺構図	61
第17図	2区SB 10 遺構図・柱列土層断面図	24	第50図	6a区-E～F（SI 01周辺2、P 105）遺構図	62
第18図	2区P 109～P 111、SD 103、SD 31・33、SK 101 遺構図	25	第51図	6a区-G（SB 04）遺構図	63
第19図	2区SK 103・106 遺構図	26	第52図	6a区-G ピット遺構図・写真	64
第20図	2区NR 01、SK 102・105、P 101～P 103 遺構図	28	第53図	6a区-H（SD 3・4・25・33）遺構図	65
第21図	2区NR 01、SK 104、SD 22、SD 15・104、P 104・105 遺構図	29	第54図	6a区-H～I（SB 05）遺構図、SD 3写真	66
第22図	2区SD 101・102・14 遺構図、調査区東壁断面	30	第55図	6a区-H～I SB 05 柱穴遺構図	67
第23図	2区SD 07・105、P 106・107・108 遺構図	32	第56図	6a区遺構出土遺物（1）	68
第24図	2区P 121・122、東壁2b区北、SK 109、SD 108 遺構図	33	第57図	6a区遺構出土遺物（2）	69
第25図	2区SD 06・108・110、P 123～P 126 遺構図	34	第58図	6a区遺構出土遺物（3）	70
第26図	2区SK 107・108、P 141 遺構図	35	第59図	7区上層全体図、工事立会範囲断面図	71
第27図	2区SD 112・113 遺構図	36	第60図	7a区東壁土層断面	72
第28図	2区SD 115 遺構図、東壁土層断面図	37	第61図	7区下層全体図（1）	74
第29図	2区遺構出土遺物（1）	38	第62図	7区下層全体図（2）、工事立会範囲	75
第30図	2区遺構出土遺物（2）	39	第63図	7a区下層SD 18 または 19・20・21 遺構図	76
第31図	2区遺構出土遺物（3）	40	第64図	7a区遺構出土遺物	77
第32図	2区遺構出土遺物（4）	41	第65図	8区全体図	79
第33図	5区全体図（1）	42	第66図	8a区西壁土層断面、SD 5 遺構図	80
			第67図	8a区SD 5北側・SD 6平面図	81
			第68図	8a区SD 17 周辺平面図	82
			第69図	8a区SD 6・11・17 遺構図	83
			第70図	8a区遺構出土遺物	84

第 71 図	西任田・中ノ庄遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（1）……………91	第 74 図	各塗膜層の赤外分光スペクトル……………96
第 72 図	西任田・中ノ庄遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（2）……………92	第 75 図	漆器塗膜構造……………97
第 73 図	西任田・中ノ庄遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（3）……………93	第 76 図	遺跡とその周辺の地質図……………100
		第 77 図	岩石表面の実体顕微鏡写真……………101
		第 78 図	調査区と遺跡位置……………102
		第 79 図	西任田遺跡、中ノ庄遺跡の遺構分布……………103

表 目 次

第 1 表	調査体制一覧表……………5	第 9 表	分析対象一覧……………90
第 2 表	周辺遺跡一覧表……………9	第 10 表	生漆の赤外吸収位置とその強度……………94
第 3 表	土器・陶磁器観察表 1……………85	第 11 表	塗膜層の X 線分析結果……………95
第 4 表	土器・陶磁器観察表 2……………86	第 12 表	塗膜分析結果……………95
第 5 表	石器観察表……………87	第 13 表	石製遺物の詳細と石材……………98
第 6 表	木製品観察表……………87	第 14 表	石製品と石材の関係……………99
第 7 表	木製品の時期・器種別樹種同定結果……………88	第 15 表	ヒスイ（実測 No.21）の化学組成……………99
第 8 表	西任田・中ノ庄遺跡出土木製品の同定試料一覧……………90		

写 真 図 版 目 次

図版 1	1 a 区完掘状況、南壁土層断面、東壁土層断面、 仮 S D 101、攪乱東壁土層断面 2 a 区遺構検出作業、遺構検出状況、遺構掘 削作業	図版 9	2 b 区手前から S D 108・S D 06 2 b 区手前から S D 113・S D 112 2 a 区 S D 07・S D 14 土層断面 2 a 区 S D 15・S D 30・31・N R 01 土層断面 S D 101・調査区東壁断面、S D 102 断面、 2 b 区 S D 06 土層断面／完掘状況 S D 108・S D 06 合流部土層断面
図版 2	2 b 区 S B 02・S B 06・S K 108、P 130・P 133・P 134・P 135 土層断面（S B 02）	図版 10	2 b 区 S D 108 土層断面／完掘状況、東壁・ S D 115 断面、2 b 区北調査区東壁断面 5 a 区 S B 01 周辺完掘状況
図版 3	2 b 区 P 136・P 137・P 138・P 139・P 140・P 142・P 143・P 144 土層断面（S B 06）	図版 11	5 a 区 P 16・P 17・P 19・P 20 土層断面 S E 01 完掘状況／土層断面／下駄出土状況
図版 4	2 b 区 S B 10、P 145・P 146・P 147・P 148 土層断面（S B 10）	図版 12	5 a 区 S D 03 完掘状況／断面①／断面② 東壁断面 2・3、6 a 区 S D 04 西壁断面、 6 a 区 S D 23・S D 24 土層断面、 6 a 区 S D 25 土層断面・完掘状況
図版 5	2 b 区 P 149・P 150 土層断面 2 a 区 S K 101・S K 103・S K 106・S D 31・ S D 33 完掘状況、S K 101・S K 103 土層断 面	図版 13	6 a 区 S D 27・S D 29・S D 31 土層断面 S D 30 土器出土状況、P 93 柱根出土状況 S I 01、P 95 土層断面／礎板出土状況
図版 6	2 a 区 S K 102・104・105 完掘状況／土層断 面 2 b 区 S K 107 遺物出土状況／土層断面	図版 14	6 a 区 P 98・P 100・P 112 土層断面（S I 01） P 112 材出土状況、P 97・99・111 土層断面 P 111 礎板出土状況
図版 7	2 a 区 S K 106 土層断面／遺物出土状況／完 掘状況／南西隅ピット／底面板材痕跡／北東 隅底面板材出土状況／南西隅直立材出土状況		
図版 8	2 b 区 S K 108 土層断面／完掘状況 2 a 区手前から S D 15・S D 14・S D 07 2 a 区手前から S D 22・S K 104・奥 N R 01		

- | | | | |
|-------|--|-------|--|
| 図版 15 | 6a 区 P 116 完掘状況、S B 04・S B 05、
P 106 土層断面
P 107・P 108 土層断面／完掘状況 | 図版 19 | 8a 区 S D 5 南側西壁土層断面／南側土層断面
S D 6 土層断面／完掘状況、S D 17 土層断面
8b 区 S D 11 西壁断面／完掘状況
西任田・中ノ庄遺跡から白山を望む |
| 図版 16 | 7a 区上層水田面検出状況／完掘状況 | 図版 20 | 2a・b 区出土遺物（1） |
| 図版 17 | 7 区工事立会範囲 上層 S D 01 完掘状況、
下層西壁断面、下層 S D 26 確認トレンチ断面
7a 区 S D 18 または S D 19 完掘状況／土層
断面、S D 20・21 完掘状況／土層断面 | 図版 21 | 2a・b 区出土遺物（2） |
| 図版 18 | 8a 区全景、西壁①・②・③土層断面
S D 5 北側完掘状況／土層断面／北壁土層
断面 | 図版 22 | 2a・b 区出土遺物（3） |
| | | 図版 23 | 5a 区出土遺物・6a 区出土遺物（1） |
| | | 図版 24 | 6a 区出土遺物（2） |
| | | 図版 25 | 6a 区出土遺物（3） |
| | | 図版 26 | 7a 区・8a・b 区出土遺物 |

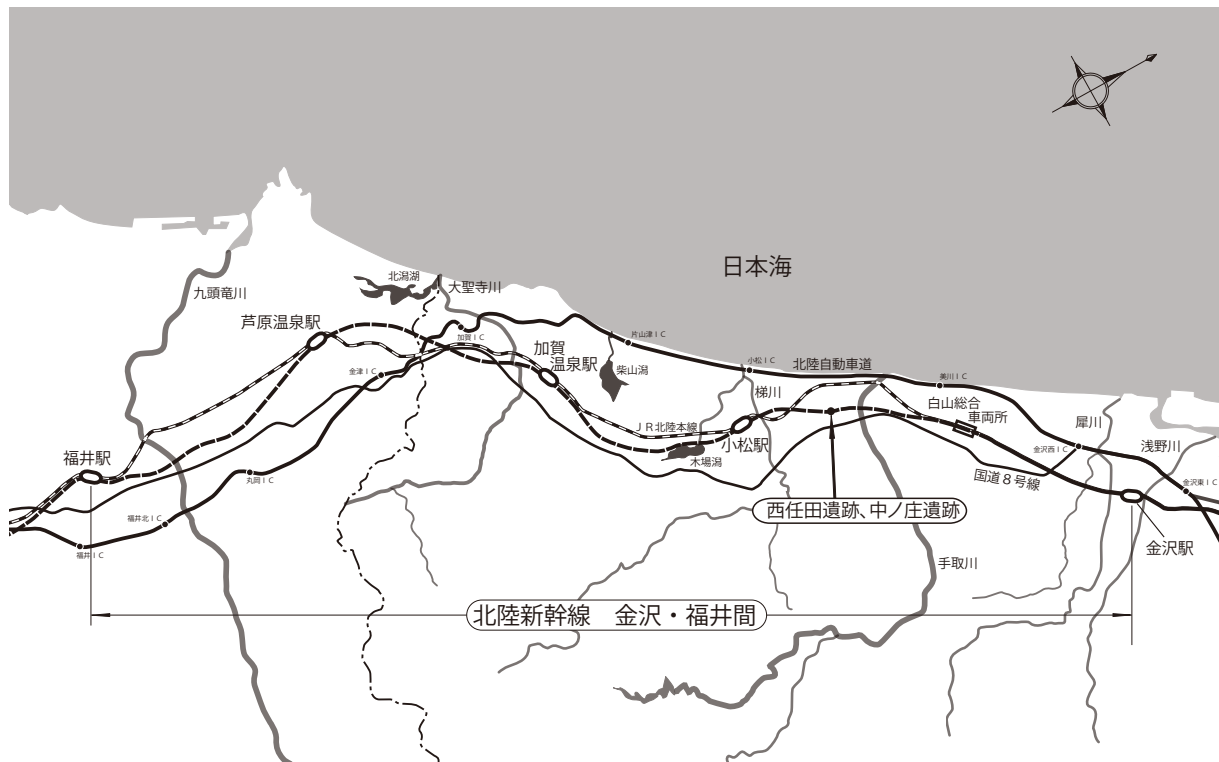
第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

西任田遺跡、中ノ庄遺跡の発掘調査は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構を建設主体とする北陸新幹線建設事業に伴い、石川県教育委員会及び公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」）により実施されたものである。

北陸新幹線は「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道」である。平成9（1997）年に東京駅から長野駅まで部分開業しており、平成27（2015）年には長野駅から金沢駅までの区間が開業された。これに伴い、石川県内では平成10～24年度にかけて、津幡町地内から白山総合車両所までの区間において発掘調査が実施された。その後、福井県敦賀までの延伸が決定され、平成24（2012）年6月に国土交通省による認可を受けて事業が開始されることとなった。同年8月北陸新幹線（金沢・敦賀間）建設工事に着工し、8月19日には起工式が行われている。平成27年1月、政府は完成・開業時期を3年前倒しし平成34（2022）年度の完成を目指すことを決定したが、令和3（2021）年3月、工事の遅れ等から工事完成を令和5（2023）年度末と新たに認可している。

白山総合車両所から福井県境までの工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いについては、鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社（以下「事業者」）から石川県教育委員会文化財課（以下「県文化財課」）に照会があり、県文化財課は計画範囲内に22箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを回答した。また、周知の埋蔵文化財包蔵地については、文化財保護法第94条の規程に基づき発掘調査等の保護措置が必要となること、周知外についても工事中の不時発見時には同法第97条に基づく保護措置が必要となることから、円滑な埋蔵文化財の保護と建設事業の計画的な実施を調整す



第1図 北陸新幹線（金沢・福井間）概略図

平成 25 年度には、白山総合車両所内の本線部分に係る宮保 B 遺跡や米永ナデソオ遺跡、高見遺跡の本調査が実施された。平成 27 年度から、新幹線小松駅舎部分の八日市地方遺跡の調査が実施された。平成 28 ～ 29 年度に本線部分に係る、能美市・小松市・加賀市の遺跡で本格的調査が行われ、令和元～ 2 年度にかけては、管理用道路などに係る調査が行われた。

北陸新幹線建設事業に伴う西任田遺跡、中ノ庄遺跡の試掘状況については、調査担当の県文化財課からの提出資料に基づき報告する。平成27年10月1日から2日、8日から9日、そして23日に能美市赤井町から小松市犬丸町までの範囲内で試掘調査を実施した（第2、3図参照）。

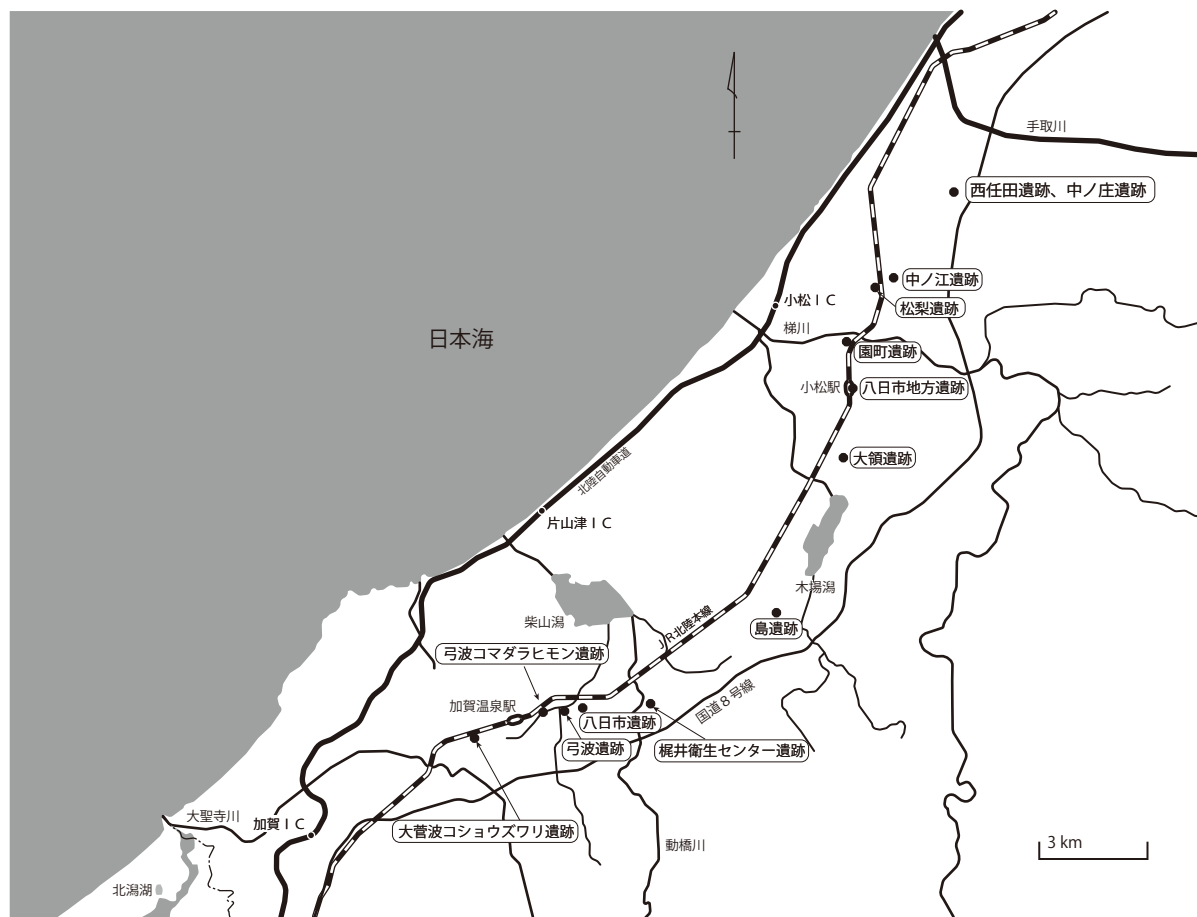
試掘坑No.1では、現地表下120cmで砂の混ざる灰色系の粘質土を確認した。試掘坑No.2から試掘坑No.16の基本層序は上から、耕土、水田の床土、灰褐色粘質土、遺物包含層と思われる暗灰褐色ないし黒褐色粘質土、地山層の灰黄褐色粘質土となる。また、現地表下50cm、70cmで地山を確認し、包含層は10cm程度である。さらに、試掘坑No.2・No.3・No.5・No.15で遺構を検出し、No.12で土師器片が出土した。試掘坑No.17～21では腐植物を含む暗灰色粘土層が見られ安定した地盤は検出されなかった。

以上のことから、試掘坑No.2～No.16の範囲で周知の埋蔵文化財包蔵地である「西任田遺跡」、「中ノ庄遺跡」を確認し、調査対象範囲とした。





第3図 試掘調査箇所位置図 (S=1/5000)



第4図 能美市以南で調査した遺跡

第3節 調査の経過

西任田遺跡、中ノ庄遺跡は、県埋文センターによって平成 28 年度に本線部分の発掘調査が実施され、調査成果は令和 2 年度に刊行した発掘調査報告書にまとめられている。本誌で報告するのは、新幹線建設工事に伴い分断される現道の取り付け道路部分の発掘調査成果で、令和元・2 年度に現地調査が、令和 3 年度に文化財課による工事立会が行われた。当初の新幹線建設計画では、この道路部分については舗装を行わない簡易的な工法で建設する設計であり、埋蔵文化財への影響も回避できるものであった。しかしその後、地元等との調整を経て計画が見直され、埋蔵文化財への影響が及ぶ設計となったことから、再度文化財保護法第 94 条の通知が提出され発掘調査の対応となった。

平成 31 年 4 月 1 日には事業者と石川県、石川県と県埋文センターの間で委託契約を締結し、県埋文センターからは発掘届を県文化財課に提出した。なお、調査体制は第 1 表のとおりである。道路や水路などを境に 1 ～ 10 区に分割した本線調査区を踏襲し、それぞれ隣接する本線調査区に a、b の小文字を付して調査区名とした。

現地調査は、令和元年5月15日から同年12月17日にかけて6a、7a、8a、8b区の1,460㎡を対象に実施、翌令和2年4月20日から6月25日にかけて1a、2a、2b、5a区の1,150㎡を対象に実施した。

令和元年度の調査

4月17日に事業者、IV（現地工事実施）、県文化財課、県埋文センターによる現地打合せを行い、

環境整備状況、調査準備、発掘調査の進行などについて協議・確認をした。5月16日より北側の8a区から表土除去を行い、5月21日に作業員による現地作業が開始された。6月7日には8a区の空中写真測量を行い、6月14日に調査を終了した。続いて6a区は6月5日から表土除去、7月18日に空中写真測量を実施し、7月30日に調査を終了した。調査は併行して実施されている本線工事の進捗状況に影響され、調整を続けながらの実施となった。7月31日から11月6日までは工事との調整がつかず、調査担当者は同じ事業の加賀市弓波遺跡の発掘調査に従事している。その後11月7日から8b区の表土除去、11月11日からは7a区の表土除去を行い、調査を再開した。8b区は11月19日に空中写真測量を行い12月5日に調査完了、7a区は11月22日に空中写真測量を行い12月17日に調査が完了した。

令和2年度の調査

3月24日に事業者、JV、県文化財課、県埋文センターによる現地打合せを行い、環境整備状況、調査準備、発掘調査の進行などについて協議・確認をした。4月20日より北側の5a区の表土除去を行い、4月23日に作業員による現地作業が開始された。令和元年度同様、調査は併行して実施されている本線工事の進捗状況に影響されたが、天候にも恵まれ、5a区の空中写真測量は5月8日に実施、引き続き5月13日には1a区の表土除去を行った。1a区は15㎡と狭い調査区であり、手実測による平面図作成を行った。1a区、5a区は5月15日に調査を完了している。5月19日には2a区の表土除去を行い、5月29日に空中写真測量、6月2日に2b区の表土除去、6月23日に空中写真測量を実施し、6月25日に2a区、2b区の調査が完了している。

令和3年度の工事立会

9月6日から8日にかけて7a区、2a区の南側について県文化財課が工事立会を実施した。

第4節 整理作業の経過

事業者から依頼を受けた県教育委員会の委託事業として、令和3、4年度に出土品整理作業のうち記名、分類、接合、実測・トレース作業を調査部特定事業調査グループが担当して実施した。また、自然科学的分析について株式会社パレオ・ラボに樹種同定、石質同定、漆器塗膜分析・赤外分光分析・漆下地蛍光X線分析を委託して実施した。

報告書刊行については、令和5、6年度に原稿執筆、図版作成、出土品の写真撮影などを行い、編集・校正作業を経て刊行することとなった。

現地調査	平成31年4月1日～令和元年3月31日	現地調査	令和2年4月1日～令和3年3月31日	整理期間	令和3年4月1日～令和4年3月31日
調査主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 田中新太郎	整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 徳田 博	整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 徳田 博
総 括	紺野 欽一(専務理事)	総 括	田村 彰英(専務理事)	総 括	田村 彰英(専務理事)
事 務	釜親 利雄(事務局長)	事 務	北谷 俊彦(事務局長)	事 務	北谷 俊彦(事務局長)
総 務	伊藤 直(総務GL)	総 務	伊藤 直(総務GL)	総 務	北谷 祥子(総務GL)
調 査	垣内 光次郎(所長)	調 査	伊藤 雅文(所長)	調 査	伊藤 雅文(所長)
	伊藤 雅文(調査部長)		川畑 誠(調査部長)		川畑 誠(調査部長)
	澤辺 利明(特定事業調査GL)		澤辺 利明(特定事業調査GL)		中屋 克彦(特定事業調査GL)
担 当	白田 義彦(特定事業調査G課長補佐)	担 当	熊谷 葉月(特定事業調査G主幹)	担 当	柿田 祐司(県関係調査GL)
	中家 正之(特定事業調査G専門員)		寶珍 貴史(国関係調査G嘱託調査員)		
整理期間	令和4年4月1日～令和5年3月31日	整理期間	令和5年4月1日～令和6年3月31日	整理期間	令和6年4月1日～令和7年3月31日
整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 北野 喜樹	整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 北野 喜樹	整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 北野 喜樹
総 括	田村 彰英(専務理事)	総 括	加美 弘行(専務理事)	総 括	加美 弘行(専務理事)
事 務	北谷 俊彦(事務局長)	事 務	北谷 俊彦(事務局長)	事 務	寺沢 昌士(事務局長)
総 務	杉林 賢明(総務GL)	総 務	谷鋪 繁(総務GL)	総 務	谷鋪 繁(総務GL)
調 査	川畑 誠(所長)	調 査	川畑 誠(所長)	調 査	土屋 宣雄(所長)
	土屋 宣雄(調査部長)		土屋 宣雄(調査部長)		中屋 克彦(調査部長)
	中屋 克彦(特定事業調査GL)		端 猛(特定事業調査GL)		金山 哲哉(特定事業調査GL)
担 当	柿田 祐司(県関係調査GL)	担 当	端 猛(特定事業調査GL)	担 当	山川 史子(国関係調査GL)

第1表 調査体制一覧表

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

西任田遺跡、中ノ庄遺跡は石川県能美市（旧根上町）西任田町、中ノ庄町に所在する。現在の能美市は、平成 17（2005）年に能美郡根上町、寺井町、辰口町の合併により誕生した市であり、東西約 18km、南北 2.5～7km、面積 84.14km² の広がりを持ち、人口は約 5 万人（令和 6 年 1 月現在）の市である。市域の北側には川北町、東側には白山市、南側には人口では県下第 3 位の都市である小松市が隣接している。市の北側には県下最大の 1 級河川である手取川、東側には石川県、福井県、岐阜県の 3 県にまたがる白山（標高 2,702 m）を頂上とする加越山地とその前縁を占める能美・江沼丘陵が広がり、南側には鍋谷川が流れ、西側は日本海に面している。能美・江沼丘陵の北辺一帯は「辰口丘陵」と呼称されており、平坦面が多く起伏の緩やかな丘陵地形を呈していることが特質としてあげられる。

石川県中部から南部にかけて広がる沿岸低地帯は総称して「加賀平野」と呼ばれ、北はかほく市河北潟の北縁から南は加賀市大聖寺川の河口までを含み、北東から南西方向に長さ約 60 km に延びる細長い平野である。加賀平野を大別すると、北部の河北平野、中部の手取川扇状地、南部の小松・江沼平野に分けられ、能美市は中部の手取川扇状地南端と南部の小松・江沼平野に属している。両遺跡の位置する小松平野は沖積低地が広がり、海岸部には海岸砂丘が形成されている。沖積低地の平野部では、舌状に延びる微高地上に各時代に営まれた遺跡が立地している。



第5図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

西任田遺跡、中ノ庄遺跡周辺の遺跡を時代ごとに概観する。なお、本節の遺構名（番号）は、第 2 表と第 6 図の番号が対応し、遺跡名の表記は石川県教育委員会が管理するウェブサービスの「いしかわ文化財ナビ」を参考としている。

西任田遺跡（1）、中ノ庄遺跡（2）が所在する能美市内には 327 カ所の埋蔵文化財包蔵地が確認されている。市域における遺跡の分布傾向を概観してみると、海岸部から丘陵地帯に向かって遺跡数が増加する傾向が見られる。丘陵部には旧石器時代から中世に至る各時代の遺跡が密集している。

能美市域内で確認される最古の遺跡は後期旧石器時代まで遡ることができる。旧石器時代や縄文時代の遺跡の多くは辰口丘陵や能美丘陵で発見されている。石川県内で初めて旧石器時代の遺跡が調査された灯台笹遺跡からはナイフ形石器や搔器などの石器が出土したことで、研究史上重要な位置を占めている。また、灯台笹下遺跡からは石器集中ブロックが確認され、珪質頁岩などの石材で作られたナイフ形石器や石刃、搔器などの石器が出土している。他にも、宮竹ショウガヤシキ C 遺跡や、小松市八里向山 B 遺跡などでも後期旧石器時代の遺物が確認されている。

縄文時代草創期から早期にかけては、宮竹ショウガヤシキB遺跡や灯台笹下遺跡で若干量の遺物が確認されている。前期には旭台遺跡群が存在し、中期に入ると遺跡数の増加と集落の大型化が見られ、気候の温暖化とともに定住化が進行したものと考えられている。中期の遺跡としては、萌生遺跡や宮竹ショウガヤシキ遺跡群、長滝B遺跡などがあげられる。萌生遺跡では、竪穴住居7棟、配石遺構11基などが確認された他、土器と共に石皿や磨石類、石錘が出土している。後・晩期に入ると、長滝遺跡や岩内遺跡などがあげられるが、気温の寒冷化にともなって遺跡数は減少する傾向がみられる。

弥生時代前期・中期の遺跡数は極めて少なくこれまで不明な部分が多かった中で、牛島ウハシ遺跡(27)から弥生時代前期～中期の土器が多量に出土した。その中から、遠賀川式の壺が2点確認されている。また、近年の発掘調査で中ノ江遺跡(3)からも遠賀川式土器の破片が出土している。中期に入ると小松市八日市地方遺跡(96)のような拠点集落が出現するが、能美市内では和田山下遺跡(13)や寺井山遺跡(8.寺井山古墳群)などから遺物が散見的に確認されるのみである。中期の拠点集落が衰退し、分村化が進む後期に入ると遺跡数が徐々に増加し、後期後半から終末期にかけて集落の盛行期を迎える。市内各所に集落が形成されるが、平野部においては市南部の鍋谷川流域に遺跡が多く分布している傾向がみられる。鍋谷川は小松市北部で梯川に合流するが、梯川流域にも弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多数立地している。梯川周辺の遺跡の特徴として、弥生時代後期から古墳時代にかけて下流から上流に向かって遺跡が増加・拡散していく傾向がある。

能美市域における弥生時代の遺跡は、海岸砂丘上に弥生時代後期の土器が出土した加賀舞子遺跡(5)があり、平野部には本報告の対象遺跡である西任田遺跡や中ノ庄遺跡、平地式建物や布掘式掘立柱建物が確認された小松市高堂遺跡(17)、小松市にまたがる中ノ江遺跡などがある。また、法仏式から月影式にかけての土器が寺井山、和田山、末寺山、秋常山、西山といった独立丘陵からも出土している。和田山からは、弥生時代後期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。それぞれの独立丘陵上に集落が形成されているが、社会的緊張状態であった時代に各地で防御色の強い高地性集落が形成されていく中で、これらの集落が高地性集落としての機能を有していたかは疑問が多く意見が分かれている。弥生時代終末期に入ると西山で土坑墓群が確認され、さらに寺井山では鉄製武器を副葬した全長14.0mの区画墓である6号墓が造営される。

古墳時代に至ると、和田山、寺井山、末寺山、秋常山、西山に80基以上の古墳が丘陵間を移動しつつ古墳時代前期前半から後期後半にかけて継続して造営されていく。これらの古墳は丘陵ごとに古墳群として呼称され、総称して「能美古墳群」として国史跡に指定されている(平成25年10月17日付)。特筆すべき点として、和田山古墳群(11)からは北陸唯一の出土品である六鈴鏡(1号墳)や鈴付銅剣(2号墳)が出土している。また、2つの粘土槨が検出された5号墳からは眉庇付冑、三角板鋌留短甲などの鉄製武具と共に刀剣、ヤリ、鉾などの鉄製武器が多量に副葬されおり、加賀地域の広域首長墓に位置づけられている。また、周溝内から刻書須恵器2点を含む多量の高坏群が出土した23号墳などがあげられる。また、北陸最大級の前方後円墳である秋常山1号墳(墳長約140m)も古墳群に含まれており、古墳時代の政治的動向、古墳文化の展開過程を知るうえでも極めて重要な古墳群として位置づけられている(菅原編2013)。古墳群が形成される一方で、古墳時代の集落については、高座遺跡や和田山下遺跡から遺物が散見されているにすぎなかった。しかし、近年の発掘調査で西任田遺跡や中ノ江遺跡から当該時期の遺構が確認され始めている。西任田遺跡では弥生時代後期から古墳時代前期の水田に伴う溝や、古墳時代後期から末期にかけての井戸や掘立柱建物、溝などが確認された(浜崎ほか2021)。中ノ江遺跡と合わせ、市域における古墳時代の集落動向について理解が進むことを期待したい。また、梯川に近い小松市千代・能美遺跡(49)から首長居館と考えられ

る施設群が見つかり、当該地域における古墳群との関わりが指摘されている。

律令期の市域一帯は越前国江沼郡に属しており、この時期の遺跡としては、徳久・荒屋遺跡や下開発遺跡などがあげられる。徳久・荒屋遺跡からは、「庄」・「莊」と墨書された須恵器が出土していることから当該地が『東大寺諸莊園文書并絵図等目録』に記載されている「越前国江沼郡幡生庄」と比定されている（小坂 2004）。弘仁十四（823）年に江沼郡と加賀郡の二郡から加賀国が立国し、当遺跡周辺は加賀国能美郡となる。能美郡は、野身（能美）、加留美（軽海）、也万加美（山上）、也万之多（山下）、宇波之（宇橋）の五郷と「安宅」、「比楽」の二駅から構成されており、遺跡の位置する旧根上町周辺はその中の、宇橋郷もしくは山下郷に比定されている。能美郡には、加賀国の行政機関である国府と郡単位の行政機関である郡家が設けられたと文献等から推測されている。郡家については旧寺井町西部から旧根上町東部、小松市北東部の一帯にあったと推定されているが、これまでの発掘調査からは郡家に相当する遺跡は確認されていない。しかし、推定地周辺の遺跡にあたる小長野C遺跡（20）からは、平安時代初頭を中心とした遺構から多量の墨書土器が出土し、その中から「能美」と記された墨書土器が見つかったことから一躍注目をあびている。また、小松市高堂遺跡からは、「金光明最勝王経四天王護国品」と記された護国經典を示す木簡、「隆」「改吉」「□弥」などと記された 100 点以上の墨書土器が出土したほか、柱穴から皇朝十二銭がまとまって確認され地鎮が行われたことを示している。これらの遺跡は、出土遺物の特異性から郡家関連遺跡として考えられている。また、中ノ庄遺跡では、昭和 58（1983）年に行われた調査で、掘立柱建物 2 棟と土坑等が検出されている。土師器、須恵器の他に掘立柱建物の柱穴に伴う礎板などが出土し、平安時代前期の集落が展開していたことが確認されており、郡家の推定地としてあげられている。

当該期の丘陵部では、須恵器や瓦を焼いた窯跡が多数確認されている。これらの窯跡群は、能美市大口町から小松市河田町にかけての辰口丘陵に分布し、東西 7 km、南北 4 km の範囲に約 50 基の窯跡群が確認され、総称して「能美窯跡群」と呼称されている。窯跡群は広範囲に分布しているため大きな括りとして「辰口北群」、「辰口南群」、「寺井群」、「小松群」の 4 群に分けられ、さらにそれぞれのまとまりから支群名が付けられている（菅原・知田 2018）。開窯は 7 世紀前半とされ須恵器生産を主として行われていたが、7 世紀中頃から後半にかけて湯屋窯跡群を中心に瓦生産も開始する。なかでも瓦陶兼業窯として瓦と須恵器を焼成した湯屋窯跡群 B 支群 1 号窯で焼成された瓦が、白鳳寺院である野々市市末松廃寺へ供給されていたことが判明し、郡域を超えた需給関係が注目されている。能美窯跡群としては、9 世紀前葉に生産のピークを迎え、窯場を移動させつつ継続して生産を行っていくが、9 世紀中頃には急激に生産が衰退し、末葉には生産の終焉を迎えることになる。また、能美窯跡群の生産動向については、県内最大の窯業地である南加賀古窯跡群との関連性が指摘されている。

中世の本遺跡周辺は、根上地域を中心とする郡家荘（板津荘）にあたるものと想定されている。郡家荘の他にも能美荘や開発荘などの中世荘園が各地に展開していたと考えられる。しかし、考古学的な資料はこれまで断片的にしか見つかっておらず、中世における市域の様相は明らかになっていないのが現状である。北陸新幹線に伴う発掘調査で、西任田遺跡からは平安時代末～鎌倉時代にかけての遺構が検出された。11 世紀～12 世紀には総柱式掘立柱建物群が、河川帯に挟まれた微高地状に距離をおいて出現し、同一方位で 2 棟がセットになっている様子がうかがわれ、区画溝も見られる。13 世紀以降は掘立柱建物も減少し、出土遺物も少なくなることから水田として利用されていたと考えられ、それ以降現代まで、生産域として土地利用されていたとみられる。

引用・参考文献

- 垣田修児・杉野洋一郎 1984 『根上町中庄遺跡』 石川県根上町教育委員会
- 辰口町埋蔵文化財調査委員会ほか 1987 『萌生遺跡』 辰口町教育委員会
- 小坂清俊 1987 『和田山下遺跡』 石川県能美郡寺井町教育委員会
- 戸潤幹夫・湯尻修平編 1990 『小松市高堂遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター
- 新修根上町史編纂専門委員会 1995 『新修 根上町史 通史編』 根上町役場
- 井上誠一 1999 『牛島ウハシ遺跡』 石川県能美郡寺井町教育委員会
- 小坂清俊 2004 『小長野 C 遺跡』 石川県能美郡寺井町教育委員会
- 菅原雄一編 2013 『能美古墳群 - 総括編 -』 能美市教育委員会
- 越前慎子・浜崎悟司ほか 2017 「西任田遺跡・中ノ庄遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第 37 号 (公財) 石川県埋蔵文化財センター
- 菅原雄一・知田真依子 2018 『湯屋窯跡群Ⅳ』 能美市教育委員会
- 浜崎悟司・久田正弘ほか 2021 『西任田遺跡、中ノ庄遺跡』 (公財) 石川県埋蔵文化財センター

No.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	1000400	西任田遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世	49	303000	千代・能美遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世
2	1000300	中ノ庄遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世	50	303100	千代オオキダ遺跡	散布地, 集落	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世
3	1000200	中ノ江遺跡	散布地, 集落	弥生～中世	51	303200	千代城跡	城館	中世
4	1000500	福島遺跡	散布地	古墳	52	305300	千代小野町遺跡	散布地	古墳
5	1000100	加賀舞子遺跡	散布地	古墳	53	305400	古府しのまち遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世
6	1001700	吉光一里塚	その他	近世	54	303300	千代本村遺跡	散布地	古墳
7	1001600	吉光遺跡	散布地	弥生, 中世	55	303400	横地遺跡	散布地	縄文
8	1001801～ 1001806	寺井山古墳群	古墳	古墳	56	305600	古府フンド遺跡	散布地	古代
9	1001900	末寺山古墳群	古墳	古墳	57	305500	古府遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世
10	1002000	末寺山下遺跡	散布地	古代	58	306000	十九堂山遺跡	散布地	縄文, 古代
11	1002101～ 1002125	和田山古墳群	古墳	古墳	59	306100	十九堂山中世墳墓	墓	中世
12	1002200	和田山城跡	城館	中世	60	306200	小野窪跡	生産遺跡	近世
13	1002300	和田山下遺跡	散布地	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	61	303600	河田館遺跡	散布地, 集落, 城館	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世
14	1002400	石子遺跡	散布地	中世	62	306500	谷内横穴	横穴墓	その他
15	1002500	石子町ハサバダ遺跡	集落	弥生, 中世	63	303500	下出地割遺跡	散布地	その他
16	300200	高堂四方堂遺跡	散布地	弥生	64	306300	小野遺跡	散布地, 集落	古墳, 古代, 近世
17	1001300	高堂遺跡	集落	弥生, 古墳, 古代, 中世	65	306400	小野スギノキ遺跡	散布地	古代, 中世
18	1001400	小長野遺跡	散布地	その他	66	307100	前田利常公灰塚	その他	近世
19	1001500	小長野 B 遺跡	散布地	弥生	67	307000	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	古代
20	1018300	小長野 C 遺跡	集落	古代	68	305700	古府横穴	横穴墓	その他
21	1000600	大長野 A 遺跡	散布地, 集落	縄文, 弥生, 古代, 中世	69	305800	古府シマ遺跡	散布地, 集落	古代, 中世
22	1000700	大長野 B 遺跡	集落	古代	70	305900	南野台遺跡	散布地	縄文, 古墳, 古代
23	1000800	牛島宮の島遺跡	集落	古代	71	307200	埴田の虫塚	その他	近世
24	1000900	千代デジロ A 遺跡	集落	弥生, 古墳, 中世	72	307600	埴田ウラムキ遺跡	散布地	古代, 中世
25	1001000	千代デジロ B 遺跡	集落, 古墳, 古代	弥生, 古墳, 古代	73	312100	軽海西芳寺遺跡	散布地, 集落	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世
26	1001100	千代デジロ C 遺跡	集落	古墳, 古代	74	312500	西芳寺遺跡	散布地, 社寺	古代, 中世
27	1001200	牛島ウハシ遺跡	散布地, 集落	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	75	312700	軽海庵寺	社寺	古代
28	1003100	佐野 A 遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代	76	336502	軽海横穴群	散布地	縄文, 弥生, その他
29	1018500	佐野 B 遺跡	集落	弥生, 古墳, 古代	77	312400	亀山玉造遺跡	集落, 生産遺跡	古墳
30	1003000	佐野八反田遺跡	散布地	古代	78	312300	軽海遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世
31	1002900	狭野神社前遺跡	散布地	古代	79	312200	大谷口遺跡	散布地	弥生
32	339000	野田フルヤシキ遺跡	集落	中世	80	311900	佐々木アサバタケ遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世
33	301300	長田遺跡	散布地	弥生, 古墳	81	310600	佐々木ノテウラ遺跡	散布地, 集落	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世
34	300900	松梨遺跡	散布地, 集落	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世	82	310500	佐々木遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世
35	301200	長田南遺跡	散布地, 集落	弥生, 古代, 中世	83	311101	八幡遺跡	散布地, 集落, 室町時代の墓地	縄文, 弥生, 古墳, 古代, 中世, 近世
36	301000	御館遺跡	城館	中世	84	311103	八幡若杉古窯跡	生産遺跡	近世
37	301100	銭畑遺跡	散布地, 集落, 城館	弥生, 古墳, 古代, 中世	85	311102	八幡古墳群	古墳	古墳
38	301800	島田 A 遺跡	散布地	古墳, 古代	86	310400	漆町遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世
39	339400	島田 B 遺跡	集落	古墳	87	310700	打越遺跡	散布地 (遺跡ではない可能性高い)	古代
40	300500	梯遺跡	集落	弥生, 中世	88	311000	若杉古窯跡	生産遺跡	近世
41	302000	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	89	302500	白江堡遺跡	城館	中世
42	302100	梯川鉄橋 B 遺跡	散布地	弥生	90	310300	白江遺跡	散布地, 集落	古墳, 古代, 中世
43	302200	平面梯川遺跡	集落	弥生	91	310900	吉竹 B 遺跡	散布地	古墳
44	302300	平面梯川 B 遺跡	散布地	弥生	92	302400	白江梯川遺跡	散布地, 集落, 生産遺跡, 祠跡	弥生, 古墳, 古代, 中世
45	302600	一針遺跡	散布地	縄文	93	310200	上小松遺跡	散布地	古代
46	302700	一針 B 遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代	94	338900	園町遺跡	集落, 方形周溝墓 (墓域)	弥生, 中世
47	302800	一針 C 遺跡	散布地, 集落	弥生, 古墳, 古代, 中世	95	301900	大川遺跡	集落	中世, 近世
48	302900	定地坊跡	社寺	中世	96	310100	八日市地方遺跡	散布地, 集落, 弥生時代の墓域, 生産遺跡	縄文, 弥生, 古代, 中世, 近世

第2表 周辺遺跡一覧表



第6図 周辺の遺跡(S=1/25,000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区は道路等で分割されており、平成28年度に実施した本線部分の発掘調査との整合性を持たせ、隣接する本線調査区名にaを付して調査区名とした（第7図）。また、前述したとおり本線新幹線建設工事の工程により2区、7区、8区は2分割での調査となったためa、bを付している。本線調査では公共座標（世界測地系）に基づく10m間隔のグリッドを設定したが、今回は調査区の幅が狭く調査区も座標軸に対し斜めになっていることから、調査区に沿うように任意のグリッドを設定している。グリッドの間隔は原則10mで、2a・2b区、7a区はそれぞれ北から枝番号を付し2-1区、2-2区と呼称した。7a区では、7-1区の北にある杭番号を7-1と付したため7-0区が存在する。6a区は北から、6a区-A、6a区-Bとアルファベットを付け呼称している。また、1a区、8a・8b区はグリッドを設定していない。5a区のグリッド間隔は40mとなっているが、遺物の取り上げ等でも使用しておらず、特に図示はしなかった。

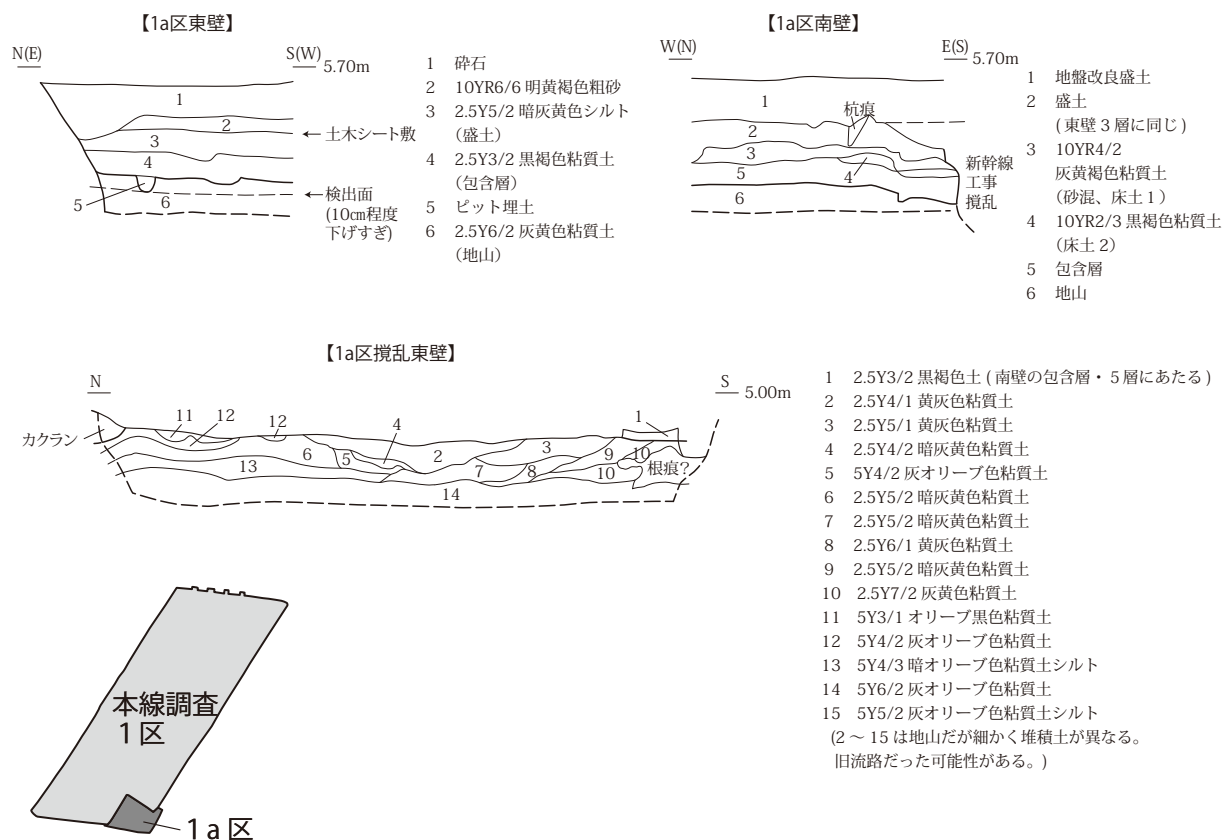
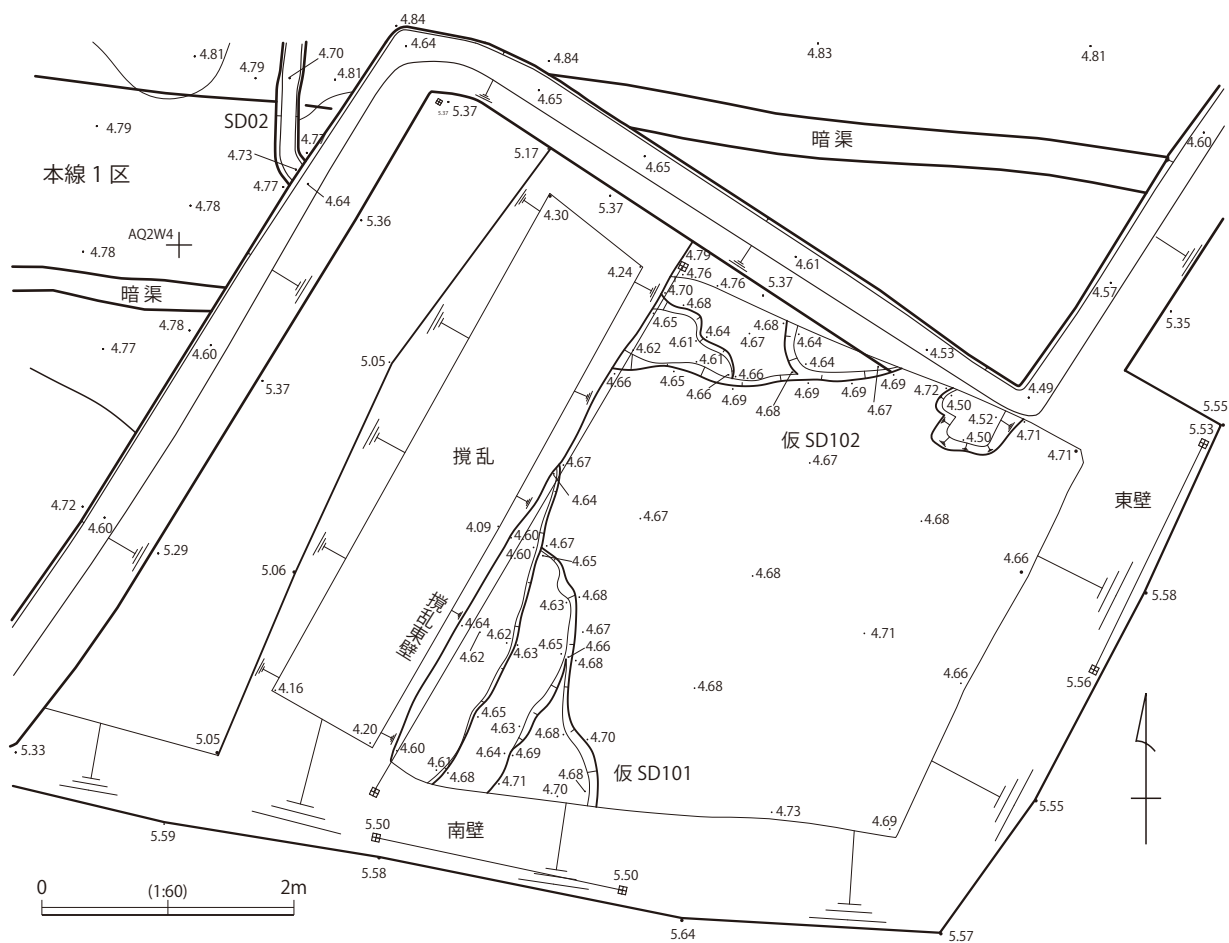
遺構番号は各調査区でそれぞれ1や101から付しており、溝や土坑の略記号SDやSKと組み合わせて使用した。また一部複数の遺構面が存在する調査区があるが、遺構番号は連続しており、遺構面により分けていない。ただし、土坑番号を付していたものを井戸に変更する等により略記号が変わった場合など、元の遺構番号が欠番になっている場合がある。さらに、隣接する本線調査区から延びる溝等については、本線調査での遺構番号と同じ番号を付している。したがって、遺構を呼称する場合調査区も含めて呼称する必要があるが、本報告書では基本的に7a区SD01のように呼称するが、文脈より明らかな場合はSD01のみの記述となることもある。

基本層序は、耕土、床土の下に客土を含み暗褐色の包含層、地山へと続く。以下、調査区ごとに記述する。なお、土層の断面観察の際には、共通認識を持ちやすくするため、「新版 標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）」を使用することとし、土色名の前にマンセル表示を併記して注記を行っている。

第2節 1a区の遺構と遺物

本線調査1区の南東隅に位置し、中ノ庄遺跡の範囲となる（第7、8図）。令和2（2020）年度に調査を実施した。検出面の標高は4.65～4.70mを測るが、1区南側では4.85m程度で検出している。東壁断面では検出面の上方でピット状の落ち込みが観察されており、表土掘削で10cm程度下げすぎたことを確認している。調査区の西側1/3程度は本線構造物工事により攪乱を受けている。中央あたりで溝状に検出された落ち込みを仮SD101、仮SD102として調査したが、これらは周囲より低くなっていた箇所、黒褐色土がみられるものである。この黒褐色土は、南壁断面の包含層（5層）にあたる。SD101は検出面下の地山とした堆積土の様子や、完掘後の状態で平行して一定の幅を持つ段差が見られることから、このあたりにあった溝状または低地上の凹みが埋没した後、掘削された部分に包含層としたものが堆積したと考えられる。また、SD102は、本線調査1区からSD02が続いていた部分が埋没後も窪んでおり、そこに包含層としたものが堆積した可能性がある。本線調査1区は、北半部に掘立柱建物や井戸が残っていたが、南半部は生産域ないし低地とみられる部分であった。1a区か





第8図 1a区平面図・土層断面図 (S=1/60)

らはSD101から土師器甕の頸部が1点出土したのみであったことから、本線調査同様、生産域など集落域の周辺であった様相を示している。また、SD02は近世以降の溝と判断されていることから、1a区で包含層とされた層も近世以降の可能性が高い。

第3節 2a・2b区の遺構と遺物

本線調査2区の東側に隣接し、検出面の標高は5.30～5.50mを測る。本線調査2区同様、北端がやや低く、その南側に微高地状の高い部分があり、それより南へ向かって地山面が下がっていく。調査区北側を2a区、南側を2b区として調査した。本線調査区では北端に小ピット群が確認され水田域が広がると考えられているが、2a区も北端部分の標高が低くなっており、攪乱等で小ピット群は検出されていないが、同様の状況とみられる(第9図)。それより南側、自然河道周辺が5.5mとやや高く、北西から南東方向の古代の幅広溝が存在する(SD31、33)。本線調査区ではこのあたりに掘立柱建物が確認できた。2a区では建物は未検出だがピット列を確認している。2a区の南側から2b区の北側にかけては、区画溝と掘立柱建物群が存在し、古代末～中世の居住域が広がる(第10図)。掘立柱建物群の西側は本線調査区で削平がみられ、2b区南側でも遺構は少ない。南端周辺は表土除去の際に地山面を掘り下げすぎ、標高5.05m～5.20mとなっているが、東壁断面の観察では5.30mほどであった。

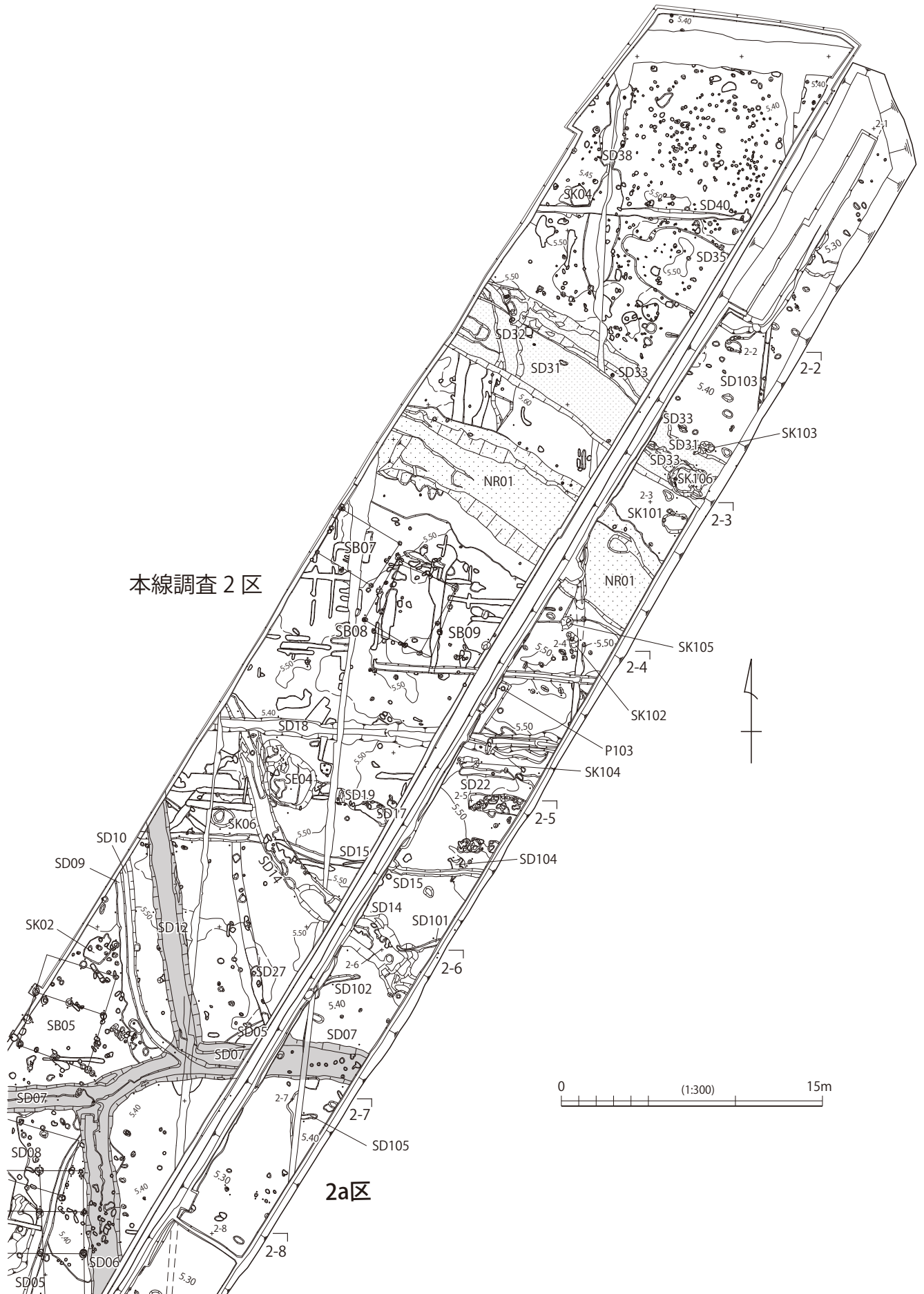
基本層序は、調査時地表面の標高が5.6m～6.0m、以下順に、新幹線工事に伴う盛土(粗砂、部分的に碎石含む)が15～45cm、部分的に床土(粗砂および粘質土)が約15cm～30cm、部分的に包含層(暗オリーブ褐色～黒褐色の粘質土)約10cm、灰黄色粘質土の地山となる。調査区東壁断面図は、北から第18図(SD31、33断面)、第22図、第24図、第16図内に示してある。以下、掘立柱建物について触れた後、調査区北側から主な遺構を取り上げる。なお、遺構検出作業中には、須恵器、土師器の他、磁器や弥生土器などが出土した。

《掘立柱建物群》

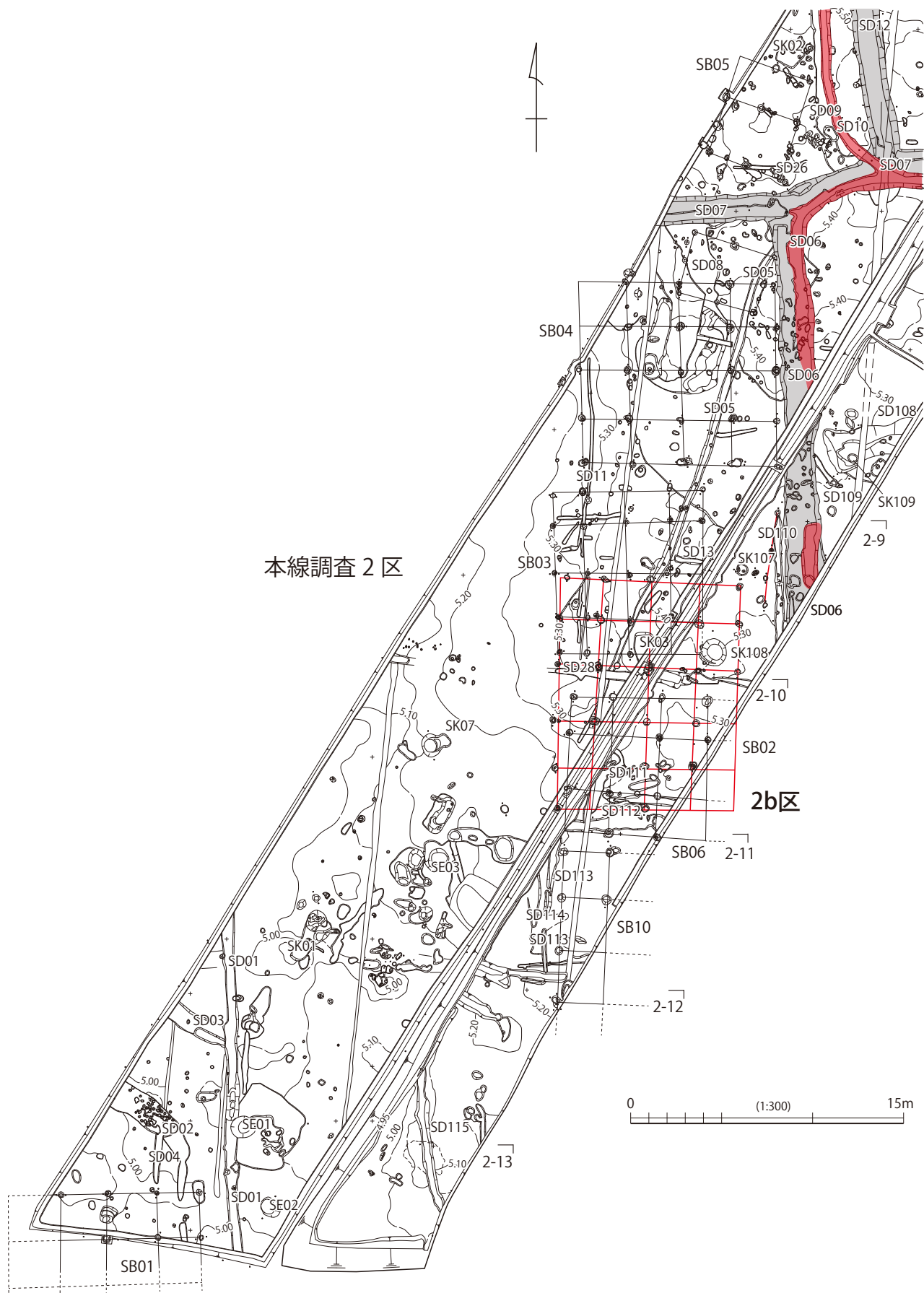
SB02(第11・12・13図) 2b区の中央部に位置し、検出面の標高は5.3m前後である。本線調査2区調査時に把握されていた建物の、続きの柱穴10基を確認した。柱穴底面の標高は4.8～5.1mを測る。梁行4間(9.9m)×桁行5間(12.6m)で、建物の主軸はN-1°-Eである。北西隅については、本線調査中にはSB02-P05としていたが、SB03-P03の可能性もあるとみている。柱間は2.7m～3.0mほどの長めのところと、2.2m～2.5mの短めのところがある。北東部分の柱に囲まれた一角に井戸(SK108)が存在する(第26図)。P133から平安時代に属する土師器埴(第29図1)が、P127・P128・P129・P130からは土師器片、P131・P133からは弥生土器片・土師器片、P132からは須恵器片・土師器片、P135からは弥生土器片が出土している。本線調査区を含め、掘立柱建物が集中する2区では、縄文時代～弥生時代の貯蔵穴や溝などを検出しており、柱穴にもそれらの時期の遺物が混入している。井戸(SK108)からは平安時代のものと思われる土師器の内黒埴底部(第30図14)、平安時代前期の須恵器坏の他、トチノキ製の椀などが出土した。

SB03(第14図) 本線調査2区中央部に位置し、SB02と平面的に重複する部分がある。検出面は標高5.2～5.3m、梁行4間(6.2m)×桁行4間(8.9m)で、主軸方位はN-2°-Wである。南東隅の柱穴を2b区で検出できなかったが、SK108掘削に伴い損壊したとすると、SB02より古い可能性がある。柱間は2.1～2.8mほどのやや長めのところと、1.6～1.9mほどの短めのところがある。

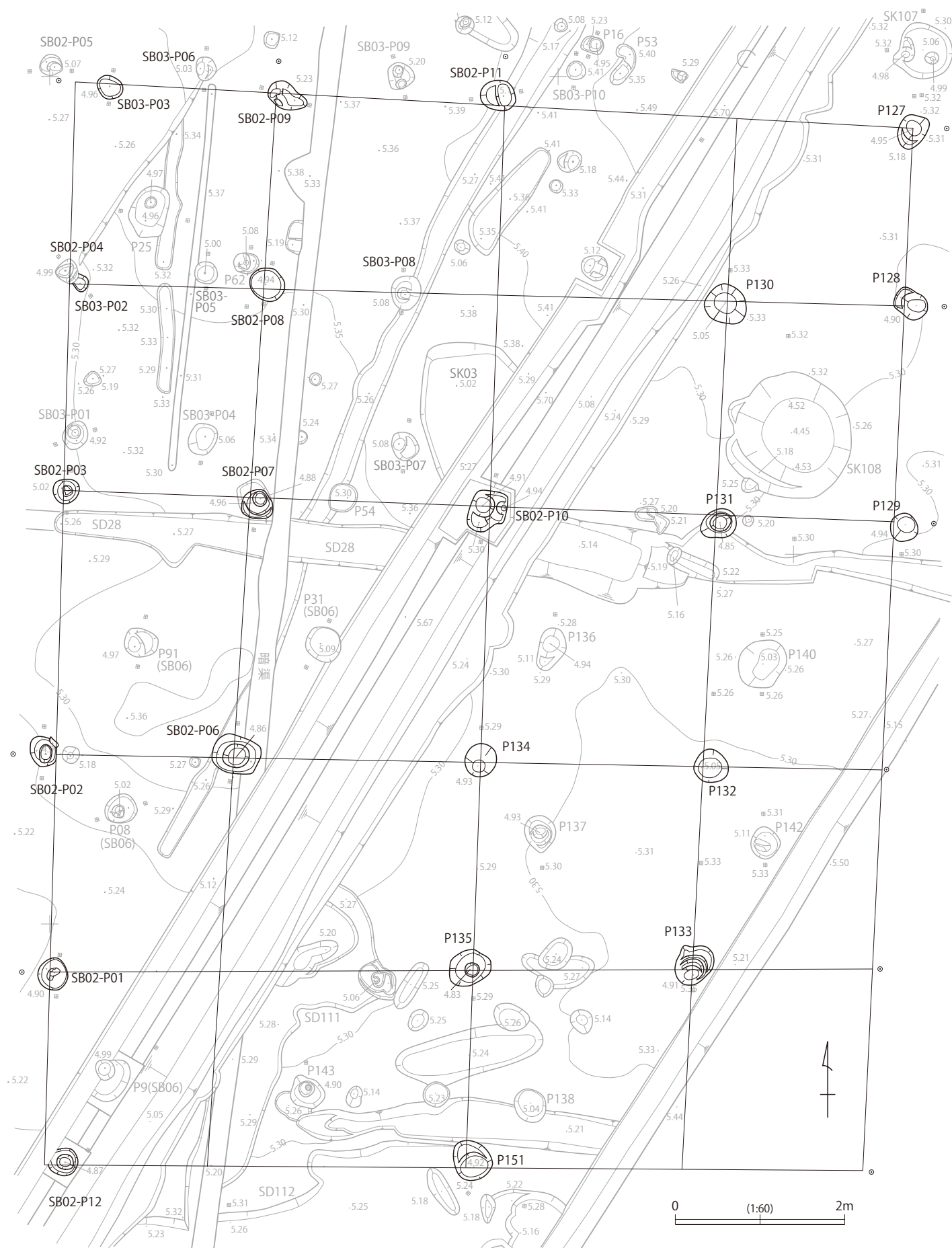
SB06(第15・16図) 2b区中央部に位置し、SB02と平面的に重複する部分があり、検出面の標高は5.3m前後である。本線調査時に確認した柱穴3基を含め、梁行3間(7.5m)×桁行3間(7.5m)で、



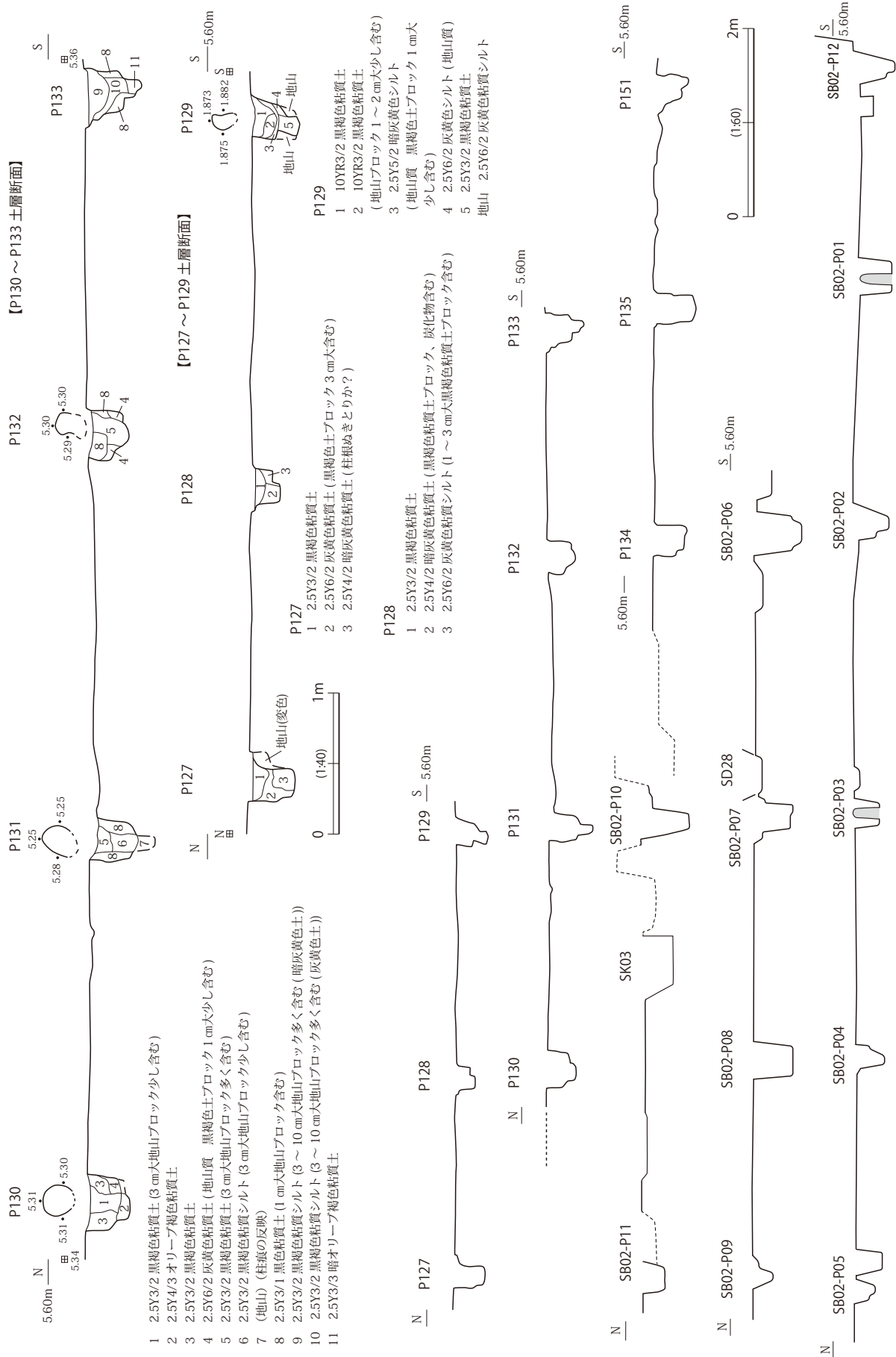
第9図 2区全体図(1) (S=1/300)

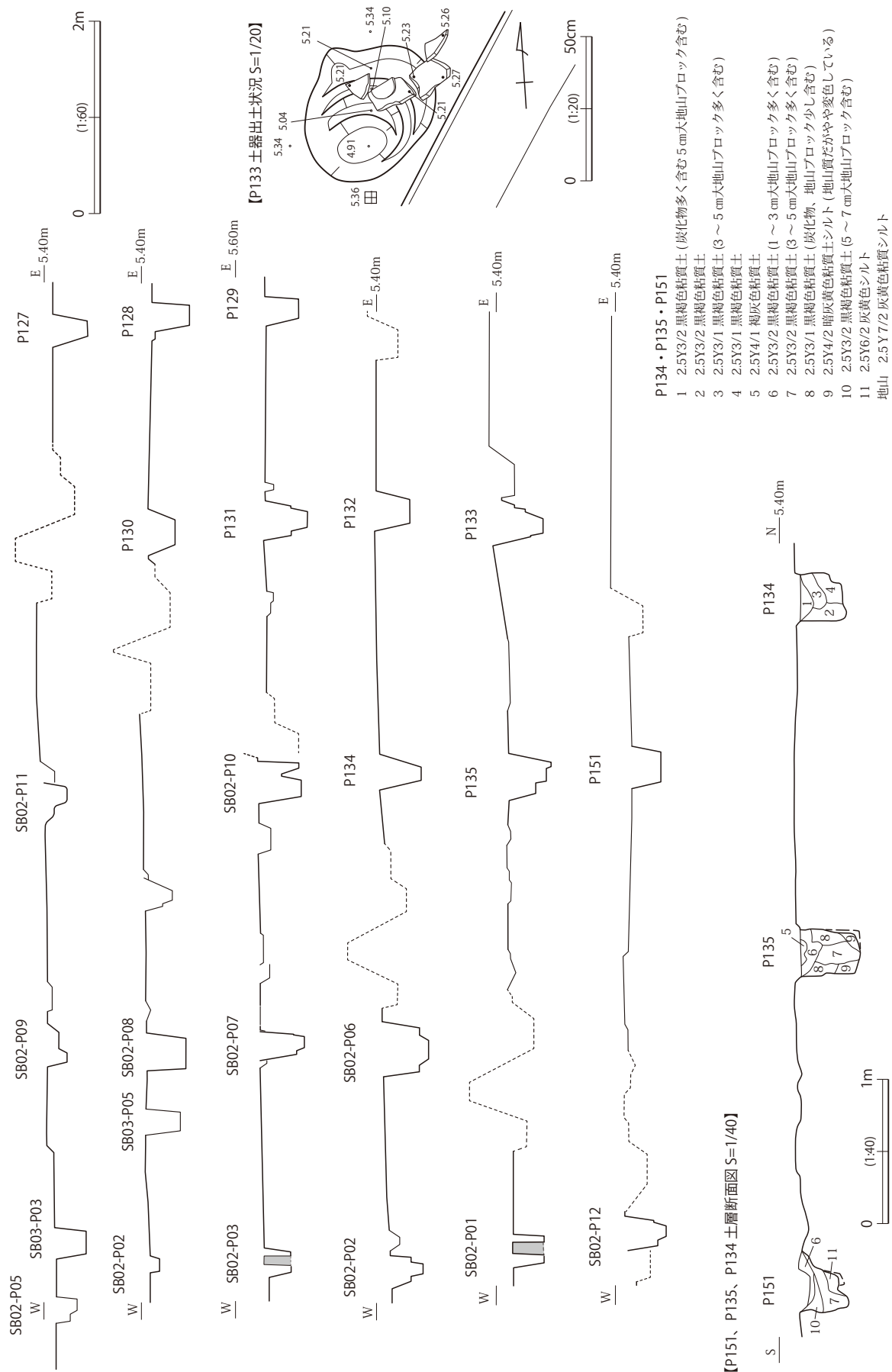


第 10 図 2 区全体図 (2) ($S=1/300$)

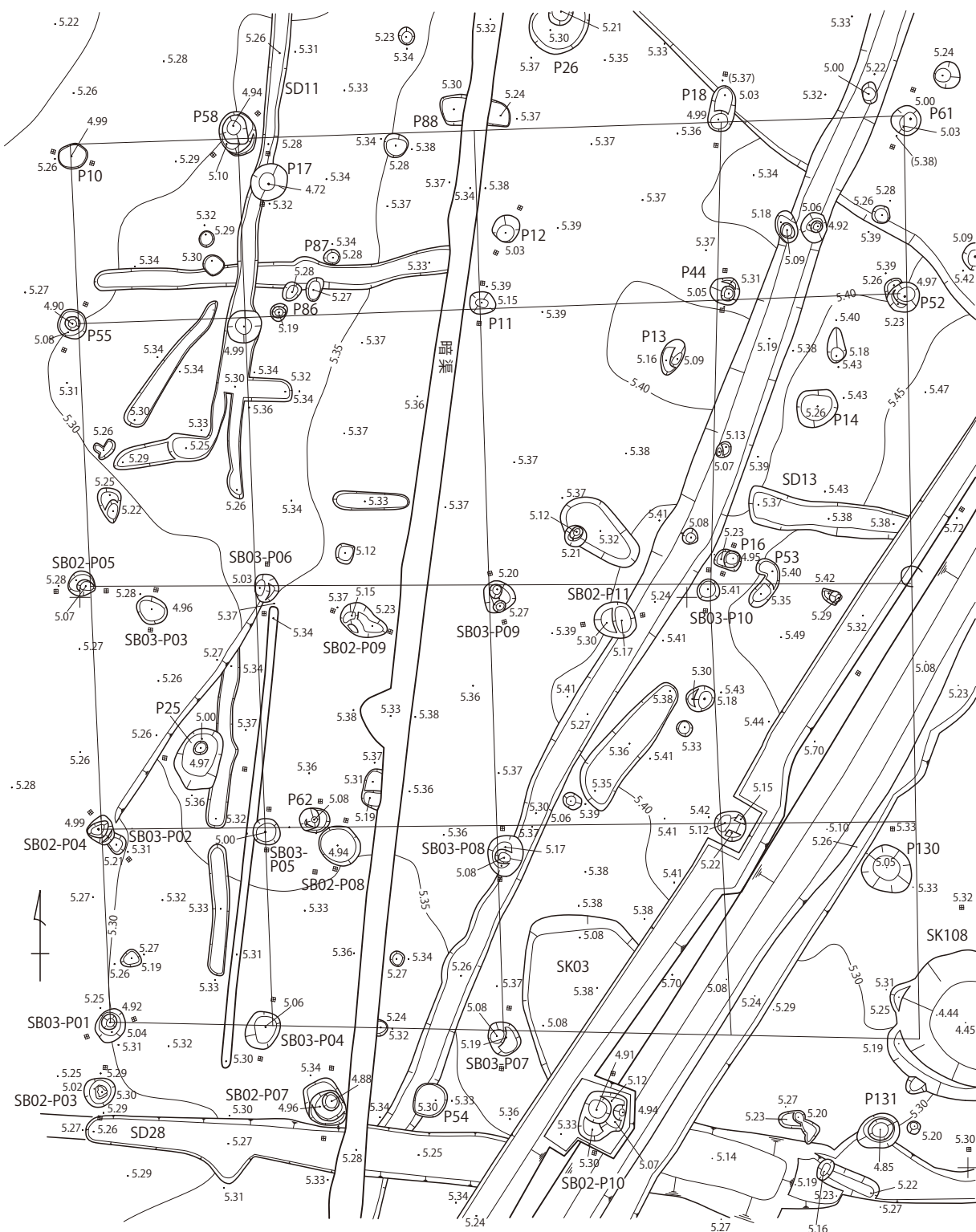


第 11 図 2 区 SB02 遺構図





第 13 図 2 区 SB02 東西方向柱穴エレベーション・土層断面図



第14図 2区SB03遺構図(S=1/60)

主軸方位はN-3°-Eである。桁行の柱間は中央が3.2mで広く、北側、南側は2.2mほどである。柱がこれより東側へ延びる可能性もあり、その場合は梁行3間×桁行3間以上、主軸方向はW-3°-Nとなる。P142に柱根(スギ)が残存していた(第29図2)。これと同じ並びで西端のP08(本線調査時検出)にもスギの柱根が残っていた。P136・P137・P138・P139・P140・P142・P143・P144からは、弥生土器片、土師器片が出土した。柱穴の底面標高は4.8～5.1mである。柱穴平面形はほぼ円形のものが多く、一部長円形や隅丸方形のものも見られ、径40～50cmを測る。

SB10(第17図) SB06の南側に位置する建物で、東西方向1間以上、南北方向3間以上を確認した。主軸方位はN-2°-Eとみられる。西端はSB06と面位置が合い、柱間は東西方向で2.5m、南北方向の北側列2.5m、その南側の列・さらに南側の列とも2.9m弱で、北端列がやや狭い。検出面の標高は5.25mほどで、柱穴底面の標高は4.9m前後である。柱穴はほぼ円形で、径45cmほどである。SD113はこの建物に伴う雨落ち溝の可能性があり。P145、P146、P147、P148、P149、SD113から弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土している。

SB02、03、06、10とも、建物中央部の柱間が広く、その外側の柱間がやや狭くなっている傾向は同様で、古代末～中世の建物群ととらえている。配置や主軸方位等を考慮すると、区画溝SD06に区切られた範囲に、SB03→SB02→SB06、10と3段階にわたり建物が展開したと考えられる。

《2a区》(第9図)

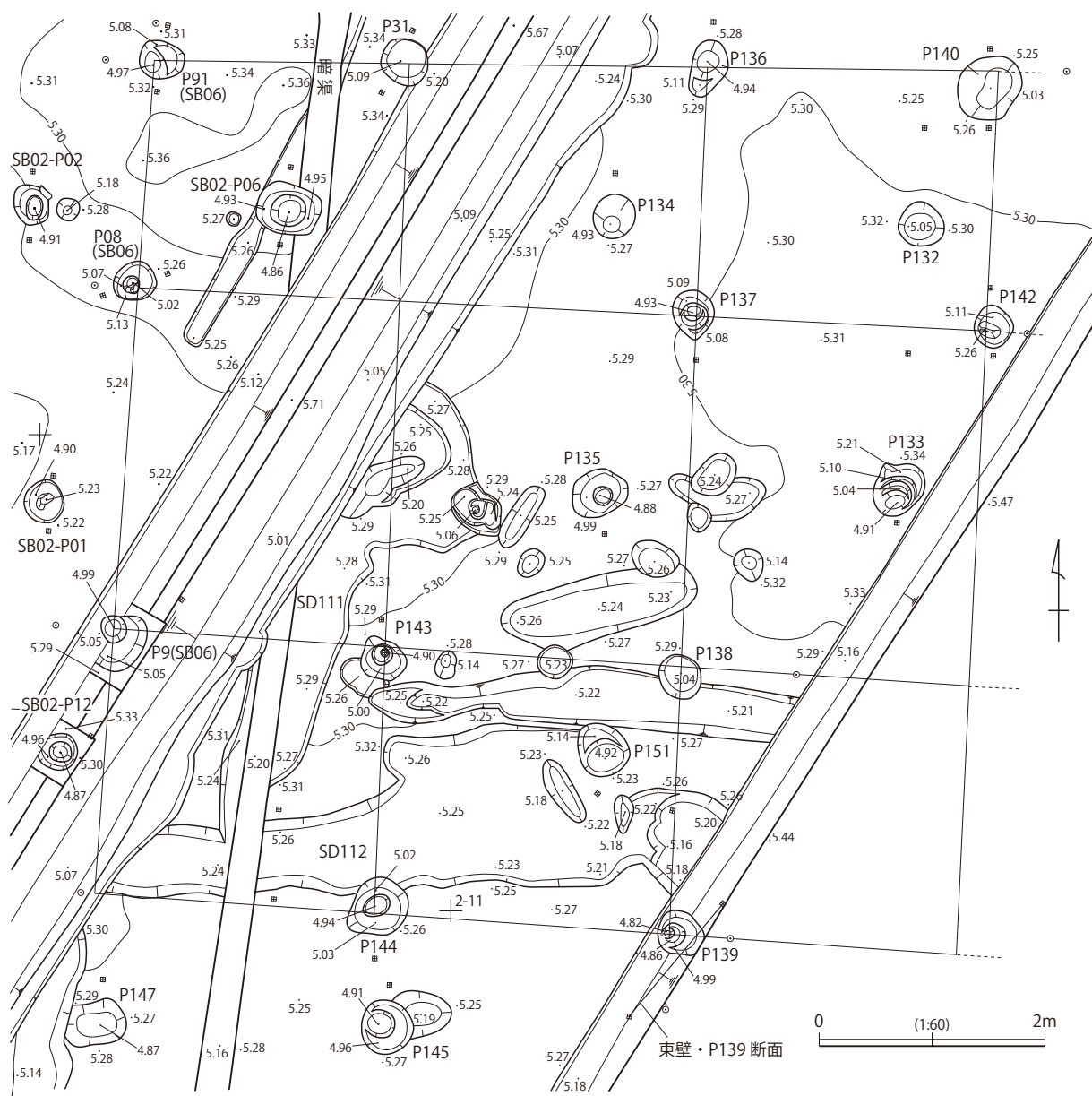
2a区の北部には、やや幅が広い溝(SD31、33)とそれに並走する河道(NR01)が調査区を横切っている。それより北側には、近世以降の水田耕作に伴うとみられる溝(SD103)や小穴が存在する(第18図)。本線調査2区でも、南北方向、東西方向に走る用排水路が検出され、それに囲まれた水田域で小穴が確認されている。2a区もSD31、33以北は、水田などの生産域であったと思われる。SD31、33周辺やそれ以南は小規模な溝や小穴、土坑などが点在する状況である。

SD31、33(第18・19図) 本線調査2区から続く溝で、SD31は南東から北西に直線的に延びている。SD33はややカーブしており、本線調査区西端と2a区でSD31に切られている。より古いSD33は幅1.6～2.2m、残っている埋土の深さは30cm程度である。SD31は幅2.8m、深さ20cm程度である。埋土は断面図の3、4層がSD31に、5、6、7、8層がSD33に相当するとみられる。本線調査時にはSD33から須恵器(坏身、坏蓋等)や非ロクロの土師器甕など7～8世紀代のものが出土した。SD31からは7世紀代の須恵器(坏身、鉢、壺等)、土師器(高坏脚部、外面赤彩の無台埴、鉢等)が出土した。2a区のSD33からは土師器片が、SD31からは須恵器(底部内面に滑らかな部分があるもの、カキメ残るもの、瓶体部等)、土師器が出土したが破片が多く、図化したのは7世紀後半の無台坏(坏G、第31図21)のみである。古墳時代末から古代前半にかけての溝ととらえている。南東から北西に向かい若干底面レベルが下がっている。

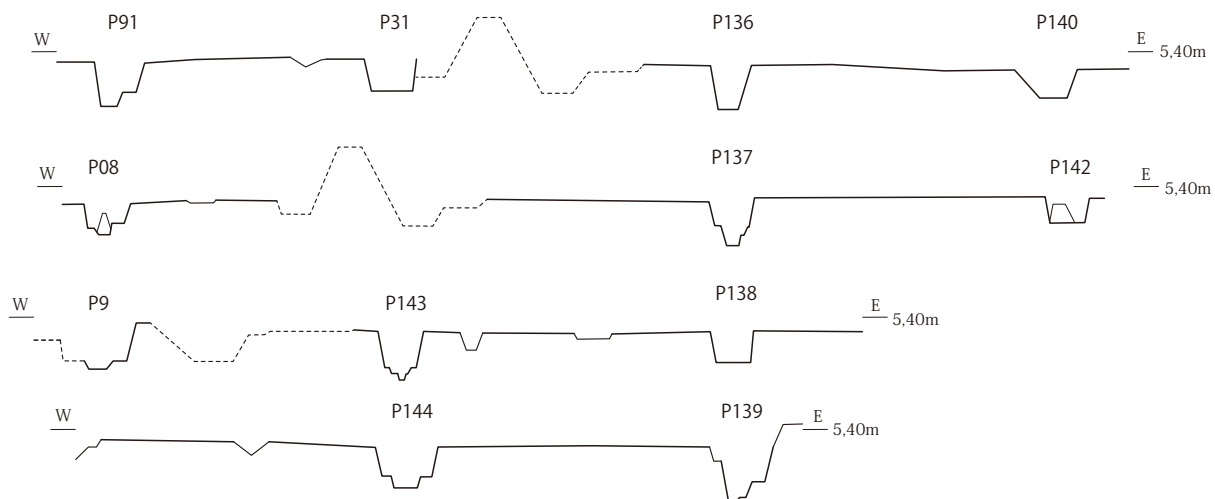
SK101(第18・19図) SD31、33の南側にあり、長径145cm、短径115cmの隅丸方形を呈する。深さ5cm程度の浅い凹み状だが、須恵器片・土師器片が出土している。7世紀前半の須恵器蓋(坏G、第29図3)を図化した。

SK103(第19図) SD31、33の北側にあり、長径84cm、短径55cm、深さ15cm程度の長円形を呈する。須恵器片・土師器片が出土し、須恵器の中には平安時代の坏または埴で胎土が緻密で滑らかな、丁寧な作りのものなどがみられる。SD31、33より新しいと思われる。

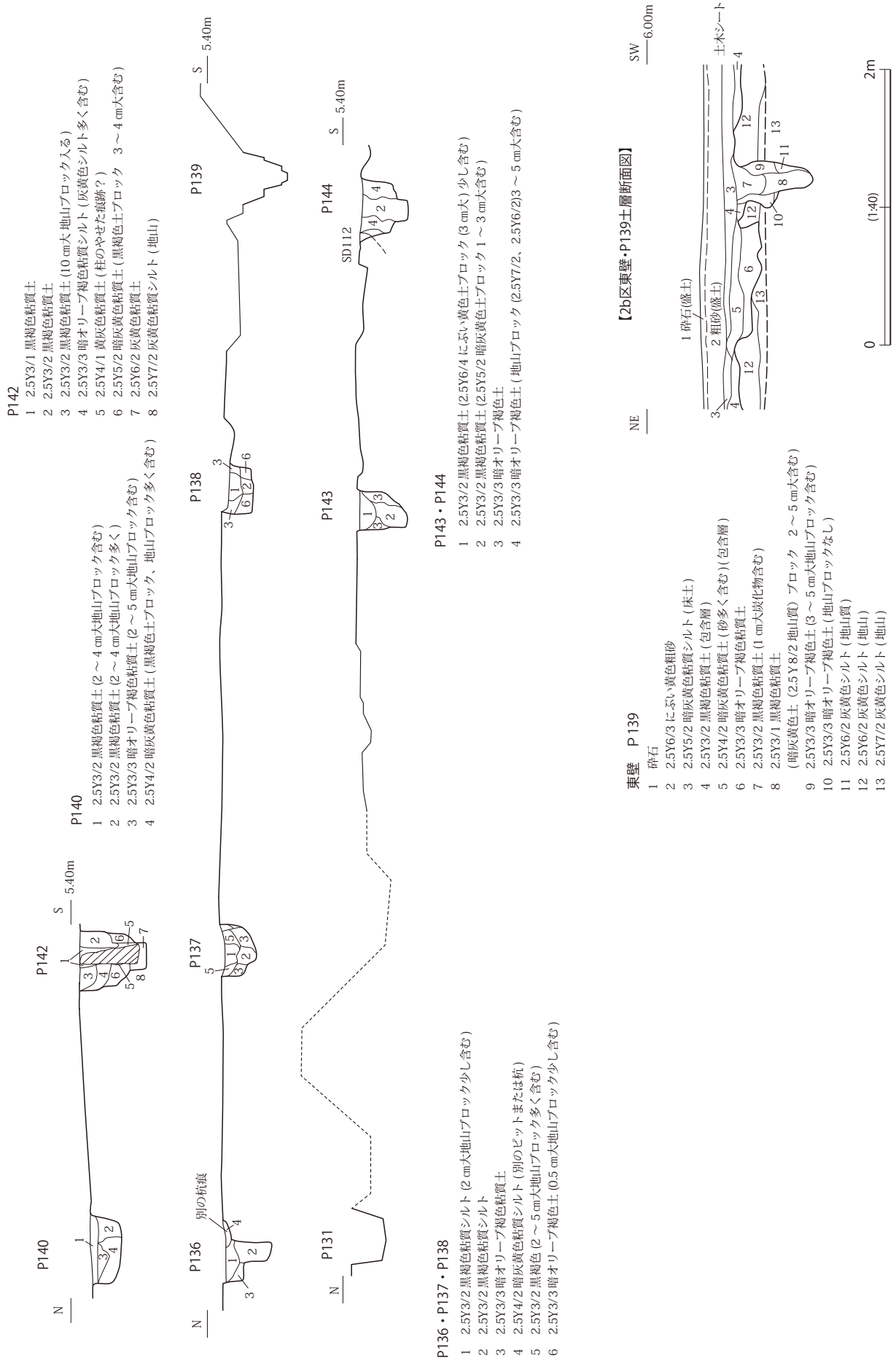
SK106(第19図) SD31、33を切って作られている土坑で、南北165cm、東西195cm、残っていた深さは35～55cm程度の隅丸方形を呈する。掘り方と水溜部分があったようで、木杵などの立ち上がりのラインとみられる部分があり、板材などの木製品も出土する。東辺と西辺の各中央辺りに、



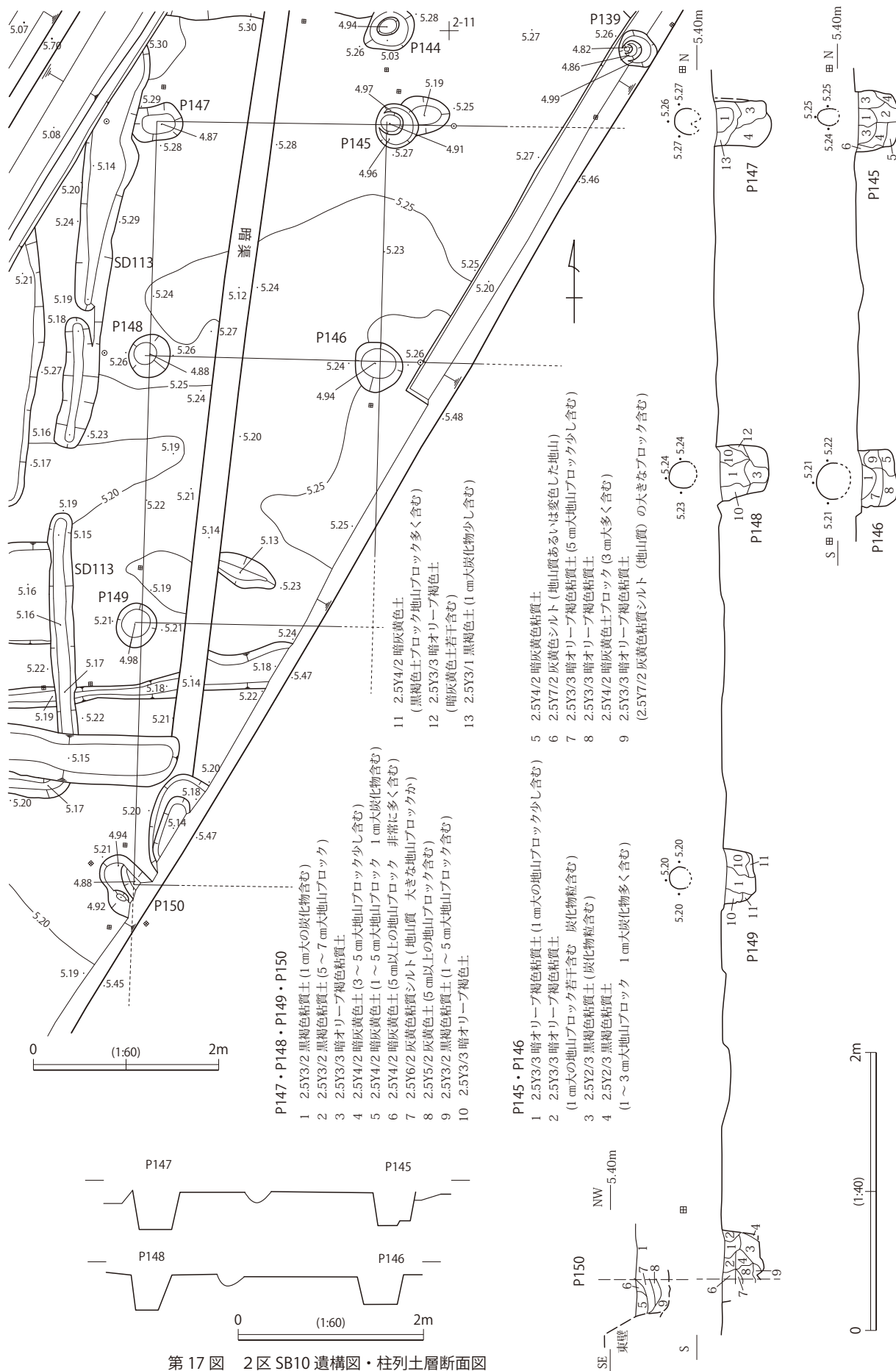
【東西方向柱穴エレベーション】

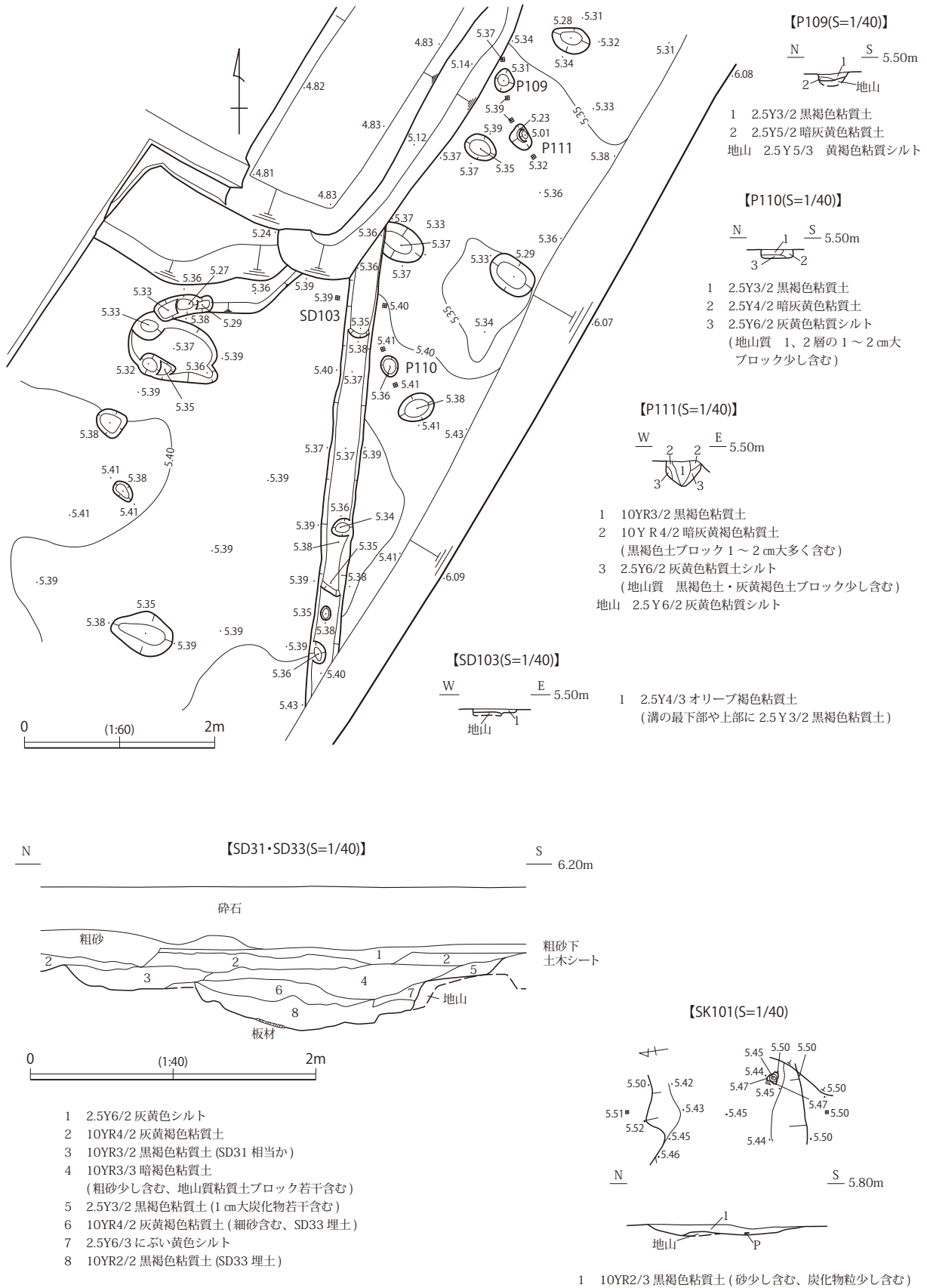


第15図 2区SB06遺構図



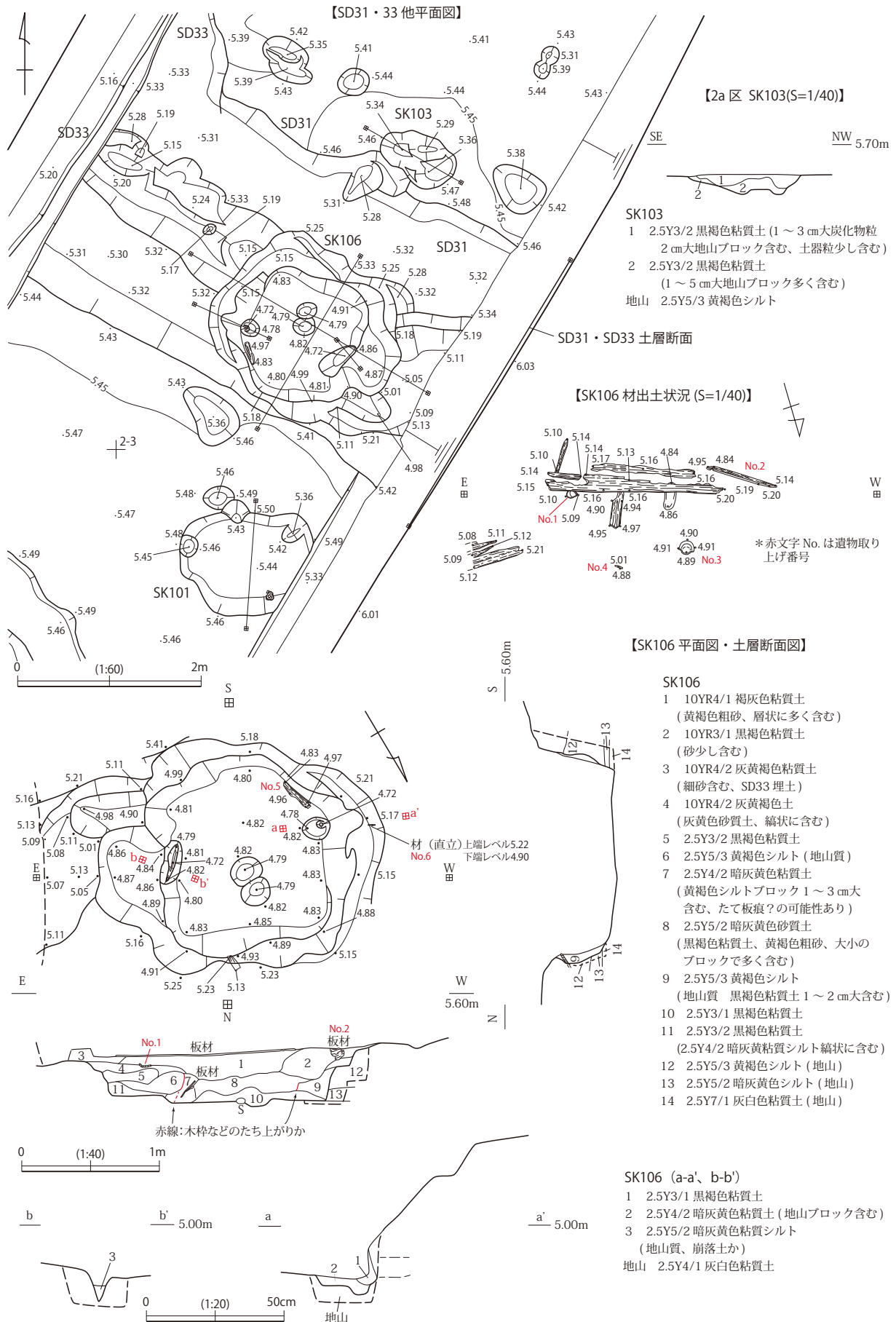
第16図 2区SB06南北柱列土層断面図





第18図 2区 P109～P111、SD103、SD31・33、SK101 遺構図

第3節 2a・2b区の遺構と遺物



第19図 2区 SK103・106 遺構図

底面を掘り込んだピット状の部分が残る。木杵を押さえるための杭跡などであろうか。板材などの他、須恵器・土師器が出土し、須恵器の無台坏を図化している（第29図6、7）。8は先端を尖らせた厚さ1cm以下の薄い板材で、欠損により上端形状は不明である。第30図12は幅13cm、厚さ1.4cmを測る壁板などの建築部材で、下部にほぞ孔が作られている。2点ともスギである。遺構の時期は特定しかねるが、平安時代～中世ととらえている。

NR01（第20・21図） 本線調査区から続く幅4.6～5.7m、深さ35cm程度の河道である。2a区内では底面レベルに位置による差がほとんどみられないが、本線調査区では南東から北西にかけやや下がっていた。断面図6層の粗砂は、本線調査時には60cm以上の堆積が見られ洪水層と判断された。6層を含む下部の層からは出土遺物がほとんどなかったが、上部の層からは内黒を含む土師器や弥生土器などが出土した。破片が多く、32図30の奈良時代の甗を図化したのみである。河道の遺物は埋没する段階の頃に入り込んだものが多いと思われ、河川として存在していた時期は古墳時代の可能性が高い。

SK102（第20図） NR01の南西側に位置し、長径120cm、短径60cm、深さ32cmの長円形を呈する。溝の一部か。弥生土器片、土師器片が出土した。図化した第29図4の土師器は鉢としたが、内面に付着物などもあり甕の可能性もある。古墳時代以降のものだが、埋土最上層上面での出土である。

SK105（第20図） SK102の北側に隣接する。径65cmほどの不定形な円形で、深さ30cmほどである。遺物は出土していない。SK102、103、104、105は埋土の堆積状況が類似する。

P101、P102、P103（第20図） 現代の溝に沿って東西方向に並ぶ。径25～35cmの円形ピット。

SD22（第21図） 調査区を横断する現代の用排水路（本線調査区SD18に続く。須恵器、近世の白磁、瓦質土器など出土）の南側に東西方向に走る溝である。本線調査区から続くものとみられ、幅50cm、深さ10cmほどで、須恵器片・土師器片が出土した。

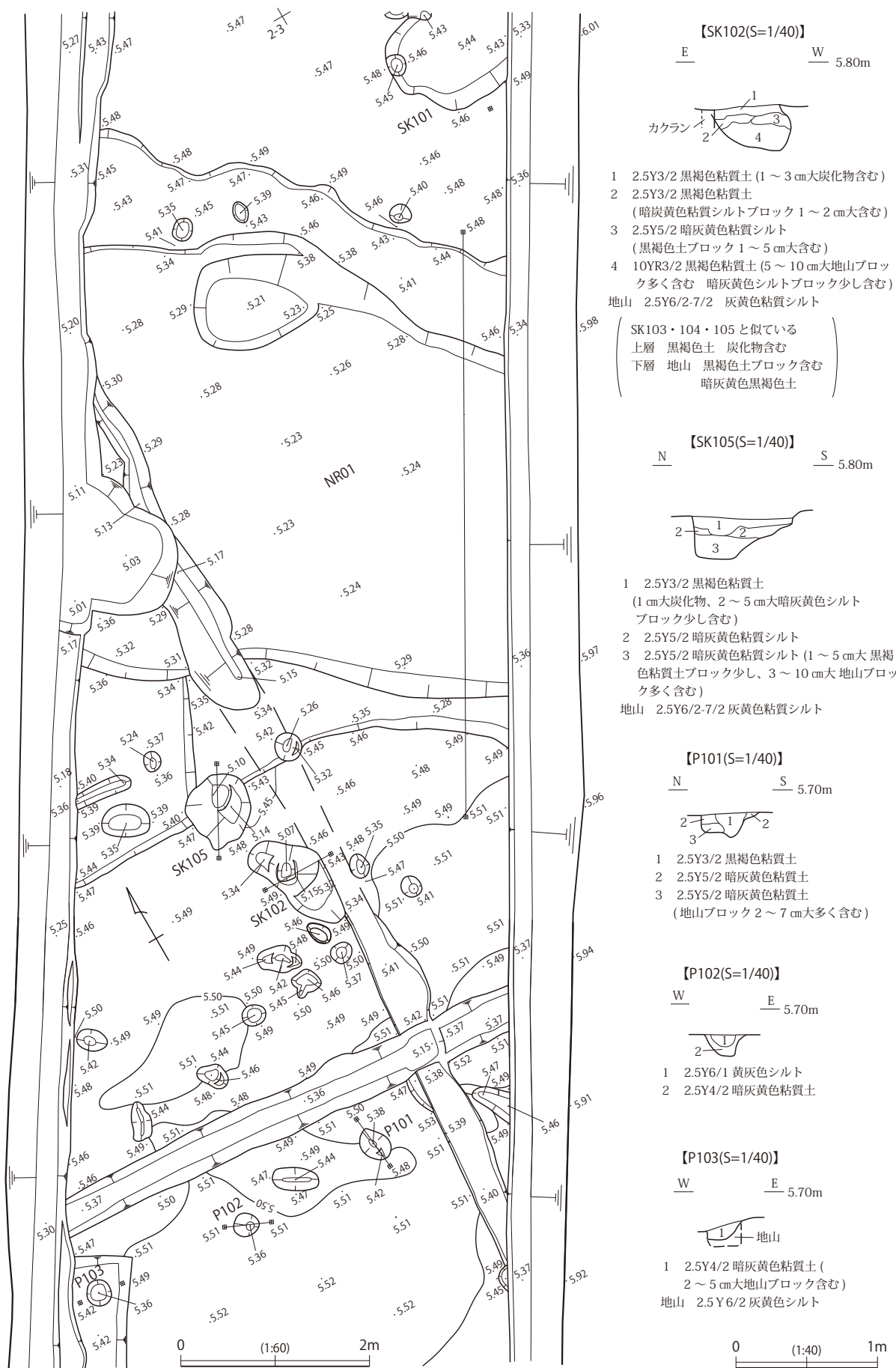
SK104（第21図） SD22に切られており、長辺115cm、短辺80cm、深さ25cmほどの不定形な方形土坑である。底面は東側が斜めに上がり、西側が主な土坑部分である。内黒を含む土師器片の他、第29図5の砂岩製砥石が出土した。トーンをかけた部分は非常に滑らかで使い込まれている。下端部は打割によって大きさを規定している。この向きで置くと安定しているが、裏面も使用されトーン部分ほどではないがかなり滑らかである。

SD15（第21図） SD22から南側へ5.7mほどに位置し、東西方向に伸びる溝で、本線調査区から続く。幅35～50cm、深さ15cm。土師器片が出土した。本線調査区ではSD14に切られており、古代かそれ以前の溝と考えられる。

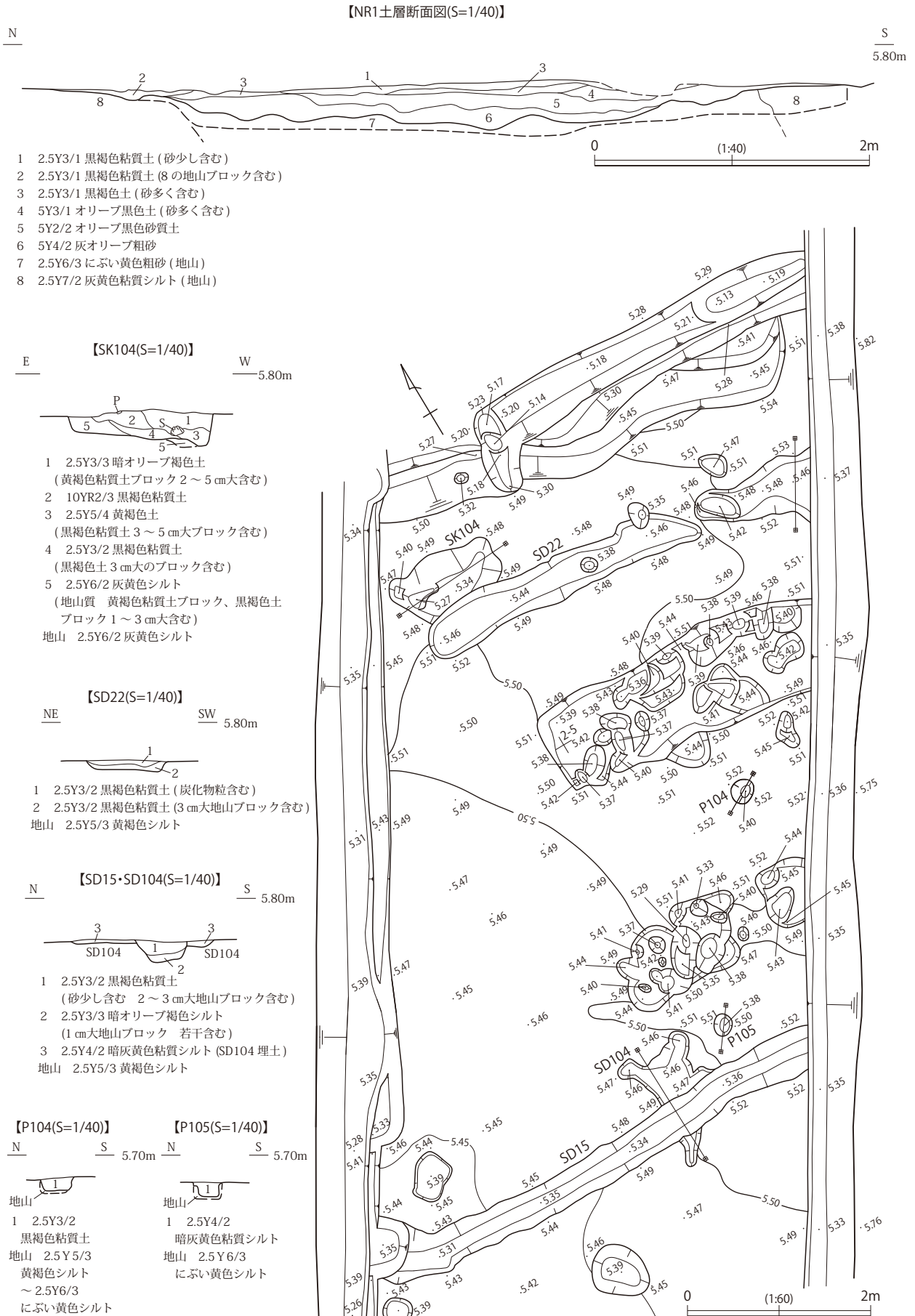
SD14（第22図） 本線調査区から続く溝で、南東から北西へと延び、2a区ではSD15の南側に位置する。本線調査区では幅1.2～1.7mであったが、2a区では幅1.9～2.2mと広がる。深さは本線調査区では20cm前後、2a区では35cmほどで東側が若干深く40cmである。底面レベルからは南東から北西へ流れていたと想定され、他の溝と流れる方向が逆である。最下層から須恵器（8世紀代の坏蓋など）、土師器が流れ込んだような状態で出土した。また黒褐色粘質土からは須恵器片・土師器片の他に条痕文系弥生土器が出土する。古代の溝と考えられるが、アゼから中世の瓦質土器・香炉（第30図19）が出土した。表面が摩滅して荒れている。20は縄文時代の剥片（ガラス質安山岩）である。

SD101、SD102（第22図） 本線調査区のSD05に続く同一の溝とみられる。幅35cmほど、深さ5cm弱で、SD14を横断するように位置するが、切り合いが明確ではない。本線調査区では平安時代～中世の区画溝・SD07に切られていた。SD101から土師器片が1点のみ出土した。

SD07（第23・9図） 本線調査区から続く溝で、幅2.1m、深さ25cm弱で、東西方向に延びる。底

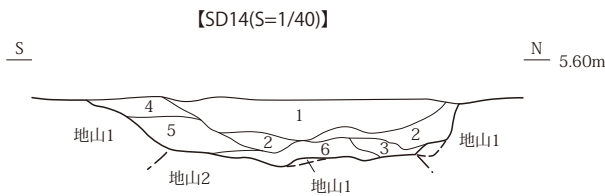
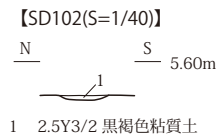
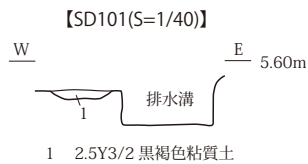
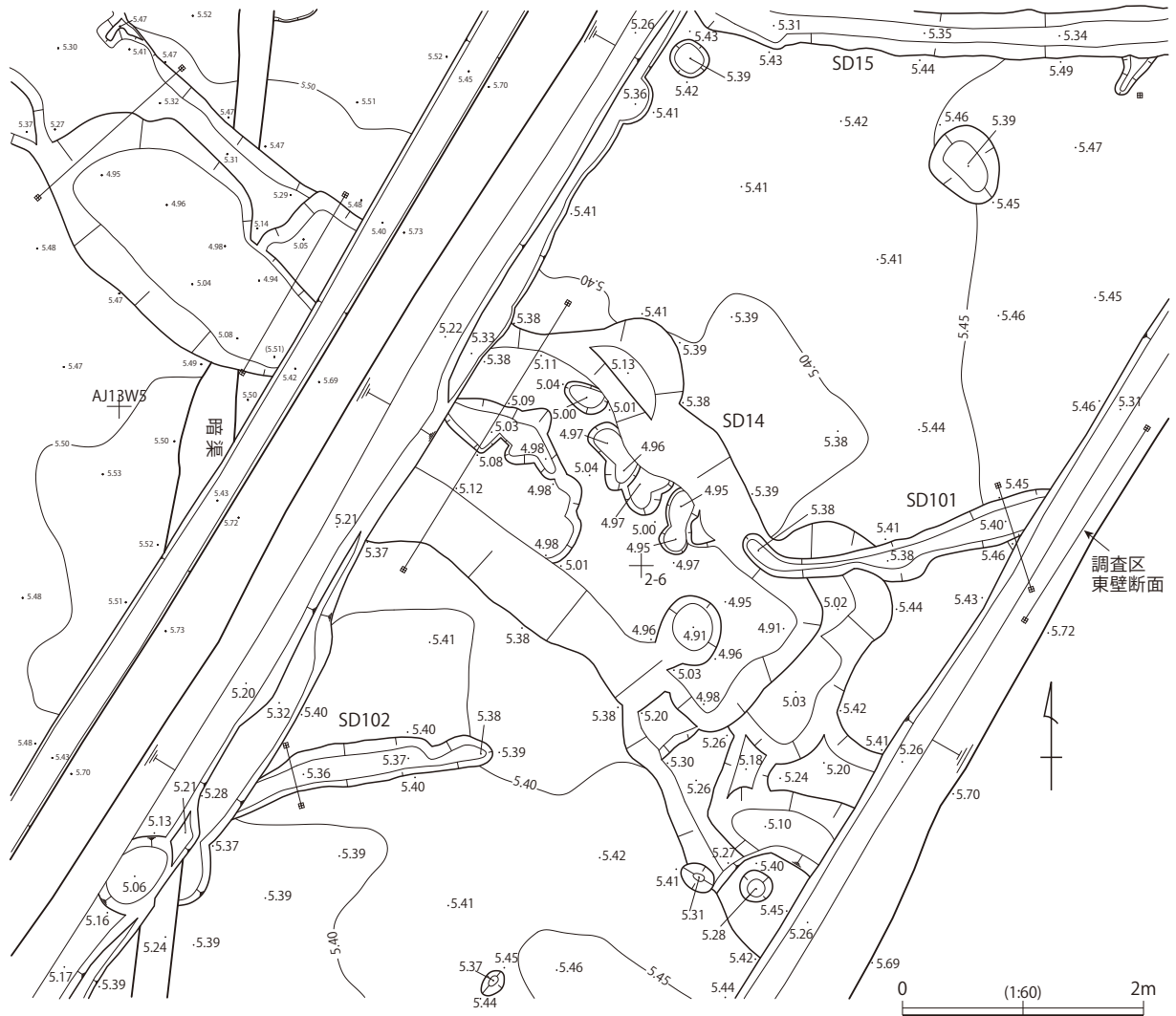


第20図 2区 NR01、SK102・105、P101～P103 遺構図

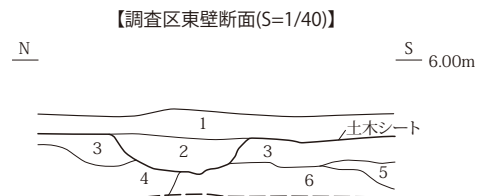


第21図 2区NR01、SK104、SD22、SD15・104、P104・105遺構図

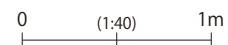
第3節 2a・2b区の遺構と遺物



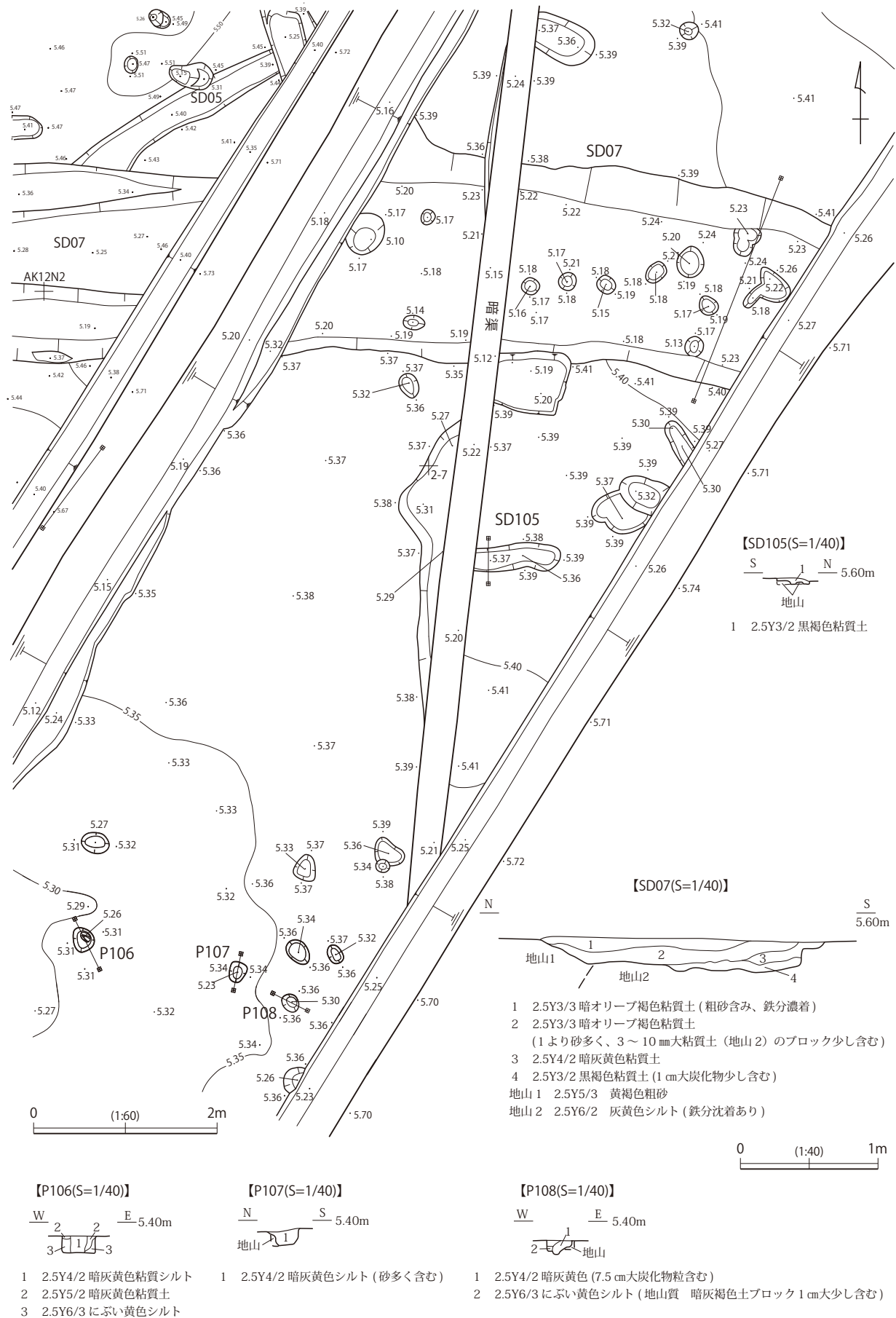
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 (黄褐色粗砂縞状に若干入る)
- 2 2.5Y4/2 暗灰黄色土 (砂多く含む)
- 3 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
- 4 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (砂 (地山由来) 大きなブロックで含む)
- 5 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 (4と同質、砂のブロック多く縞状に入る)
- 6 2.5Y4/1 黄灰色粗砂
(黒褐色土少し混じる流れこみの土器細片多く含む 須恵器、土師器)
- 地山1 2.5Y5/3 黄褐色粗砂
- 地山2 2.5Y6/2 灰黄色シルト (鉄分沈着あり)



- 1 10YR6/6 明黄褐色粗砂
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土 (炭化物含む) (SD101 埋土)
- 3 2.5Y6/2 灰黄色シルト (黒褐色土ブロック含む)
- 4 2.5Y6/2 灰黄色シルト (黒褐色ブロック若干含む)
- 5 2.5Y5/2 暗灰黄色粗砂
- 6 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂



第22図 2区 SD101・102・14 遺構図、調査区東壁断面



第23図 2区SD07・105、P106・107・108遺構図

面の標高は5.17～5.19mで、本線調査区でSD06と合流するあたりまではほぼ平らである。水を流すための溝とはいえ、本線調査の報告書で述べられているように、平安時代～中世の区画溝ととらえている。須恵器、土師器（高台付き内黒埴など）が出土した。

《2b区》（第10図）

2a区との境界周辺に、古代末～中世の区画溝が南北および東西方向に造成されている。その南側、2b区の中央部分には、掘立柱建物が集中する居住域がある。調査区南部は遺構が少ないが、小規模な溝や小穴が確認できる。南へ向かい検出面の標高が下がっており、削平を受けているようである。SD108（第24・25図） 2b区北端に位置する幅1.6～2.4m、深さ20～30cmを測る、弥生時代の浅い溝である。溝の形はやや不定形で、西側は徐々に底面レベルが上がり、SD06手前で検出できなくなる。弥生時代前期の条痕文系土器や、磨石・砥石・打製石斧などの石器が出土している（第31図22～27）。22は外面貼付突帯を持つ柴山出村式の壺である。23は細流砂岩の磨石で、上面、下面に敲打痕がよく残る。正面、裏面、側面と3面を磨り面として使用しており、どの面も片手で持って利用しやすい石である。24は流紋岩製の砥石で、厚みがありどっしりとして安定感がある。擦痕は不明瞭だが、使用面は非常に滑らかである。図正面の手前（下）側と右側は、使用面端部がややざらつくが、上側と左側は端部まで滑らかな面が続くことから、欠損により上方向と左方向の部分が割れ取れた可能性がある。裏面を平らに置くと、奥（上）がやや高く、手前（下）がやや低くなる。25～27は凝灰角礫岩製の打製石斧で、使用により破損している。25は短冊形で、26、27は撥形を呈するものである。

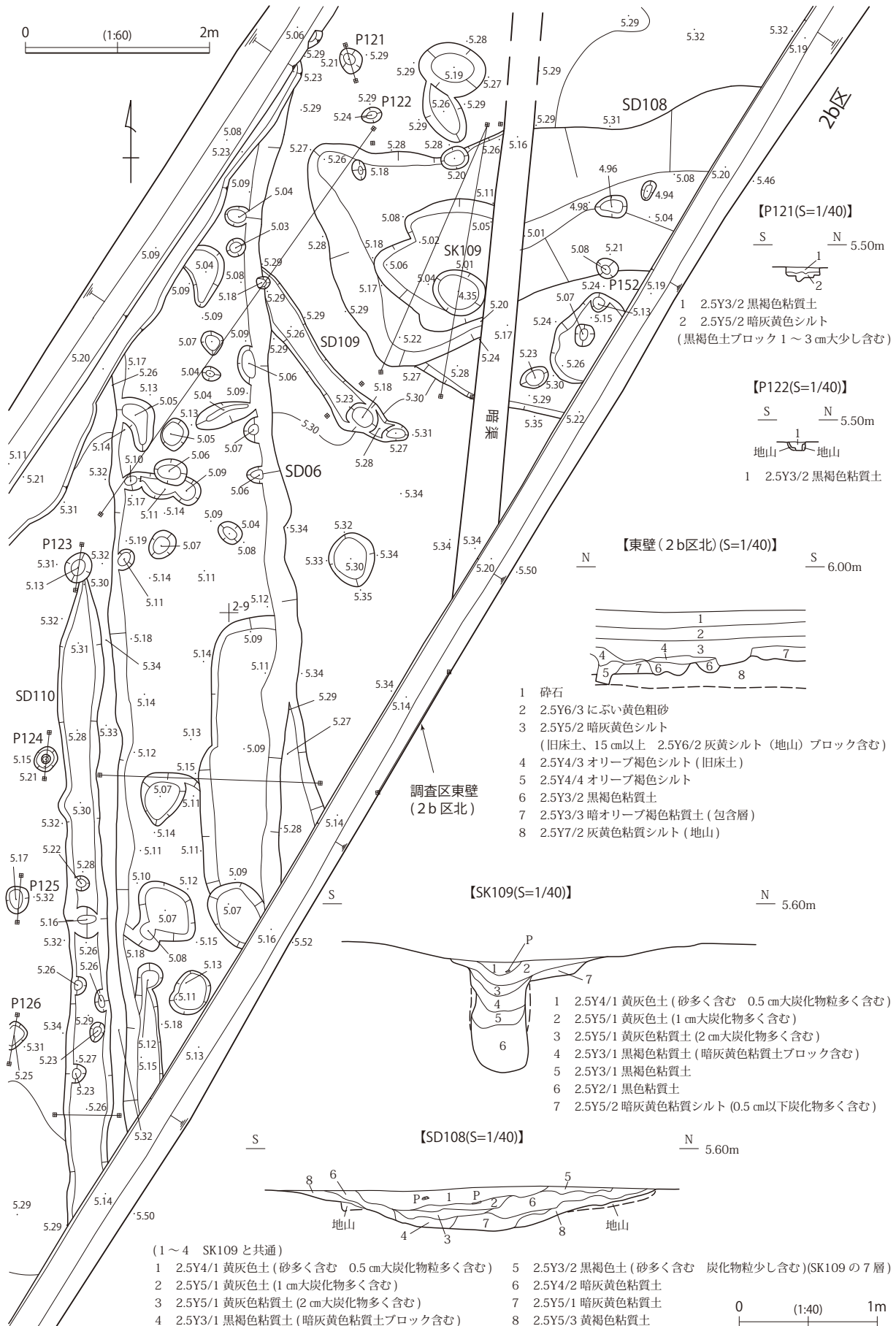
SK109（第24図） SD108の中にあり、検出面では径50cm程度、深く掘り下がった部分は径40cm程度、深さ80cmのしっかりとした円形土坑である。SD108とは同時存在か。本線調査で縄文時代、弥生時代の貯蔵穴が複数確認されており、これも貯蔵穴と考えられるが、種実等は見られず弥生土器片が出土したのみである。埋土には炭化物が多量に含まれる。

SD06（第10・24・25図） 南北方向に延びている区画溝で、本線調査区ではSD07と合流する。幅1.8m、深さ20～30cmで、南から北に向かって底面の標高は下がっている。本線調査報告書では、断面観察などから2時期が想定されており、溝の東部分に古い溝が一段深く残っている。2b区でも東部分がやや深いところが存在する。SD07に水を引き入れるために、南から北に向かい若干の傾斜が作られている可能性がある。高台付き底部片を含む土師器、古墳時代末のものも含む須恵器、白磁片の他、第30図17の砂岩製磨製石斧未成品が出土している。17は図の剝離面の中に、図化していない細かい敲打痕が残る。18は玉縁の白磁碗口縁部である。第32図28の須恵器無台坏は底部に「月」と思われる墨書が確認できる。溝の時期は平安時代～中世ととらえている。

SD110（第25図） SD06の西側に沿うように位置する溝で、幅50cm前後、深さ5cm弱を測る。SB02に伴う溝の可能性はある。第32図29の須恵器無台坏は底部に「ニ イ」のような墨書と、ヘラ記号が残る。28の須恵器はSD06、109、110から出土した破片が接合したものであることをふまえると、この須恵器片も同様の状況でこの場にあったと考えられる。

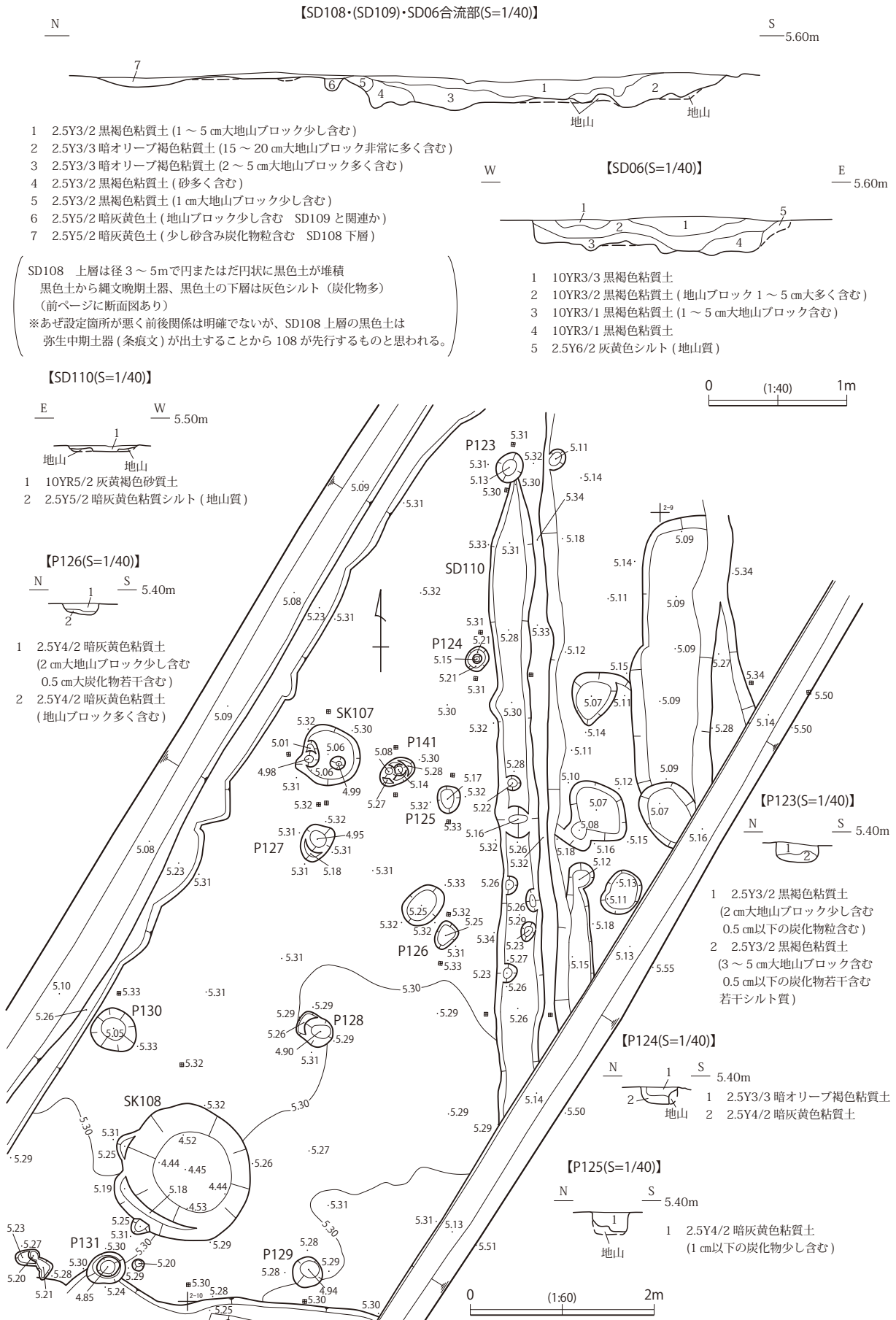
SK107（第25・26図） SD06の西側に位置する、径60cm、深さ25cm弱の円形土坑である。還元不十分なものを含む須恵器、土師器が出土した（第29図9、10、11）。9はヘラ切りの有台坏、10は土師器甕の底部で内面に汚れが染み込んでいる。11は土師器甕の口縁部で、口径22.4cm、外面に若干煤が付着する。古代か。

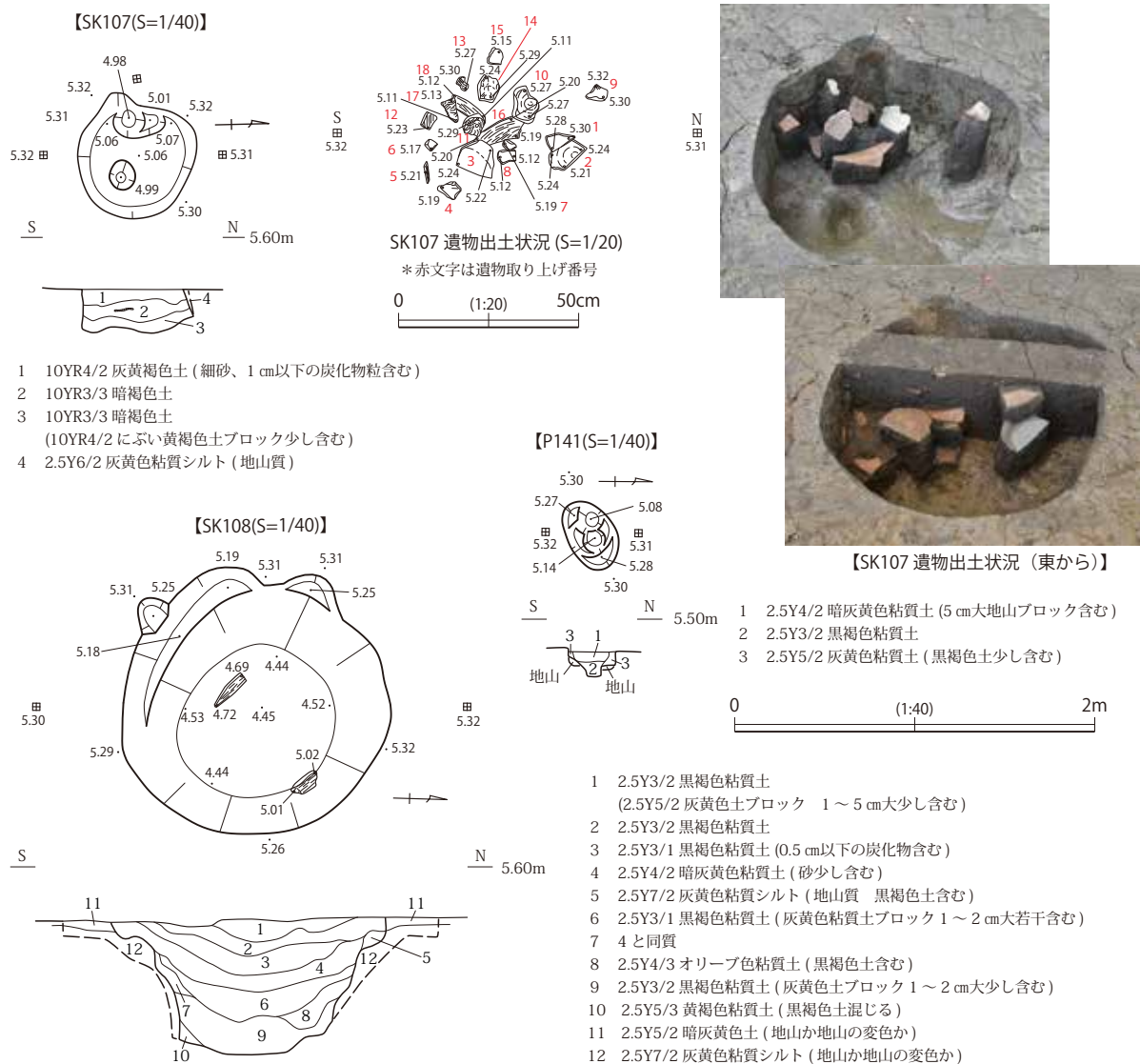
SK108（第25・26図） SD06の西側、SB02の一角に位置する。径140cm、深さ80cm前後の円形の井戸だが、底面近くでは方形となっている。平安時代か。底近くから第30図13の板状木製品が



第24図 2区P121・122、東壁2b区北、SK109、SD108遺構図

第3節 2a・2b区の遺構と遺物





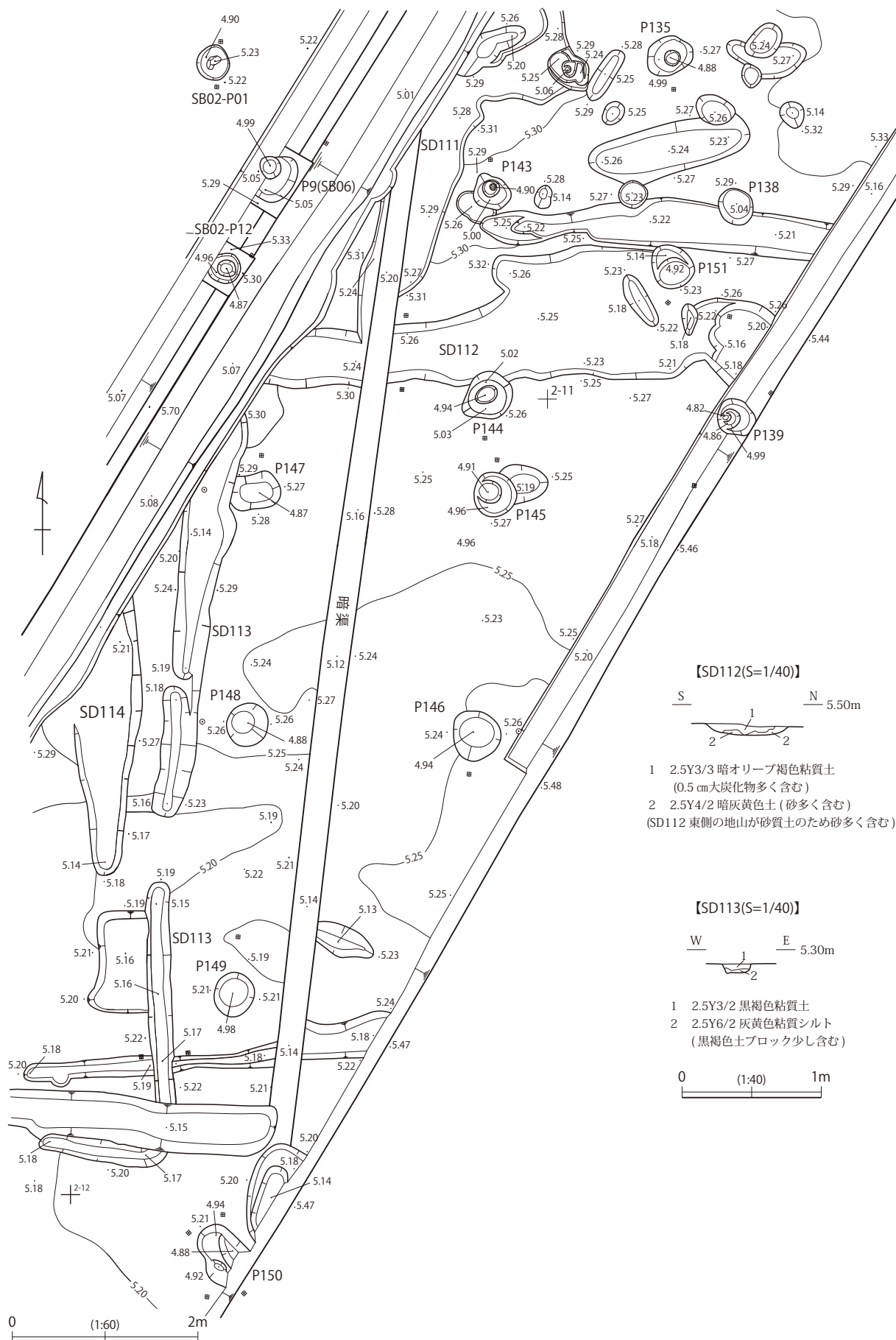
第26図 2区 SK107・108、P141 遺構図

出土した。先端を尖らせるように整形し、表裏とも丁寧に加工してある。14は土師器内黒埴の底部、15・16はトチノキ製の椀で、16は漆塗りである。他に皿底部などの土師器、自然釉やタタキ痕がみられる須恵器、平安時代前期の須恵器坏が出土した。

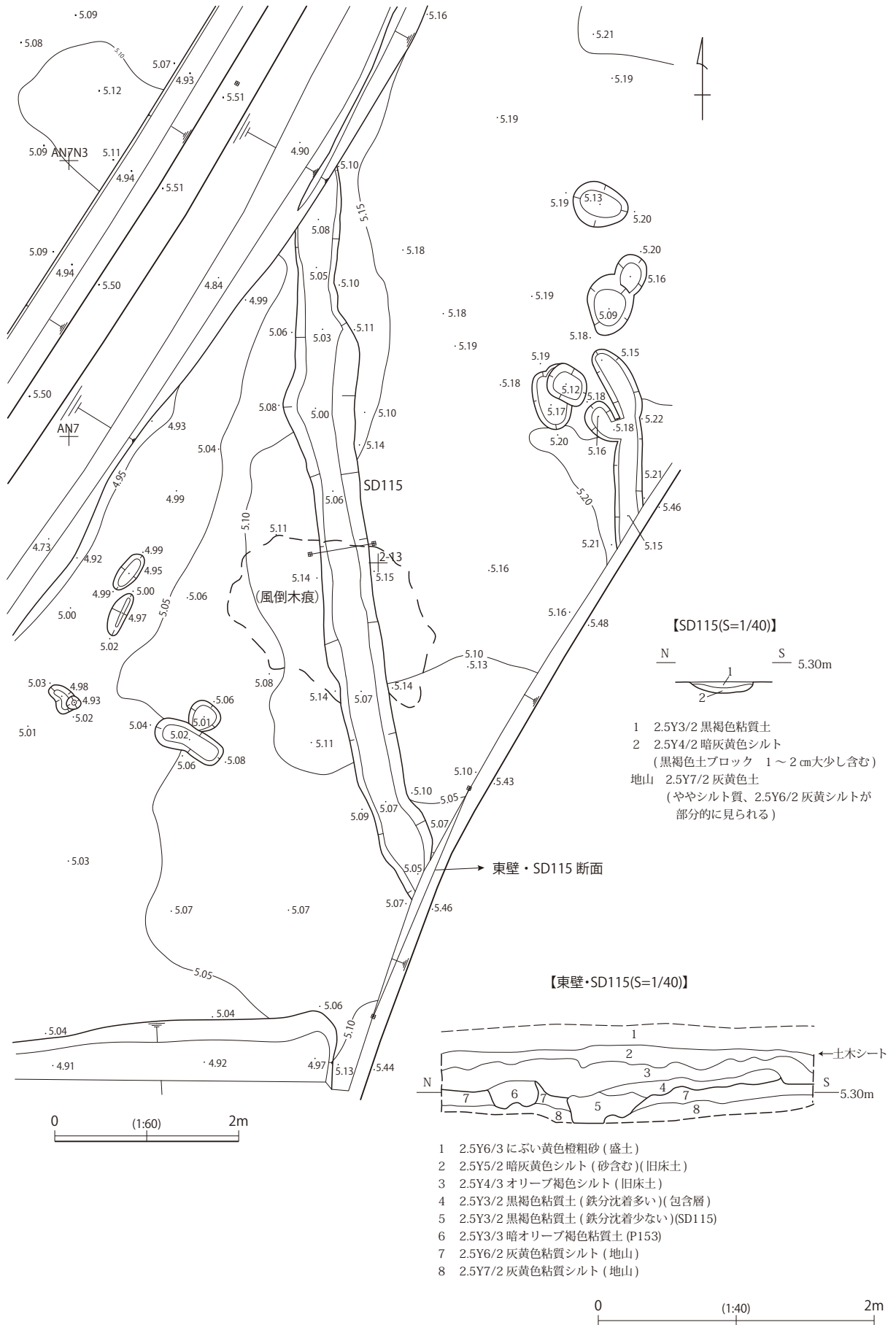
SD112 (第27図) 2b区の中央あたりを東西に走る基幹用排水路 (近現代か) と、それより南側の基幹用排水路の、ほぼ中間あたりに同方向に走る溝である。幅60cm、深さ5cm前後で、農業用の水路痕跡と考えられる。須恵器、土師器、弥生土器が出土する。

SD113 (第27図) 2b区の南部で南北に走る暗渠の西側に位置し、幅25～40cm、深さ5～15cmほどの南北方向の溝である。北の方ほど底面の標高は若干低くなっている。土師器、弥生土器が出土する。SB10に伴う溝の可能性はある。

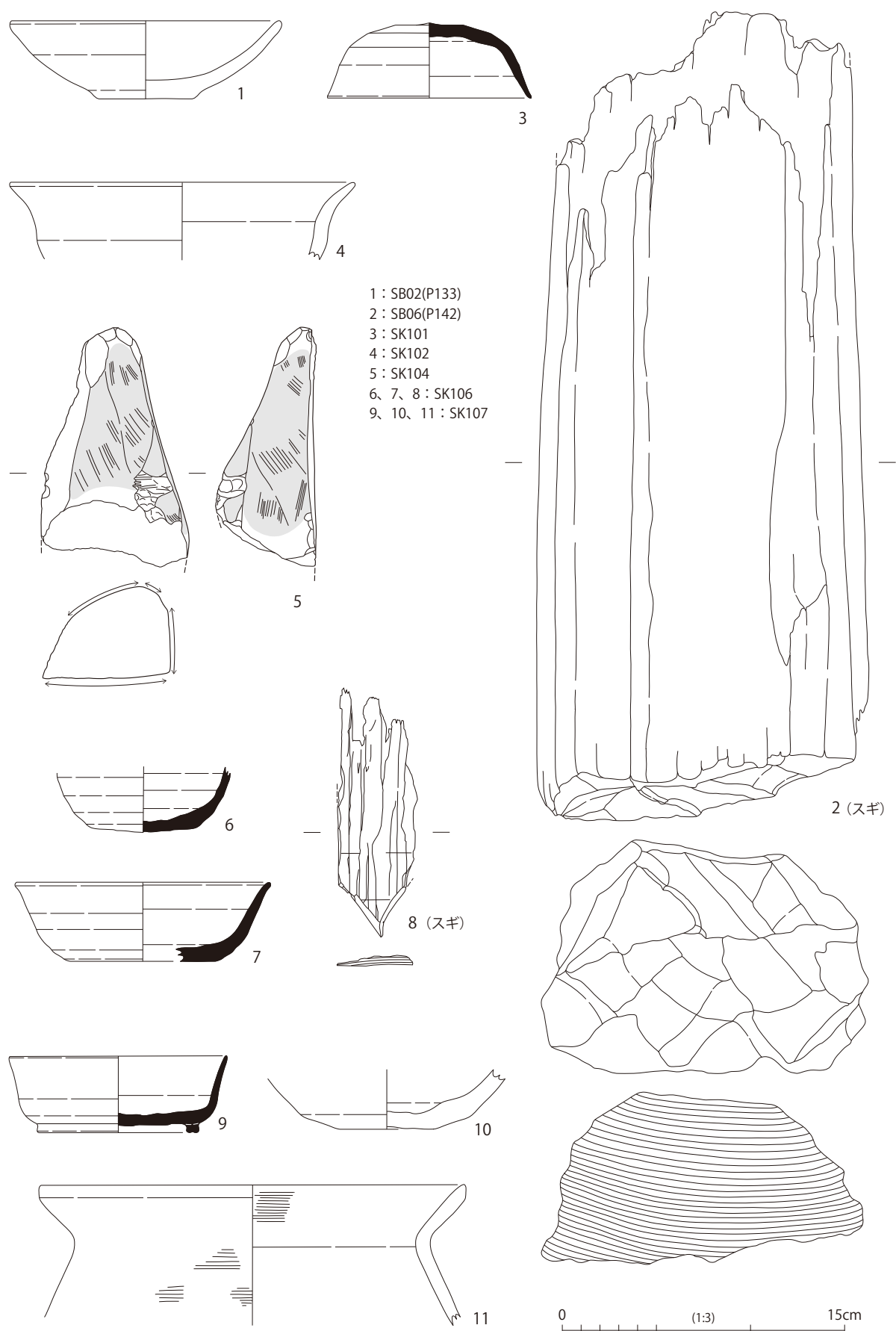
SD115 (第28図) 2b区の南部、SB10など掘立柱建物群の南側の空閑地に位置する。幅50～60cmで、調査区断面では深さ20cmほどの溝と確認できる。緩やかなカーブをなしており、須恵器、土師器が出土する。古代かそれ以前の溝か。



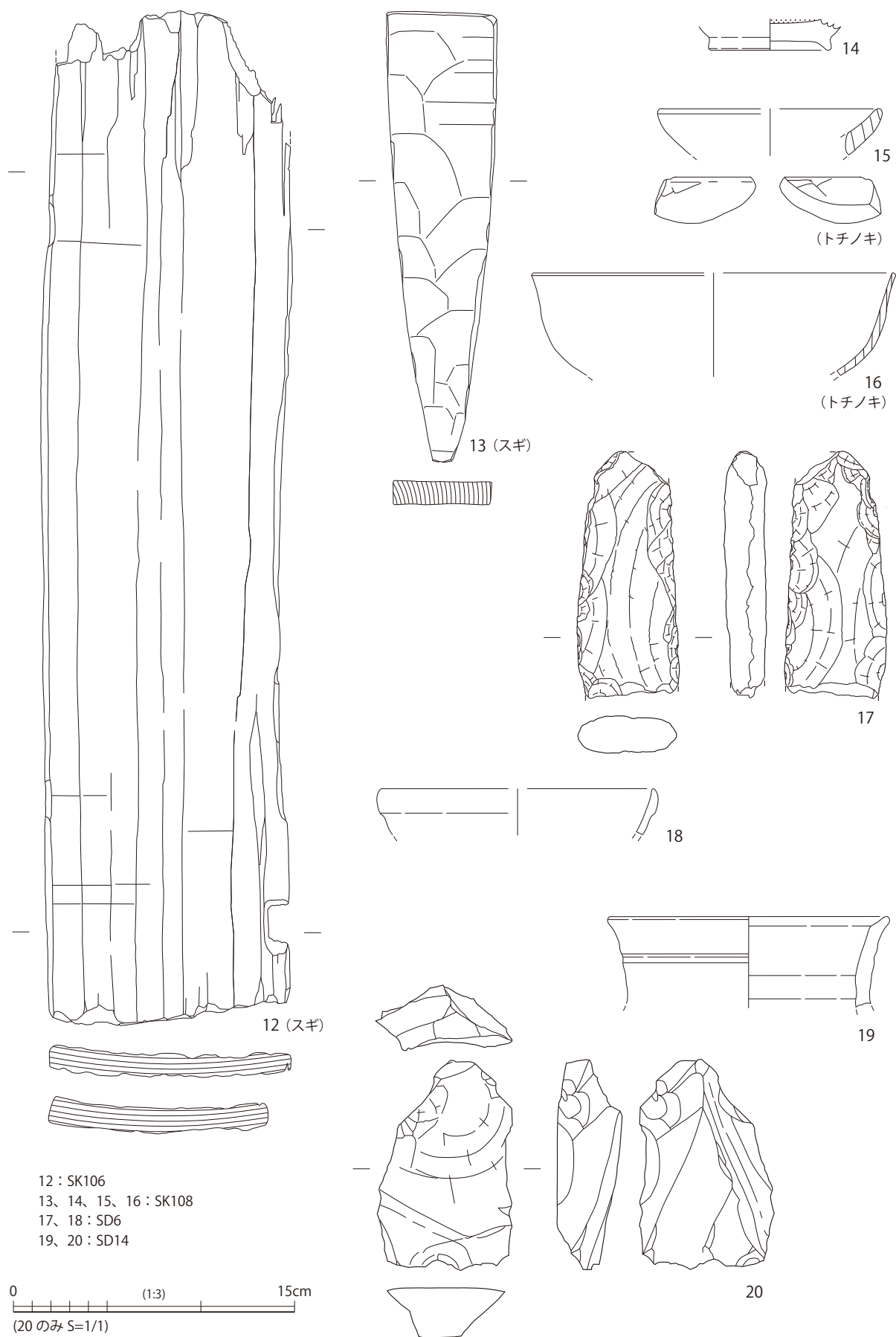
第27図 2区SD112・113遺構図



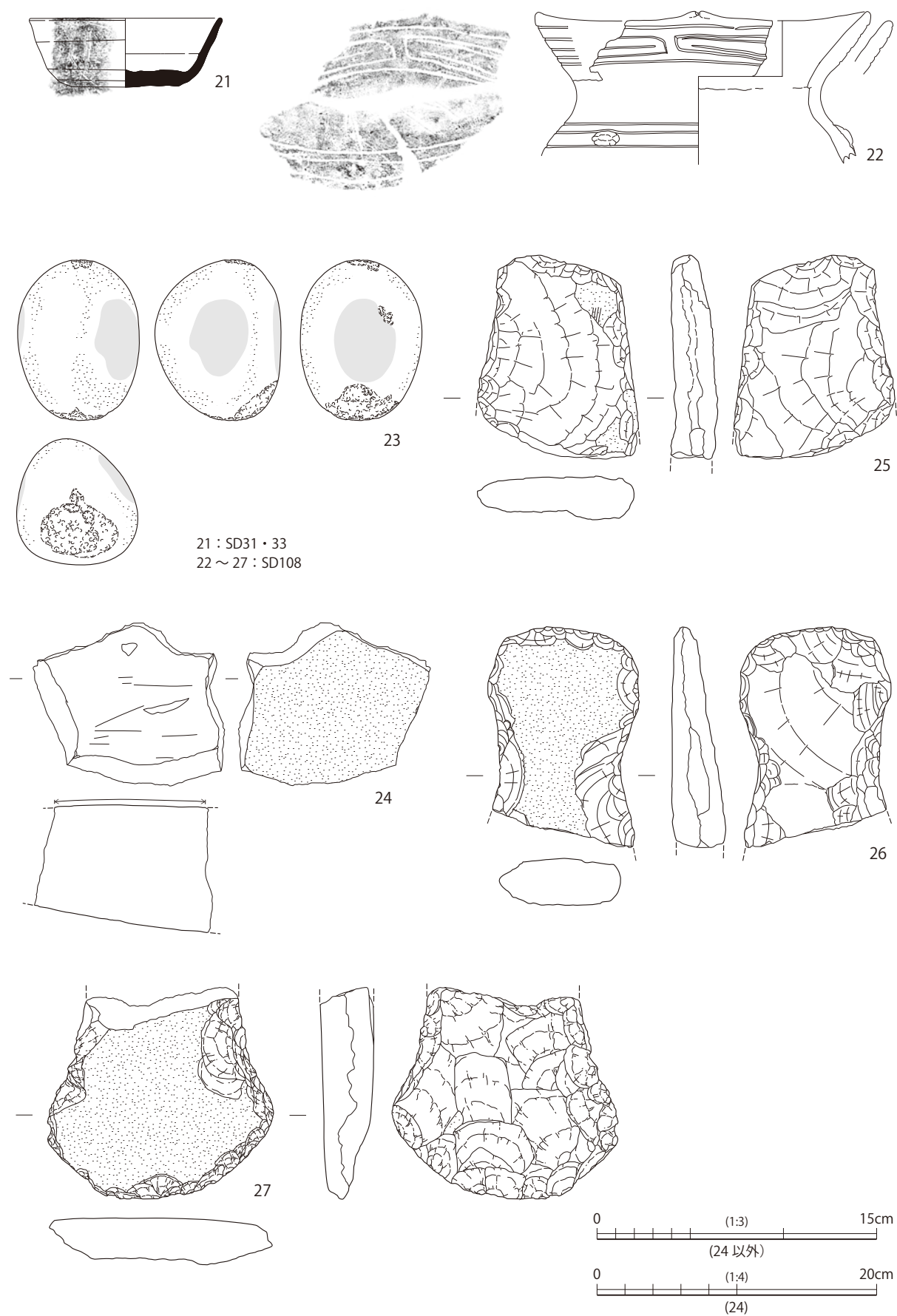
第28図 2区 SD115 遺構図、東壁土層断面図



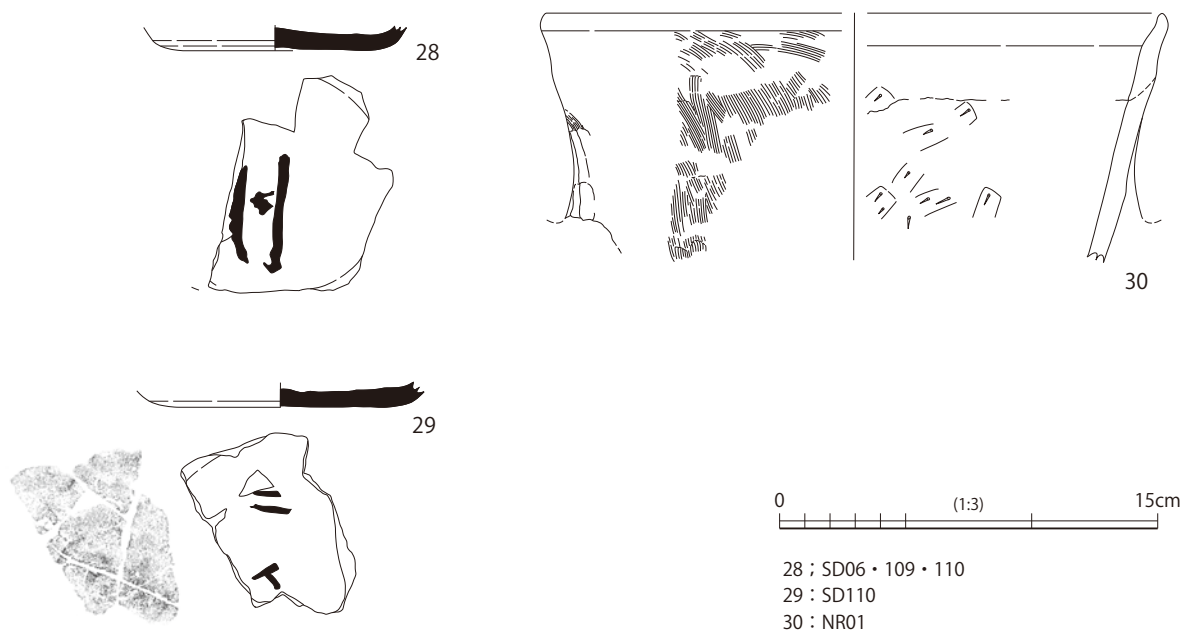
第29図 2区遺構出土遺物(1)



第30図 2区遺構出土遺物(2)



第31図 2区遺構出土遺物(3)

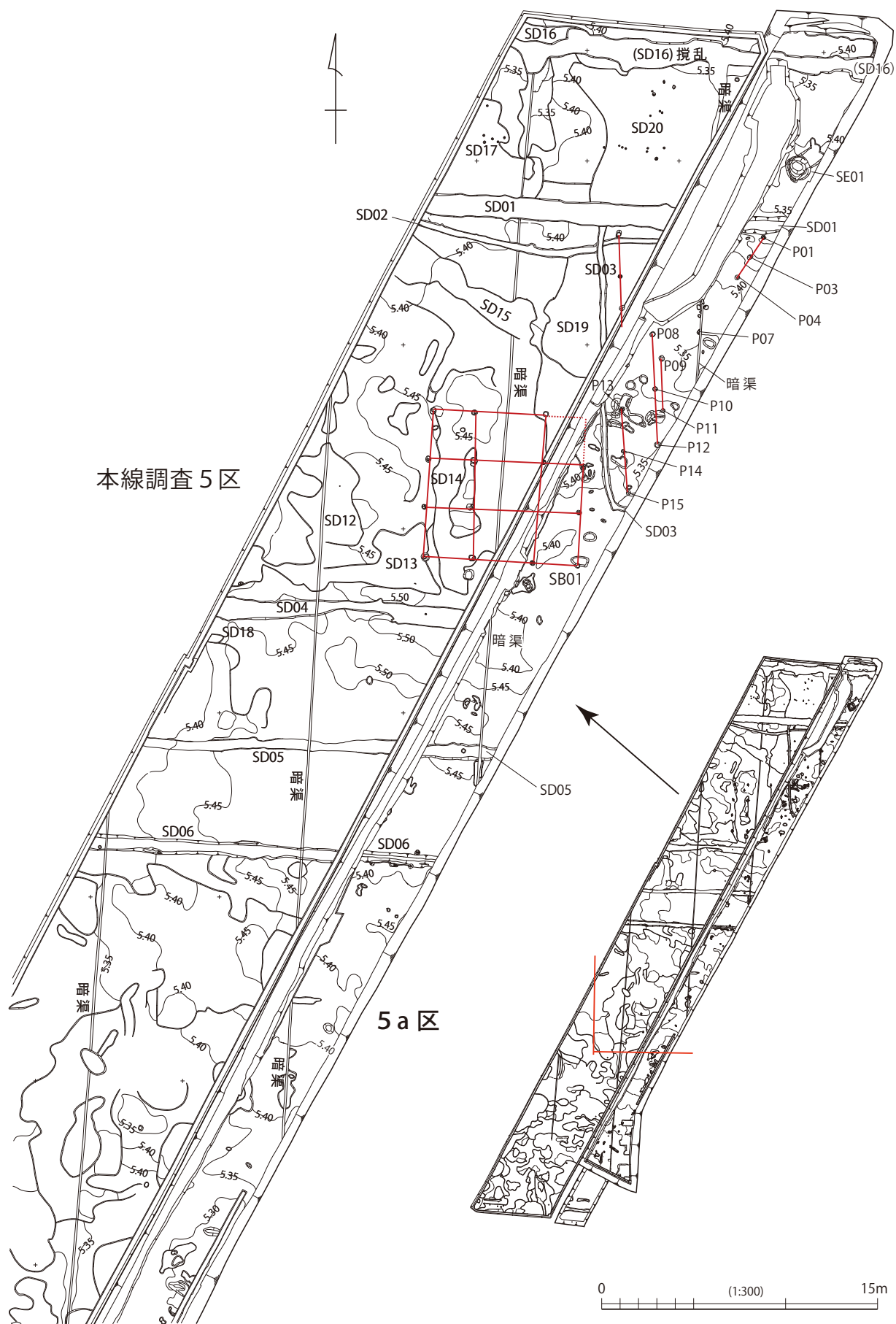


第32図 2区遺構出土遺物(4)

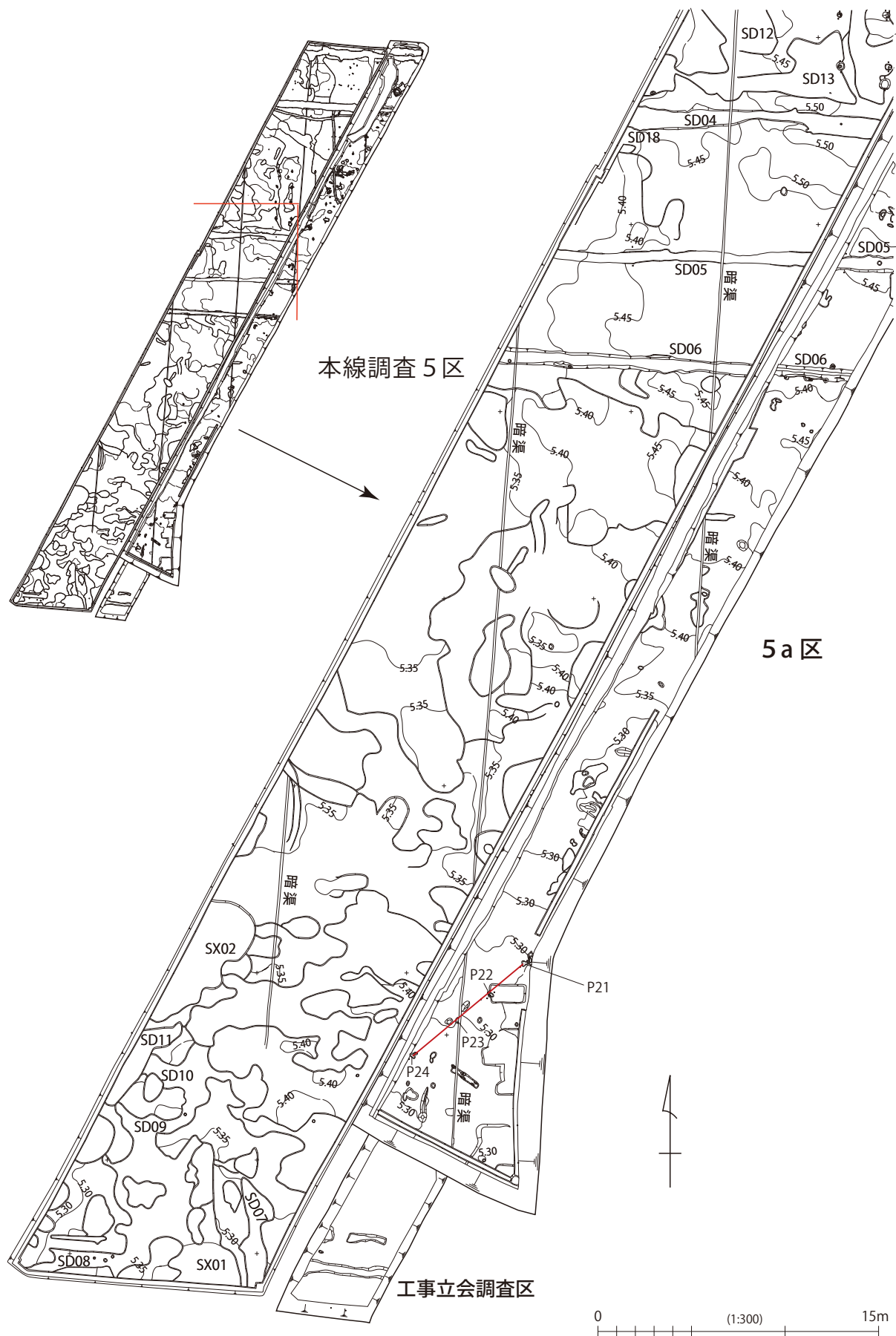
第4節 5a区の遺構と遺物

本線調査5区の東側に隣接し、検出面の標高は5.25～5.45mを測り、本線調査5区より全体的に若干低い(第33・34図)。調査区北部には区画溝や井戸、掘立柱建物などが確認でき、居住域であったと考えられる。調査区中央あたりのSD06以南は、ピットや溝がわずかに検出できるが出土遺物はなく、水田などの生産域であったと見られる。この状況は本線調査5区と同様である。基本層序は、調査時地表面の標高が6.1m、以下順に、新幹線工事に伴う盛土(粗砂、部分的に碎石含む)が80～90cm、部分的に耕作土が15cmほど堆積し、床土(粗砂および粘質土)が約10cm、包含層(オリブ褐色～黒褐色の粘質土)約10cm、灰黄色粘質土の地山となる(第35図)。以下、調査区北側から主な遺構について触れる。

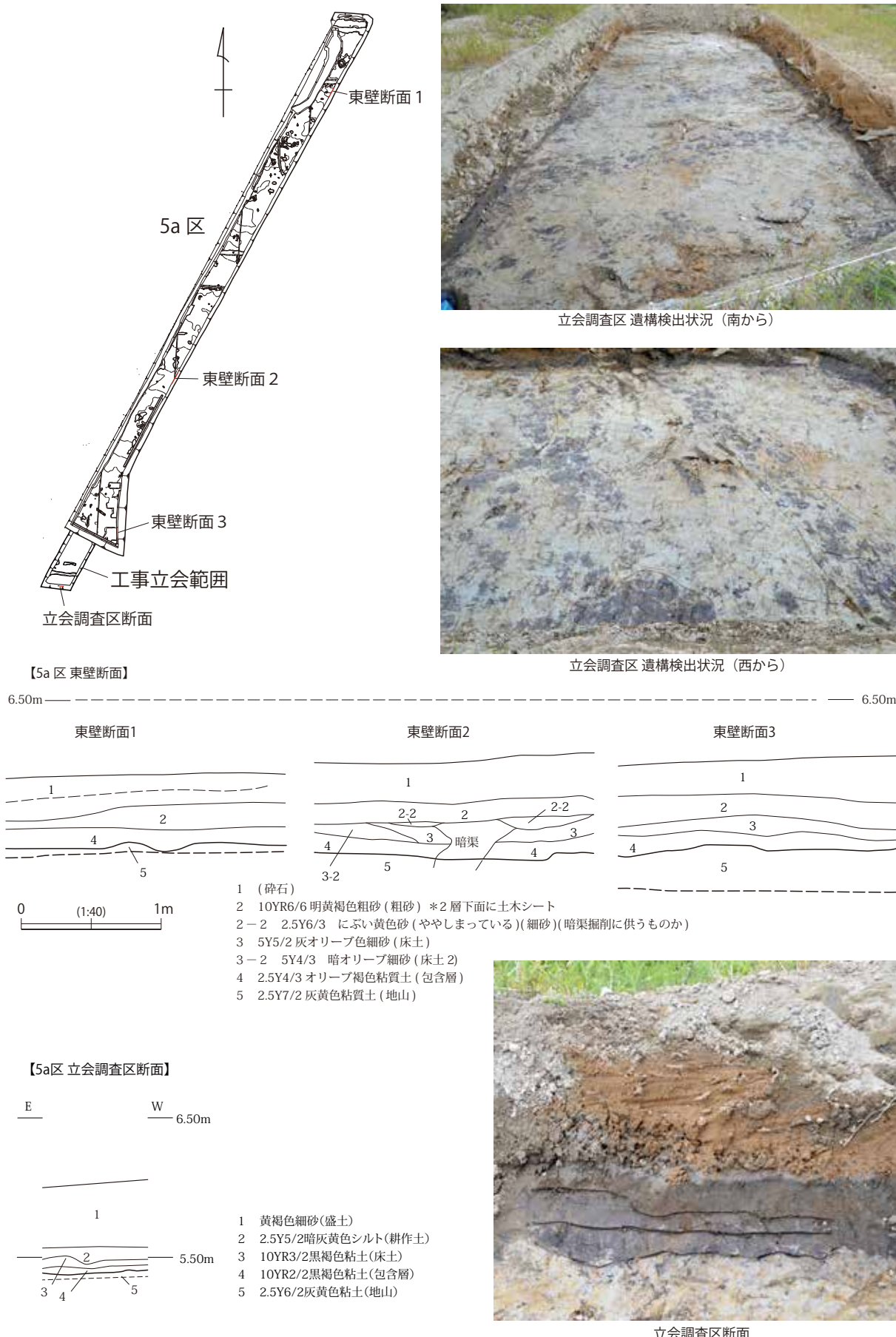
SE01(第36図)調査区北端で確認したもので、検出面の標高は5.4mほどである。一辺約1.3mの隅丸方形を呈する。井戸の最深部標高は4.50mで検出面からの深さは約90cmである。桶や側板などの部材は出土せず、断面形などからも崩落して原形が分かりにくい様子が見える。6層から土器片少量とクスノキ科を素材とする棒状木製品(第42図34)が出土した。底面は削って整形しており、上部は欠損している。直径約4cm、残存長23cm。31は、ケヤキ製の連菌下駄で、井戸がほぼ埋まった後に堆積した1層から出土した。鎌倉時代のものとみられる。小判形を呈し独立した2枚の菌を持つ。前壺部分は欠損しており位置を確認できない。後壺は菌の前方に位置する。32はイスノキ製の横櫓で、棟部に若干漆のようなものが付着している。分析はしておらず詳細は不明だが、漆が剝離した可能性がある。棟部はゆるやかな円弧を描き、1cmあたり6本程度の菌が観察できる。菌は毛引きのラインまで挽かれておらず、根元まで挽ききれていないことから、未成品の可能性がある。33はスギ材の有頭棒だが、後面は扁平で断面半月状となる。平安時代末～鎌倉時代の井戸と判断した。SD01(第36図)SE01の南側を東西方向に流れる溝で、本線調査5区と繋がる。本線調査時は12



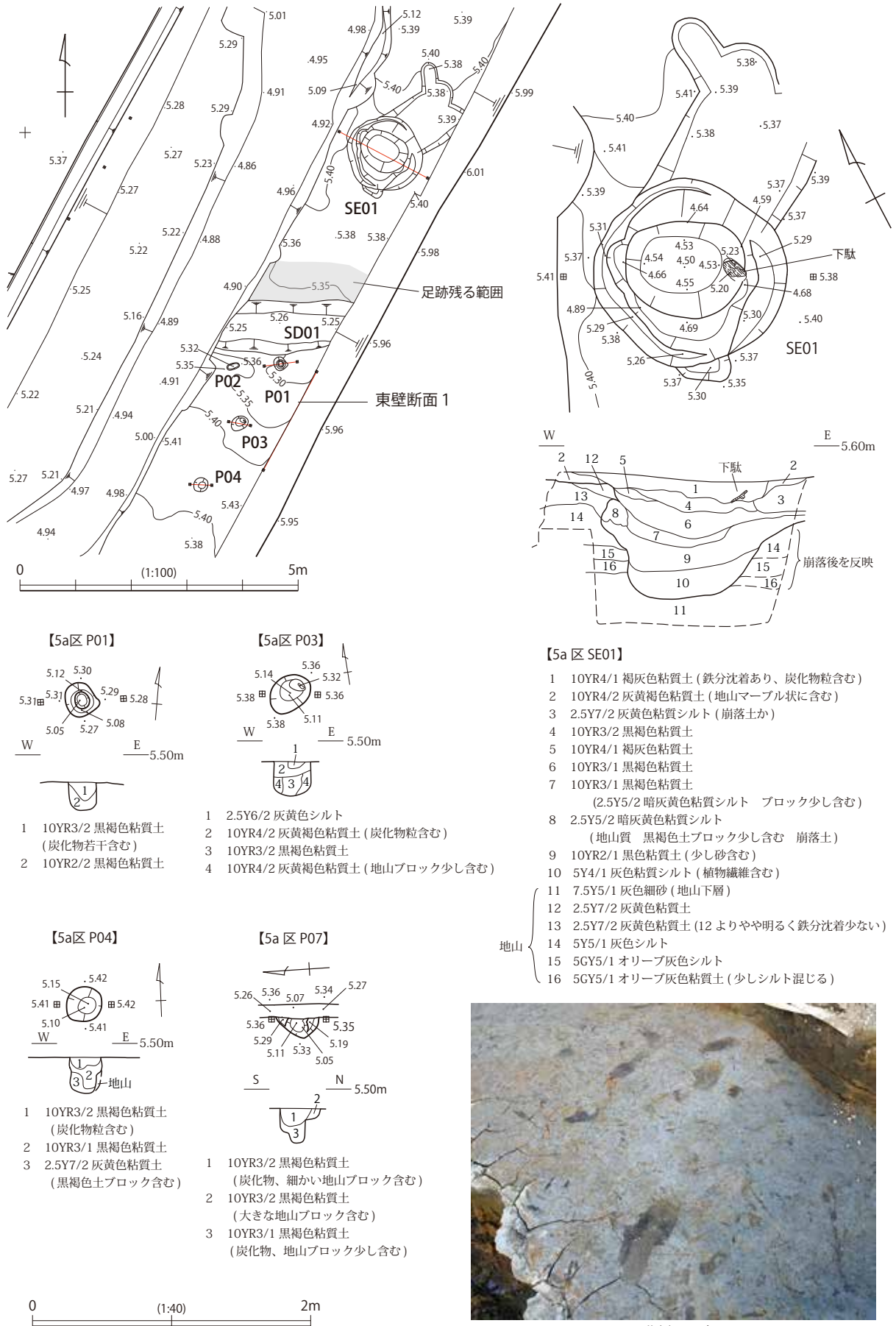
第33図 5区全体図(1) (S=1/300)



第34図 5区全体図(2) (S=1/300)



第35図 5a区 調査区土層断面図(S=1/40)



第36図 5区 SE01、P01・03・04・07 遺構図

世紀後半の珠洲焼甕破片や大正期以前の輪島塗盆などが出土し、圃場整備前の基幹用排水路とみられている。検出面からの深さは10cm程度、溝底の標高は5.25mで、東から西へ流れていた。溝の北側には東西方向に移動した足跡が残っており、溝脇に水がつき土壌がやわらかくなる部分があったことがわかる。

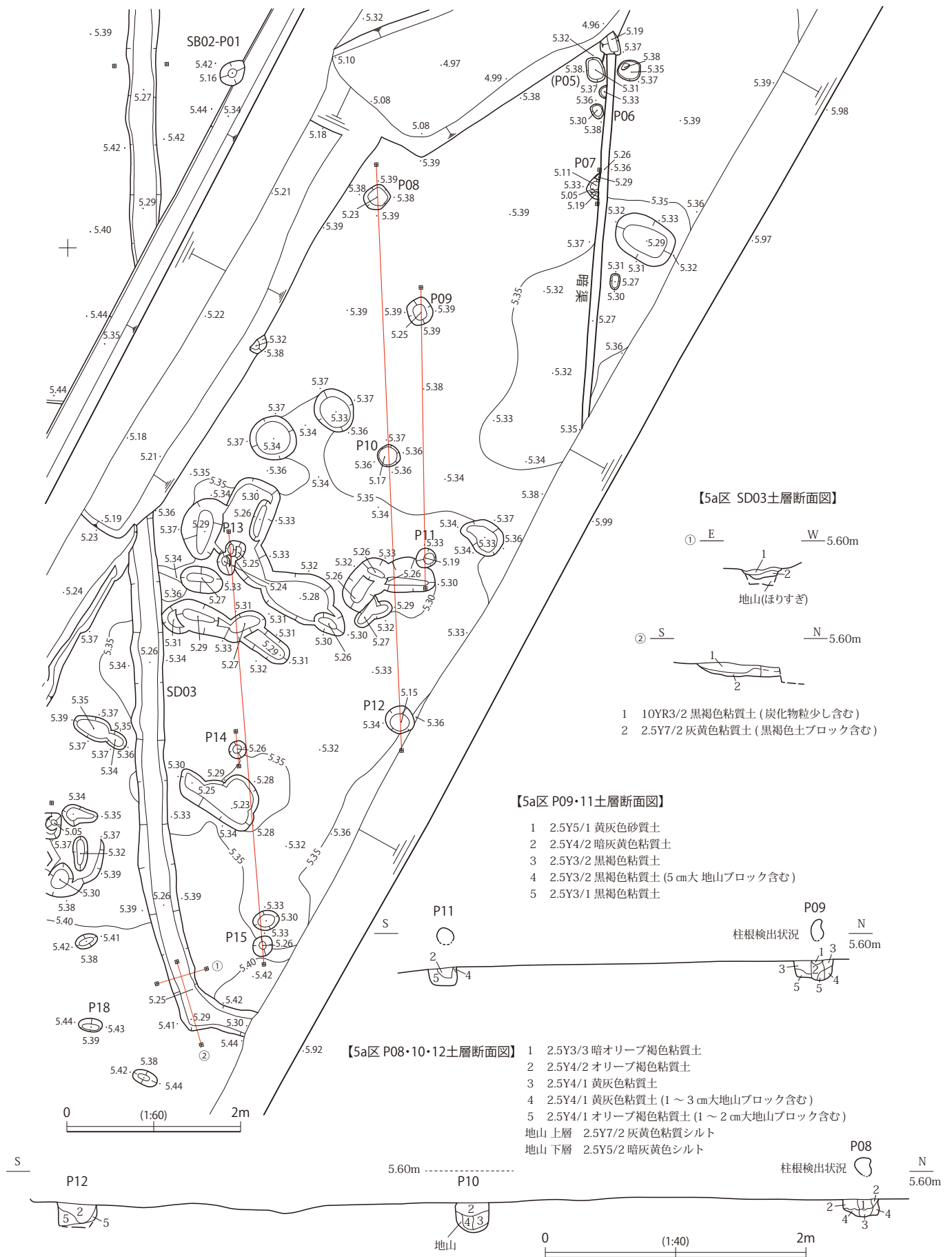
ピット列（第36・37・38図）SD01より南側には、SD03に平行するようなピット列複数と、それらとは軸が異なりN-35°-Eとなるピット列が存在する。軸が異なるのはP1・P3・P4を結ぶラインで、SD03に平行するのはP9・P11、P8・P10・P12、P13・P14・P15の各ラインである。平面形は円形を呈するものがほとんどで、径20～30cm、検出面からの深さは15～25cm、底面の標高は5.15～5.25mである。本線調査5区でSB02の柱穴としていたピットと、P13・P14・P15の列は繋がるようであり、SD03を区画溝と見た場合、その内側に建てられた柵や塀とも考えられる。ピット列の周辺は攪乱の影響もあってか、掘立柱建物として認識できる柱穴は確認できなかった。

SD03（第37図）本線調査5区のSD03から続く溝で、幅30cm程度、検出面からの深さは15cm程度である。若干西に傾く南北方向の溝が、5a区内ではほぼ直角に曲がり東へ延びるようである。本線調査5区では土師器皿の細片が出土しており、古代末～中世の区画溝と考えられる。南北方向の部分で上記のピット列と平行する。

SB01（第39・40図）本線調査5区のSB01の一部となるピットを確認した（P16・P17・P19・P20）。東西3間（8.4m）、南北3間（8.1m）の掘立柱建物で、検出面の標高は5.4m、柱穴底面の標高は5.1m前後を測る。柱穴は円形を呈し、径25cm、深さは約30cm。主軸方位はN-2°-Eで、SD03の方向とは若干ずれる。古代末～中世に属する建物とみている。

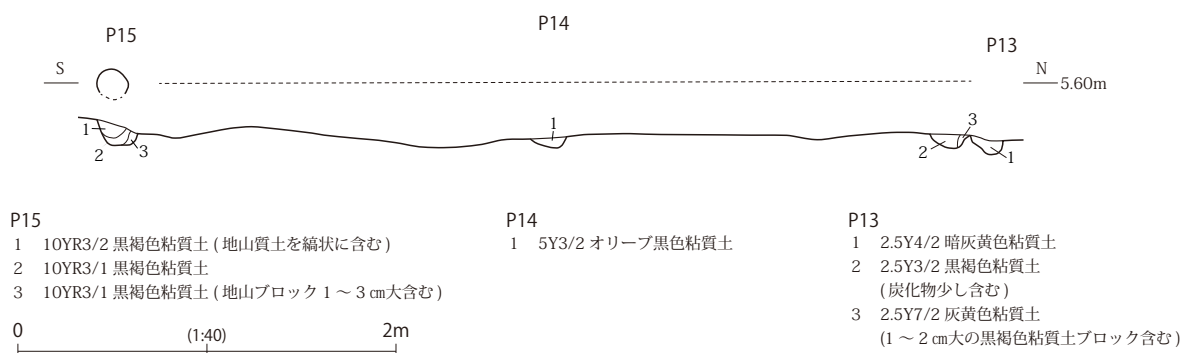
SD05・06（第40図）本線調査5区で検出された溝に続くものである。本線調査時にSD01とSD06は圃場整備前の基幹用排水路、SD04、SD05はそれ以前の用排水路と判断している。SD05は幅60～70cm、検出面からの深さ約10cm。SD05から遺物は出土していないが、SD06からは近現代の磁器碗、近世の陶器・瓦質土器、須恵器瓶・甕などの破片が見られた。

調査区南端のピット列（第41図）SD06以南は検出面の標高が徐々に下がり、不整形な落ち込みやピットが見られ、水田などの生産域であったと思われる部分である。P21～P24は径30cmほどの長円形でピット間隔が2.4～3.0mとまちまちであるが、底面の標高は5.3m前後で一定であり、水田等に伴うものか。



第 37 図 5a 区 P07 ~ P12、SD03 遺構図

【5a区P13・14・15土層断面図】



第38図 5a区P13～15土層断面図



P08



P09



P10



P11

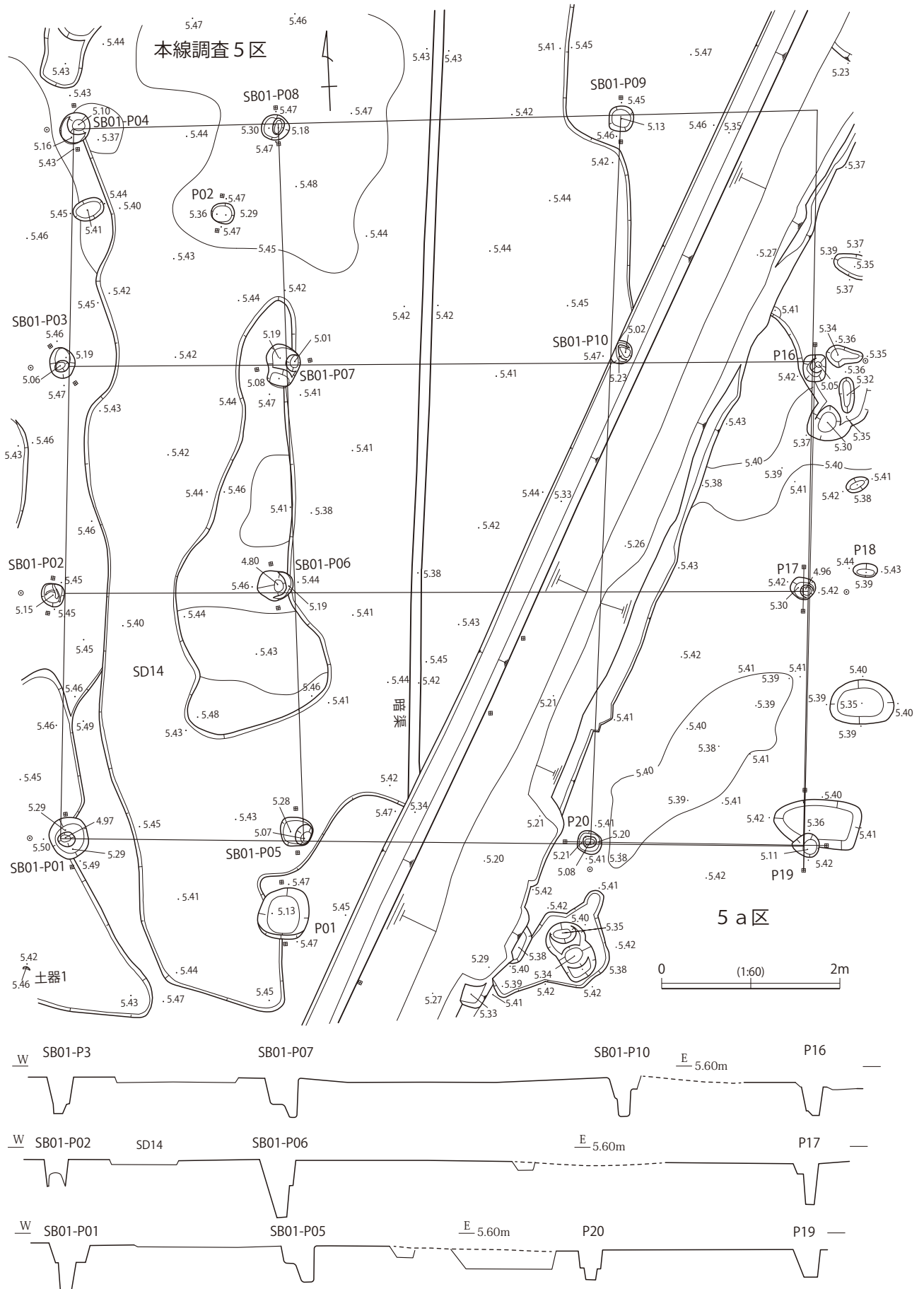


P12



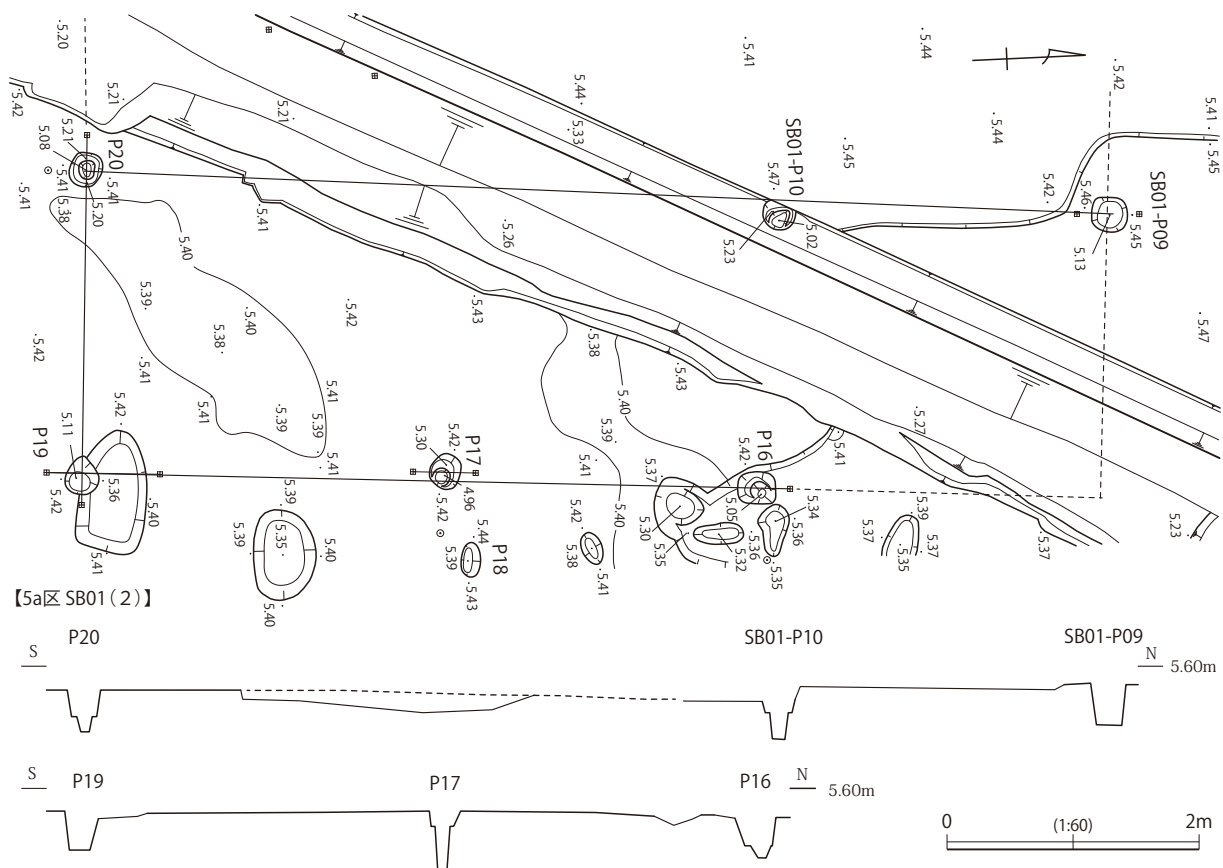
P15

ピット土層断面写真 (東から)

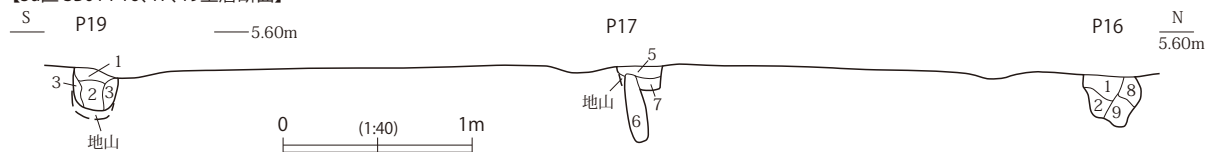


第39図 5区SB01(1)平面図、柱穴エレベーション(S=1/60)

第4節 5a区の遺構と遺物

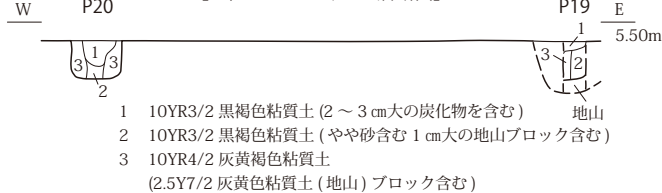


【5a区 SB01 P16、17、19土層断面】

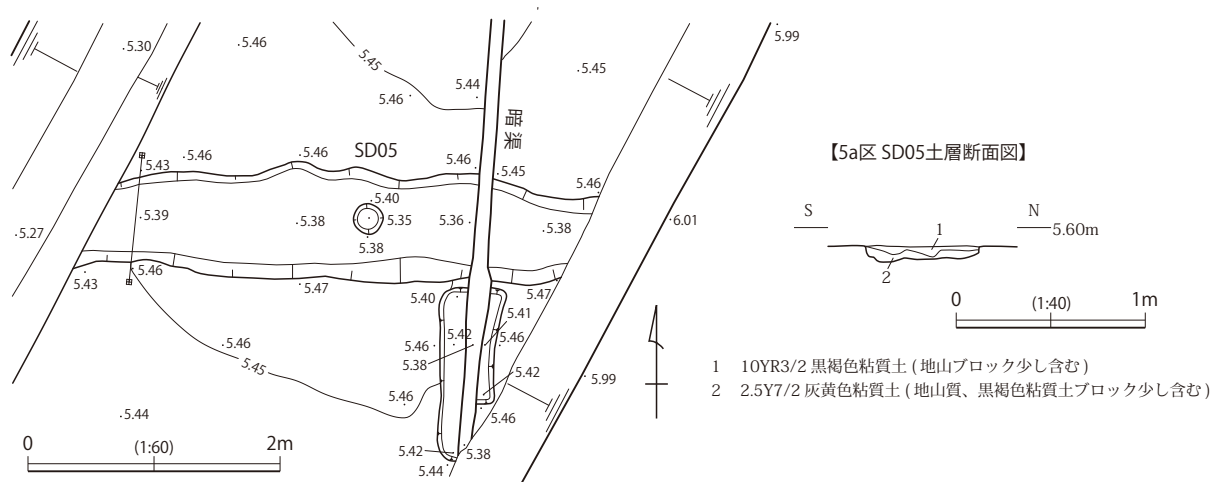


- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土 (小さな炭化物ブロック含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土 (やや粘性強い、地山ブロック含む)
- 3 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック含む)
- 4 10YR3/3 暗褐色粘質土 (地山ブロック含まない)
- 5 2.5Y3/2 黒褐色粘質土
- 6 2.5Y3/1 黒色粘質土 ※壁に木の皮付着、柱が沈下したか or 杭?
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 (2 cm大地山ブロック少し含む)
- 8 10YR3/2 黒褐色粘質土 (2 ~ 5 cm大地山ブロック多く含む)
- 9 10YR3/2 黒褐色粘質土 (1 cm大地山ブロック若干含む)

【5a区 SB01 P19、20土層断面】

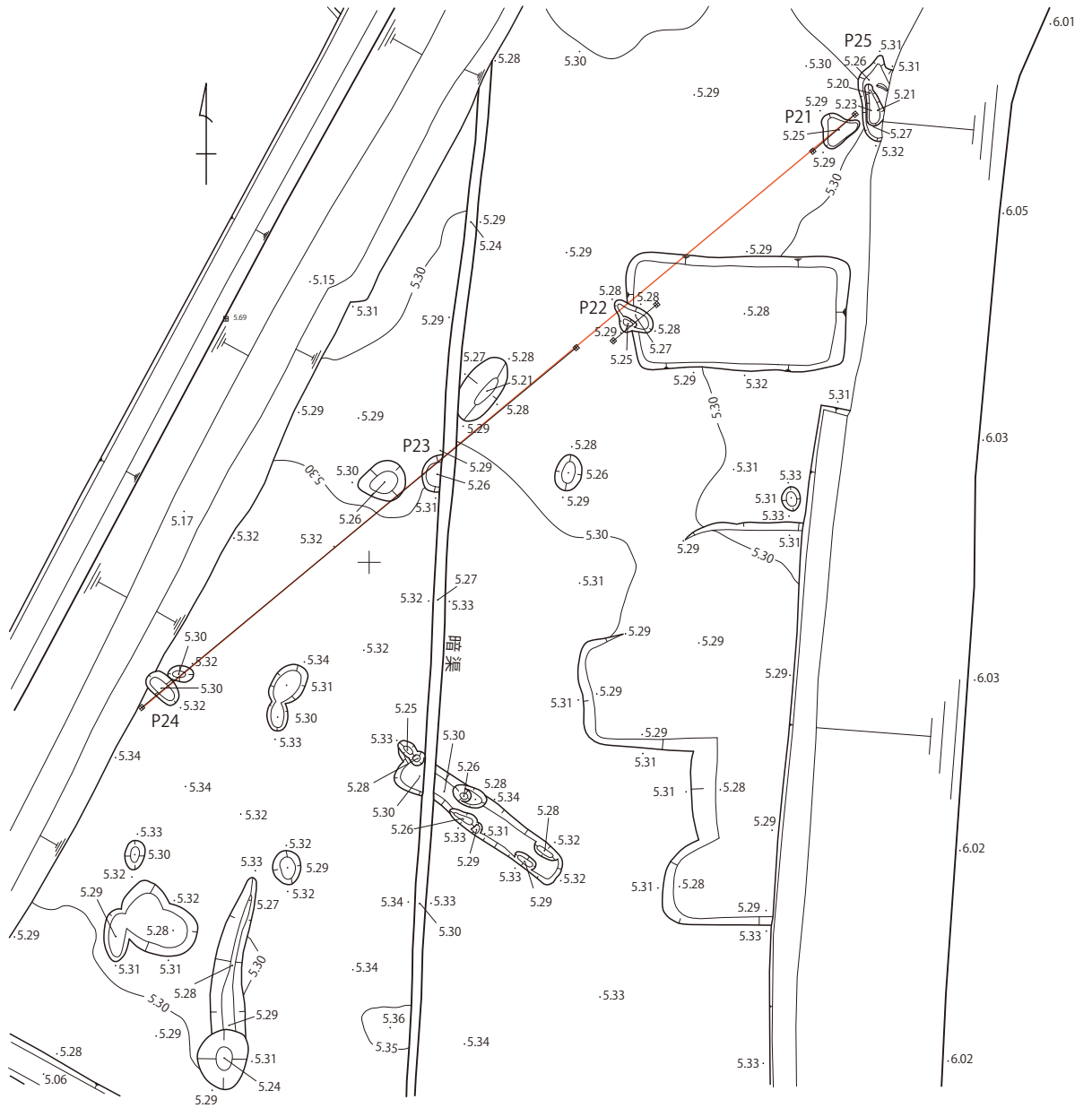


- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土 (2 ~ 3 cm大の炭化物を含む)
- 2 10YR3/2 黒褐色粘質土 (やや砂含む 1 cm大の地山ブロック含む)
- 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (2.5Y7/2 灰黄色粘質土 (地山) ブロック含む)

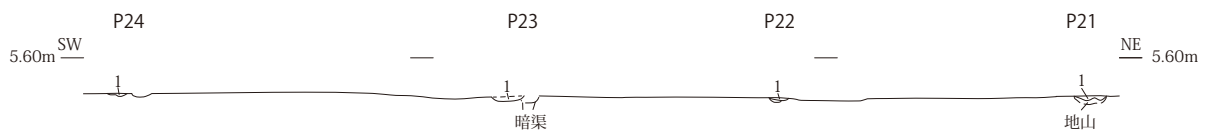


- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土 (地山ブロック少し含む)
- 2 2.5Y7/2 灰黄色粘質土 (地山質、黒褐色粘質土ブロック少し含む)

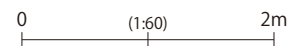
第40図 5a区 SB01 (2)、SD05 遺構図



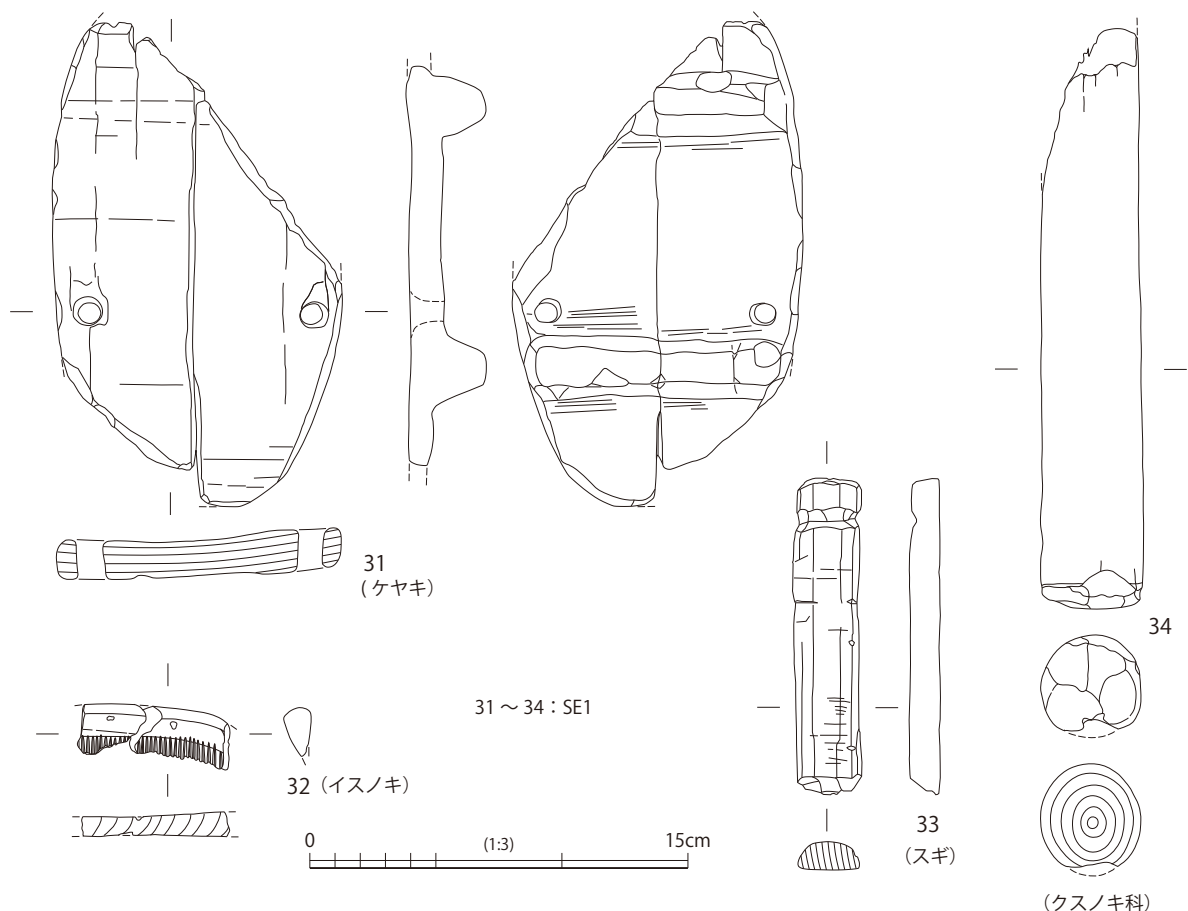
【5a区 P21・P22・P23・P24】



1 2.5Y6/2 灰黄色粘質土に 2.5Y3/2 黒褐色粘質土がマarmor状に入る (P21～P24 共通)



第41図 5a区 P21～P24 遺構図

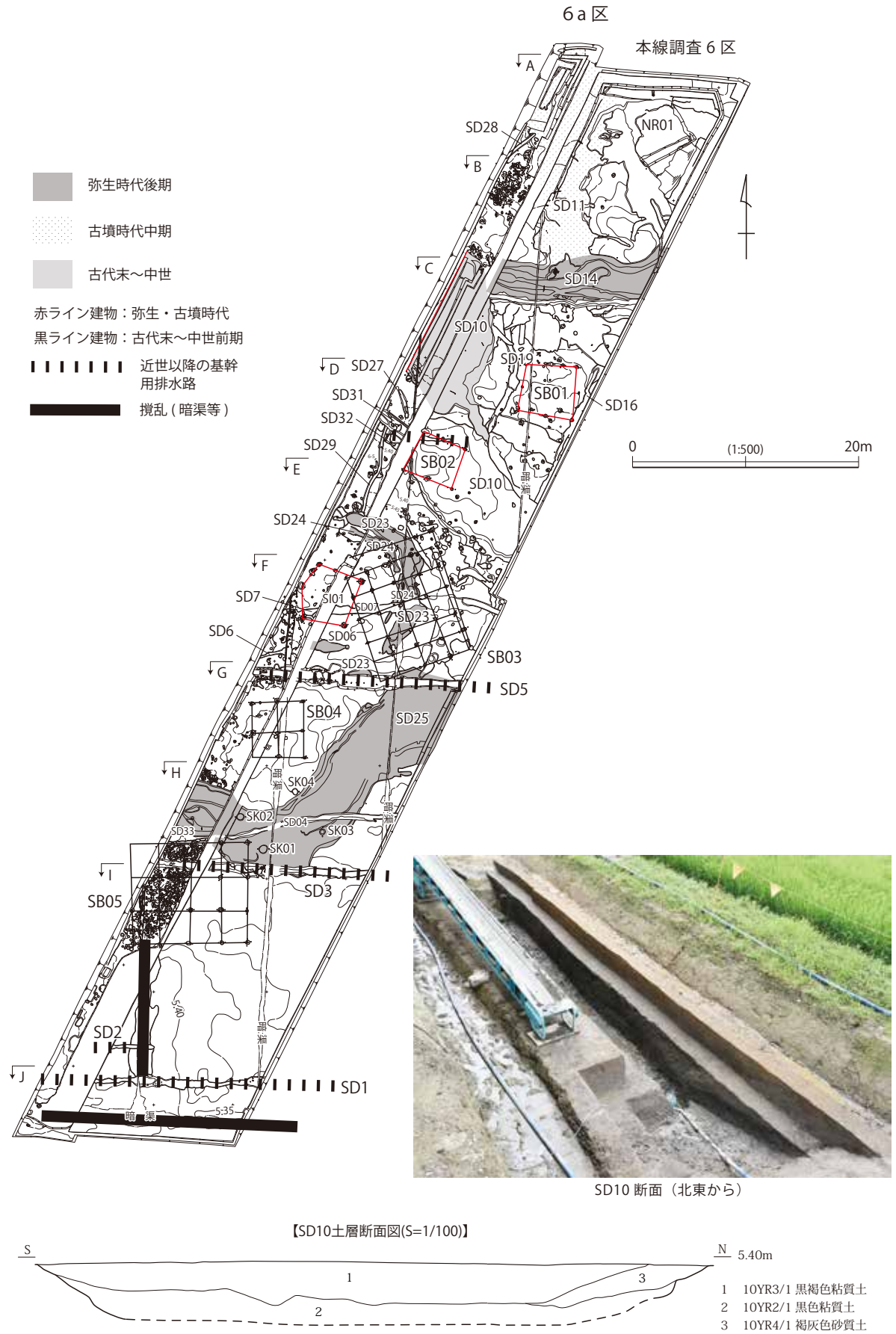


第42図 5a区遺構出土遺物

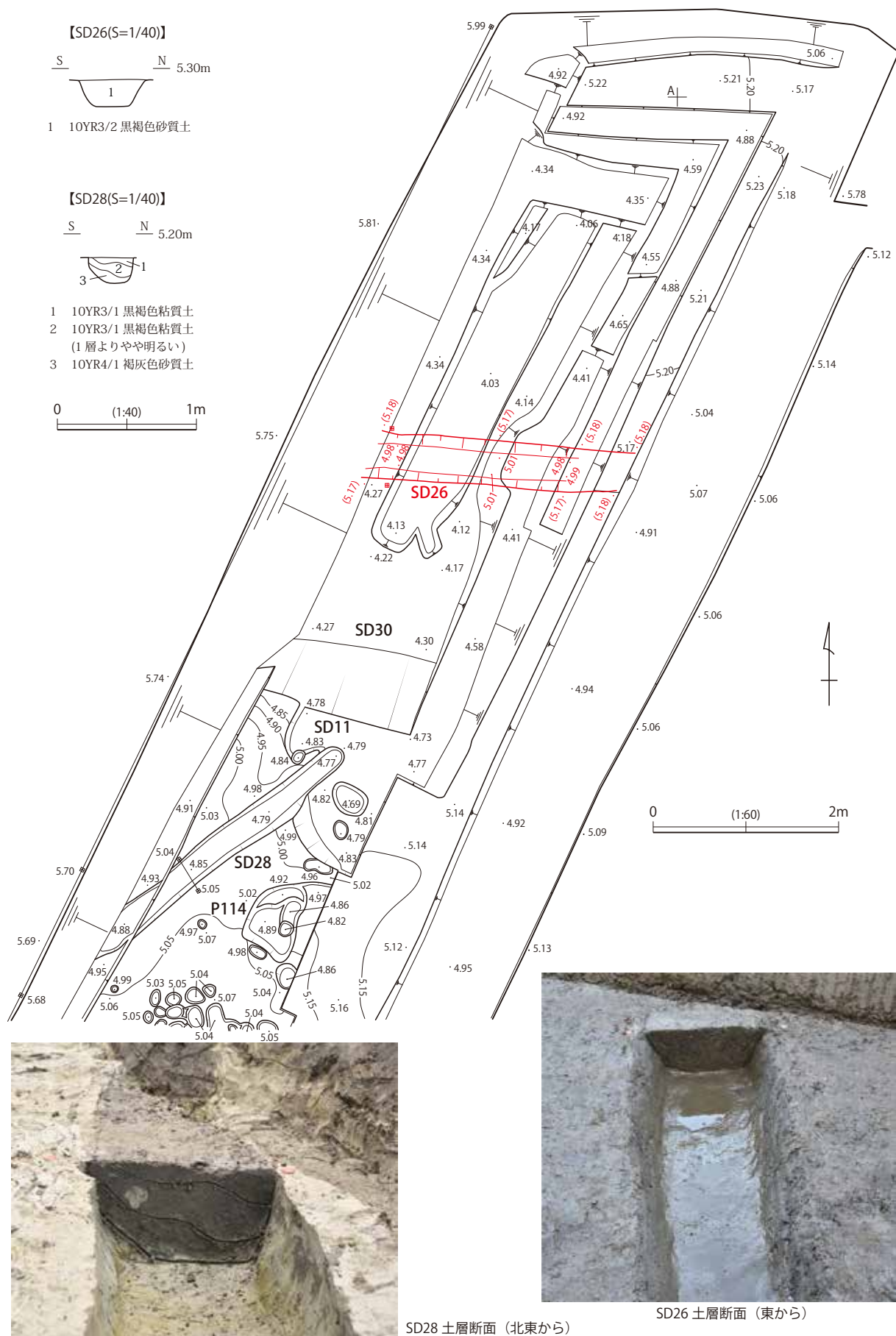
第5節 6a区の遺構と遺物

本線調査6区の西側に隣接し、検出面の標高は南端が5.2～5.3m、北に向かい徐々に高まり5.3～5.4m程の部分が多い。その微高地上に弥生時代後期の平地式竪穴系建物（SI01）や、古代末～中世の掘立柱建物（SB05、SB04）がみられ、北端は標高5.0～5.1mと低くなり北に続く7区にかけて河川帯となる（第43図）。調査時には、調査区北側から10mごとにA～Iのグリッド名を使用しており、以下、北側のAから順に主な遺構を取り上げる。なお、本線調査の発掘調査報告書で、SI01を平地式竪穴系建物と記していることから、その名称を使用した。

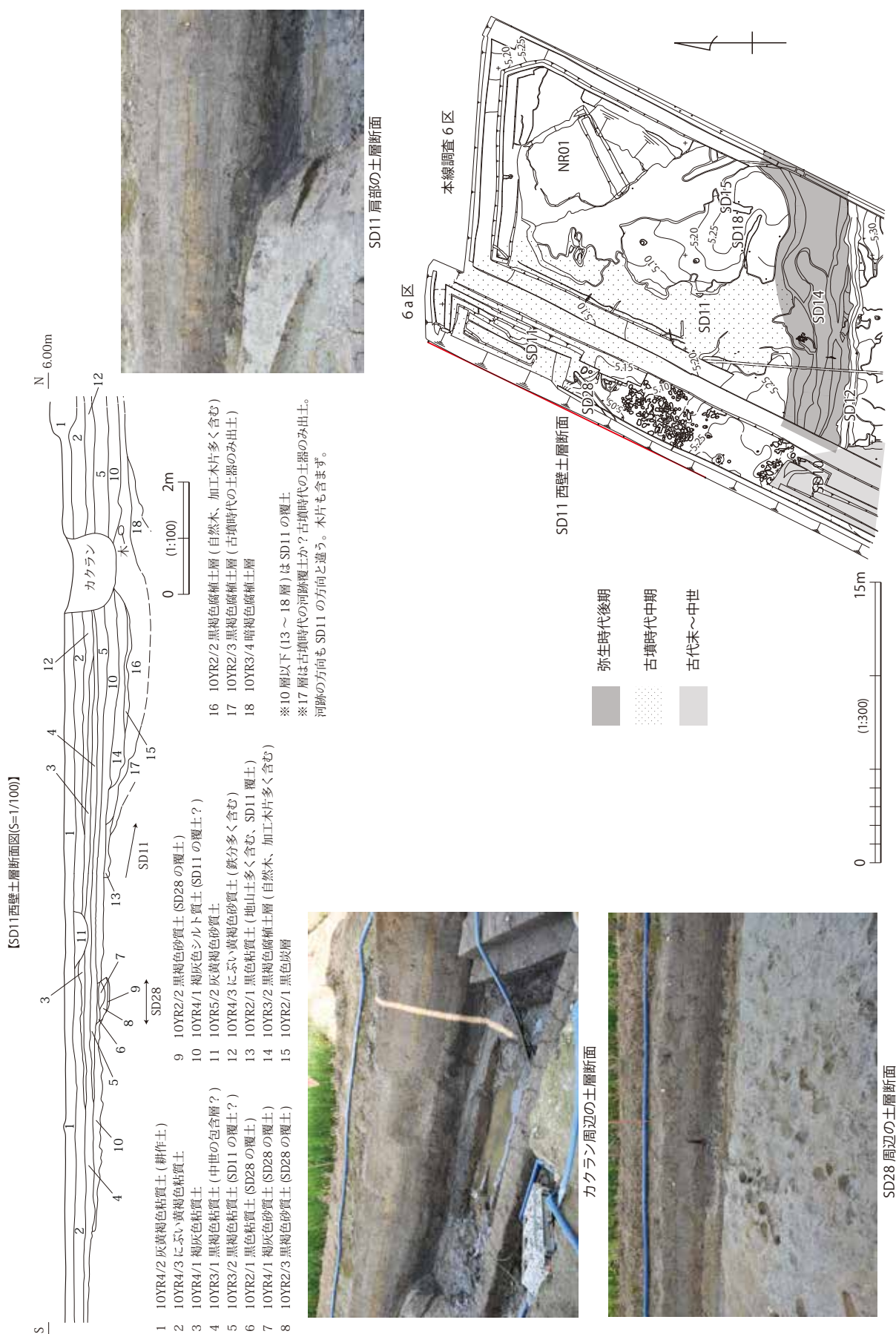
6a区北側（6a-A）には本線調査6区から続く溝状遺構がいくつか見られる。本線調査6区のSD14が最も古く弥生時代後期ととらえられているが、この溝に続く溝を明確には確認できていない。6a区では、SD14より新しく古代末～中世と考えられるSD10によって、削平されているとみられるが、第56図40、41はSD14として取り上げられている。40、41とも磨きが施された壺で、40は弥生時代終末期、41は弥生時代後期のものとみられる。図化していない出土土器の多くは法仏式など弥生時代後期のものである。SD10は溝と言うより、本線調査6区から6a区に向かい下がっていく窪地や湿地などと考えられ、第43図の断面図にあるように、底にあたる部分は未確認である。SD14とSD10の間の時期に存在していたのがSD11である。本線調査6区では古墳時代中期頃の土



第43図 6区主要遺構配置図、SD10土層断面図



第44図 6a区-A(SD26・28)遺構図



第 45 図 6a 区 SD11

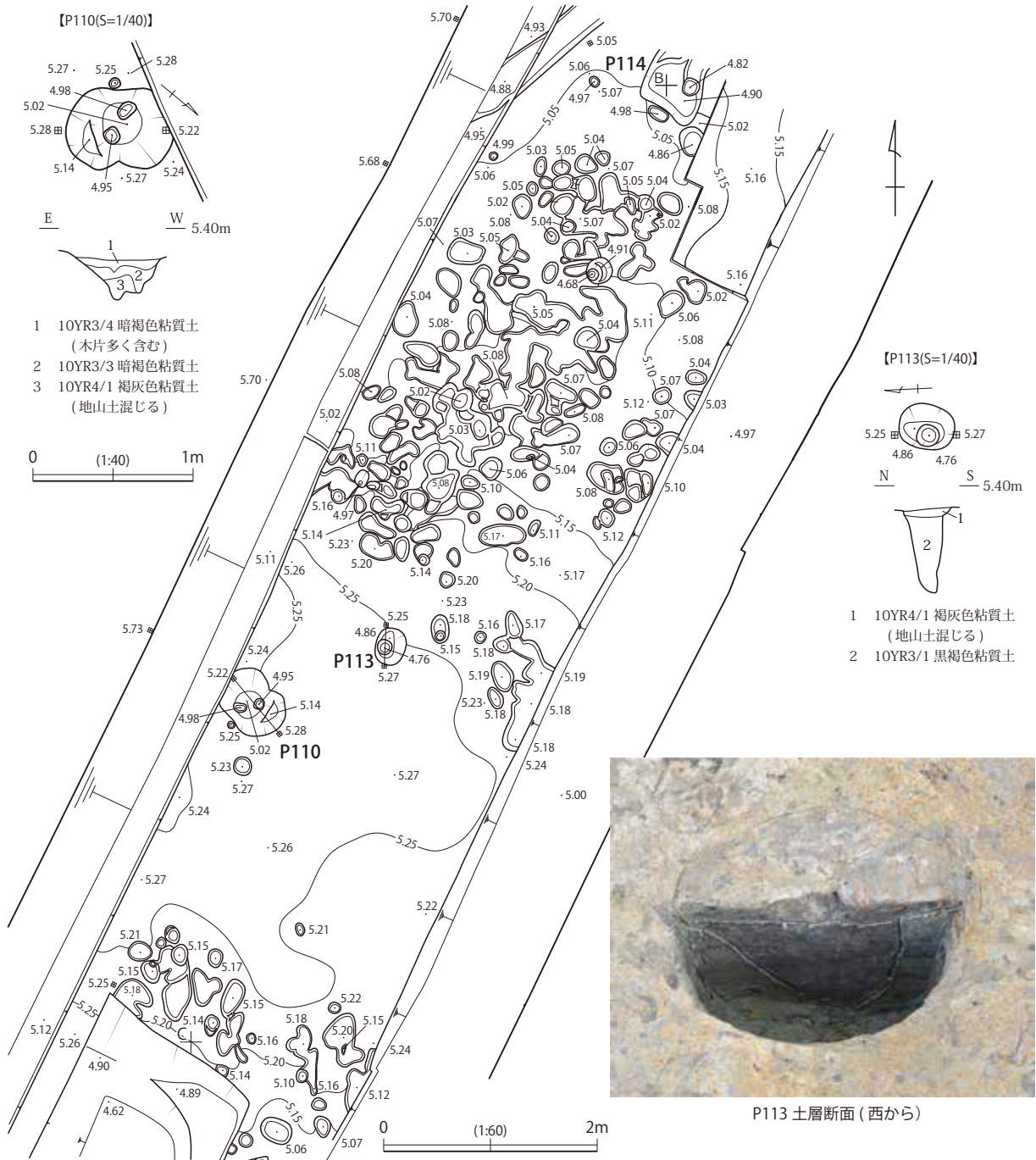
器や管玉などが出土しており、その頃の溝とみられる。SD11 南端はSD14あたりで上がりきっている（第45図）。北側の6a区に向かい下がっていき、6a区では一段低い部分をSD30として調査した。断面図の17層がその部分にあたり、調査時の所見では、SD11と方向の異なる別の河跡とみている。第57図の51（高坏脚部）、52（甕）など古墳時代の土師器が出土しており、本線調査6区のSD11の続きがSD30の可能性もあるか。6a区北端にはSD11より上面にSD26が確認できた。近世以降の用排水路と同じく東西方向であり、その頃の遺構とみられる（第44図）。遺物は出土していない。SD26の南側には方向の異なるSD28がある。古墳時代の土師器片が1点出土した、深さ、幅とも20cm程度の断面箱形のしっかりとした溝である。底面は北東に向かって下がっている。

SD11などの南側（6a-B）にはいくつかの小穴の他、深さ5cm前後の浅い窪みが多量に見られる（第46図）。これらの窪みは、北側に広がる湿地などの影響で地盤が軟らかくなっているところにできたもので、何らかの植物の痕跡などと考えられる。P110は深さ30cm、長軸60cmほどの円形に近い土坑で、古墳時代の土師器が出土した。P113は径30cm、深さ50cmのピットで出土遺物は見られなかった。

6a-Cはほとんどが本線調査6区から続くSD10に覆われている（第47図）。本線調査時、SD10は竪穴状遺構と窪地が洪水の影響を受けたものととらえていた。SD14を切っており、出土した弥生時代後期の土器などは流れ込みと考えられる。古代の土師器や須恵器、白磁も出土し、古代末～中世の遺構とみている。第56図38、39はスギの板状木製品で、38の上部は削り出して整形しており、下部の中央から右辺にかけてみられる3箇所の孔は貫通している。39は上部が炭化しているようである。SD10の南側に位置するP111は径50cm、深さ40cmの円形を呈し、断面イメージ図のように材を使用した礎板が2段に施された柱穴である。第56図42・43のコナラ属クヌギ節の材が下方に敷かれており、その上に木の枝が敷き詰められ、44のケヤキ材が上方に設置されていた。小さな土器片が出土したのみだが、弥生時代後期の竪穴建物（SI01）の柱穴にも同様の礎板が見られることや柱穴の状況などから、弥生時代後期の柱穴ととらえている。

SD10の南側（6a-D、E）には、溝や柱穴となるピット等が確認でき、居住空間の広がりが見られる。6a-D区より北側、6a-H区より南側と比べ、このあたりは標高5.4m前後と若干高く微高地となっている（第48図）。SD31は幅1.2m、深さ15～25cmの南東から北西へ延びる溝で、7a区上層の古代の水田畦畔と同様の方向を示す。弥生時代～古墳時代の土器が出土している。第57図53は弥生時代後期の器台脚部で、孔が4箇所あったとみられる。SD31から弥生時代後期の平地式建物の外周溝（SD23）に向かって、SD29が続いている。SD29は幅30cm、深さ10cm前後の溝で、SI01の外周溝から水を流すためのものか。弥生時代後期の大型甕（第57図50）の他、弥生時代～古墳時代の土器片が出土している。50と同一個体とみられる口縁部が15mほど離れたSD34から出土している。SD29西側にあるP93は径25cm、深さ50cmほどの円形柱穴で、柱根が残っていた。柱穴形状や褐色粘質土の埋土などから、弥生時代の柱穴と考えられる。

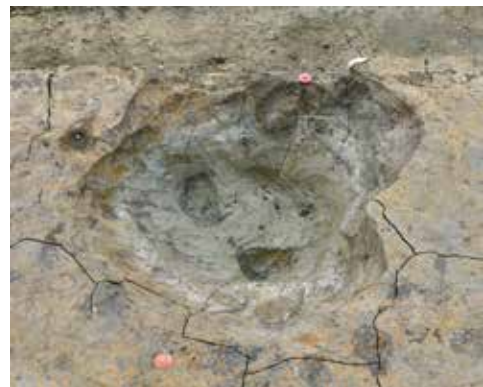
6a-E～Fにかけては平地式竪穴系建物SI01（弥生時代後期）と、それに付随する外周溝であるSD23、SD24が確認できた（第49・50図）。外周溝は削平され残存状況はよくないが、遺構検出時に全長1.5cmほどのヒスイ製小型勾玉（第57図46、片側穿孔）が出土した。わずかに残る埋土のうち3層では、炭化物粒が断面で筋状に見えるほど残り面的にも広がる部分があり、埋まっていく段階で火の使用や炭化物の廃棄が行われた可能性がある。本線調査時にも、SD23の北辺からは炭化物の面が認められた。外周溝の南辺側は、近世以降の用排水路であるSD5によって削平され確認できない状況である。SD5の北側にあるSD34とした遺構からは、弥生後期後半の甕（第58図55）やスタ



P113 土層断面 (西から)



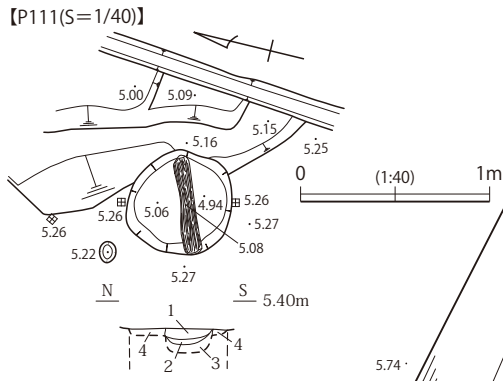
P110 土層断面 (北東から)



P110 完掘状況 (東から)

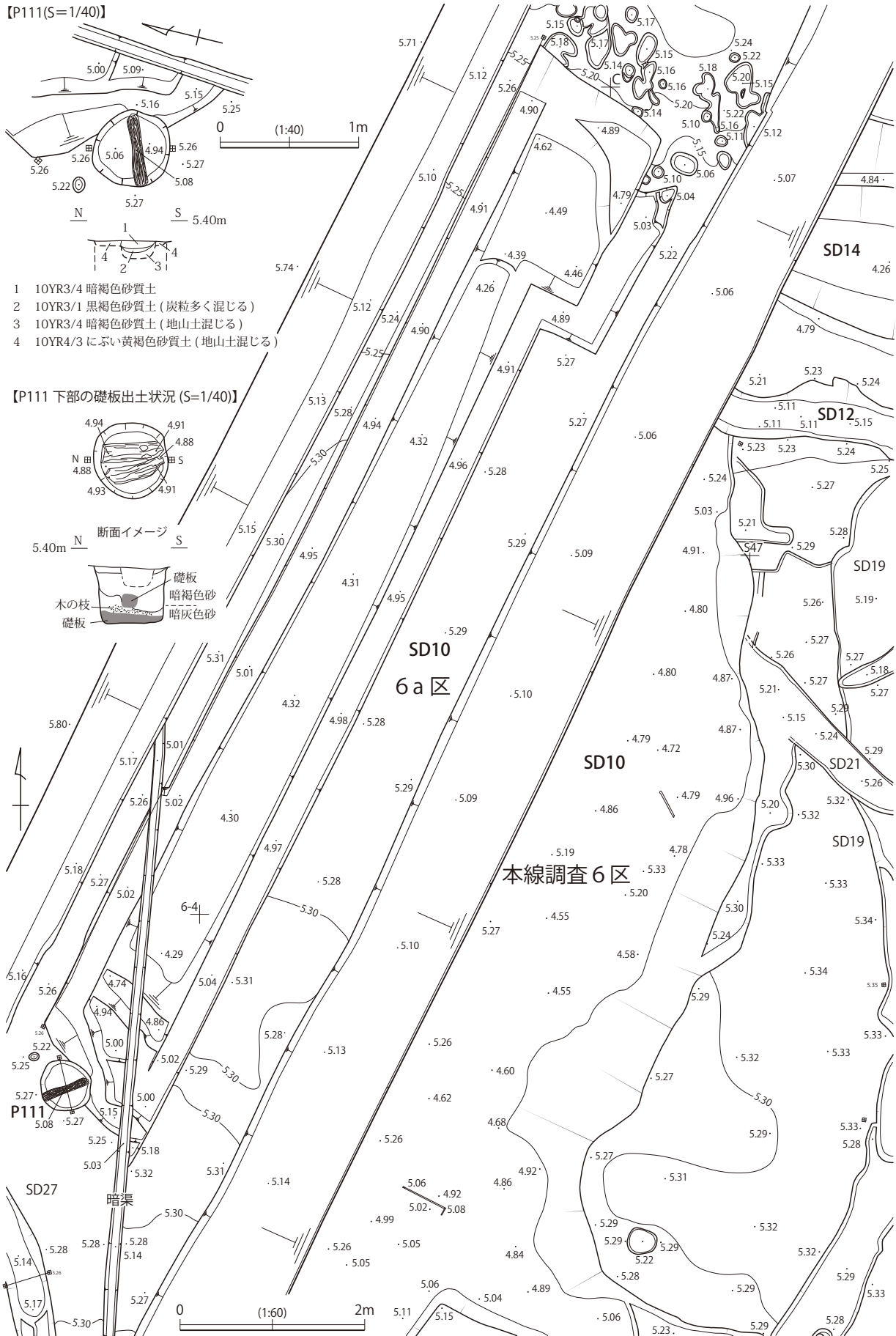
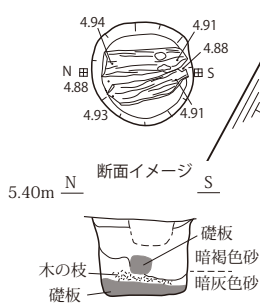
第46図 6a区-B (P110・113) 遺構図

【P111(S=1/40)】

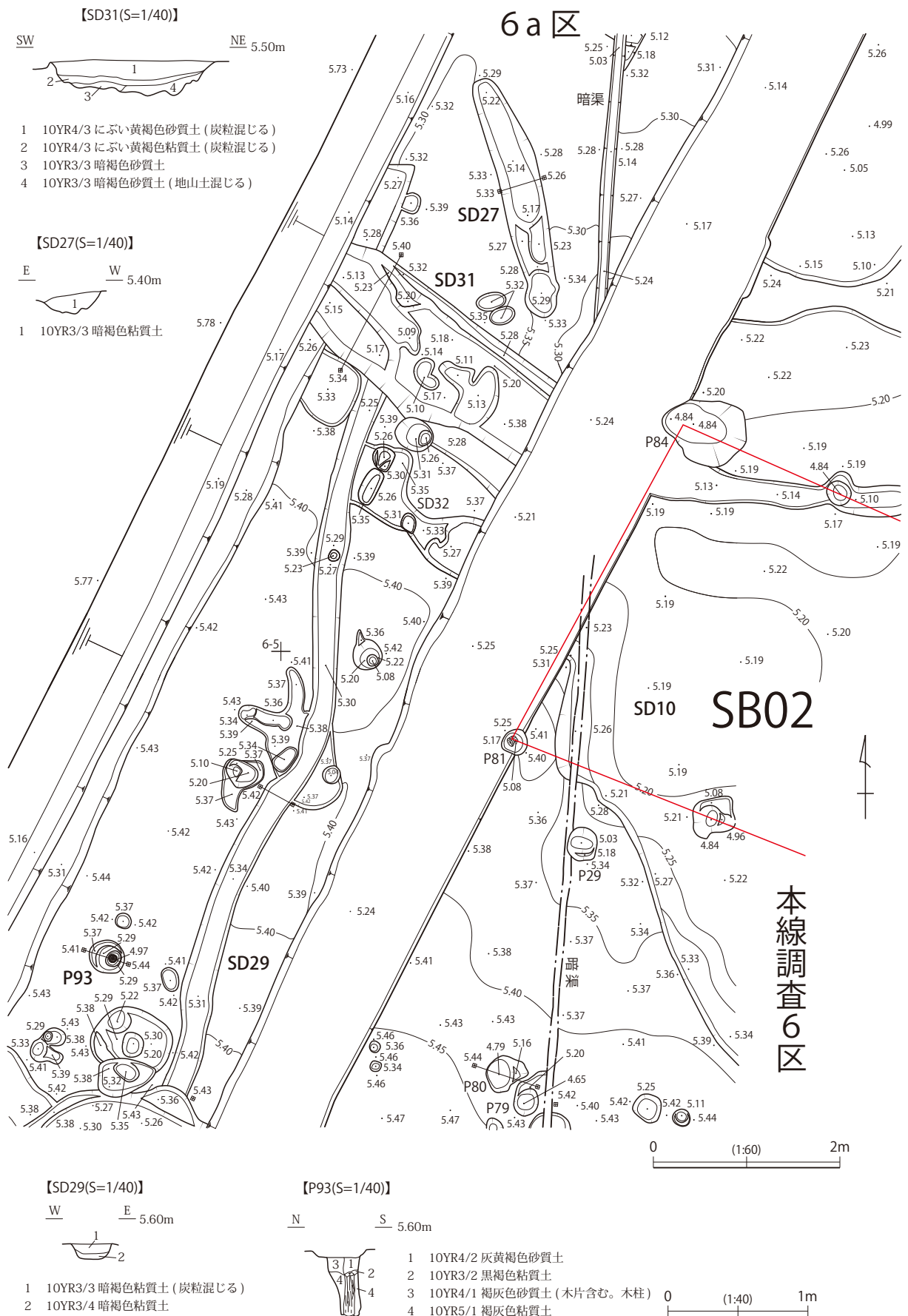


- 1 10YR3/4 暗褐色砂質土
- 2 10YR3/1 黒褐色砂質土 (炭粒多く混じる)
- 3 10YR3/4 暗褐色砂質土 (地山土混じる)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (地山土混じる)

【P111 下部の礎板出土状況 (S=1/40)】



第47図 6a区-C (SD10・P111) 遺構図



第48図 6a区-D~E (SD27・29・31、P93) 遺構図

ンブ文のある器台(56)が出土した。

SI01は支柱穴が5基存在し、本線調査時にP66、P68の2基が、6a区調査でP95、P98、P112の3基が確認できた。直径45～65cm、深さ30～50cm程度である。西側に突出したホームベース型の配置で、全ての支柱穴に礎板が設置されていた。今回調査の柱穴については樹種同定がなされていないが、本線調査6区の方は、P66が落葉広葉樹のキハダ、P68が常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属と同定されており、両者とも耐水性がある種類であり、集落近辺で入手できる樹種から目的に合わせて選定していると考えられる。建物の時期は本線調査報告書で弥生時代後期後半とされており、今回の調査でもSD23、24から弥生時代後期の土器(擬凹線の入る有段口縁の甕など)が出土していることから、同様にとらえている。他に柱部分が沈んだような痕跡が残るP94は、径35cm、深さ30cmほどの長円形のピットで、埋土から古代以降のものと考えられる。P96は径30cm、深さ20cm、柱痕跡が15cm程度の柱穴。P97は柱根(第56図35)が残る径50～60cm、深さ50cmのやや不定形なピットで、スギの柱根が沈み込んでいる。弥生時代後期か。P99は径50cm、深さ15cm程度のピット、P100はSI01の柱穴P112を切っているピットで、完掘状況から柱部分が沈み込んでいた柱穴とみられる。

6a-Gでは、近世以降の用排水路であるSD5以南に、本線調査時検出のSB04の柱穴の続きを確認した(第51図)。P101、P102、P103の3基で、東西2間(4.5m)×南北2間(5m)の総柱建物である。N-1°-Wを指す。P102から古代～中世の土師器が出土しており、建物形状などから古代末～中世の建物と考えられる。SB04内に位置するP104からはアスナロの付木(第56図36)が出土した。

6a-Hでは、本線調査6区から続くSD25など数条の溝を確認した(第53図)。SD25は6a-D～Gに広がる居住域の南を画する自然流路で、幅5m、深さ60cmほどを測り、本線調査6区では緩やかにS字状を呈し、西に向かって流下する。6a-C区のSD14が北を画する溝となる。SD14とともに、弥生時代後期の土器が出土している。他に重量感のある閃緑岩の磨石(第57図47)が出土し、図示された使用範囲は滑らかで周囲より褐色みのある色調を呈している。上面には敲打痕も残り、下面も敲打によって剝離したものと考えられる。48は外面に煤が若干付着した弥生時代後期・猫橋式の甕、49は古墳時代の高坏で丁寧な磨かれている。SD25の南側には本線調査6区から続くSD4があり、両者の間にSD33とされた溝状遺構がある(写真図版12右下、SD25左側の平坦面)。SD33からは弥生土器が出土しており、第58図54を図化した。SD4は本線調査6区ではSD25を切っており、古代以降の溝とみられる。土師器片が出土しており、幅35cm、深さ10cm前後を測る。その南にあるSD3は近世以降の用排水路とされているもので、本線調査6区から続いている。15世紀以降の中国青磁片、17世紀後半の肥前磁器(一重網目文)などもあるが、多くは18世紀前半のもので、肥前の陶胎染付碗、刷毛目唐津碗、播り鉢、こんにやく印判染付片、内面白磁・外面青磁の磁器片、銅緑釉蛇の目高台の底部片の他、越前焼(塗り鉄釉)や瀬戸美農のとっくり、いぶし瓦など近世のものが多。弥生時代や古墳時代の土器片もわずかに混入がみられる。

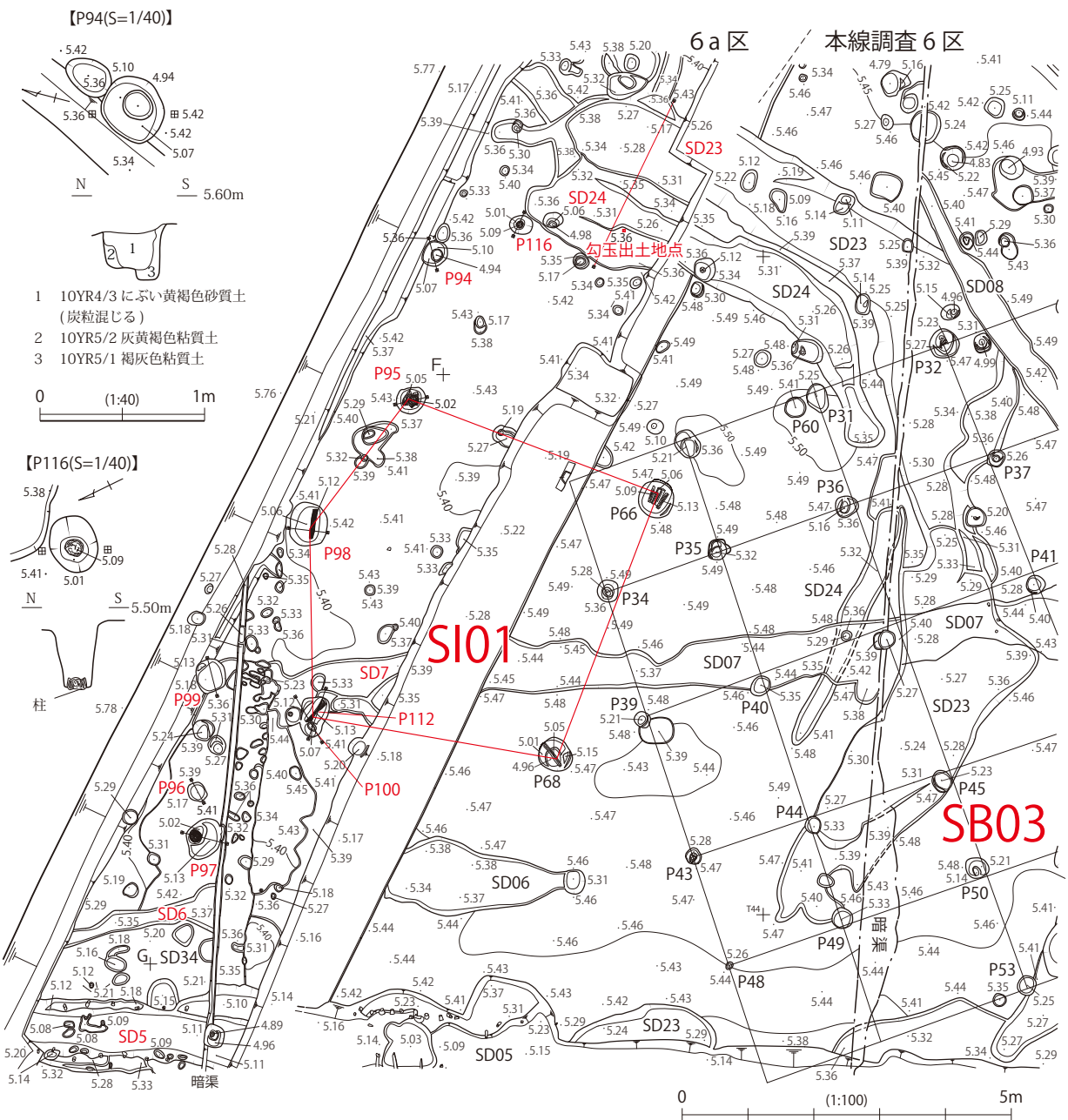
6a-H～Iでは、本線調査6区で検出されたSB5の柱穴を新たに6基検出し、東西4間(10m)×南北3間(8.8m)の総柱建物であることを確認した。柱穴の径は50cm、深さは30～50cmで、黒褐色、褐灰色砂質土の埋土が主である。本線調査6区ではSD25が埋まりきった後に、それを切り込んで柱穴が掘削されていることなどから、古代末～中世前期ととらえている。



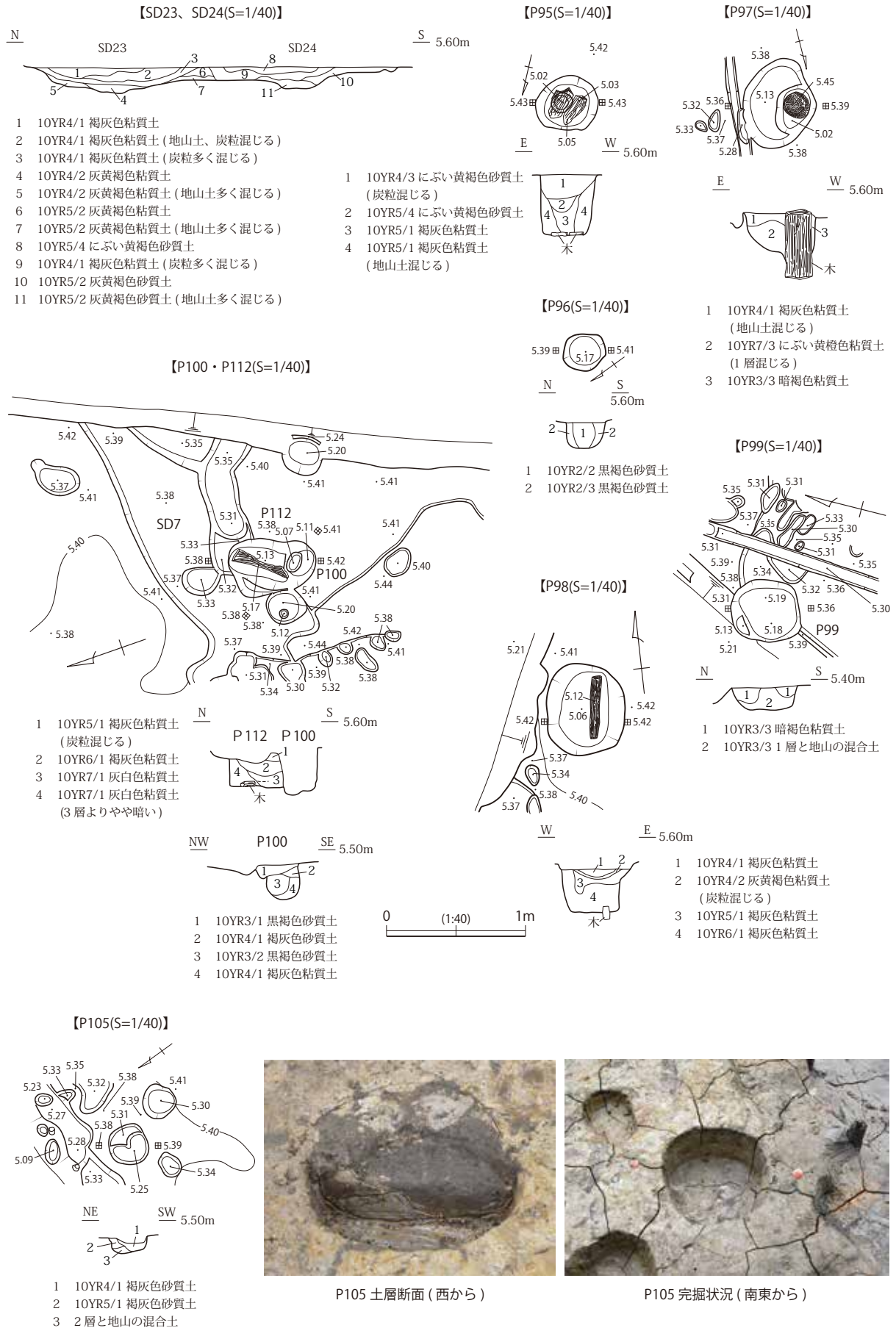
SD29 完掘状況 (南から)



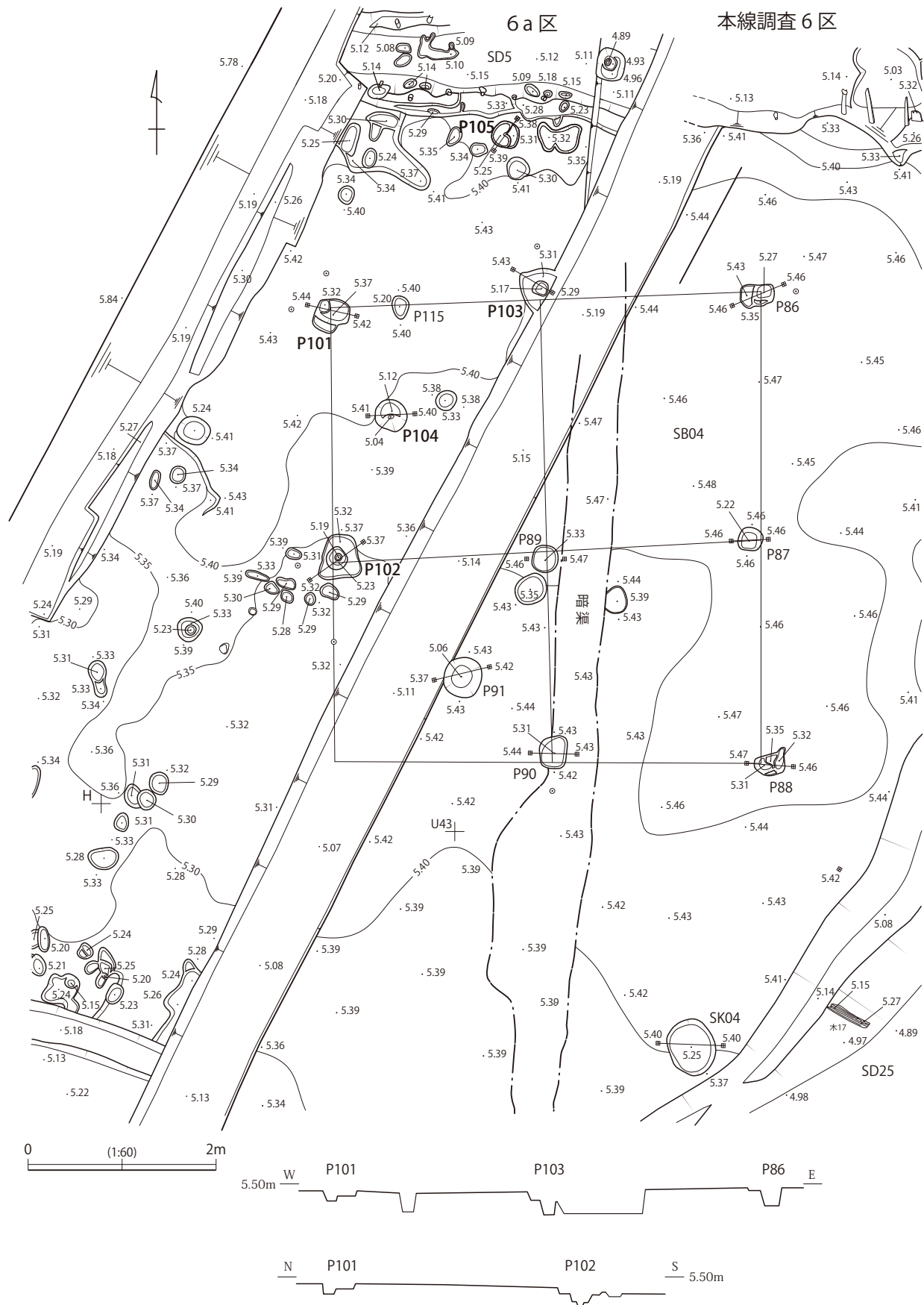
P93 完掘状況 (南から)



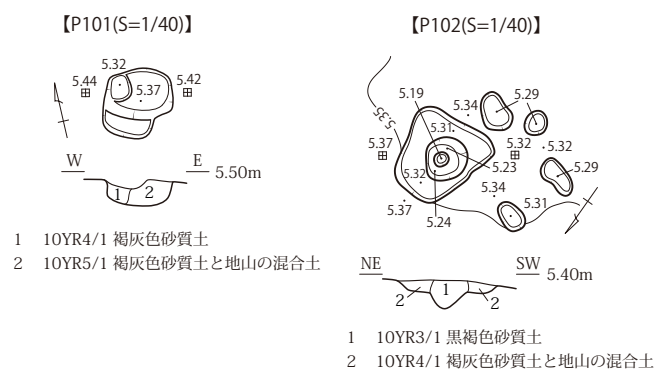
第5節 6a区の遺構と遺物



第50図 6a区-E~F (SI01周辺2、P105) 遺構図



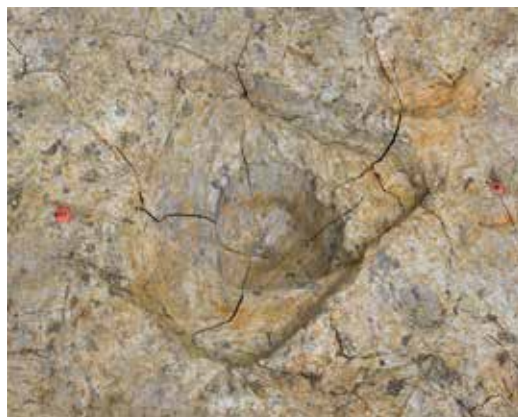
第 51 図 6a 区一 G (SB04) 遺構図



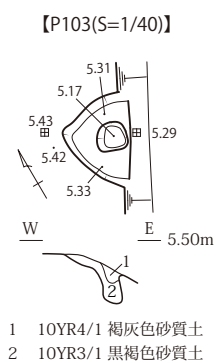
P101 土層断面 (南から)



P102 土層断面 (北西から)



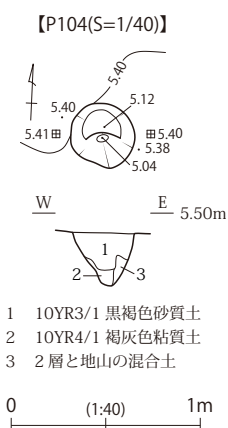
P102 完掘状況 (北西から)



P103 土層断面 (南から)



P103 完掘状況 (南から)

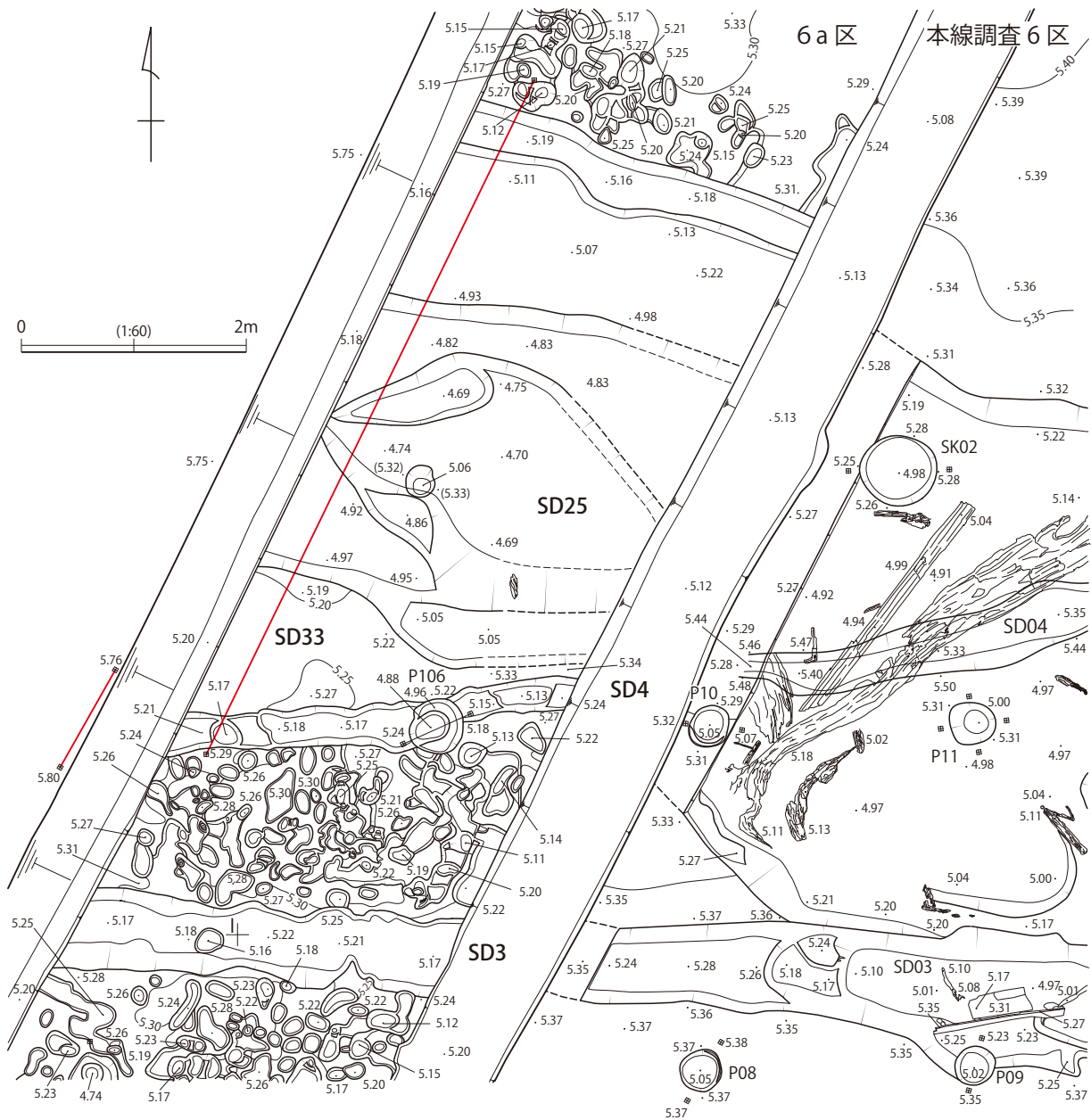


P104 土層断面 (南から)

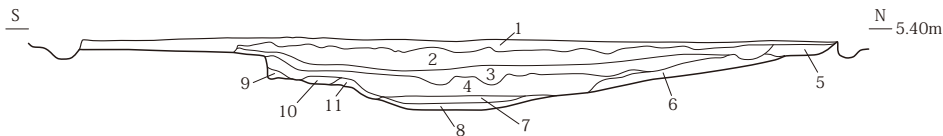


P104 完掘状況 (北から)

第52図 6a区-G ピット遺構図・写真

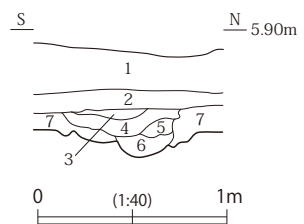


【SD25西壁(S=1/60)】



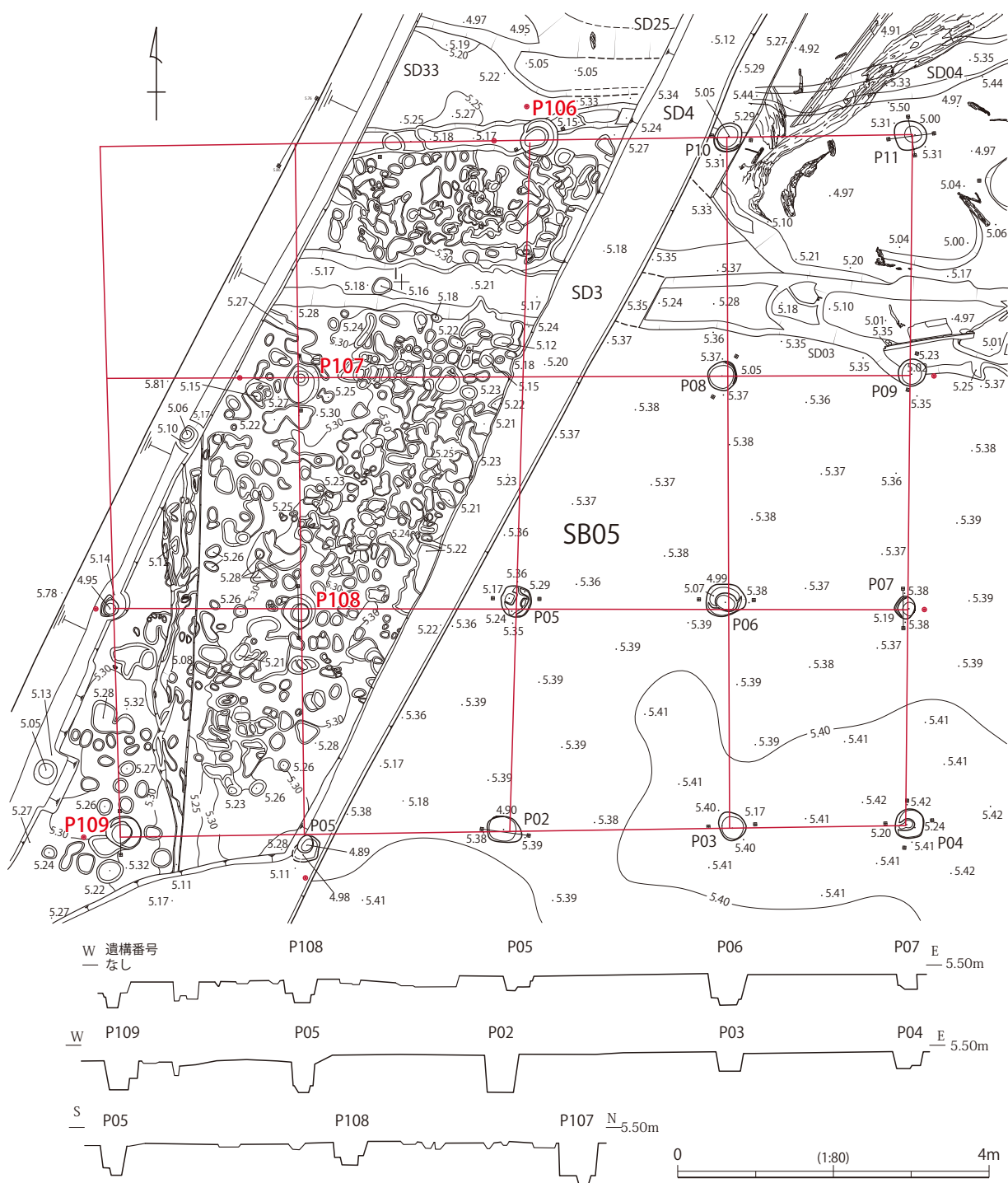
- 1 10YR2/1 黒色粘質土
- 2 10YR5/1 褐灰色粘質土
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 4 10YR3/2 黒褐色腐植土 (木片多く混じる)
- 5 10YR6/1 褐灰色粘質土
- 6 10YR5/1 褐灰色粘質土 (炭粒混じる)
- 7 10YR3/2 黒褐色腐植土 (木片多く混じる)
- 8 10YR2/2 黒褐色腐植土 (木片多く混じる)
- 9 10YR7/1 灰白色粘質土
- 10 10YR7/1 灰白色粘質土 (9層よりやや暗い)
- 11 10YR4/1 褐灰色シルト質土

【SD4西壁(S=1/40)】



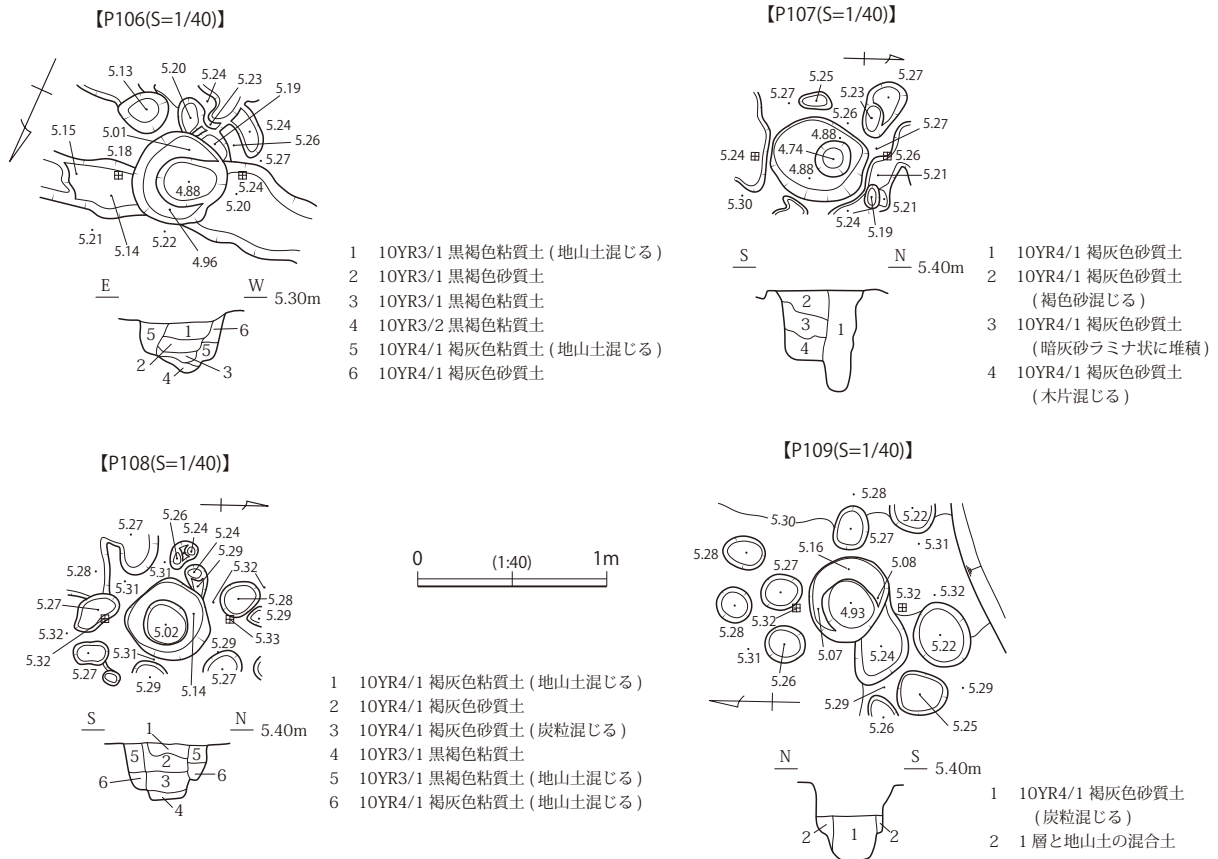
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 (耕作土)
- 2 10YR5/1 褐灰色砂質土 (中世の包含層か)
- 3 10YR4/1 褐灰色砂質土 (SD4 覆土)
- 4 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 (SD4 覆土)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 (SD4 覆土)
- 6 10YR3/1 黒褐色砂質土 (地山土混じる。SD4 覆土)
- 7 10YR3/2 黒褐色砂質土 (弥生時代包含層)

第53図 6a区一H (SD3・4・25・33) 遺構図

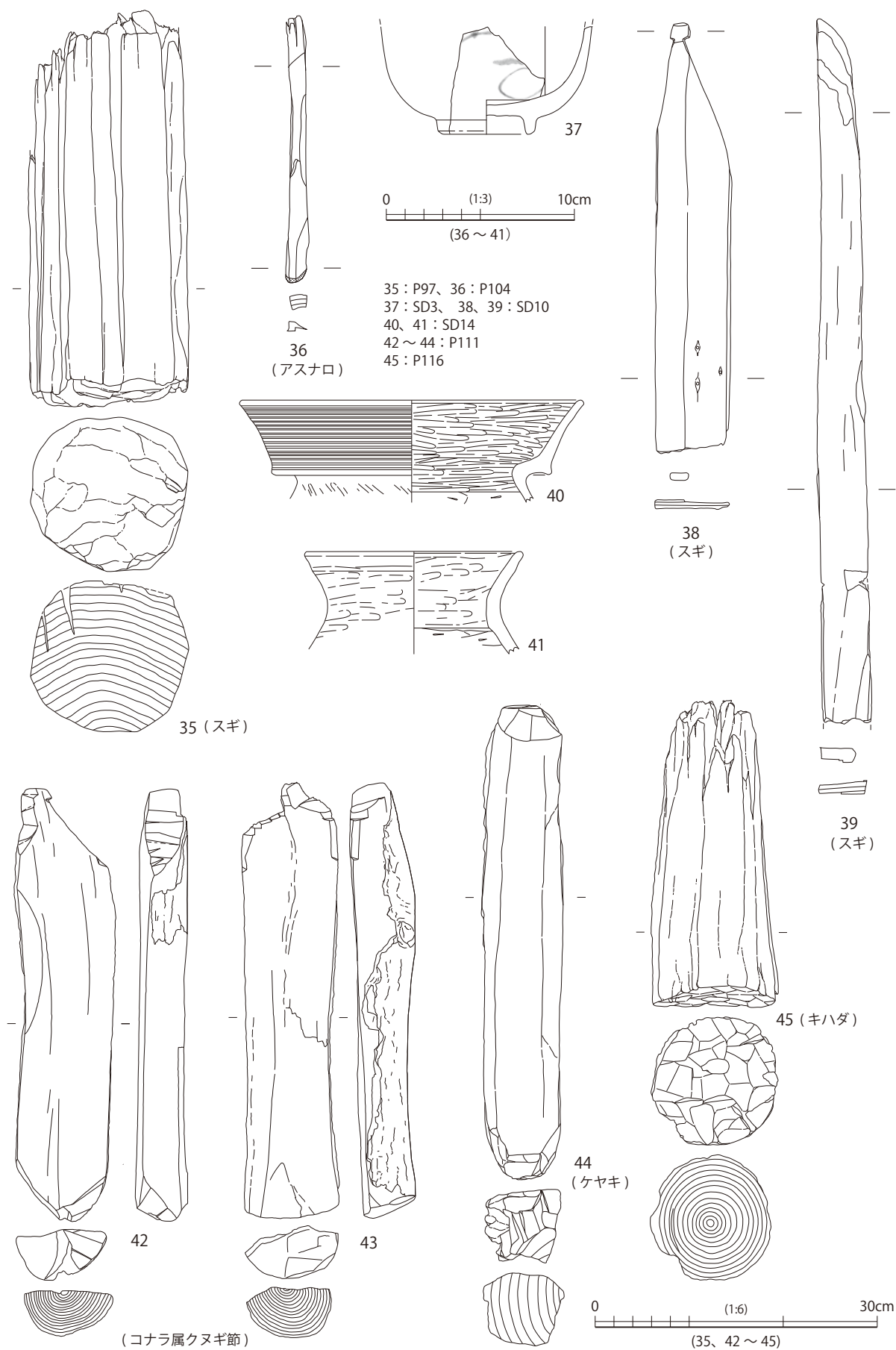


SD3 完掘状況 (東から)

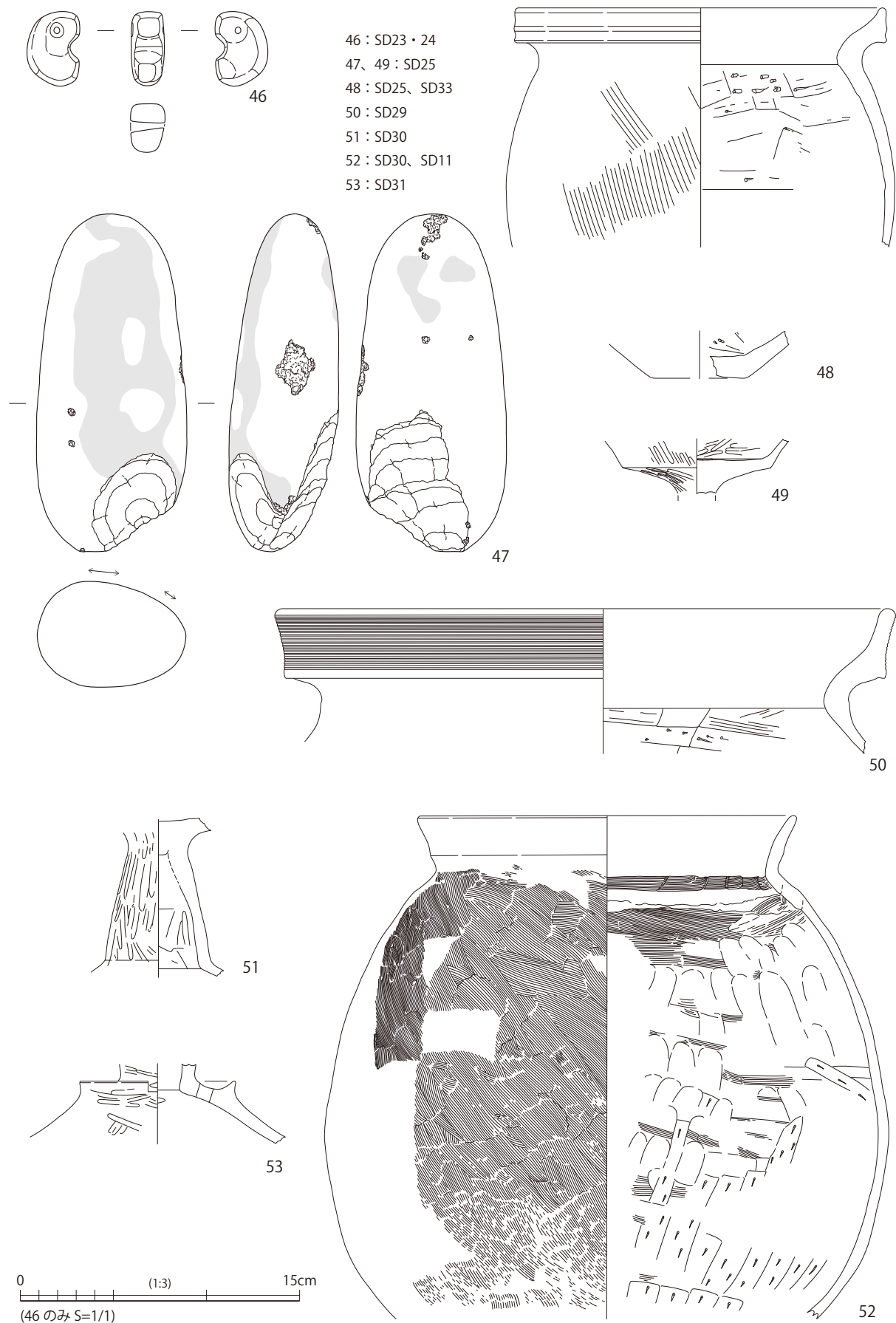
第54図 6a区—H～I (SB05) 遺構図、SD3写真



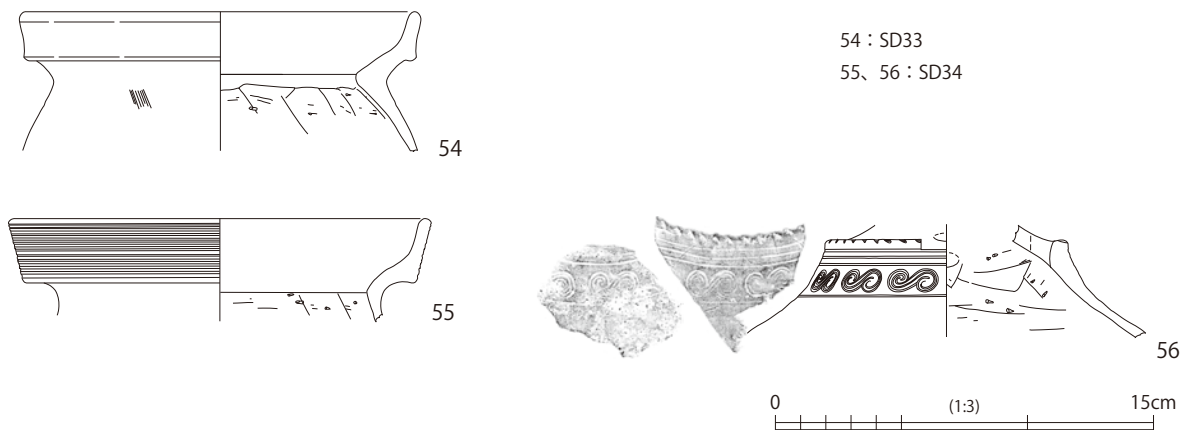
第55図 6a区-H~I SB05柱穴遺構図



第56図 6a区遺構出土遺物(1)



第 57 図 6a 区遺構出土遺物 (2)



第58図 6a区遺構出土遺物(3)

第6節 7 a 区の遺構と遺物

本線調査7区の東側に隣接し、本線調査時と同様、上層に水田面、それより下層に弥生時代後期～古墳時代にかけての遺構を確認した。本線調査時、洪水砂で覆われたⅡ層（土壌面）に存在する水田跡の面を上層とし、水田面の下層には古墳時代の流路跡もしくはⅢ層（基盤層）があり、Ⅲ層面で下層遺構を調査している。

基本層序は、調査時地表面の標高が6m 前後、その下に盛土や耕作土等が50～60cm みられ、その下には灰黄褐色や黒褐色を呈する洪水堆積砂が、10～20cm ほどの厚さを持つ。洪水堆積砂の下に水田の畦畔が残り、水田耕作土が10～25cm 堆積している（第59、60、62図）。この水田耕作土が本線調査時のⅡ層に相当し、水田面の標高は5m 前後を測る。洪水堆積砂の下には薄い腐植土層が所々で確認できた（第60図の6層）。水田耕作土より下層は低地や自然流路内となる部分がほとんどで、本線調査時に確認できたⅢ層（基盤層）は明確ではない。調査時、包含層とされた部分から、弥生時代後期の甕口縁部や古墳時代～古代の土師器などが少量出土した。破片がほとんどである。

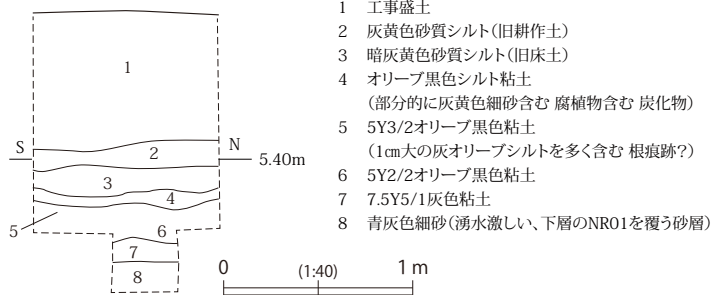
《上層》（第59図）

水田跡（第59・60図）7a区南半部分のみに上層遺構が残っていた。洪水堆積砂で覆われた畦畔を7箇所確認したが、高まりは数cm 程度であった。本線調査区と合わせて見ると、畦畔を含まない田面幅（南北方向）2.4m～3.6m、現存長（東西方向）7.2m～11.4m ほどの細長い区画となっているが、東側へどれほど延びるかは調査区外となるため未確認である。畦畔検出段階では、畦畔6と7の西側端が途切れているあたりにも南北方向の高まりがあったようで、細長い区画は南北方向に更に区切られ、区画がより小規模だった可能性がある。なお、残存する畦畔幅は50cm～100cm だが、これは畦畔の基底部分の幅である。

標高を見ると、本線調査区の方が全体的に高く、東に向かい下がる傾向があり、本線調査区の畦畔には切れ間が確認できることから、水口は西側にあったと考えられる。畦畔1と2の間の田面標高は5.15～5.20m、2と3の間は5.15～5.18m、3と4の間は5.07～5.14m、4と5の間は5.05～5.07m、

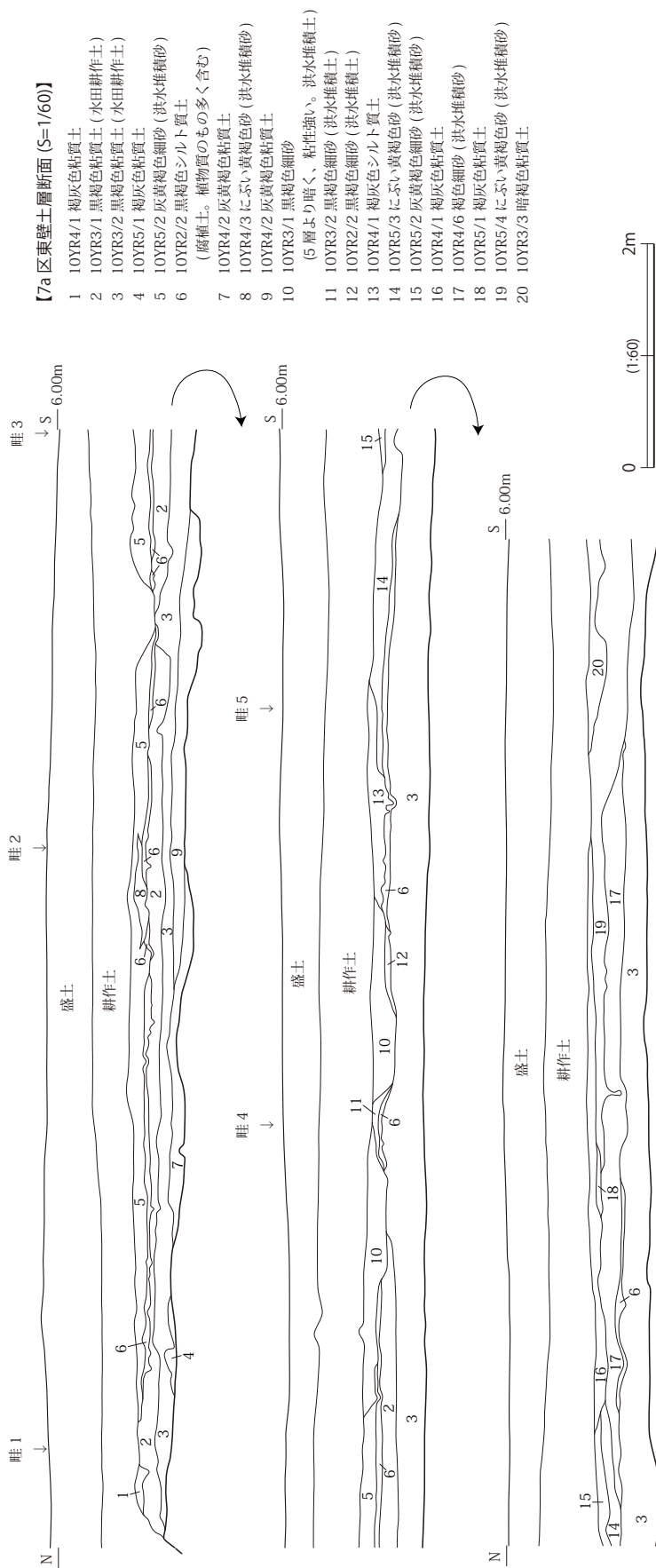


【7区工事立会上層断面 (S=1/40)】



工事立会上層断面 (南から)

第59図 7区上層全体図、工事立会範囲断面図



7a 区東壁土層断面 (畦畔 2 と 3 の間) (西から)

第 60 図 7 a 区東壁土層断面

5と6の間は4.98～5.04m、6と7の間は4.98～5.02m、7以南は4.98～5.02mで、北東から南西へ徐々に低くなっている。畦畔5を境に北側は標高差がやや大きいため、畦畔1と畦畔5がより大きな区画の境となっていた可能性があり、その場合の区画長は15mほどとなる。

水田面砂層から第64図59・60が出土した。59は底部糸切りの土師器埴、60は土師器小型甕で10世紀後半のものとみられる。須恵器片もわずかに出土した。本線調査区では古代末～中世前半頃とみられる掘立柱建物も検出されており、中世遺構の埋土に洪水堆積砂がみられることを考慮すると、これらの土器が水田の時期を示すものとは言い切れない。一方、本線調査時の水田面土壌をAMS法による放射性炭素年代測定した結果、7世紀中頃～後半の暦年代が示されている。他の遺構の出土遺物や遺構の切り合い関係などから、本線調査区の水田は7世紀後半頃～古代のものにとらえられており、その考えを引き継いでおく。

工事立会範囲（第59図）7a区の南側調査区は、県文化財課が工事立会を実施した範囲である。本線調査区で確認されたSD01の続きが検出された。本線調査時に非ロクロの土師器皿が出土し、中世の溝ととらえている。この溝以外の部分は下層の流路の内部にあたり、標高4.7m程まで深掘りした部分でも、激しい湧水の中で青灰色細砂を確認したが、基盤層には至らなかった。

《下層》（第61・62・63図）

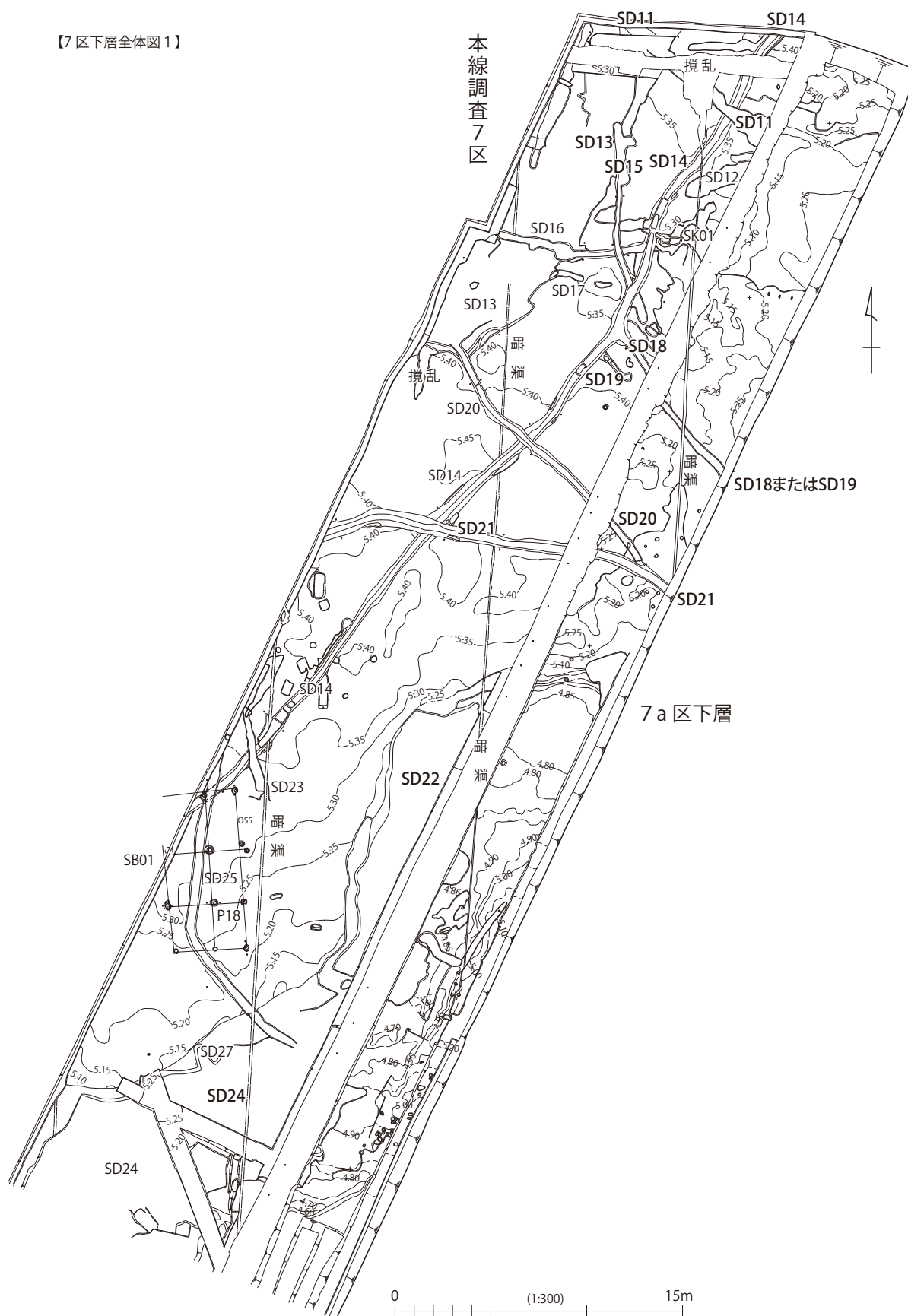
調査区北端から4～5mの所からSD18または19のあたりまでは、本線調査区側に向けて低地となっており、本線調査区のSD11、12などの状態が続くとみられる。SD11、12は深さ10cm弱窪んだ小穴の密集帯であり、遺構とは呼べないとされている。さらに南側を含め、用排水路となる溝などを検出していることから、水田域であったと想定されており、7a区も同様の状況を示すと考える。SD14は北から南へ流れている弥生時代後期の溝で、そこから枝分かれしたSD18または19の続きを確認している。SD20、SD21も続きを検出しており、本線調査区内での切り合いなどから、弥生時代後期以降、古代以前の溝とみられる。SD21からは古墳時代の土師器高坏等の脚部が出土している。

調査区南半部は、本線調査区のSD22、24などの自然流路内にあり、本線調査区のSK02、03の円筒形土坑のような明確な遺構は確認されていない。弥生時代の流路が古代までの間に埋没したとみられる。7a区内では、完掘後の等高線をみると、本線調査区側に向かって低く下がり、北側はSD21の方に向かい上がっており、掘り鉢状になっている。SD22、24は調査区外の東側にカーブを描いて伸びていくと考えられる（第61・62図）。SD22、24からは古墳時代～古代の土師器が出土し、高坏脚部や煤が付着した甕、埴などが出土している。

工事立会範囲（第62図）本線調査区のSD26からは古墳時代前期末～中期の土師器がまとまって出土したため、その広がりを確認するトレンチを設定して掘削を実施した。断面図の4層（オリーブ黒色粘土）、5～7層（灰色粘土）はSD26の埋土で、そのうち4層、5層から少量の土器片が出土したが、土器の集中域は確認できなかった。本線調査区の土器集中は、SD26の肩部に大量の土器が意図的に置かれたか堆積したものとみられる。本線調査区では灰色粘土の下に標高3.7mでⅢ層（暗青灰色細砂）が確認できたが、このトレンチでは標高4mまで下げた段階では未確認である。

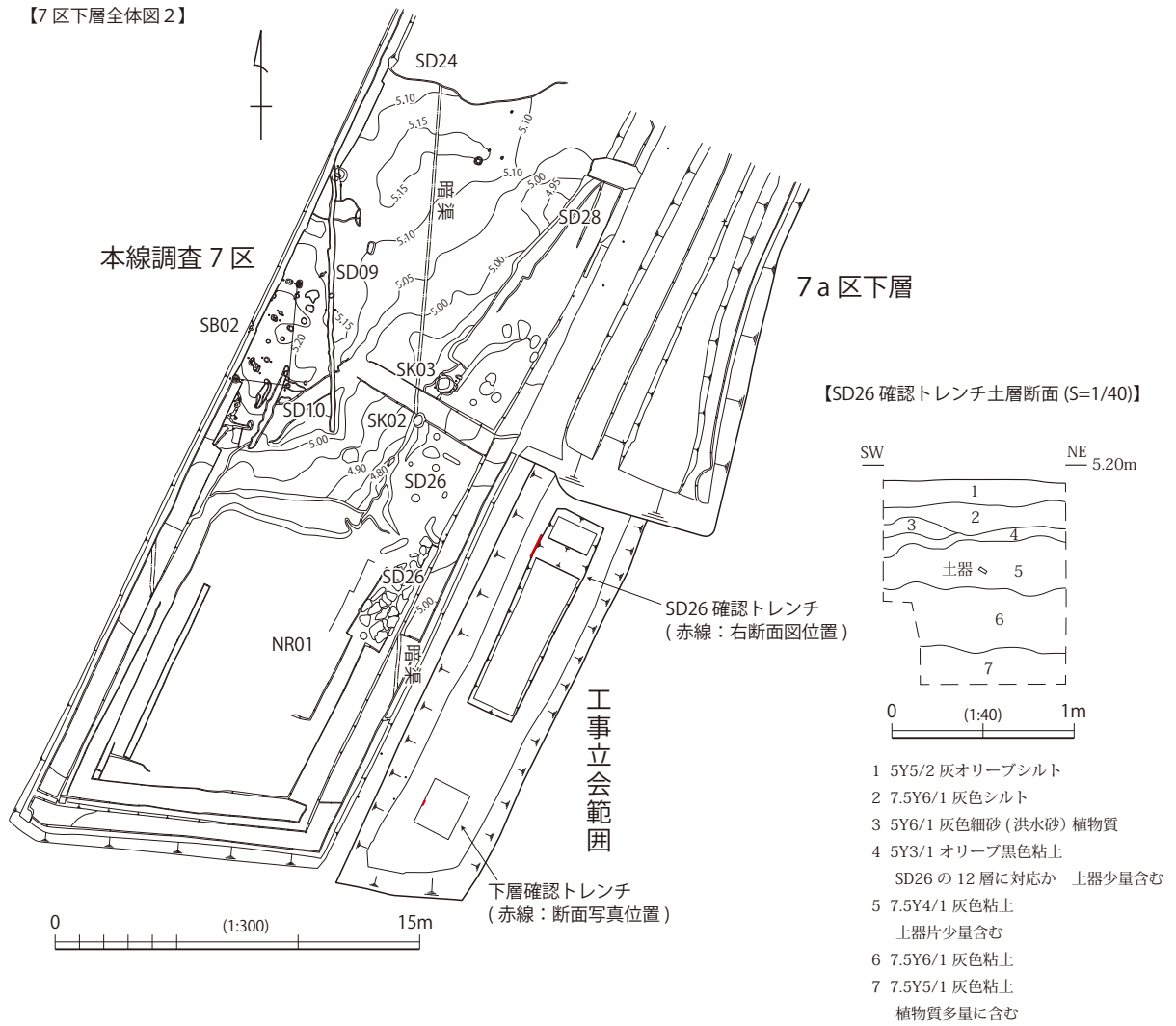
本線調査区南端は自然河道（水田面形成後のNR01、形成前のNR02）となっており、下層確認トレンチで堆積状況を調査した。河道の堆積は写真で示した。この範囲では遺物は出土しなかった。

【7区下層全体図1】



第61図 7区下層全体図(1)

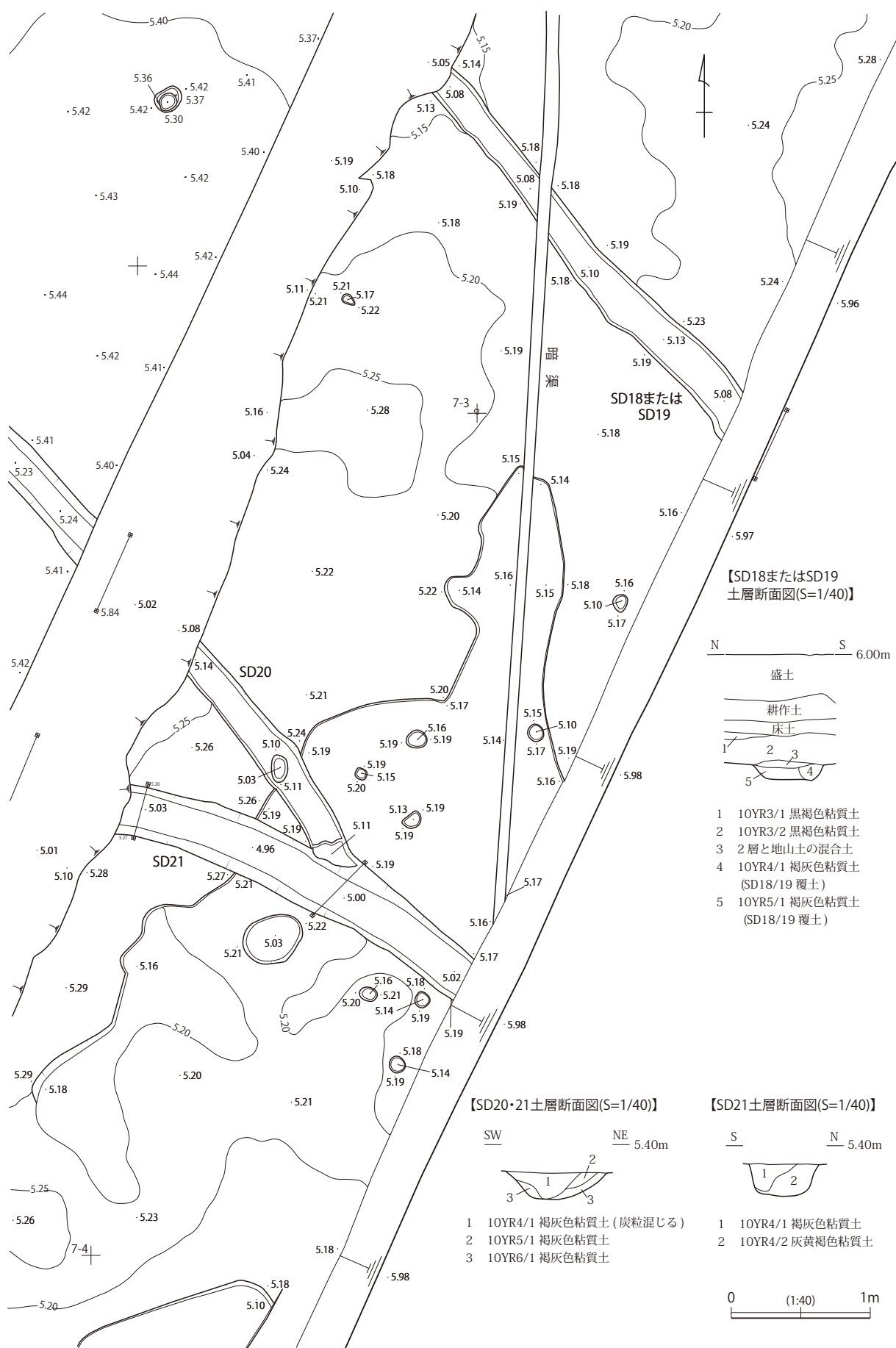
【7区下層全体図2】



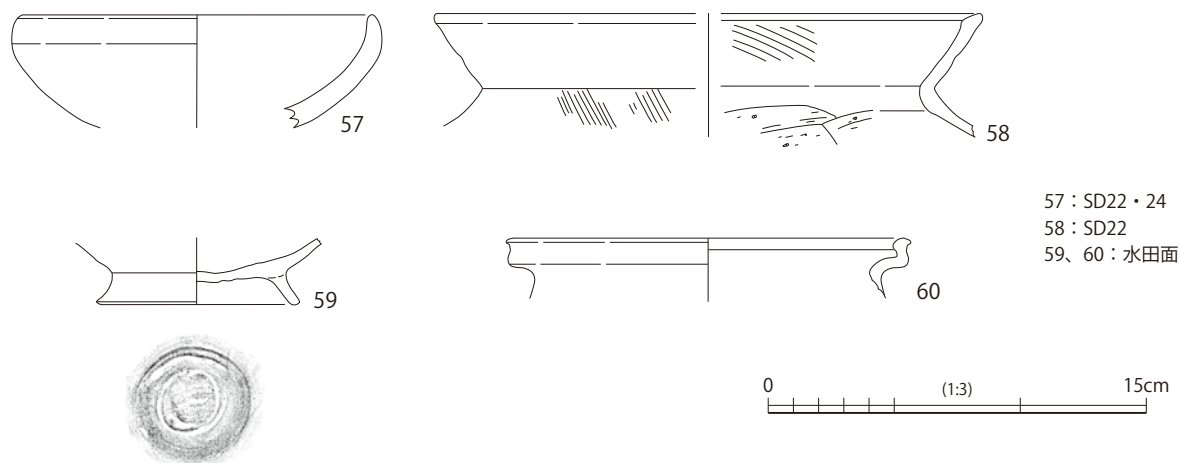
工事立会範囲 下層確認トレンチ (NR01・NR02の堆積)

- 1 灰色粘土
- 2 青灰砂
- 3 暗褐色粘質土 腐植物混ざる ビート層
- 4 褐灰色粘土 腐植物、遺物混ざる
- 5 暗褐灰色粘土～シルト 腐植物混ざる
- 6 暗灰色シルト 白色軟質の混和物
- 7 暗灰色シルト 細砂混ざる、白色軟質の混和物

第62図 7区下層全体図(2)、工事立会範囲



第 63 図 7a 区下層 SD18 または SD19・20・21 遺構図



第64図 7a区遺構出土遺物

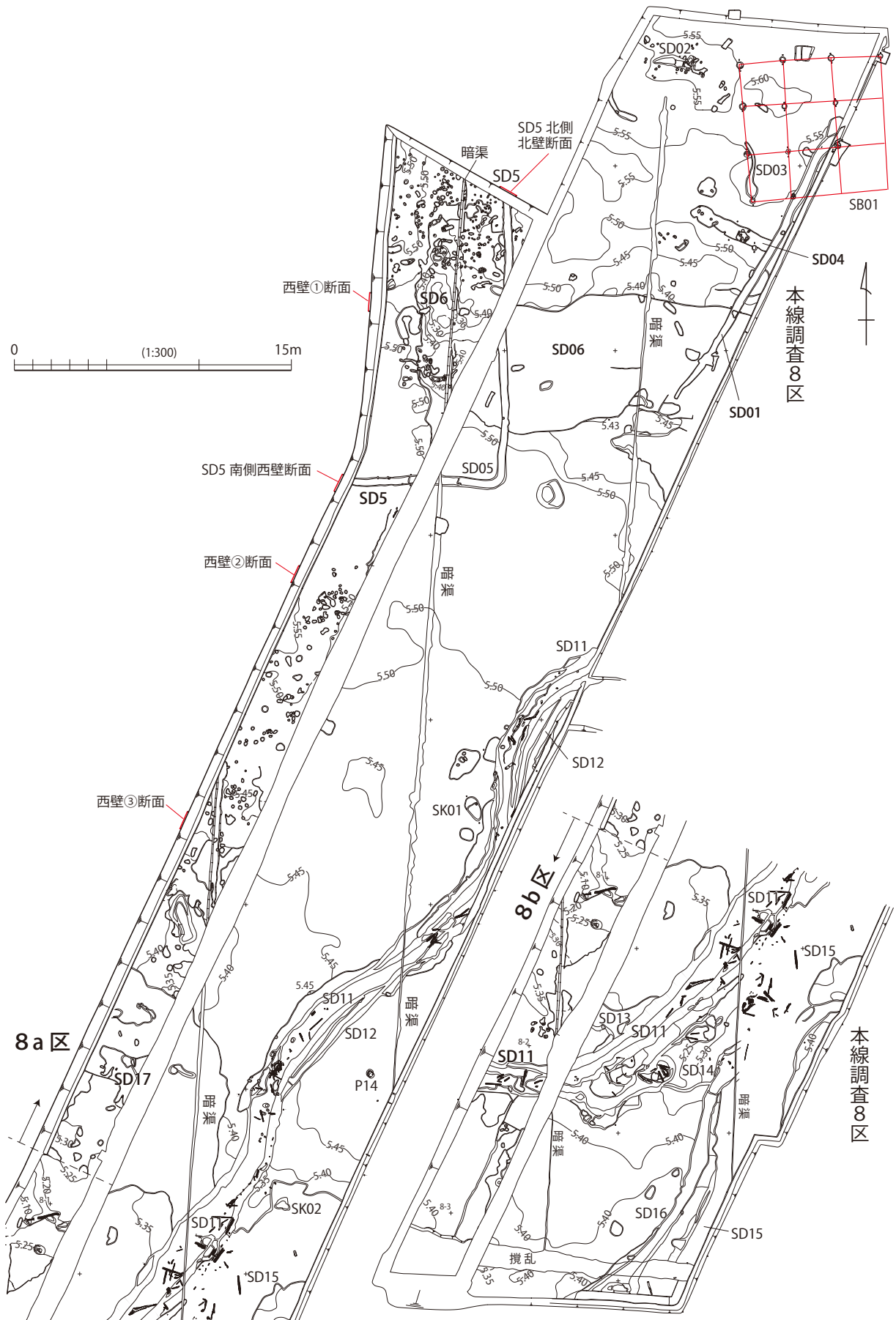
第7節 8a・8b区の遺構と遺物

本線調査8区の西側に隣接し、検出面の標高は5.3～5.5mほどで、東側にある本線8区より若干低くなっている（第65図）。8a区北側には、地山とした層の上に部分的に弥生時代の包含層とみられる黒褐色粘質土が残り、その上面から古代の溝（SD5）が掘削されている。この溝の上面には、黒褐色砂質土（部分的に粘質土）が堆積し、さらにその上面に洪水堆積層の可能性が高いにぶい黄褐色砂質土が部分的に見られる。8区より南側の7a区では、古代の水田面の上面に洪水堆積層が見られることから、SD5も古代の遺構と考えられる。洪水堆積層の上には褐灰色砂質土が一定量存在するが、これも洪水時かそれ以降に洪水で運ばれた土砂が供給源となって堆積し、古代末以降のこのあたりの地盤を形成したようである。その上には近現代の耕作土が20～40cm厚で堆積している。包含層からは、弥生後期～古墳時代の土器、土師器が出土したが、中世土師器も若干みられた。

調査区北側から主な遺構を見ていく。SD5は本線調査8区から続く溝で、方形に巡る区画溝の一部と考えられる（第66・67図）。幅40～50cm、深さ5～10cm、断面箱形を呈し、底面レベルの高低は目立たずわりと平らで、標高5.35～5.40mを測る。上述したように古代の溝とみられる。そのSD5に切られるSD6は、溝というより浅い落ち込みで、最も深いところで20cmほどである（第67・69図）。黒褐色粘質土、褐灰色粘質土など、湿地の堆積土が見られる。これより南側には目立つ遺構が確認できず、8a区南端部にSD17とした溝状の落ち込みがある（第68・69図）。これは本線調査8区から続く深さ10cm前後の窪みの一部と考えられる。縄文時代後晩期の磨耗が著しい土器などが出土している。

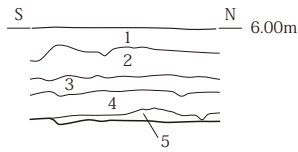
8a区から8b区にかけて、標高が低くなり水が溜まりやすい窪地であったようである。8b区の南端では若干標高があがっていくが、その境あたりに、本線調査8区から続くSD11が存在する（第69図）。西壁断面を見ると、SD11埋土の上面に黒色粘質土がみられ、北の窪地に向かって広がっており、湿地の堆積土と考えられる。これより上部には、何度となく洪水堆積砂が低い部分に流れ込んでいる。溝の幅は0.8～1.2m、深さ30～50cmで、最下層に褐灰色粗砂が、その上に黒褐色粘質土が堆積している。SD11は本線調査8区で出土遺物から古墳時代前期ととらえられ、土器や銅鏃の他、打製石斧（石鋬）、柱や壁材などの建築部材、それらを転用した矢板や杭などが出土した。本線調査

8区ではSD11の東側に沿うようにSD12、14、15などの溝が流れ、これらは出土土器より弥生時代後期後半の溝と判断されている。SD11の東壁側には、それ以前の溝の存在で土壌が柔らかかったのか、矢板や杭が打たれ護岸を意識をしている様子が確認されている。8b区のSD11からも建築部材（第70図61）、杭（62）、板状木製品（63、一部炭化）が出土し、全てスギ材を用いている。縄文時代後期の深鉢底部（64）や古墳時代の甕（65）を図化した。他に縄文後期中葉の酒見式とみられる土器片などが出土した。第70図66、67はSD14出土とされているが、平面図上にはSD14の記載がない。本線調査8区で、8b区との境近くでSD11の東側にSD14があることから、8b区SD11内の南側の部分から出土したものを、SD14出土とした可能性がある。66は縄文時代後期の深鉢底部、67は縄文時代後期の西日本系の浅鉢で、4単位の波状口縁となるものである。本線調査9区で縄文時代の遺構が検出されており、SD11から出土した縄文土器を含め、周囲からの流れ込みと考えられる。



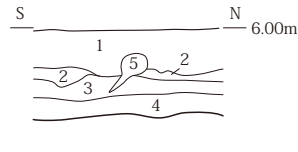
第 65 図 8区全体図 (S=1/300)

【西壁①土層断面図(S=1/40)】

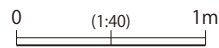


- 1 10YR5/1 褐灰色粘質土 (耕作土)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土
- 3 10YR4/1 褐灰色粘質土
- 4 10YR3/1 黒褐色砂質土
- 5 10YR6/1 褐灰色砂質土

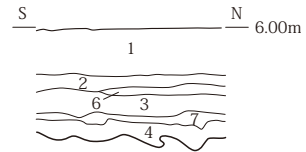
【西壁②土層断面図(S=1/40)】



- 1～4層は西壁①と同
- 5 2層に近似。2層よりやや暗い

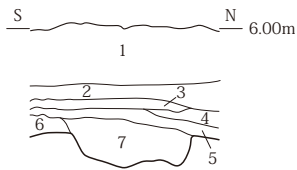


【西壁③土層断面図(S=1/40)】

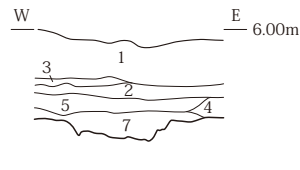


- 1～4層は西壁①と同
- 6 10YR5/6 黄褐色砂質土 (床土)
- 7 10YR6/3 にぶい黄橙色砂質土 (洪水堆積層か)

【SD5南側西壁土層断面図(S=1/40)】



【SD5北側北壁土層断面図(S=1/40)】



- 1 10YR5/1 褐灰色粘質土 (耕作土)
- 2 10YR6/1 褐灰色粘質土 (耕作土)
- 3 10YR6/8 明黄褐色砂質土 (床土)
- 4 10YR4/1 褐灰色砂質土
- 5 10YR3/1 黒褐色粘質土
- 6 10YR3/2 黒褐色粘質土 (弥生時代包含層)
- 7 10YR2/1 黒色粘質土 (SD5 覆土)

【SD5南側土層断面図(S=1/40)】



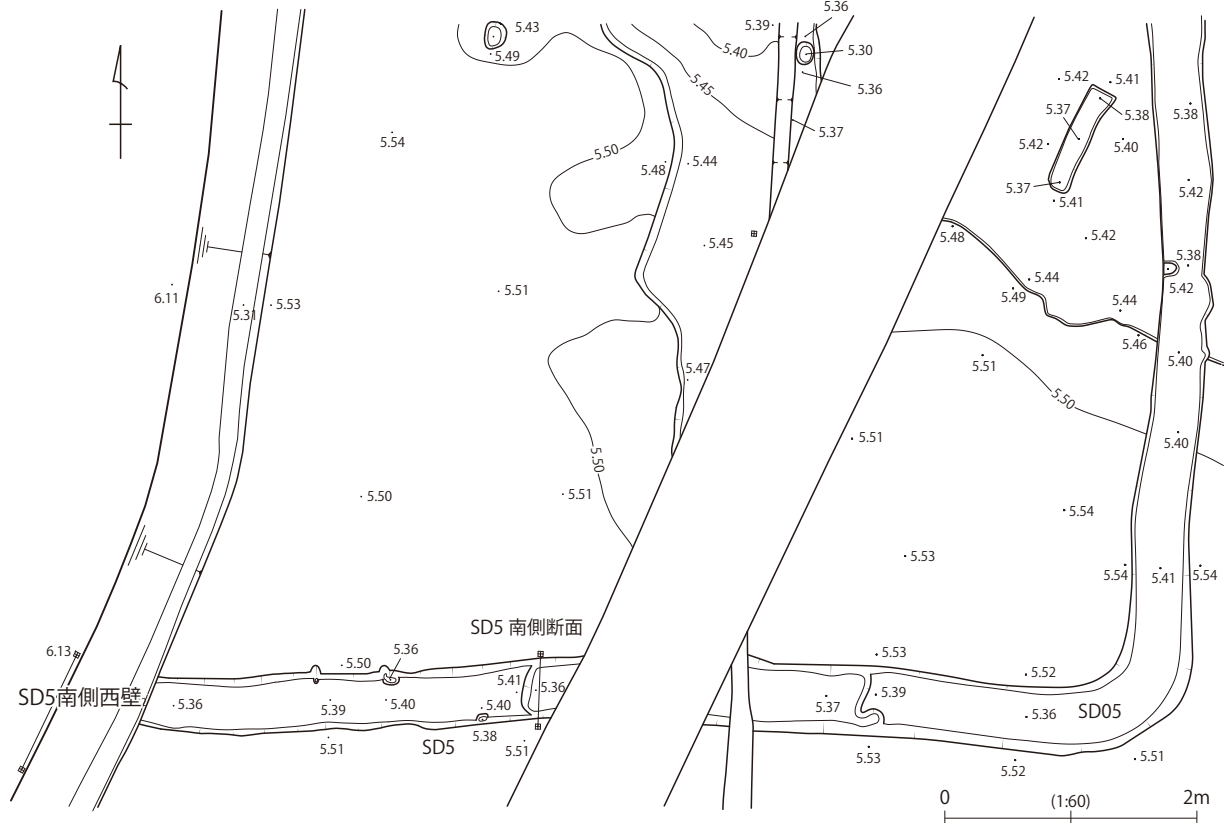
- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土
(地山ブロック混じる。人為的な埋戻し土)

【SD5北側土層断面図(S=1/40)】

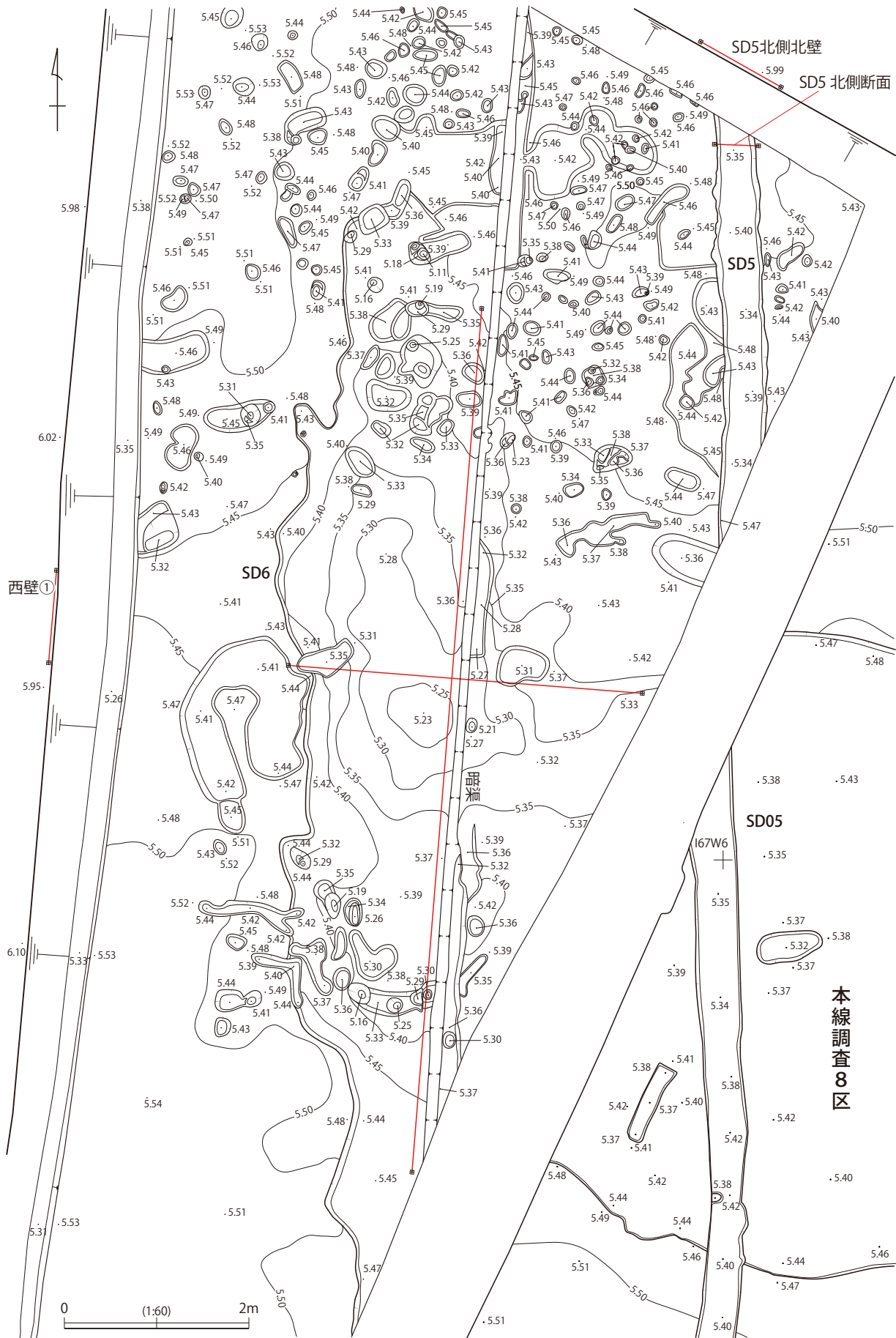


- 1 10YR3/1 黒褐色粘質土
(地山ブロック混じる。人為的な埋戻し土)

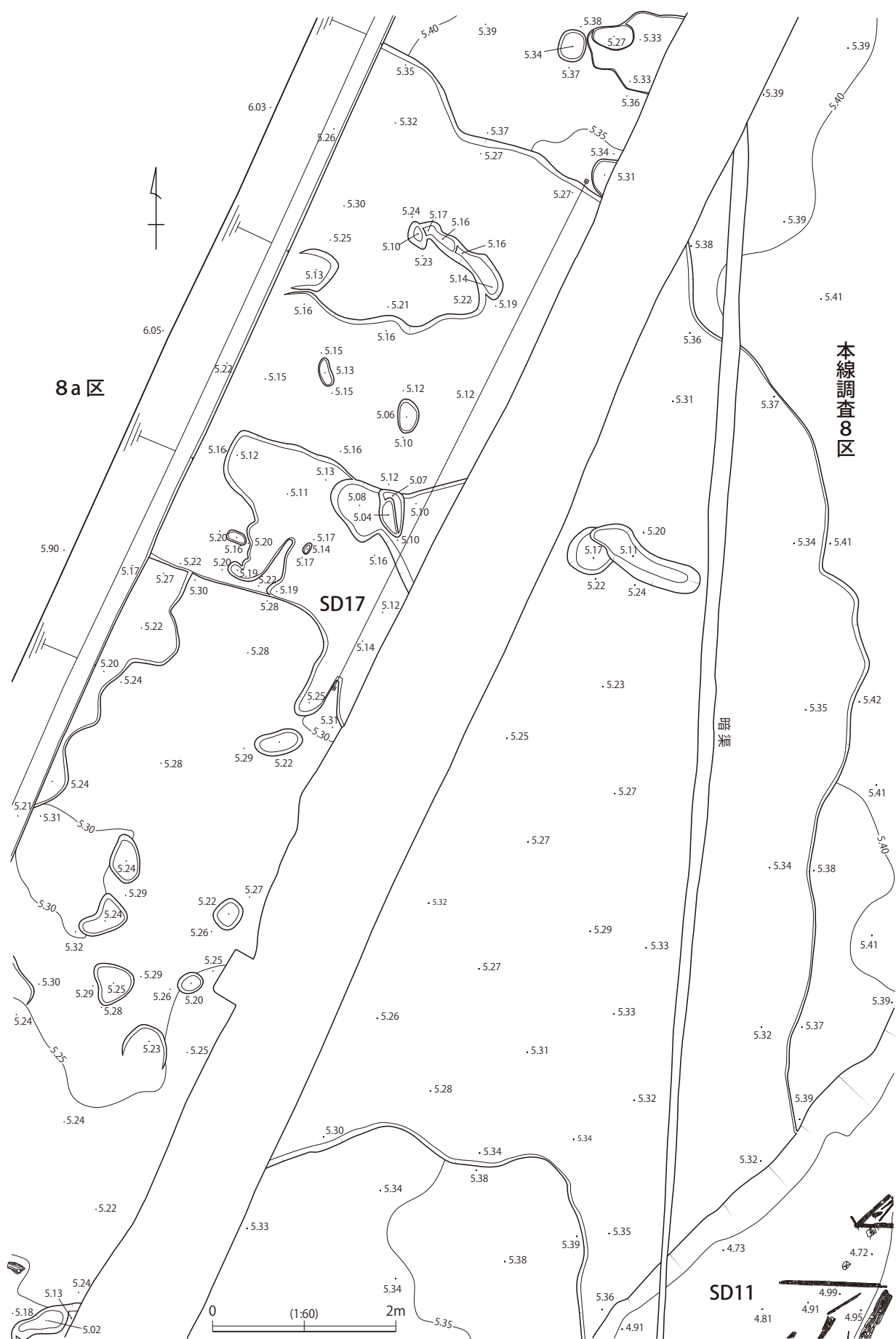
【SD 5 南側平面図 (S=1/60)】

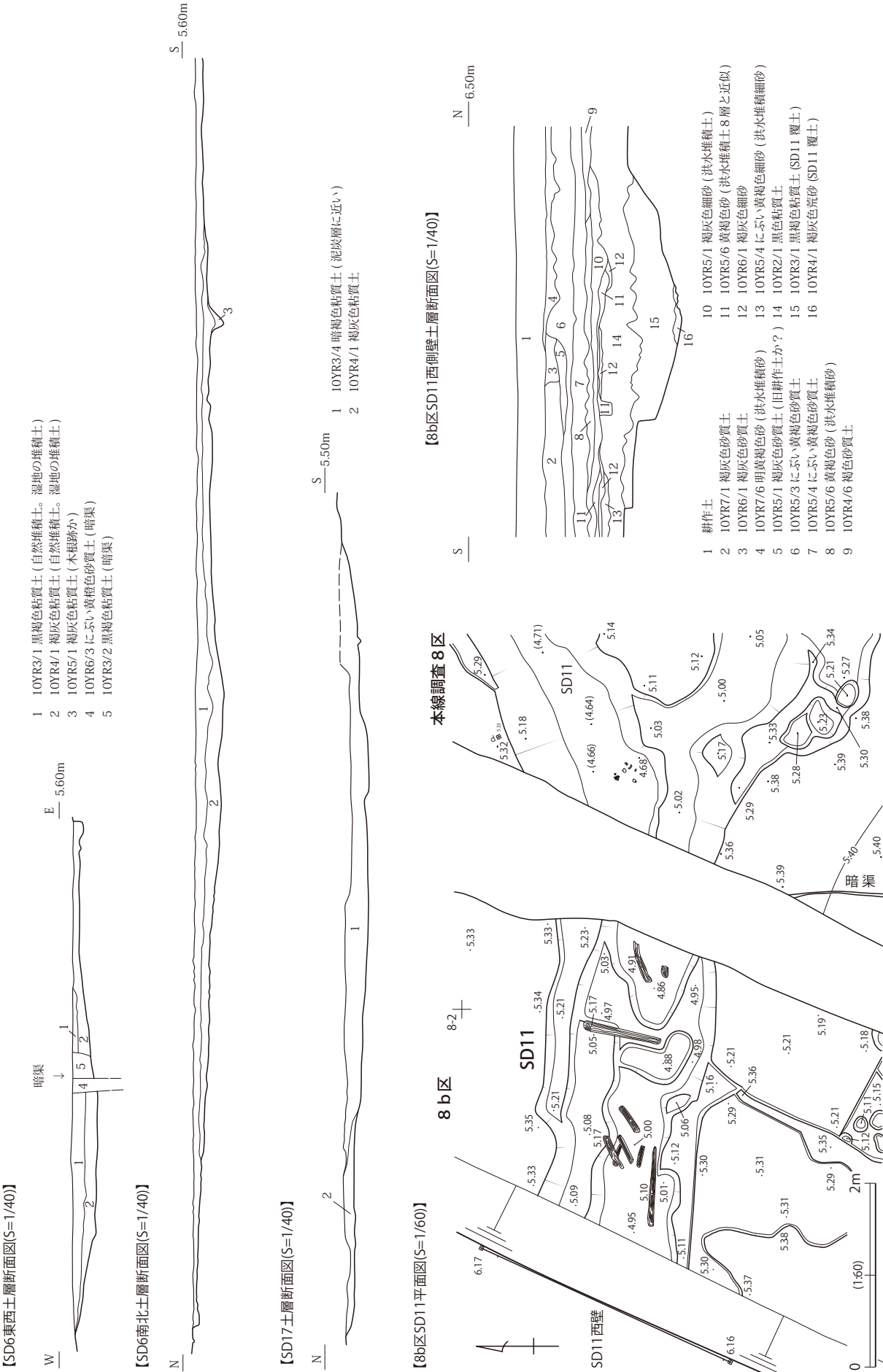


第 66 図 8a 区西壁土層断面、SD5 遺構図

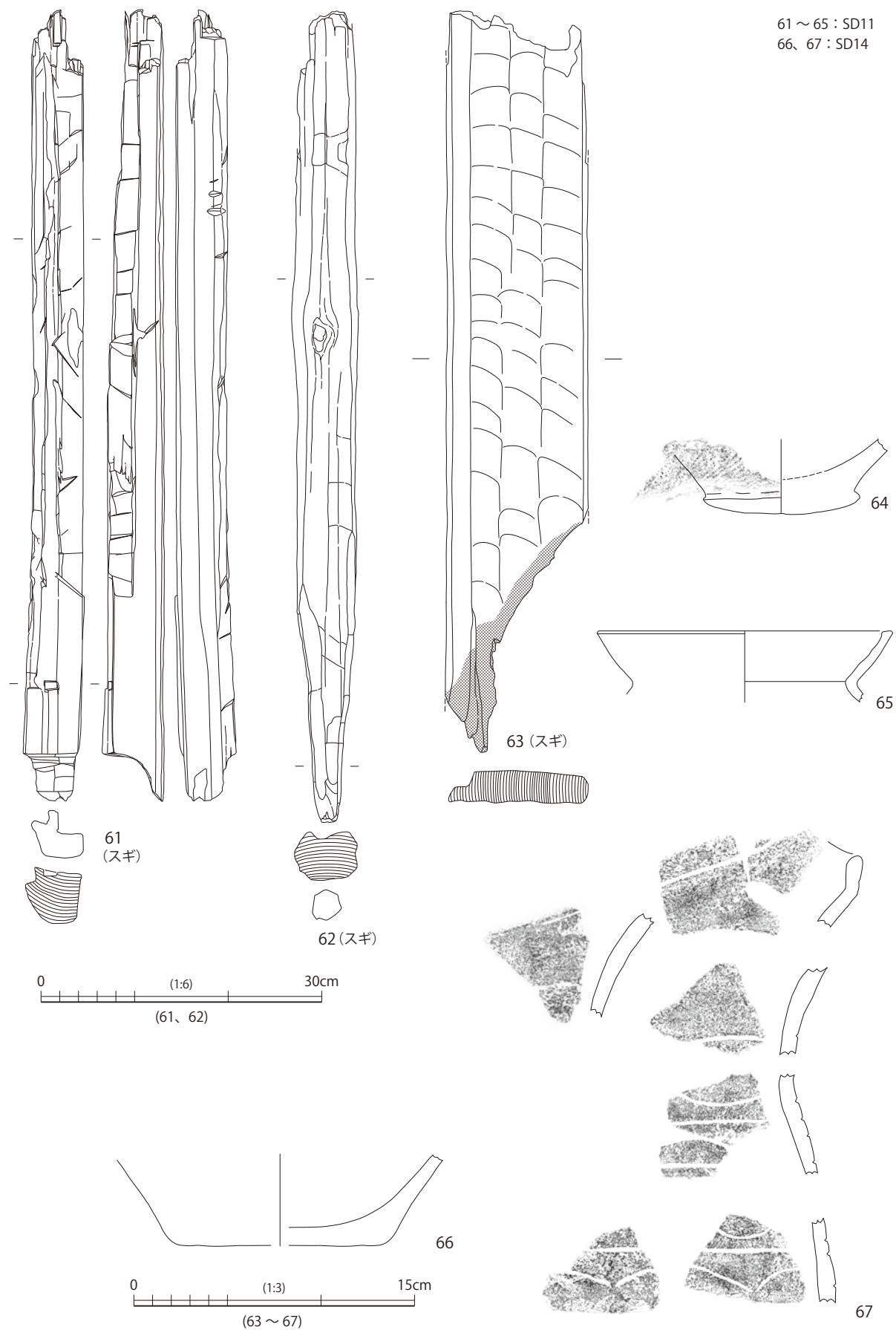


第 67 図 8a 区 SD5 北側・SD6 平面図





第 69 図 8a 区 SD6・11・17 遺構図



第70図 8a区遺構出土遺物

報告 番号	種別	器種	調査区	小区	遺構等	時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存率	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	備考	調査 年度	遺物 I D	実測 番号
1	土師器	碗	2b区	2-10	P133 1-4 (SB02)	平安	14.3	5.2	4.2	口9/12 底 11/12	にぶい・橙	にぶい・橙	粗砂並 赤色粒あり	良	摩耗により調整不明	摩耗により調整不明		2020	MA0000043067	0723
3	須恵器	蓋 (坏H)	2a区	2-3	SK101	古墳時代末	10.8	—	4.0	口2/12	灰黄	灰白	粗砂並	良	クロコナデ	クロコナデヘラ切り後ナデ	7世紀前半	2020	MA0000043058	0714
4	土師器	鉢	2a区	2-3	SK102	不明	18.2	—	(4.1)	口小片	にぶい・褐	にぶい・赤褐	粗砂並	良	ヨコナデナデ (摩耗)	ヨコナデナデ (摩耗)	外面スス付着 内面ヨゴレの 可能性あり	2020	MA0000043059	0715
6	須恵器	無台坏	2a区	2-2	SK106-1	奈良・平安	—	6.1	(3.5)	底8/12	灰白	灰白	粗砂並	良	クロコナデ	クロコナデヘラ切り後ナデ		2020	MA0000043056	0712
7	須恵器	無台坏 (坏A)	2a区	2-2	SK106	奈良・平安	13.4	8.4	4.2	口2/12 底 2/12	灰白	灰白	粗砂多	良	クロコナデ	クロコナデヘラ切り後ナデ		2020	MA0000043057	0713
9	須恵器	有台坏	2b区	2-9	SK107-2	奈良・平安	11.5	4.1	8.4	口2/12 底 6/12	灰白	灰白	粗砂多	良	クロコナデ	クロコナデヘラ切り後ナデ		2020	MA0000043064	0720
10	土師器	甕 底部	2b区	2-9	SK107-10	奈良・平安	—	5.4	(3.2)	底5/12	明褐灰	にぶい・橙	礫並 粗砂並	良	ヨコナデ	ナデ (摩耗)	内面にヨゴレ	2020	MA0000043066	0722
11	土師器	甕	2b区	2-9	SK107-4	奈良・平安	22.4	—	(7.5)	口3/12	浅黄橙	浅黄橙	礫あり 粗砂並 赤色粒	良	ハケ 摩耗により調整不明	ハケ (カキメカ) 摩耗により調整不明 (一部ハケ残る)	外面スス付着	2020	MA0000043065	0721
14	土師器	碗 (内黒)	2b区	2-9	SK108	平安か	—	6.4	(1.7)	底5/12	黒・	灰白	粗砂多 雲母多	良	内黒 (摩耗)	ナデ (摩耗)		2020	MA0000043164	0734
18	土師器	碗	2b区	2-9	SD06	中世	(14.5)	—	(2.5)	口小片	—	—	灰白 堅緻	良	透明 白磁	貫入あり		2020	MA0000043061	0717
19	瓦質土器	香炉	2a区	2-5	SD14 アゼ	中世	14.8	—	(4.9)	口1/12	黄灰	黄灰	粗砂少	良	クロコナデ	クロコナデ (凹線あり)		2020	MA0000043161	0731
21	須恵器	無台坏 (坏G)	2a区	2-2	SD33・31上層 SD33・31上層 SD31・33下層	古墳時代末	10.2	5.7	3.6	口8/12 底 12/12	灰白	灰白	粗砂多	良	クロコナデ	クロコナデヘラ切り後ナデ	口縁部ゆがみあり 外面にヘラ書きあり 7世紀後半か	2020	MA0000043055	0711
22	弥生土器	壺	2b区	2-8	SD108	弥生前期	16.8	—	(8.2)	口1/12	にぶい・橙 灰黄褐	にぶい・黄橙 灰黄褐	礫あり 粗砂並 雲母	良	ヨコナデナデ	波状口縁	外面貼付突帯 柴山出村式	2020	MA0000043060	0716
28	須恵器	無台坏 (墨書)	2b区	2-9	SD109 SD110 SD06	奈良・平安	—	9.1	(1.0)	底3/12	灰	灰白	粗砂並	良	クロコナデ	クロコナデヘラ切り後ナデ	墨書「月」か	2020	MA0000043063	0719
29	須恵器	無台坏 (墨書)	2b区	2-8	SD110	奈良・平安	—	10.5	(1.0)	底小片	灰白	灰白	粗砂多	良	クロコナデ	クロコナデヘラ切り後ナデ	墨書「ニイ」ヘラ 記号あり「一」	2020	MA0000043062	0718
30	土師器	甗	2a区	2-3	NR01	奈良か	(24.5)	—	(9.9)	口小片	にぶい・橙	橙	礫あり 粗砂多	良	ヨコナデ スリ	ヨコナデハケ	把手はがれている	2020	MA0000043162	0732
37	陶器	碗	6a区	I	SD3	近世	—	(4.7)	(5.7)	底2/12	灰白	明青灰	細砂含む	良	透明	釉内外面墨入 泡あり 高台に釉 のかきとり2面		2019	MA0000043026	0012
40	弥生土器	壺	6a区	C	SD14 SD10	弥生	18.0	—	(5.5)	口3/12	灰黄褐	灰黄褐	粗砂多 細砂並	良	ミガキ後ナデ ミガキ	ミガキ後ナデ ミガキ 外面 擬凹線 16条		2019	MA0000043027	0013
41	弥生土器	壺	6a区	C	SD14	弥生	11.4	—	(5.5)	口3/12	灰黄褐	灰黄褐	礫多 粗砂多	良	ミガキ ケズ	ミガキ後ナデ ミガキ		2019	MA0000043028	0014
48	弥生土器	甕	6a区	H	SD25 上層 SD33	弥生	(19.5)	(4.9)	(12.9) +(2.5)	口3/12 底 3/12	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	礫多 粗砂多	良	ヨコナデ ズリナデ	ヨコナデナデ	外面スス付着	2019	MA0000043037	0023
49	土師器	高坏	6a区	H	SD25 上層	古墳	—	—	(3.0)	—	にぶい・黄橙	にぶい・黄橙	砂多	良	ミガキ	ミガキ		2019	MA0000043167	0033
50	弥生土器	甕	6a区	E	SD29 SD34	弥生	(32.4)	—	(7.8)	口小片	淡黄	にぶい・黄橙	礫少 粗砂多 赤色粒	良	ヨコナデ ズリ	ヨコナデ 凹線 17条	外面スス付着	2019	MA0000043038	0024

表3-1 土器・瓦質土器調査表1

報告 番号	種別	器種	調査区	小区	遺構等	時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存率	色調 (内面)	色調 (外面)	胎土	焼成	調整 (内面)	調整 (外面)	備考	調査 年度	遺物 I D	実測 番号
51	土師器	高坏 脚	6a区	A	SD30	古墳	—	—	(8.5)	—	にぶい黄橙	にぶい黄橙	精良 砂粒少	良	ケズリ後ナデ ナデ	摩耗 ミガキ		2019	MA0000043039	0025
52	土師器	甕	6a区 6a区 6a区 6a区	A9 AB A A	SD30 SD11 上層 SD11 南岸最下層 SD11	古墳	20.0	—	(27.1)	□ 3/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫あり 粗砂並	良	ヨコナデ ケ後ナデ スリ	ハ ケ ヨコナデ ハ ケ	外面スス付着 (うすく頸部 まで) 黒斑あり (マキカ)	2019	MA0000043029	0015
53	弥生土器	器台	6a区	D	SD31	弥生	—	—	(4.3)	—	褐	赤橙	粗砂多	良	ヨコナデ	ミガキ (摩耗) 赤彩	孔2コ現存 全部で4コ かも (8.5ミ リ)	2019	MA0000043030	0016
54	弥生土器	甕	6a区	H	SD33	弥生	(15.6)	—	(5.6)	□ 4/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	礫少 粗砂多 雲母 赤色粒	良	ヨコナデ スリ	ケ ヨコナデ 細かいハケ目	内外面スス付 着	2019	MA0000043031	0017
55	弥生土器	甕	6a区	G	SD34	弥生	(16.55)	—	(4.1)	□ 4/12	にぶい黄褐	にぶい黄褐	礫少 粗砂多	良	ヨコナデ スリ	ケ 擬凹線 12条 ヨコナデ	外面スス付着 内面頸部まで ヨコレあり	2019	MA0000043165	0031
56	弥生土器	器台	6a区	G	SD34	弥生	—	—	(4.5)	—	浅黄橙	浅黄橙	精良 やや砂 目立つ	良	ケズリ	ミガキ (摩耗) キザミ 沈線 3条 スタンプ文 沈線 1条 ミガキ (摩耗)	孔の痕跡 2ヶ 所	2019	MA0000043040	0026
57	土師器	碗	7a区		SD22・24	古墳	13.9	—	(4.5)	□ 5/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂並	良	ナデ (摩耗)	摩耗により調 整不明		2019	MA0000043032	0018
58	土師器	甕	7a区		SD22	古墳	(21.6)	—	(4.9)	□ 1/12	にぶい黄	黒	粗砂 雲母	良	ヨコナデ ケ ヨコナデ ナデ ケズリ	ハ ヨコナデ ハケ目	外面スス付着	2019	MA0000043166	0032
59	土師器	有台碗	7a区		水田面 砂層	平安	—	7.6	(2.7)	底完形	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂多 雲母	良	クロナデ	ロクロナデ 回転系切り	内外面スス付 着	2019	MA0000043033	0019
60	土師器	甕	7a区		水田面 砂層	平安	(15.2)	—	(2.55)	□ 1/12	にぶい黄橙	灰黄褐	粗砂多 雲母	良	クロナデ	ロクロナデ	内外面スス付着 内面ヨコレあり	2019	MA0000043034	0020
64	縄文土器	底部	8b区		SD11	縄文	—	8.4	(4.0)	底 11/12	黒褐	にぶい黄橙	粗砂含 砂多	良	ナデ	縄文? ナデ		2019	MA0000043044	0030
65	土師器	甕	8b区		SD11	古墳	(15.6)	—	(3.8)	□ 3/12	灰黄橙	明黄褐	砂多	良	ヨコナデ ナデ	ハ ヨコナデ ナ	外面スス付着	2019	MA0000043042	0028
66	縄文土器	深鉢	8b区		SD14	縄文	—	(10.0)	(5.0)	底 3/12	にぶい橙	浅黄橙	砂多	良	ナデ	摩耗により調 整不明		2019	MA0000043043	0029
67	縄文土器	浅鉢	8b区		SD14	縄文	(39.5)	—	(5.2)	□ 小片	黄橙	にぶい黄橙	粗砂多	良	ナデ (摩耗)	沈線	波状口縁	2019	MA0000043041	0027

第4表 土器・陶磁器調査表2

報告 番号	器種	調査区	小区	遺構等	時代	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考	調査 年度	遺物 I D	実測 番号
5	砥石	2a区	2-3	SK104	弥生	12.8	7.9	5.3	423.1	砂岩		2020	MA0000043069	0725
17	磨製石斧 未成品	2b区	2-8	SD6	縄文	(13.3)	5.4	2.3	234.2	砂岩	表面に細かな敲打痕	2020	MA0000043068	0724
20	剥片	2a区	2-6	SD14	縄文	3.2	0.9	2.4	8.2	ガラス質 安山岩		2020	MA0000043163	0733
23	磨石	2b区	2-8	SD108	弥生	8.6	6.5	6.8	550.1	細粒砂岩	上部下部敲打痕	2020	MA0000043073	0729
24	砥石	2b区	2-8	SD108	弥生	11.7	13.7	9.0	1875.0	流紋岩	表面非常に平滑 裏面自然面 表裏面ともに擦痕不明瞭	2020	MA0000043070	0726
25	打製石斧	2b区	2-8	SD108 アゼ 1.2 層	弥生 後期	11.0	8.6	2.4	311.0	凝灰角礫岩		2020	MA0000043074	0730
26	打製石斧	2b区	2-8	SD108 アゼ 1.2 層	弥生 後期	11.9	8.1	2.9	315.9	凝灰角礫岩	表面自然面つつる している平滑	2020	MA0000043072	0728
27	打製石斧	2b区	2-8	SD108	弥生 後期	(11.4)	12.2	2.9	508.0	凝灰角礫岩		2020	MA0000043071	0727
46	勾玉	6a区	E	S D 23・24	弥生	1.45	0.6	0.95	1.53	ヒスイ		2019	MA0000043035	0021
47	磨石	6a区	H	SD25	弥生	18.2	8.1	5.9	1144.0	閃緑岩	一部敲打痕あり	2019	MA0000043036	0022

第5表 石器観察表

報告 番号	器種	樹種	調査区	小区	遺構等	時代	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考	調査 年度	遺物 I D	実測 番号
2	柱根	スギ	2b区	2-10	P142(SB06)	平安～ 中世	(42.9)	17.7	12.4	芯去削出	2020	MA0000043045	0701
8	板材	スギ	2a区	2-2	SK106 北東隅 No.4	平安～ 中世	13.2	4.3	0.5	板目	2020	MA0000043050	0706
12	建築部材	スギ	2a区	2-2	SK106 2層 No.2	平安～ 中世	55.0	13.0	1.4	板目	2020	MA0000043046	0702
13	板状木製品	スギ	2b区	2-9	SK108 7層	平安～ 中世	24.0	6.0	1.4	柱目	2020	MA0000043049	0705
15	椀	トチノキ	2b区	2-9	SK108 7層	平安～ 中世	口 (12.0)	器高 (2.0)	遺存率 1/12	横木取り	2020	MA0000043054	0710
16	椀	トチノキ	2b区	2-9	SK108 7層	平安～ 中世	口 (19.4)	器高 (5.5)	遺存率 小片	横木取り	2020	MA0000043053	0709
31	下駄	ケヤキ	5a区		SE1 1層	中世	19.3	11.5	3.0	板目	2020	MA0000043048	0704
32	櫛	イスノキ	5a区		SE1	中世	(2.6)	(6.0)	1.1	板目、漆 剥離か	2020	MA0000043051	0707
33	有頭棒	スギ	5a区		SE1	中世	12.6	2.6	1.2	芯去削出	2020	MA0000043052	0708
34	棒状木製品	クスノキ科	5a区		SE1 6層	中世	(23.0)	5.1	(4.1)	芯持丸木	2020	MA0000043047	0703
35	柱根	スギ	6a区		P97	弥生後 期か	(42.0)	17.1	17.7	芯去削出	2019	MA0000043016	0002
36	付木	アスナロ	6a区	G	P104	平安～ 中世	14.2	1.2	0.85	角材	2019	MA0000043023	0009
38	板状木製品	スギ	6a区		SD10 下層	平安～ 中世	23.0	4.1	0.5	板目	2019	MA0000043021	0007
39	板状木製品	スギ	6a区		SD10 下層	平安～ 中世	37.5	3.0	0.85	板目	2019	MA0000043022	0008
42	礎板	コナラ属ク ヌギ節	6a区	D	P111 西側礎板	弥生後 期か	46.1	10.8	5.5	半割	2019	MA0000043018	0004
43	礎板	コナラ属ク ヌギ節	6a区	D	P111 東側礎板	弥生後 期か	46.5	10.3	7.0	半割	2019	MA0000043019	0005
44	礎板	ケヤキ	6a区	D	P111 上位礎板	弥生後 期か	50.4	8.8	8.2	角材	2019	MA0000043017	0003
45	柱根	キハダ	6a区	E	P 116	不明	(32.7)	13.5	13.6	芯持丸木	2019	MA0000043015	0001
61	建築部材	スギ	8a区		SD11	古墳	79.5	6.5	6.7	板目	2019	MA0000043020	0006
62	杭	スギ	8a区		SD11	古墳	(86.6)	7.2	5.2	板目	2019	MA0000043024	0010
63	板状木製品	スギ	8a区		SD11	古墳	(39.6)	7.6	1.7	柱目	2019	MA0000043025	0011

第6表 木製品観察表

第4章 自然科学的分析

第1節 木製品の樹種同定

小林克也（パレオ・ラボ）

石川県能美市の西任田遺跡・中ノ庄遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。なお、一部の試料では塗膜分析も行われている（第2節 漆器の塗膜分析 参照）。同定した試料は、溝跡や井戸跡などから出土した木製品 21 点で、時期については弥生時代後期、古代末～中世である。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柃目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

結果

同定の結果、針葉樹のスギとアスナロの2分類群と、広葉樹のクスノキ科とケヤキ、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、トチノキ、キハダ、イスノキの6分類群の、計8分類群がみられた。スギが最も多く11点で、ケヤキとクヌギ節、トチノキが各2点、アスナロとクスノキ科、キハダ、イスノキが各1点見られた。同定結果を第7表に、一覧を第8表に示す。

時期 器種	中世			平安末～中世						古墳			弥生後期		不明	合計
	下駄	櫛	有頭棒	椀	板材	杭	板状 木製品	柱根	付木	板状 木製品	杭	建築 部材	礎版	柱根	柱根	
スギ			1		1	1	3	1		1	1	1		1		11
アスナロ									1							1
クスノキ科																1
ケヤキ	1												1			2
コナラ属クヌギ節													2			2
トチノキ				2												2
キハダ															1	1
イスノキ			1													1
合計	1	1	1	2	1	1	3	1	1	1	1	1	3	1	1	21

第7表 木製品の時期・器種別樹種同定結果

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

- (1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 第71図 1a-1c (No.0002)、2a-2c (No.0701)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

- (2) アスナロ *Thujopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 第71図 3a-3c (No.0009)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は

やや急である。放射組織は単列で、高さ2～13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野に2～4個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工は比較的容易である。また精油分が多く、耐朽性に優れている。

(3) クスノキ科 Lauraceae 第72図 4a-4c (No.0703)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～2列となる。木部繊維内には、油細胞が認められる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

(4) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第72図 5a-5c (No.0704)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が多数複合し、接線～斜線方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、1～5列となる。放射組織の上下端には、結晶が認められる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに好んで生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

(5) コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 第72図 6a-6c (No.0004)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クスギ節にはクスギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(6) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 第73図 7a-7c (No.0709)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

(7) キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 第73図 8a-8c (No.0001)

大型の道管が年輪のはじめに1～3列並び、晩材部では急に径を減じた道管が多数複合して接線または斜線状に配列する環孔材である。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～4列となる。

キハダは国内各地の河川など水湿の多い所に多く分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で比較的水湿に強く、切削加工等は容易である。

(8) イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 第73図 9a-9c (No.0707)

小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は1～3列程度の帯状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1～3列が方形ないし立方である異性で、1～2列である。放射組織の単列部と多列部は、同じ大きさである。

イスノキは本州の東海や南近畿、山陽の本州南部、四国、九州などの温帯中南部に分布する、常緑高木の広葉樹である。材は非常に重硬で強度が大きく、切削加工等は困難で、割れにくい。

考察

弥生後期では、礎板はケヤキとクヌギ節、柱根はスギであった。スギは木理通直でまっすぐに生育し、加工性が良い。またケヤキとクヌギ節は堅硬な樹種であるが、ケヤキは加工性が良い樹種である（伊東ほか 2011）。石川県内の弥生時代後期の木製品では、柱根にはスギ、礎板にはケヤキとクヌギ節がみられ（伊東・山田編 2012）、傾向は一致する。

古墳時代では、板状木製品と建築部材、杭は、いずれもスギであった。石川県内の古墳時代の木製品では、建築部材、板、杭共にスギが多くみられ（伊東・山田編 2012）、傾向は一致する。

平安時代末～中世の木製品では、付木はアスナロ、椀はトチノキ、板材と板状木製品、柱根、杭はスギであった。また中世の木製品では、下駄はケヤキ、櫛はイスノキ、有頭棒はスギ、棒状木製品はクスノキ科であった。アスナロはスギ同様にまっすぐで加工性が良く、トチノキは軽軟で加工性が良い樹種である。またクスノキ科とケヤキ、イスノキは、堅硬な樹種である（伊東ほか 2011）。

中世頃の石川県内の木製品では、付木にはアスナロやスギ、下駄にはケヤキ、櫛はイスノキ、椀にはトチノキ、柱根および板、杭にはスギ、棒にはスギとクスノキ科がみられ、傾向は一致する。

時期不明の柱根は、キハダであった。キハダは堅硬な樹種である（伊東ほか 2011）。

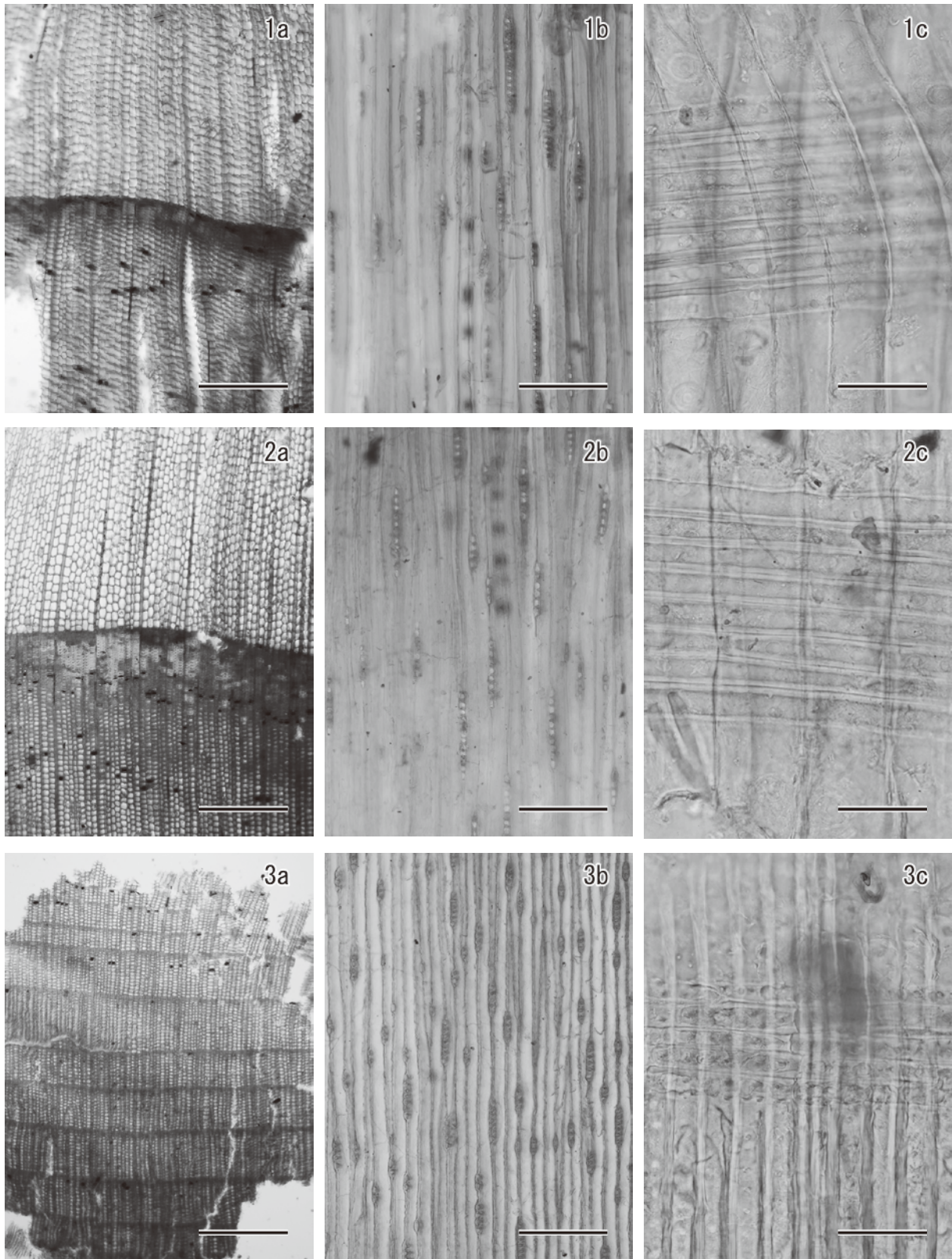
引用文献

伊東隆夫ほか 2011 『日本有用樹木誌』海青社 238 頁

伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学—出土木製品用材データベース—』海青社 449 頁

試料 No.	遺物 ID	調査 ID	地区	グリッド	遺構名	器種	樹種	木取り	時期
0001	MA0000043015	2019 - 05	6a 区	E	P116	柱根	キハダ	芯持丸木	不明
0002	MA0000043016	2019 - 05	6a 区		P97	柱根	スギ	芯去削出	弥生後期
0003	MA0000043017	2019 - 05	6a 区	D	P111 上位礎版	礎版	ケヤキ	角材	弥生後期
0004	MA0000043018	2019 - 05	6a 区	D	P111 西側礎版	礎版	コナラ属クヌギ節	半割	弥生後期
0005	MA0000043019	2019 - 05	6a 区	D	P111 東側礎版	礎版	コナラ属クヌギ節	半割	弥生後期
0006	MA0000043020	2019 - 05	8a 区		SDII	建築部材	スギ	板目	古墳
0007	MA0000043021	2019 - 05	6a 区		SD10 下層	板状木製品	スギ	板目	平安末～中世
0008	MA0000043022	2019 - 05	6a 区		SD10 下層	板状木製品	スギ	板目	平安末～中世
0009	MA0000043023	2019 - 05	6a 区	G	P104	付木	アスナロ	角材	平安末～中世
0010	MA0000043024	2019 - 05	8a 区		SDII	杭	スギ	板目	古墳
0011	MA0000043025	2019 - 05	8a 区		SDII	板状木製品	スギ	板目	古墳
0701	MA0000043045	2020 - 05	2b 区	2 - 10	P142	柱根	スギ	芯去削出	平安末～中世
0702	MA0000043046	2020 - 05	2a 区	2 - 2	SK106 2 層 No.2	板状木製品	スギ	板目	平安末～中世
0703	MA0000043047	2020 - 05	5a 区		SE1 6 層	棒状木製品	クスノキ科	芯持丸木	中世
0704	MA0000043048	2020 - 05	5a 区		SE1 1 層	下駄	ケヤキ	板目	中世
0705	MA0000043049	2020 - 05	2b 区	2 - 9	SK108 7 層	杭	スギ	板目	平安末～中世
0706	MA0000043050	2020 - 05	2a 区	2 - 2	SK106 北東隅 No.4	板材	スギ	板目	平安末～中世
0707	MA0000043051	2020 - 05	5a 区		SE1	櫛	イスノキ	板目	中世
0708	MA0000043052	2020 - 05	5a 区		SE1	有頭棒	スギ	芯去削出	中世
0709	MA0000043053	2020 - 05	2b 区	2 - 9	SK108 7 層	椀	トチノキ	横木取り	平安末～中世
0710	MA0000043054	2020 - 05	2b 区	2 - 9	SK108 7 層	椀	トチノキ	横木取り	平安末～中世

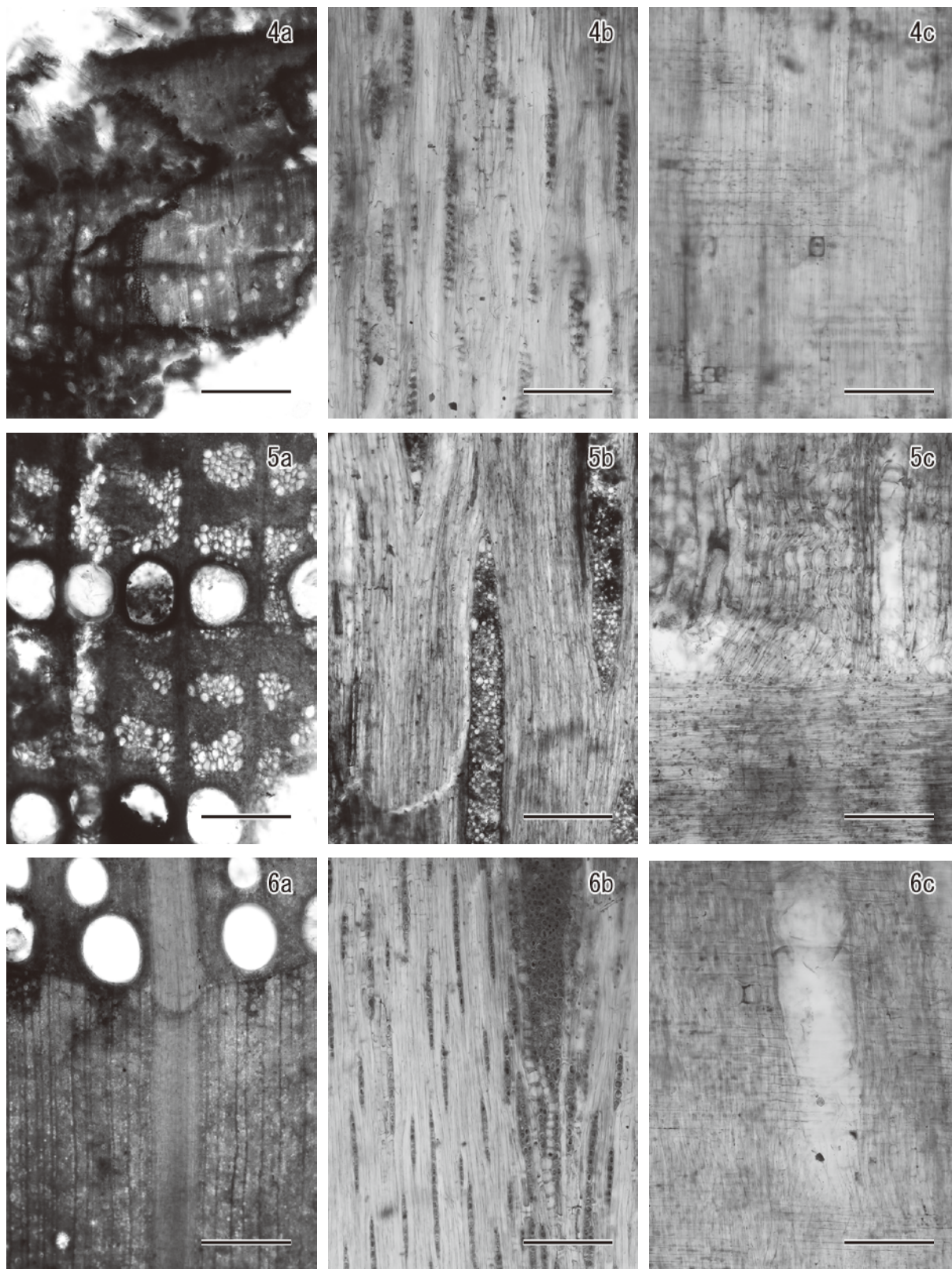
第8表 西任田遺跡・中ノ庄遺跡出土木製品の同定試料一覧



第71図 西任田遺跡・中ノ庄遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. スギ(No. 0002)、2a-2c. スギ(No. 0701)、3a-3c. アスナロ(No. 0009)

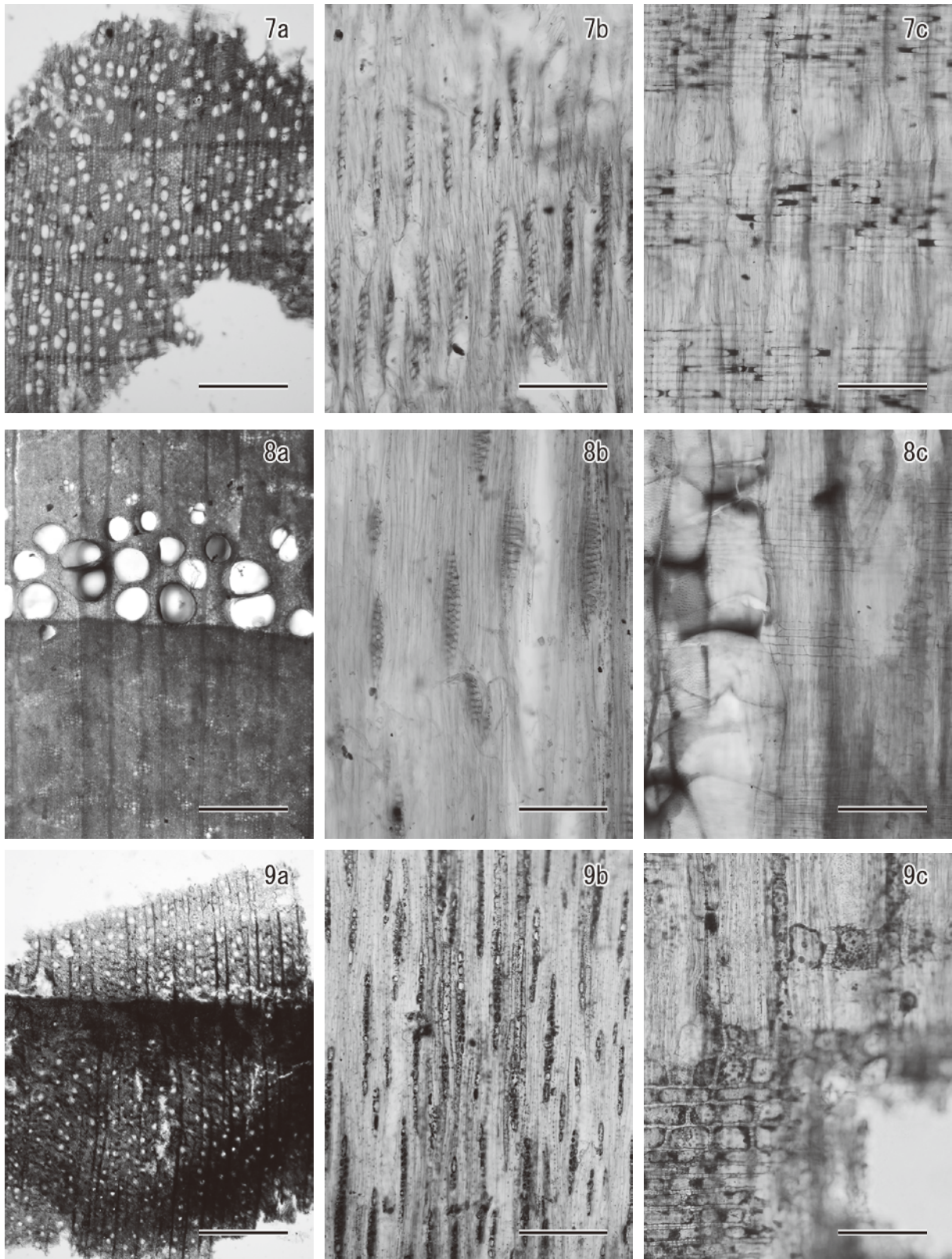
a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=50 μm)



第72図 西任田遺跡・中ノ庄遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)

4a-4c. クスノキ科 (No. 0703)、5a-5c. ケヤキ (No. 0704)、6a-6c. コナラ属クスギ節 (No. 0004)

a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=200 μm)



第73図 西任田遺跡・中ノ庄遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(3)

7a-7c. トチノキ (No. 0709)、8a-8c. キハダ (No. 0001)、9a-9c. イスノキ (No. 0707)

a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=200 μm)

第2節 漆器の塗膜分析

竹原弘展・藤根 久・米田恭子・小林克也（パレオ・ラボ）

西任田遺跡・中ノ庄遺跡より出土した漆器について、塗膜薄片を作製し、塗膜構造と材料について検討した。分析対象は、漆器椀2点である（第9表、第75図1A、2A）。2点とも、胎部は横木取りのトチノキ製である（詳細は樹種同定の項参照）。分析No.1（実測番号0709）は、内外面黒色の椀である。分析No.2（実測番号0710）は、劣化が激しく、外面一部に白色？の塗膜が残存する椀である。外面塗膜片を少量採取し、分析試料とした（第75図1B、2B）。なお、分析にあたっては、小林が試料採取、藤根が赤外分光分析、米田・竹原が薄片作製、竹原が顕微鏡観察・X線分析を行い、竹原が報告をまとめた。

分析は、漆成分を調べるために赤外分光分析を行った。また、塗膜構造を調べるために薄片を作製して、光学顕微鏡と走査型電子顕微鏡による観察、およびX線分析を行った。

分析No.	実測番号	遺物ID	調査ID	地区	グリッド	出土遺構	時期	器種	樹種	木取り	特徴	塗膜分析面
1	0709	MA0000043053	2020-05_	2b区	2-9	SK1087層	平安末～中世	椀	トチノキ	横木取り	内外面黒色	外面
2	0710	MA0000043054	2020-05_	2b区	2-9	SK1087層	平安末～中世	椀	トチノキ	横木取り	劣化激しい、内面不明 外面一部白色？塗膜	外面 白色部

第9表 分析対象一覧

赤外分光分析は、手術用メスを用いて塗膜表面から少量を削り取り、ダイヤモンドセルに乗せて薄く延ばして、測定試料とした。分析装置は日本分光株式会社製フーリエ変換型顕微赤外分光光度計FT/IR- 4X、IRT-5200-16を使用して、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。材料の検討は、生漆などの赤外吸収スペクトルと比較した。

塗膜観察用の薄片は、高透明エポキシ樹脂を使用して包埋し、薄片作製機および精密研磨フィルム（＃1000）を用いて厚さ約50μm前後に仕上げ、まず走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-IT200）による反射電子像観察を行った。さらに、電子顕微鏡に付属するエネルギー分散型X線分析装置（オックスフォード・インストルメンツ株式会社製AZtecOneシステム）による定性・半定量分析を行った。その後、再度精密研磨フィルム（＃1000）を用いて厚さ約20μm前後に調整した後、生物顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

結果および考察

第75図1C、2Cに塗膜薄片の生物顕微鏡写真を、第75図1D、2Dに走査型電子顕微鏡反射電子像を示す。第74図に、赤外吸収スペクトルを示す。図の縦軸は透過率（%T）、横軸は波数（Wavenumber（cm⁻¹）；カイザー）である。吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す（第10表）。また、第11表にX線分析による半定量分析結果を示す。以下に、各塗膜の分析結果について述べる。また、各試料の特徴は、第12表にまとめた。

吸収No.	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

第10表 生漆の赤外吸収位置とその強度

分析 No.	塗膜層	CO ₂	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃
1	c 層	95.05	0.05	0.05	0.10	0.08	0.10	1.87	0.08	0.02	0.86	0.02	1.74
	b 層	98.37	0.02	0.04	0.03	0.02	0.04	0.83	0.06	0.02	0.38	—	0.20
2	c 層	70.03	0.06	0.10	0.23	—	12.97	0.62	0.16	0.12	0.75	—	14.95

第 11 表 塗膜層の X 線分析結果（酸化物換算、mass%）

[分析 No.1（実測番号 0709、内外面黒色漆器碗の外表面黒色塗膜）]

塗膜薄片では、木胎 a 層、炭粉と柿渋からなるとみられる下地 b 層、透明漆層 c 層が観察された（第 75 図 1 C、1 D）。赤外分光分析では、炭化水素の吸収（No.1 と No.2）は僅かであり、炭化物に近いが、生漆を特徴づけるウルシオール（No.7 と No.8）が確認され、漆と考えられる（第 74 図 1）。下地 b 層は、クラックの多く入った褐色透明の層に黒色物が多く混ざるといった特徴から、炭粉と柿渋からなる下地と推定される。

[分析 No.2（実測番号 0710、劣化の激しい漆器碗の外表面白色？塗膜）]

塗膜薄片では、木胎 a 層、透明塗膜層 c 層が観察された（第 75 図 2 C、2 D）。赤外分光分析では、有機物でみられる炭化水素の吸収（No.1 と No.2）は確認されず、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収も確認されなかった（第 74 図 2）。下地にあたる層は観察されなかった。

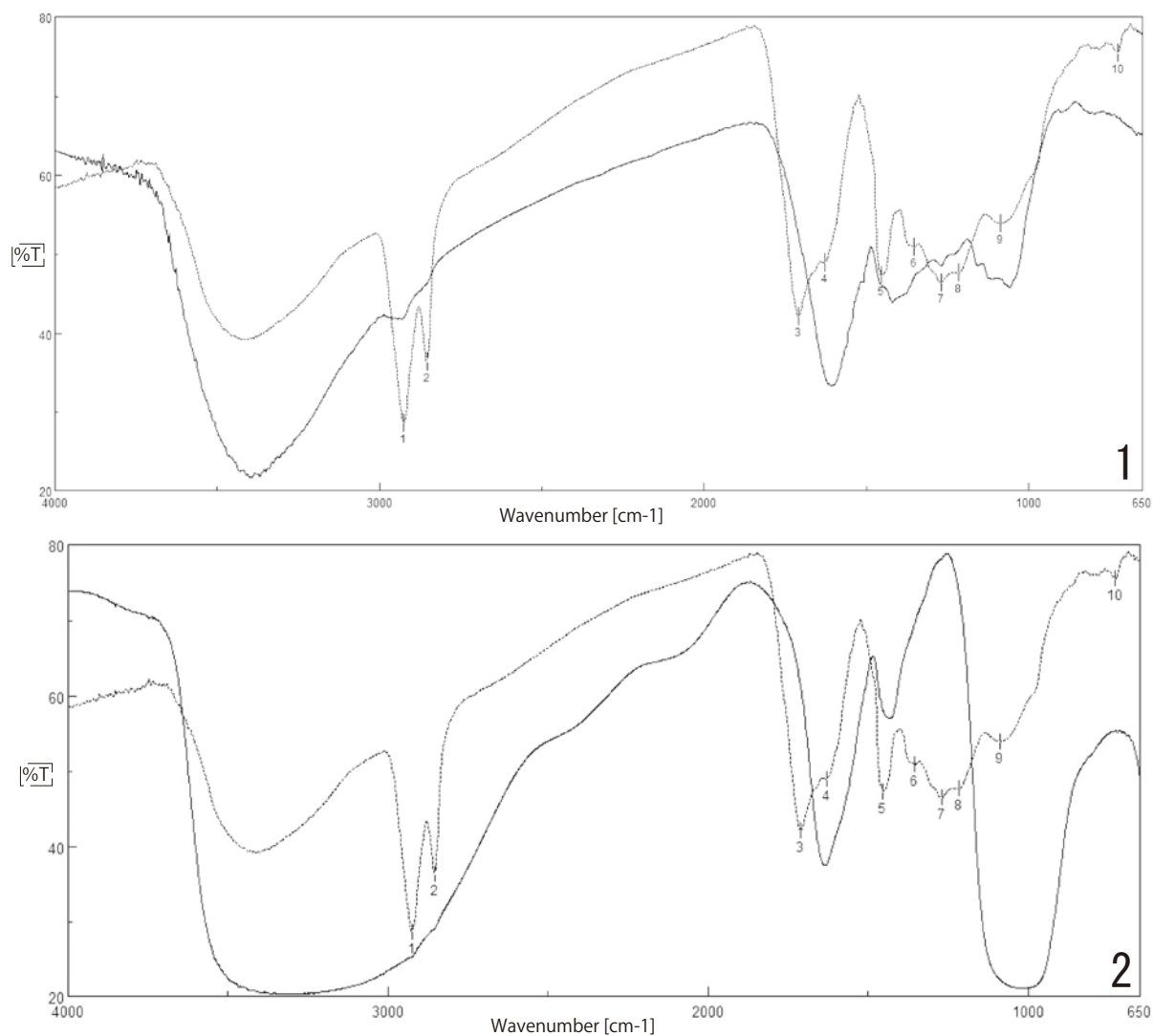
透明塗膜層 c 層は、赤外分光分析では漆と同定できなかったが、木胎 a 層に浸透している様子が観察されるため、表面に塗り、固化した塗膜層である。X 線分析では、炭素以外にリン（P₂O₅）と鉄（Fe₂O₃）がやや多く検出された。リンの多い物質としては、骨が挙げられるが、カルシウム（CaO）を伴っておらず、由来は不明であった。外観は白色の塗膜であるが、全体的に劣化の激しい資料であり、劣化に伴う変質、変色による可能性が考えられる。

分析 No.	器種	採取塗膜	下地	塗膜層	
1	碗	外面黒色塗膜	炭粉渋下地	1 層	透明漆層
2	碗	外面白色？塗膜	—	1 層	透明不明塗膜層（劣化？）

第 12 表 塗膜分析結果

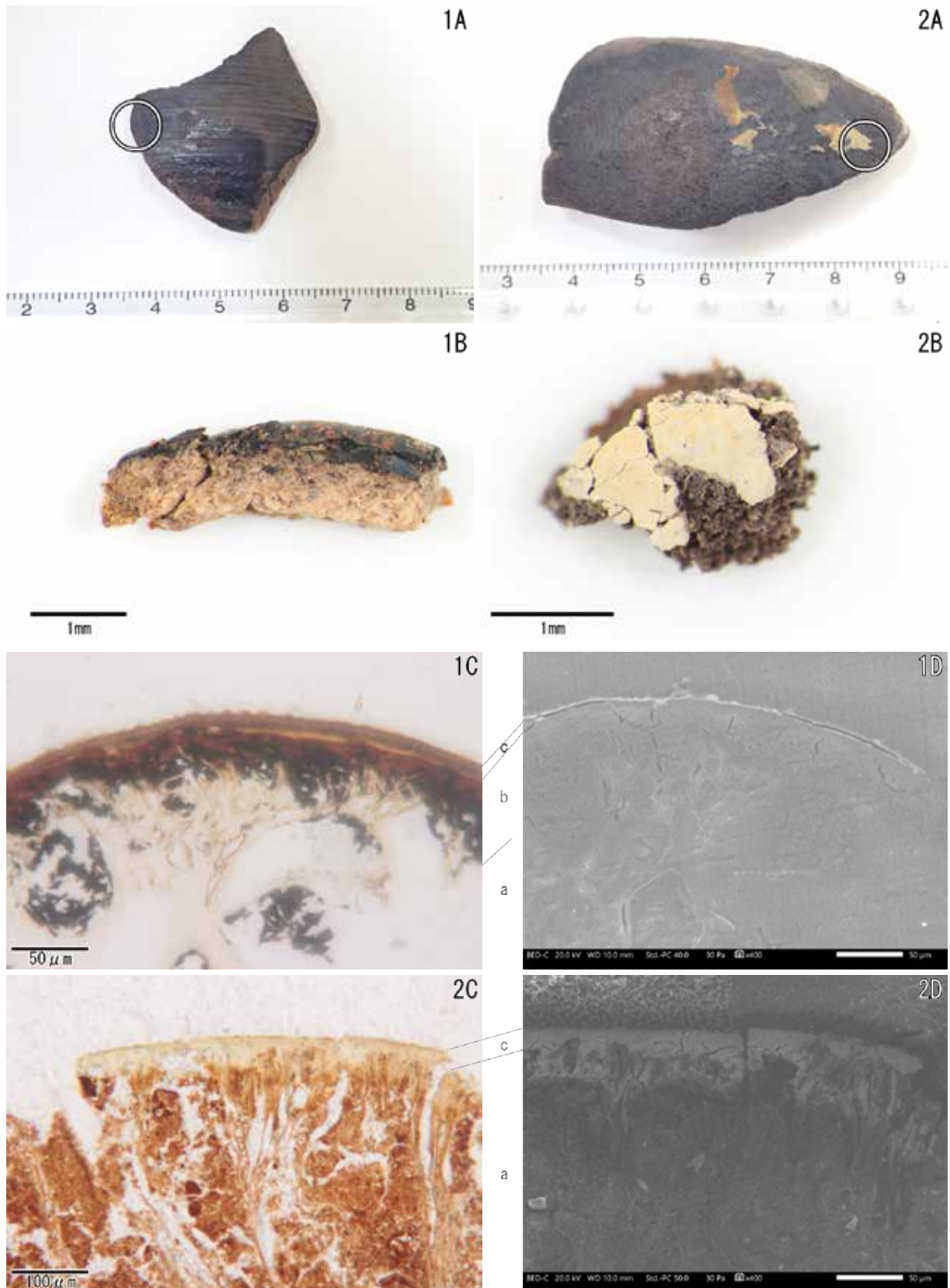
おわりに

西任田遺跡・中ノ庄遺跡から出土した漆器 2 点について塗膜分析を行い、塗膜構造や材料について検討した。その結果、分析 No.1（実測番号 0709）は、炭粉渋下地の上に、透明漆が 1 層塗られる構造と考えられた。分析 No.2（実測番号 0710）は、透明塗膜層が 1 層塗られる構造で、劣化に伴い変質、変色している可能性が考えられた。



第74図 各塗膜層の赤外分光スペクトル(実線:塗膜層、点線:生漆、数字:生漆の赤外吸収位置)

1. 分析No. 1 2. 分析No. 2



第75図 漆器塗膜構造 (1:分析No.1、2:分析No.2)

A. 遺物写真と試料採取位置 B. 採取試料の実体顕微鏡写真 C. 断面生物顕微鏡写真 D. 断面反射電子像

第3節 石製品の石材同定

藤根 久（パレオ・ラボ）

西任田遺跡・中ノ庄遺跡では、弥生時代や縄文時代の勾玉や打製石斧等が出土した。ここでは、これらの石製品について、肉眼観察による石材同定を行った。試料は、石製品 10 点である（第 13 表）。石材の同定は、主に肉眼観察により行い、実体顕微鏡による石材表面の撮影を行った。

なお、ヒスイ（実測 No.0021）については、エネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX（エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製）を用いて化学組成を調べた。装置の仕様は、X 線管が最大 50kV、1000 μ A のロジウム（Rh）ターゲット、X 線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間が 300 秒間および 500 秒間、管電流自動設定、X 線照射径が 8 mm、試料室内雰囲気は真空である。定量計算は、標準試料を用いないファンダメンタル・パラメータ法（FP 法）により行った。

結果

第 13 表に、肉眼観察による石材同定の結果を示す。なお、表面観察では色調や構成鉱物、岩石組織の特徴等について観察した。

以下に、代表的な石材の特徴について記載する。

実測 No.	遺跡 ID	調査 ID	地区	グリッド	遺構	遺物名	時期	石材	色調	組織
0021	MA0000043035	2019-05_	6a 区	E	SD23,24	勾玉	弥生	ヒスイ	白色～緑色	不均質
0022	MA0000043036	2019-05_	6a 区	H	SD25	磨石	弥生	閃緑岩	オリーブ灰色	完晶質
0724	MA0000043068	2019-05_	2a 区	2-8	SD6	打製石斧	縄文	砂岩	灰黄褐色	砂質（基質有）
0725	MA0000043069	2019-05_	2a 区	2-8	SK104	砥石	弥生	砂岩	黄灰色	縞状、基質あり
0726	MA0000043070	2019-05_	2b 区	2-8	SD108	砥石	弥生	流紋岩	灰白色	斑状組織
0727	MA0000043071	2019-05_	2b 区	2-8	SD108	打製石斧	弥生後期	凝灰角礫岩	灰白色	不均質、砂礫質
0728	MA0000043072	2019-05_	2b 区	2-8	SD108 アゼ 1,2 層	打製石斧	弥生後期	凝灰角礫岩	灰白色	不均質、砂礫質
0729	MA0000043073	2019-05_	2b 区	2-8	SD108	磨石	弥生	細粒砂岩	灰色	砂岩質
0730	MA0000043074	2019-05_	2b 区	2-8	SD108 アゼ 1,2 層	打製石斧	弥生後期	凝灰角礫岩	灰白色	不均質、砂礫質
0733	MA0000043163	2019-05_	2a 区	2-6	SD14	剥片	縄文	ガラス質安山岩	黒色	斑状組織

第 13 表 石製遺物の詳細と石材

（1）砂岩および細粒砂岩（第 77 図 1）

灰色、黄灰色、灰黄褐色からなり、基質のある砂質岩である。

（2）凝灰角礫岩（第 77 図 2）

灰白色の不均質で砂礫質、火山岩片や白色軽石を含む凝灰質岩である。

（3）流紋岩（第 77 図 3）

灰白色の斑状組織からなる火山岩である。

（4）ガラス質安山岩（第 77 図 4）

黒色の小結晶からなる斑状組織を示す火山岩である。

（5）閃緑岩（第 77 図 5）

オリーブ灰色の完晶組織からなる深成岩である。

（6）ヒスイ（第 77 図 6）

白色～緑色の不均質な変成岩である。

考察

第14表に、各石製品とその石材についてまとめた。

実測 No.0021 のヒスイは、蛍光X線分析による化学組成において酸化ナトリウム(Na_2O)を2.78%含み、化学組成からもヒスイと同定された(第15表)。このヒスイは、新潟県糸魚川産のヒスイと推定される。

大分類	中分類	石材	勾玉	打製石斧	砥石	剥片	磨石	総計
堆積岩	砕屑岩	砂岩		1	1			2
		細粒砂岩					1	1
	火山砕屑岩	凝灰角礫岩		3				3
火成岩	火山岩	流紋岩			1			1
		ガラス質安山岩				1		1
	深成岩	閃緑岩					1	1
	変成岩	ヒスイ	1					1
総計			1	4	2	1	2	10

第14表 石製品と石材の関係

実測 No.	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	Cr_2O_3	MnO	Fe_2O_3	NiO	SrO	MoO_3	BaO	合計
21	2.78	0.85	23.43	66.04	0.60	0.48	0.43	3.85	0.12	0.01	0.03	1.33	0.01	0.01	0.01	0.01	99.99

第15表 ヒスイ(実測 No.21)の化学組成(単位: %)

実測 No.0733 のガラス質安山岩は、上流域に分布する安山岩類のほか、能登半島富来町(現羽咋郡志賀町)の石材の可能性が考えられる。その他の石材は、以下のような遺跡周辺および手取川上流域の地質環境から、在地石材と考えられる(第76図)。

遺跡周辺や手取川上流域では、第四紀後期更新世の古白山火山の安山岩-デイサイト溶岩・火砕堆積物及び岩屑なだれ堆積物(凡例 VQ3)、中期更新世の高位段丘及び扇状地堆積物(凡例 th)、中期更新世の戸室山、加賀室及び丸山火山の安山岩-デイサイト溶岩・火砕堆積物(凡例 VQ2)、前期更新世の法恩寺山等の安山岩-デイサイト溶岩・火砕堆積物(凡例 VQ1)が分布する。

また、新第三紀鮮新世の願教寺山等の安山岩-デイサイト溶岩・火砕堆積物(凡例 VN3)、前期中新世の糸生層最上部等の流紋岩火砕岩・溶岩(凡例 Izrp)や流紋岩溶岩・火砕岩(Izr)、竹田層及び栢野層のデイサイト火砕岩(凡例 Kad)や糸生層下部-上部等の安山岩-デイサイト溶岩・火砕岩など(凡例 Iwa)、漸新世の西谷流紋岩等(Nr)が分布する。

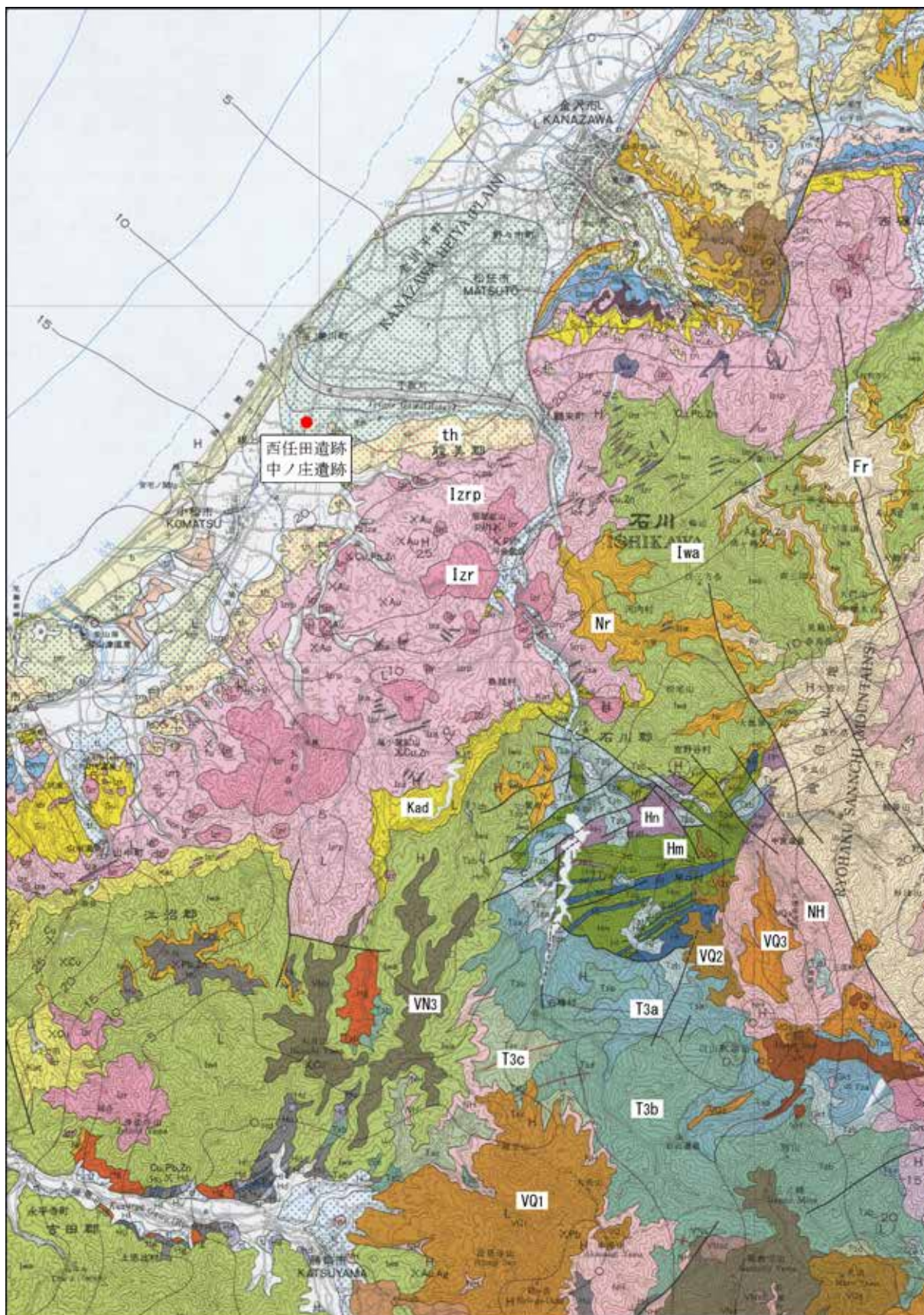
さらに、古第三紀暁新世太美山層群の流紋岩溶岩・火砕岩など(凡例 Fr)、白亜紀後期の濃飛流紋岩等の流紋岩-デイサイト火砕岩など(凡例 NH)、白亜紀の手取層群の砂岩シルト岩互層(T3c)や塊状または厚層理砂岩(T3b)あるいは中-粗粒砂岩泥岩互層(T3a)、三畳紀の飛騨花崗岩類(凡例 Hn)、古生代中-末期の飛騨変成岩類(Hm)が分布する。

このうち、新第三紀前期中新世の流紋岩火砕岩・溶岩(凡例 Izrp)は、軽石質凝灰岩や火山礫凝灰岩からなり、現在でも凝灰岩の石切り場として知られ(高田ほか 2019)、本遺跡の凝灰岩製の打製石斧には、こうした周辺に分布する凝灰岩が利用されたと考えられる。

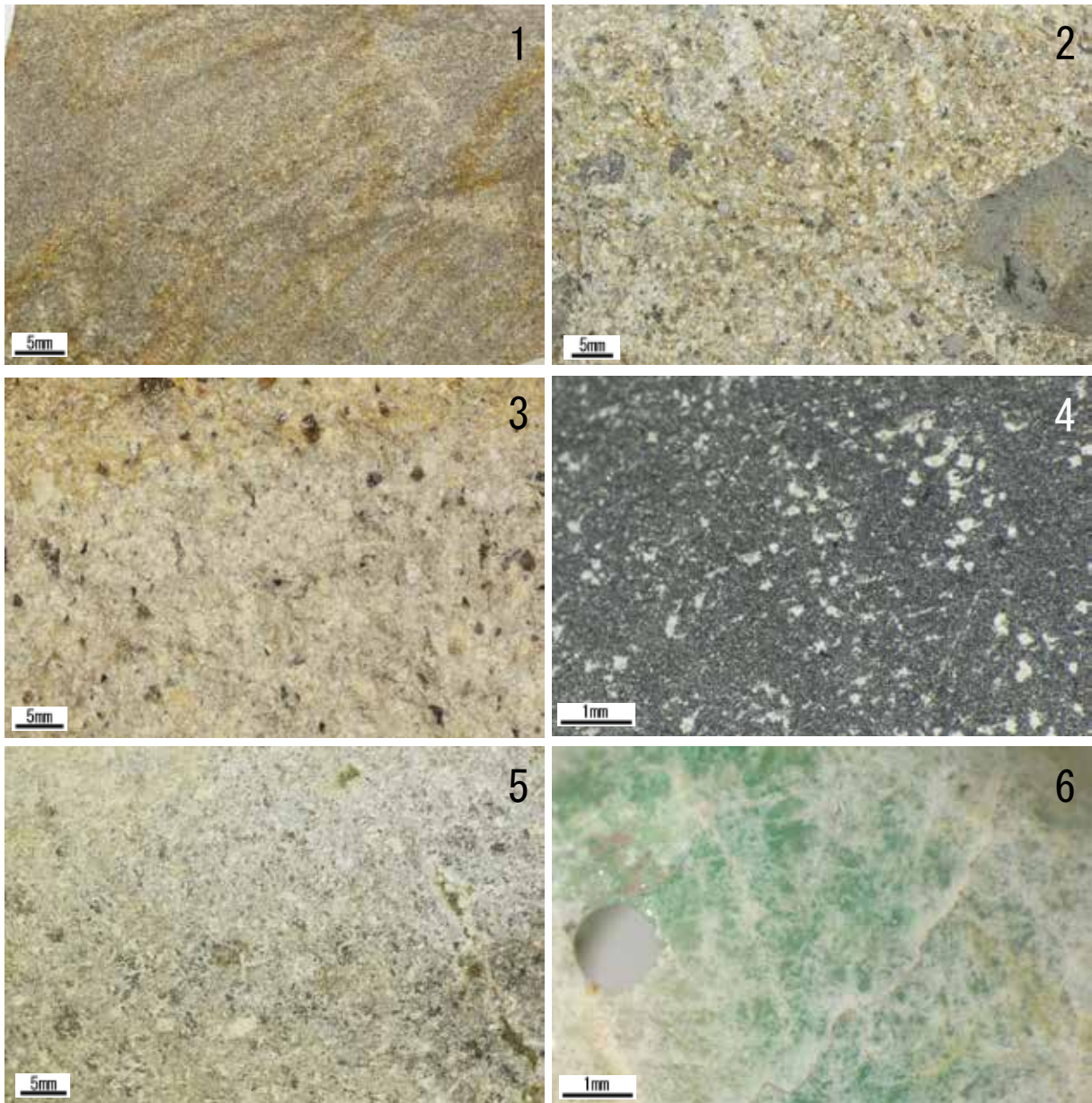
砥石、打製石斧、磨石に利用された砂岩には、手取川上流部に分布する白亜紀の手取層群の砂岩シルト岩互層(T3c)などに由来する河床礫が利用されたと考えられる。

引用文献

- 鹿野和彦ほか 1990 『20 万分の1 地質図「金沢」』地質調査所
 高田祐一ほか 2019 『産業発展と石切場』戎光祥出版 285 頁



第 76 図 遺跡とその周辺の地質図（鹿野ほか（1990）20 万の 1 地質図幅「金沢」を編集）



第 77 図 岩石表面の実体顕微鏡写真

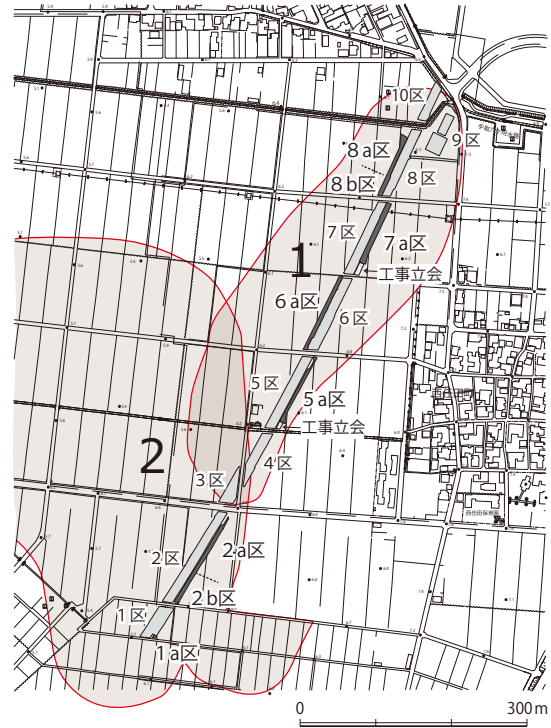
1. 砂岩（実測 No.0725） 2. 凝灰角礫岩（実測 No.0730）
3. 流紋岩（実測 No.0726） 4. ガラス質安山岩（実測 No.0733）
5. 閃緑岩（実測 No.0022） 6. ヒスイ（実測 No.0021）

第5章 総 括

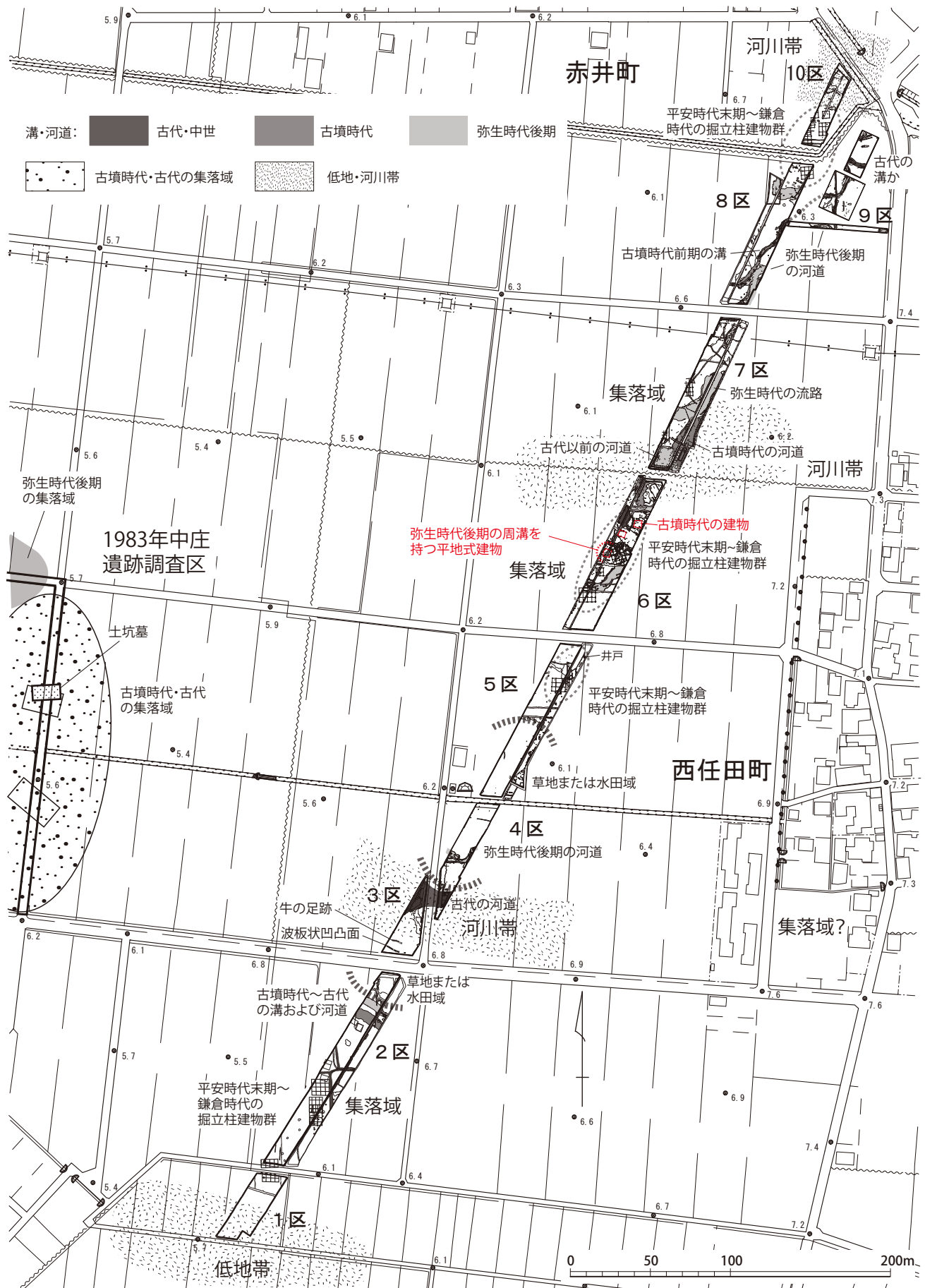
西任田遺跡、中ノ庄遺跡が位置する手取川扇状地の中で、現在の手取川両岸には遺跡の分布しない範囲が広がっており、氾濫原であったことがみてとれる。両遺跡のある扇端部を含む手取川左岸は、600～700 mの幅で遺跡が分布しておらず、それより南側には丘陵から低地にかけて各時代の遺跡が点在し、遺跡が集中する地域の一つとなっている。石川県教育委員会文化財課が運営する「いしかわ文化財ナビ」（石川県の遺跡や文化財を検索できる Web サービス）での両遺跡の位置と調査区位置は第 78 図の通りで、1（西任田遺跡）と 2（中ノ庄遺跡）は一体的な遺跡として表現されている。

両遺跡のある低地には現在水田が広がり、標高 5 m 前後を測り、その中の微高地上に住宅地が点在する。遺跡の東側には現在西任田町の住宅地が広がるが、そこから調査区の 5 区北側・6 区にかけては微高地が伸びており（第 79 図）、遺跡内で確認された弥生時代後期、古墳時代、平安時代末期～鎌倉時代の集落が、西任田町の住宅地にも広がっていた可能性がある。今回の調査区より西側では、1983 年に旧根上町教育委員会が、農村基盤総合整備事業の一環として農道舗装工事に伴う発掘調査を実施している。弥生時代後期の集落域や古墳時代の土坑墓、平安時代前期（9 世紀頃）の掘立柱建物などを確認している。

第 1 次調査の報告書第 165 図で遺跡内での土地利用についてはまとめがなされており（久田ほか 2021）、第 2 次調査の成果を加味しその傾向を再確認した。第 79 図に示したように、1 区南部には低地帯がみられ、それより北側（1 区北側・2 区）に一つの集落域が存在する。平安時代末期～鎌倉時代の掘立柱建物群が区画溝で区切られ、井戸や一部空地を持ちながら集落を構成している。2 区の区画溝より南西部に 5 棟の掘立柱建物を確認したが、建物方位や切り合いなどから、2 区 SB03、04 → SB02 → SB06、10 の 3 時期の展開が想定される。第 10 図にあるように、区画溝の東部分が古い溝（赤塗り部分）で、それに伴う建物 SB03、04（共に建物方位は N-2° -W）はやや西に傾いて 2 棟セットで配置されている。その後、溝は西側に広げられ、これに伴い SB02 がほぼ真北の方位で建てられた（N-1° -E）。SB02 は建物の一角に井戸を持つが、この井戸の掘削によって SB03 の柱穴の一部が破壊された可能性がある。次の段階で、SB06、10 がやや東に振れた方位（N-3° -E）で、2 棟セットの配置となる。建物方位は徐々に東に傾いていくと考えられる。また上記の建物と、5 区 SB01、6 区 SB03、05 など中央部の柱間が広く、その外側の柱間がやや狭い傾向がある。7 区 SB01、8 区 SB01 などその可能性が高い。2 区の区画溝堆積土から採取された昆虫には 2 タイプみられ、周辺環境を反映していると考えられる。1 つは植栽された果樹や畑作物を加害するヒメコガ



第 78 図 調査区と遺跡位置



第79図 西任田遺跡、中ノ庄遺跡の遺構分布

ネ、ドウガネブイブイ、アオドウガネであり、区画溝周辺に畑などがあった可能性を示している。区画溝で区切られた範囲に住居の他に畑地などがある風景が思い浮かぶ。もう1つが自然堤防や河川敷内に繁茂する草木、クヌギなどの落葉広葉樹など自然植生に依存するコガネムシ、クロコガネである。遺跡が手取川左岸の自然堤防外側の後背湿地とその中に点在する微高地上に営まれたことを考慮すれば、これらの昆虫が溝の埋土に流れ込むこともあったであろう。2区にはクルミがまとまって出土した土坑の他、縄文時代後期の土器や石鎌、磨製石斧、弥生時代の打製石斧などもみられ、縄文時代・弥生時代の人々の活動痕跡も伺える。土坑の1つからは、食用として利用可能なアカメガシワ、タラノキ、イネの炭化種子、クルミが出土しており、イネの炭化種子が出土していることや検出された他の遺構の時期などから弥生時代後期の貯蔵穴とみられる。区画溝の北側には、古墳時代末～古代前半と考えられる掘立柱建物、溝が確認されており、この集落域には縄文・弥生時代、古墳末～古代、古代末～中世と大きく3時期の痕跡が残る。

2区北端部から3区にかけては草地や水田などの生産活動域と想定できる。それより北側に河川帯が広がるが、河川手前の部分には東西方向の通路があったようで、ウシの足跡や波板状凹凸面が東西方向の移動を示す形で残る。ウシの足跡は西から東へ移動しており、歩幅の平均値を取ると約1.2 mとなる。現代のホルスタインを対象に、採食行動を調べる中で歩幅について計測した研究では、頭を下げずに通常歩行をする場合、歩幅が1.3～1.5 mであったという（篠田ほか2009）。対象ウシの1頭は体重が670kgであったことから、ホルスタインの標準発育値（酪農学園大学2018）では体高は150cm程度とみられる。3区に足跡を残したウシは、歩幅が小さいことから体高もこれより小さく、成牛であるならば、他の遺跡での出土例を参考にすると、在来種の見島牛や口之島牛などに近い体高120cm前後と考えられる。ウシが日本に導入されたのは4世紀末から5世紀初頭とされているが（宮路2024）、農耕や耕地開発の労働力としての利用が普及するのは、6世紀後半以降から飛鳥時代前半頃とみられている（久保1999）。明治以降、外国から様々な種類のウシを輸入し品種改良が進んでいくまで、現在の在来種と体高などは変わらない状態が続いていた。調査で確認できた遺構の方向や年代などを考えると、3区のウシは古代～近世の中でも古代のものの可能性が高いと思われる。2区のSD31・33（古墳時代末～古代前半）、3区～4区にかけてのSD01、7区上層の水田跡（7世紀後半～古代）などとウシが歩いた通路の方向が似ており、古代前半と考えられるか。

3区～4区にかけてのSD01は古代の河道で、川岸に近い下層からコタマガイやハマグリ属などの海産貝類が出土している。左岸や南東から延びるSD02との合流点からは9世紀代の須恵器が出土しており、食用とされたものがその頃廃棄されたものであろう。また各層から検出されたプラントオパールには、ヨシ属やウシクサ属など湿った所に自生するものや、イネ科、ススキ属、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型などがみられる。水田稲作に適した湿潤な環境が周囲に広がっており、チマキザサなど食物を巻くのに適する植物もあったことが示されている。河道がほぼ埋まった時期に堆積した2層からはソバ属の花粉が検出されており、近隣で栽培していた可能性がある。調査担当者は、2層が堆積したのは中世であると判断している。花粉分析資料から畿内では中世にソバ栽培が隆盛したことが報告されているが（上中2008）、石川県でも中世の遺跡でソバ属の花粉が確認されることがあり、平安時代末期～鎌倉時代の集落域近辺ではソバ栽培が行われ、夏の終わり頃から初秋には白い花が咲くソバ畑が広がる風景が見られたのではないだろうか。

4区、5区南部は草地や水田などの生産活動域であったようだ。5区北部から6区に広がる微高地上が西任田遺跡の中心的な部分と考えられ、弥生時代後期、古墳時代、平安時代末期～鎌倉時代と断続的に集落が営まれていた。弥生時代後期の建物で確認できたものは平地式建物1棟と高床倉庫と想

定できる建物1棟である。この平地式建物の柱穴以外にも礎板を持つ同時期と思われるピットが複数個検出されており（6a区）、調査区外に他にも建物が存在したと考えられる。この場所から西へ400mほどにある1983年の調査区では弥生時代後期の集落域が確認されており、2区にある同時期とみられる貯蔵穴なども含め、弥生時代後期の人々がこのあたりを利用していたといえるだろう。

古墳時代の建物は、1次調査で6区北側の河川帯の手前に1棟の掘立柱建物が想定されている。河川帯のSD11からは、古墳時代中期の土器、曲柄鋤身、管玉などが出土しており、古墳時代中期頃の活動痕跡が残る。

平安時代末期～鎌倉時代頃の掘立柱建物群は主軸が南北方向を示すものが多いが、6区中央部に建物方位がN-20°-Wと他の建物とかなり異なる1棟が存在する（6区SB03）。5区北端には建物が途切れた地点に、鎌倉時代の下駄などを出土した井戸が造られている。また6区北端の河川帯の一部NR01は、出土土師器等から中世以降に埋没したとみられる。NR01の流下する方向とSB03との建物方位が似ている点で、SB03は古代末というよりは鎌倉時代に属する可能性がある。井戸ほか中世の遺構が確認できる点で、2区の集落域より若干新しい時期の集落域とも考えられる。NR01からは獣骨、ウマ歯、馬鋤の歯が出土し、農作業との関連が想定される。また、遺構検出面から50cm下で著しい湧水がみられた。扇状地扇端部に特徴的な豊富な湧水が、農業などには恩恵をもたらすが、その管理には苦労があったことであろう。中世の頃、両遺跡を含む旧根上町域は郡家荘の範囲であり、その成立は平安時代末期と考えられている。調査区付近は中庄任田郷と呼ばれており（平凡社1991）、郡家荘の中世村落の様子は、遺跡の調査例などを元に根上町史で描かれている（垣内1995）。西任田遺跡、中ノ庄遺跡はそれら中世村落の始まりの様子を示しているといえよう。

6区北端から7区南半部にかけては、古墳時代や鎌倉時代の河道などを含む河川帯となる。その湿潤な環境を利用して水田開発が行われたようで、7区南部上層に7世紀後半～古代の水田跡が確認できた。水田はやや傾いた東西方向の長方形区画で、南北方向（短軸）幅は2.4～3.6m、その単位が4つで大きな一つの単位となっていたようで、東西方向の小畦畔が西側にある南北方向の大畦畔に繋がっていく。その取り付け部分では畦畔が途切れて水口となっており、田面は南西側へ向かい徐々に低くなっている。東端が調査区外となるため、水田規模は不明である。

7区北半部には掘立柱建物が2棟確認され、建物方位や周囲の状況等から古代末～中世前期に属するものとみられる。水田跡より新しい時期の集落域あるいは農作業などに関連する施設か。その北側8区には、弥生時代後期や古墳時代前期の溝などがあるが建物跡は未確認で、生産活動域の可能性はある。8区北端から10区南半部には平安時代末期～鎌倉時代の集落域が存在し、建物群の変遷は2～3期想定されている。この集落域の北側には、近世以降の河道を確認し、遺跡の範囲はここで途切れる。

引用・参考文献

- 上中央子 2008 「畿内地域におけるソバ属花粉の分布の変遷」『考古学と自然科学 57』日本文化財科学会 55-63 頁
- 垣内光次郎 1995 「第三章第四節 莊園びとの暮らしと祈り」『新修 根上町史 通史編』
- 久保和士 1999 「第三章 第2節 動物遺体の調査結果と検討」『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』(財)大阪市文化財協会
- 篠田満・須藤賢司・松村哲夫・梅村和弘 2009 「ハンディ GPS を利用したホルスタイン種経産放牧牛の歩行時間からの採食行動時間の推定」『日本草地学会誌 第55巻第1号』日本草地学会 34-39 頁
- 平凡社 1991 『石川県の地名』
- 久田正弘^{ほか} 2021 『西任田遺跡、中ノ庄遺跡』 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 宮路淳子 2024 「古墳時代におけるウシ飼養と感染症の関連性に関する試論」『奈良女子大学文学部研究教育年報 第20号』奈良女子大学文学部 1-11 頁
- 酪農学園大学 2018 「牛体測定」『酪農ジャーナル電子版 酪農 PLUS +』

報告書抄録

ふりがな	のみし にしとうだいせき なかのしょういせき 2							
書名	能美市 西任田遺跡、中ノ庄遺跡 2							
副書名	北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号	11							
編著者名	端 猛、新美祥人夢、山川史子、(株)パレオ・ラボ（竹原弘展、藤根久、米田恭子、小林克也）							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町 18 番地 1 TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2025 年 3 月 21 日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	面積	原因
にしとうだ 西任田遺跡、 なかのしょう 中ノ庄遺跡	いしかわけんののみし 石川県能美市 あかいまちにしよう 赤井町・西任 田町・中庄町	17361	1000400 1000300	36 度 27 分 3 秒	136 度 29 分 4 秒	20190515 ～ 20191217 20200420 ～ 20200625	1,460㎡ 1,150㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西任田遺跡、 中ノ庄遺跡	集落	弥生時代	平地式竪穴系建物、溝	弥生土器・礎板等の木製品、打製石斧・勾玉・砥石等の石器		5 本支柱の平地式竪穴系建物と、それに付随する外周溝、居住域を区画する溝を確認。外周溝からヒスイ製勾玉出土。		
		古墳時代	溝	須恵器、土師器、建築部材等の木製品				
		平安時代～中世	掘立柱建物、井戸、土坑、区画溝、水田跡	須恵器、土師器、白磁、瓦質土器、下駄・櫛・建築部材等の木製品		古代末～中世の居住域が数箇所を展開する。区画溝とそれに伴う掘立柱建物群、井戸を確認。		
要約	<p>手取川扇状地の扇端に位置する集落遺跡である。弥生時代後期、古代末～中世前期の集落が微高地上に存在する。湧水が豊富な地域で、弥生時代から近現代にかけて、集落を区画する溝や水田農耕に関する用排水路などが作られており、標高がやや低い所では水田農耕などの生産域が広がっていた。</p> <p>古代末～中世前期の集落は、河川帯や生産域を挟み、総柱の掘立柱建物群が 4 箇所ほどに展開する。古墳時代の明確な建物跡は未確認だが、溝や出土遺物は存在するため、弥生時代後期から続く集落が近辺に存在した可能性がある。細長い調査域の中央、6a 区あたりが、集落としてより頻繁に利用された区域と考えられる。</p>							



1 a 区完掘状況（南東から）



1 a 区南壁土層断面（北から）



1 a 区東壁土層断面（北西から）



1 a 区仮 SD101（北から）



1 a 区攪乱東壁土層断面（北西から）



2 a 区遺構検出作業



2 a 区遺構検出状況



2 a 区遺構掘削作業



2b区 SB02、SB06、SK108 (南から)



2b区 P130 土層断面 (SB02、東から)



2b区 P133 土層断面 (SB02、東から)



2b区 P134 土層断面 (SB02、東から)



2b区 P135 土層断面 (SB02、東から)



2b 区 P136 土層断面 (東から、SB06)



2b 区 P137 土層断面 (東から、SB06)



2b 区 P138 土層断面 (東から、SB06)



2b 区 P139 土層断面 (西から、SB06)



2b 区 P140 土層断面 (東から、SB06)



2b 区 P142 柱出土状況 (東から、SB06)



2b 区 P143 土層断面 (東から、SB06)



2b 区 P144 土層断面 (東から、SB06)



2b区SB10（南から）



2b区P146 土層断面（SB10、東から）



2b区P145 土層断面（SB10、東から）



2b区P148 土層断面（SB10、東から）



2b区P147 土層断面（SB10、東から）



2b 区 P149 土層断面 (SB10、東から)



2b 区 P150 土層断面 (SB10、東から)



2a 区 SK101、SK103、SK106、SD31、SD33 完掘状況 (垂直写真、上が北西)



2a 区 SK101 土層断面 (西から)



2a 区 SK103 土層断面 (北東から)



2a区 SK102 完掘状況（南から）



2a区 SK102 土層断面（北から）



2a区 SK104 完掘状況（北から）



2a区 SK104 土層断面（北から）



2a区 SK105 完掘状況（東から）



2a区 SK105 土層断面（西から）



2b区 SK107 遺物出土状況（南西から）



2b区 SK107 土層断面（東から）



2a区 SK106 土層断面（北東から）



2a区 SK106 遺物出土状況（南西から）



2a区 SK106 完掘状況（南から）



2a区 SK106 完掘状況（北から）



2a区 SK106 南西隅ピット（北から）



2a区 SK106 底面板材痕跡（b-b' 断面、北から）



2a区 SK106 北東隅底面板材出土状況（南から）



2a区 SK106 南西隅直立材出土状況（東から）



2b区 SK108 土層断面（東から）



2b区 SK108 完掘状況（東から）



2a区手前から SD15・SD14・SD07（北東から）



2a区手前から SD22・SK104、奥 NR01（南西から）



2b区手前から SD108・SD06（北東から）



2b区手前から SD113・SD112（南西から）



2a区 SD07 土層断面（西から）



2a区 SD14 土層断面（東から）



2a区 SD15 土層断面（西から）



2a区 SD30・31 土層断面（西から）



2a区 NR01 土層断面（北西から）



2a区 SD101・調査区東壁断面（西から）



2a区 SD102 断面（東から）



2b区 SD06 土層断面（南から）



2b区 SD108・SD06 合流部土層断面（西から）



2b区 SD06 完掘状況（北から）



2b区SD108土層断面（東から）



2b区SD108完掘状況（西から）



2b区東壁・SD115断面（北西から）



2b区北調査区東壁断面（北西から）



5a区SB01周辺完掘状況（南から）



5 a 区 P16 土層断面 (SB01、東から)



5 a 区 P17 土層断面 (SB01、東から)



5 a 区 P19 土層断面 (SB01、東から)



5 a 区 P20 土層断面 (SB01、東から)



5 a 区 SE01 完掘状況 (南西から)



5 a 区 SE01 土層断面 (南から)



5 a 区 SE01 下駄出土状況 (北西から)



5 a 区 SE01 下駄出土状況 (南西から)



5 a 区 SD03 完掘状況（南から）



5 a 区 SD03 断面①（北から）



5 a 区 SD03 断面②（東から）



5 a 区東壁断面 2（西から）



5 a 区東壁断面 3（西から）



6 a 区 SD4 西壁断面（南東から）



6 a 区 SD23・SD24 土層断面（SI01、西から）



6 a 区 SD25 土層断面・完掘状況（東から）



6a区 SD27 土層断面（北から）



6a区 SD29 土層断面（南から）



6a区 SD30 土器出土状況（北東から）



6a区 SD31 土層断面（東から）



6a区 P93 柱根出土状況（南から）



6a区 SI01（垂直写真、上が北西）



6a区 P95 土層断面（SI01、北から）



6a区 P95 礎板出土状況（SI01、東から）



6a区 P98 土層断面 (SI01、南から)



6a区 P100 土層断面 (SI01、西から)



6a区 P112 土層断面 (SI01、西から)



6a区 P112 材出土状況 (SI01、東から、左側 P100)



6a区 P97 土層断面 (北から)



6a区 P99 土層断面 (西から)



6a区 P111 土層断面 (西から)



6a区 P111 礎板出土状況 (北から)



6a区 P116 完掘状況（西から）



6a区 SB04（南西から）



6a区 SB05（P107・P108・P109、南から）



6a区 P106 土層断面（北から）



6a区 P107 土層断面（東から）



6a区 P107 完掘状況（東から）



6a区 P108 土層断面（東から）



6a区 P108 完掘状況（南東から）



7a 区上層 水田面検出状況（南から）



7a 区上層 水田面完掘状況（南から）



7a 区上層 水田面完掘状況（北から）



7a 区上層 水田面完掘状況（上空、東から）



7区工事立会範囲上層 SD01 完掘状況（西から）



7区工事立会範囲 下層西壁断面（南から）



7区工事立会範囲 下層 SD26 確認トレンチ断面（南東から）



7a区 SD18 または SD19 完掘状況（南東から）



7a区 SD18 または SD19 土層断面（西から）



7a区 SD20・21 完掘状況（南から）



7a区 SD20・21 土層断面（南東から）



7a区 SD21 土層断面（東から）



8a区全景（上空、東から）



8a区西壁①土層断面（東から）



8a区西壁②土層断面（南東から）



8a区西壁③土層断面（南東から）



8a区SD5北側完掘状況（南から）



8a区SD5北側土層断面（南から）



8a区SD5北側北壁土層断面（南から）



8a区SD5南側西壁土層断面（東から）



8a区SD5南側土層断面（西から）



8a区SD6土層断面（西から）



8a区SD6完掘状況（南から）



8a区SD17土層断面（北西から）



8b区SD11西壁断面（東から）



西任田・中ノ庄遺跡から白山を望む



8b区SD11完掘状況（東から）



2a·b区出土遗物(1)



2a·b区出土遗物(2)



(赤外線写真)



6a 区出土遺物 (1)



6a 区出土遺物 (2)



6a 区出土遺物 (3)



7a区、8a・b区出土遺物

しま 島 遺 跡 2

2 0 2 5

石 川 県 教 育 委 員 会
(公財) 石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は島遺跡（第2次）の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は小松市島町地内である。
- 3 調査原因は北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、令和2年度、令和5・6年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が負担した。
- 6 現地調査は令和2年度に実施し、期間・面積・担当（当時）は下記のとおりである。

期 間 令和2年4月13日～同年5月21日

面 積 290m²

担当課 調査部 特定事業調査グループ

担当者 白田義彦（課長補佐） 奥座 普（嘱託調査員）
- 7 出土品整理は令和5年度に特定事業調査グループが担当した。報告書の作成および刊行は令和6年度に実施し、調査部 国関係調査グループが担当した。執筆は新美祥人夢（国関係調査グループ主事）が、編集は新美と山川（国関係調査グループリーダー）が行った。
- 8 調査には下記の機関の協力を得た（五十音順、敬称略）。

小松市教育委員会、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構
- 9 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 10 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 遺構実測図その他の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、実測番号、遺物IDとの対応については、出土遺物観察表に記載している。
 - (4) 遺構の名称は、下記の略記号に番号（算用数字）を付し表記した。

S B：掘立柱建物、S K：土坑、S D：溝、P：柱穴・小穴
 - (5) 写真図版の遺構・遺物は、任意の縮尺である。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 調査の概要と基本層序	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	8
第4章 総括	16
写真図版・報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 北陸新幹線（金沢・福井間）概略図	1	第10図 V区SB12平面図 ピット・溝土層断面図 (S = 1/60)	13
第2図 調査区位置図	2	第11図 IV区・VI区土層断面図 (S = 1/60)	14
第3図 遺跡位置図	3	第12図 VI区・IV区出土遺物 (S = 1/3)	14
第4図 周辺の遺跡 (S = 1/25,000)	5	第13図 V区出土遺物 (S = 1/3)	15
第5図 基本層序 (S = 1/60)	7	第14図 古代江沼郡の駅路と「淡津駅」推定地	17
第6図 主要遺構配置図 (S = 1/600)	9	第15図 三湖台地集落群と南加賀製鉄製陶遺跡群 分布	18
第7図 VI区・IV区遺構配置図 (S = 1/100)	10	第16図 島遺跡の古代主要遺構図 (S = 1/1,000)	19
第8図 V区遺構配置図 (S = 1/100)	11		
第9図 IV区SB8平面図・IV区ピット土層断面図 (S = 1/60)	12		

表 目 次

第1表 調査・整理体制組織表	2	第3表 出土遺物観察表	16
第2表 遺跡地名表	6		

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景（南東から・V区）・調査区俯瞰（IV区）・調査区俯瞰（V区）・調査区俯瞰（VI区）
図版2 出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

島遺跡の発掘調査は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構を建設主体とする北陸新幹線建設事業に伴い、石川県教育委員会及び（公財）石川県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）が実施したものである。

北陸新幹線は、平成 27 年に長野駅から金沢駅までの区間が開業し、それに伴い石川県内では平成 10 ～ 22 年度にかけて、津幡町地内から白山総合車両基地の区間まで発掘調査が実施された。その後、福井県敦賀までの延伸が決まり、金沢から敦賀までの区間の整備が平成 24 年 6 月に国土交通省の認可を受けて事業が開始され、政府は平成 27 年 1 月に事業を前倒して、平成 34 年度の開業を目指すことを決定した。

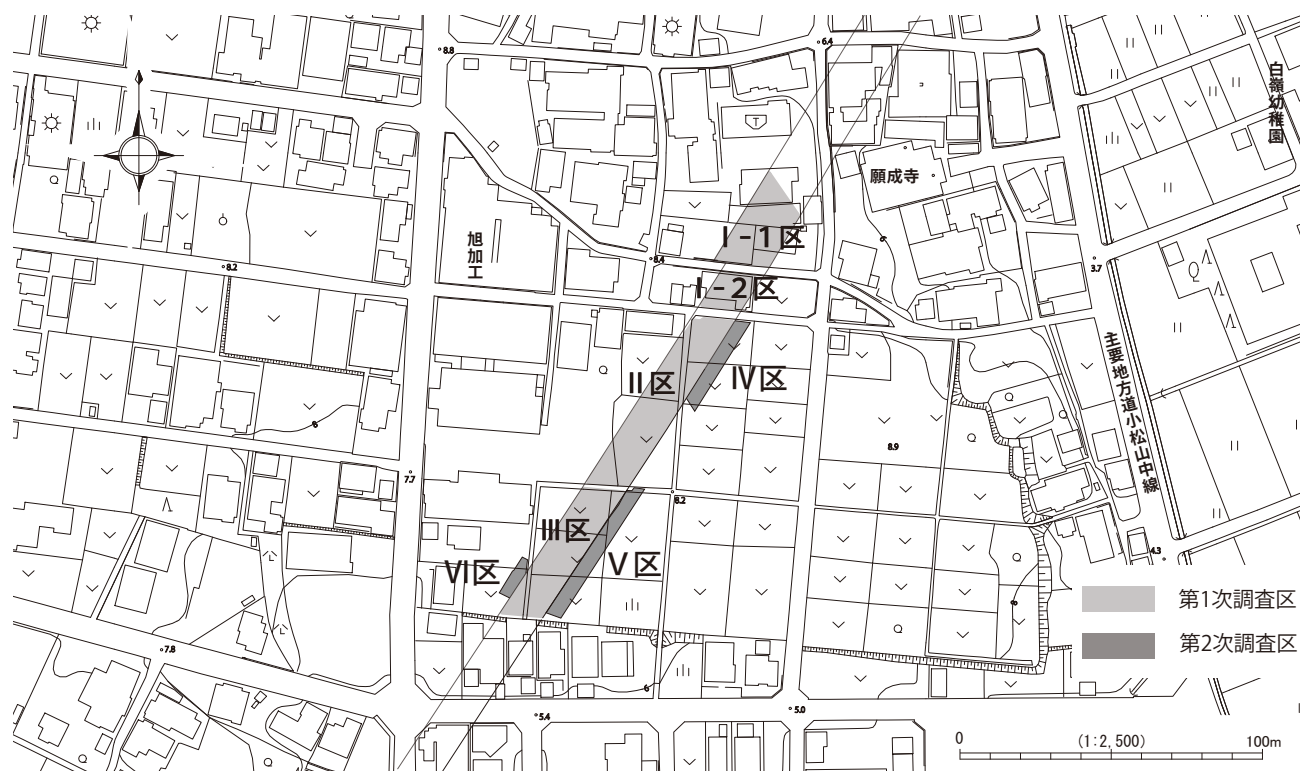
白山総合車両基地以南の工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いは、鉄道建設・運輸施設整備支援機構大阪支社（以下、事業者）から石川県教育委員会文化財課（以下、県文化財課）に照会があり、協議により用地買収が終了し試掘を実施する環境が整った範囲から順に、分布調査、試掘等を実施することとなった。分布調査の結果、16 遺跡の本調査が必要となり、島遺跡第 1 次の発掘調査は平成 29 年 4 月 13 日～同年 7 月 31 日に本線部分を実施し、平成 31 年 3 月に報告書を刊行した（島田 2019）。



第1図 北陸新幹線（金沢・福井間）概略図

第2節 調査の経過

島遺跡（第2次）の発掘調査区は第1次調査の隣にあたり、令和2年4月1日には事業者と石川県、石川県と県埋文センターの間で委託契約を締結し、県埋文センターは発掘届を県文化財課に提出した。なお、調査体制は第1表のとおりである。現地調査は、令和2年4月13日から同年5月21日にかけて実施した。調査面積は290㎡で、3月24日にJV担当者、鉄道・運輸機構、県文化財課、県埋文センターによる現地打合せを行い、調査工程や現地作業での注意点などを協議・確認した。調査は4月13日に重機による表土除去を開始し、4月17日から作業員による遺構検出を開始した。5月1日、18日にラジオコントロールヘリコプターによる空中写真測量を実施した。5月21日に現地作業を終了し、埋め戻しの必要が無いため、現状で5月21日に事業者に引渡し、現地調査を完了した。



第2図 調査区位置図

第3節 整理作業の経過

出土品整理・報告書作成・刊行は事業者から県教委の委託事業として、県埋文センターに委託され、調査部特定事業調査グループなどが担当した。令和2年度に洗浄作業、令和5年度に記名・分類・接合、実測・トレース、遺構図トレース、出土品の写真撮影を実施した。令和6年度に原稿執筆、図版作成を行い、編集・校正等作業を経て刊行することとなった。

年 度	令和2年度(第2次調査)	令和5年度	令和6年度
調査・ 整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター	(公財)石川県埋蔵文化財センター	(公財)石川県埋蔵文化財センター
	徳田 博(理事長)	北野 喜樹(理事長)	北野 喜樹(理事長)
総 括	柴田 正秋(専務理事)	加美 弘行(専務理事)	加美 弘行(専務理事)
事 務	釜親 利雄(事務局長)	北谷 俊彦(事務局長)	寺沢 昌士(事務局長)
	横山 謙一(総務GL)	谷 鋪 繫(総務GL)	谷 鋪 繫(総務 GL)
調査・整理	藤田 邦雄(所長)	川畑 誠(所長)	土屋 宣雄(所長)
	垣内 光次郎(調査部長)	土屋 宣雄(調査部長)	中屋 克彦(調査部長)
	久田 正弘(県関係調査GL)	端 猛(特定事業調査GL)	金山 哲哉(特定事業調査 GL)
担 当	白田 義彦(特定事業調査G課長補佐)	端 猛(特定事業調査GL)	新美 祥人夢(国関係調査 G 主事)
	奥座 普(特定事業調査G嘱託調査員)		山川 史子(国関係調査 GL)

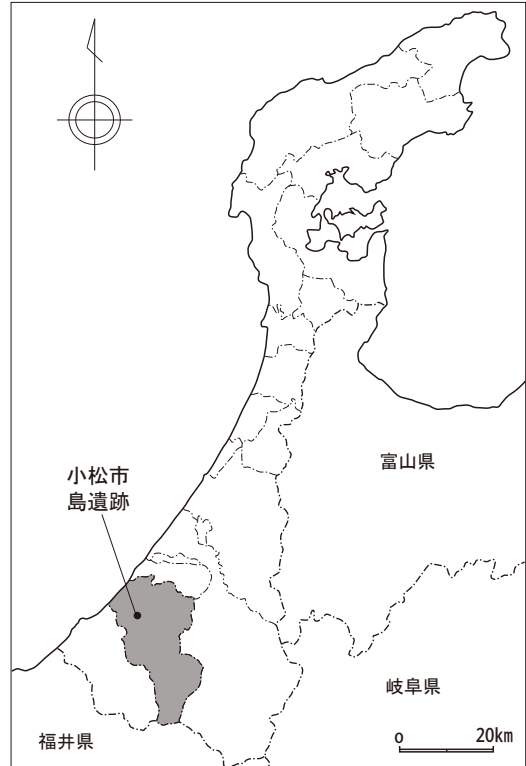
第1表 調査・整理体制組織表

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

島遺跡は石川県小松市島町地内に所在する。小松市は南北に長く、北は日本海、東に能美市・白山市、南に福井県勝山市に、西に加賀市に隣接している。市域は371.05km²を有し、人口は2024年4月時点で104,194人を数える。2004年までは増加傾向にあったが、2005年の109,084人をピークにそれ以降減少に転じている。また、平成の大合併で2005年に白山市が誕生したことにより、県内第三の都市となった。

島遺跡が立地する月津台地は、東側に木場潟、北側に今江潟、西側に柴山潟の加賀三湖に三方を囲まれて、南北へ延びるように横たわっている。これらの潟湖では豊かな恵みと水郷風景をとどめていたが、昭和の国営干拓により今江潟と柴山潟の約6割が消滅し、その景観も大きく損なわれた。月津台地の南方は江沼丘陵と接しており、更に加越山地の山並みが控えている。月津台地は第四紀に形成された中位段丘で、標高は概ね10m程度から高い場所でもおよそ26mなため、起伏が小さく、なだらかな景観を形成している。



第3図 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

月津台地とその周辺で最も古い人類活動の痕跡が確認できるのは、念仏林遺跡（26）から発見された旧石器時代から縄文時代草創期の石棺がある。しかし、集落の実態は不明で、数点の石器が散点的に発見されるにとどまる。

縄文時代前期に至っても遺跡数は少なく、柴山潟に面した早期末からの遺跡である柴山水底貝塚遺跡や、木場潟に面した前期の大谷山貝塚（59）など小規模集落が散見されるにすぎない。縄文時代中期になるとようやく本格的に台地上に遺跡が進出するようになる。月津台地東縁の木場潟に面する遺跡群として五郎座貝塚（57）、今江五丁目遺跡（55）、符津A・B遺跡（38・39）などがあり、柴山潟に面する遺跡群として額見町遺跡（33）、額見町神社前B遺跡（35）、茶臼山A遺跡などがあり、馬渡川が形成した開析谷周辺の遺跡群として念仏林遺跡、念仏林南遺跡（27）、月津新遺跡（30）などの、大きく3グループの遺跡群が展開する様相が認められる。五郎座貝塚では石鏃、石匙、石錘に加え石棒や石剣などの多様な呪具が出土している。念仏林遺跡では大型竪穴建物が発見され、集落構造を考える上で重要である。また、多くの石錘が出土しており、近隣の潟湖では漁労活動を盛んに営んでいたことも判明した。念仏林南遺跡で狩猟用の落とし穴土坑が確認されている。縄文時代中期は、遺跡

の展開が隆盛であったが、縄文時代後期以降になると遺跡数が再び減少し、念仏林遺跡や串町遺跡(37)などで遺物が散点的に発見されるにとどまる。

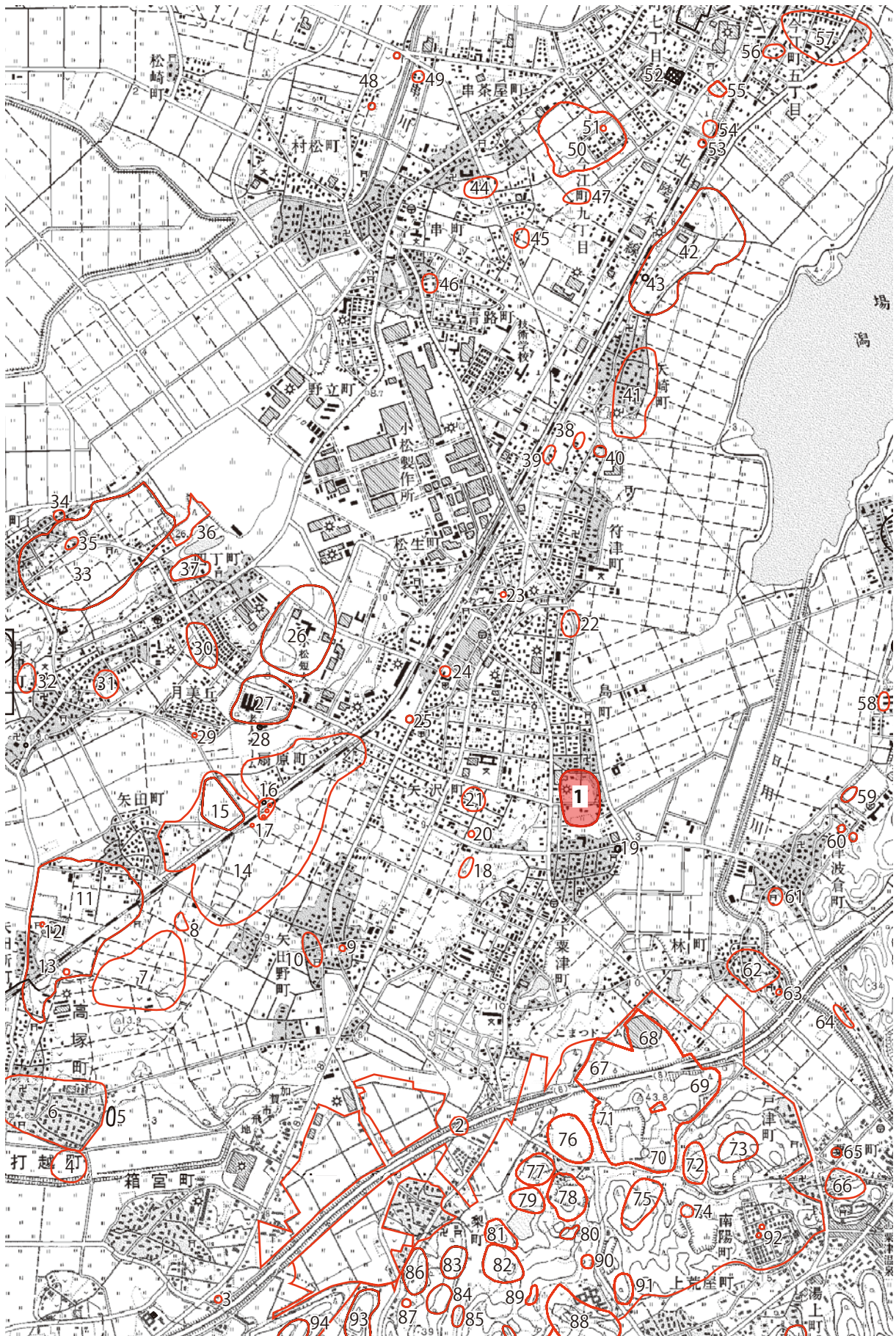
弥生時代前期から中期は、遺跡の分布が認められない空白期である。台地以外の遺跡としては、芝山潟に面した柴山出村遺跡（前期～中期）がある。後期になると遺跡数が増加し、念仏林南遺跡、額見町西遺跡などの小集落が営まれるようになる。

古墳時代前期では遺跡数が希薄で、月津台地最大級の前方後円墳である臼のほぞ古墳(36)が4世紀末にさかのぼる可能性があるが、根拠に乏しい。古墳が本格的に築造され始めるのは5世紀末葉以降である。5世紀末葉から6世紀後葉にかけて古墳群が形成されるようになり、これらの古墳群を総称して三湖台古墳群と呼称する。古墳群は大きく3群に分けることができる。月津台地の北端に分布する5世紀末葉の前方後円墳である御幸塚古墳(52)や、切石組合石棺を有するとみられる狐山古墳(51)などから構成される一群、柴山潟に面する台地上に分布する二段築成の円墳である茶臼山古墳の一群、馬渡川による開析谷周辺の埴輪を伴う矢田野エジリ古墳(25)、家形石棺を有する狐森塚古墳(8)、6世紀中葉の円墳で横穴式石室の構造を持つ丸山古墳(12)、矢田借屋古墳群(15)、矢田野古墳群(16)などの一群である。最も多くの古墳で構成されるのが馬渡川流域の一群で、6世紀初頭～後葉を中心とする築造である。矢田野エジリ古墳では、巫女や馬飼や馬などの形象埴輪が出土しており、馬飼と馬がセットで確認された初めての事例となった。前方後円墳と群集墓で構成された矢田借屋古墳群の中には加賀地方特有の主体部である粘土室を有する古墳が含まれており、副葬品がバラエティーに富んでいる。これらの古墳群は江沼国造である江沼臣との関係が推定されている。

古墳時代終末期から古代になると台地の縁辺部を中心に集落遺跡が広く展開し、大きく4グループに分けることができる。柴山潟に面する額見町遺跡を中心とする一群として額見町遺跡(33)、額見町西遺跡、茶臼山祭祀遺跡があり、馬渡川流域の一群として矢田・矢田野遺跡(14)、矢田新遺跡(11)があり、木場潟に面する一群として島遺跡(1)、符津C遺跡(40)、薬師遺跡(42)があり、串町付近で今江潟に注ぐ小支流域の一群として狐山遺跡(50)、串カンノヤマA・B・C遺跡(44・45・46)がある。額見町遺跡は7世紀代初頭の出現以降、L字型カマドを付設する朝鮮系移民の存在を示す集落の特徴をもち、8世紀前半まで盛期をむかえる。矢田野遺跡は7世紀後葉から8世紀前半を中心に営まれた集落である。薬師遺跡と符津C遺跡は古墳時代末から古代にかけての集落遺跡で、木場潟に面する薬師遺跡からはL字型カマドが確認され、柴山潟周辺以外での発見が重要である。現在の地名から古代江沼郡の郷に比定できるものは、額見町遺跡を中心とする遺跡群は額田郷に、矢田遺跡などで構成される馬渡川流域の遺跡群は八田郷に関連する集落と推定されている。

月津台地に隣接する丘陵地には北陸最大規模の生産遺跡群が広く展開している。南加賀古窯跡群は5世紀末葉には既に成立していた製陶遺跡群で、盛衰を繰り返しながら室町時代まで操業している。生産された須恵器の製品は5～6世紀には江沼郡域のみならず能登地域などへ広範囲に供給されており、須恵器と埴輪の兼業生産も行われていた。また、製陶遺跡群と製鉄遺跡群はほぼ類似するような分布状況を示しており、8世紀を中心に全盛期を迎える。林遺跡(68)では製鉄炉で精錬を行っていたこと、時期が下ると铸造炉など製品まで行っていたことが分かっている。これらの古代生産遺跡群は月津台地上の集落遺跡の動態と相互に密接な関連性がある。

中世以降は、鳥羽院領額田荘と関連が推定される額見町遺跡周辺で11世紀後半から12世紀の集落跡が、矢田新遺跡では15～16世紀の地下式坑を伴う集落が認められる。しかし、古代と比較すると集落の様相がはっきりせず、その動態は不明瞭である。「島」の地名がはじめて文献に登場するのは、近世に入ってからで、能美郡栗津郷内の一村落として記載されている。(島田亮仁 2019引用・一部加筆)



第4図 周辺の遺跡 (S=1/25,000)

第2節 歴史的環境

番号	遺跡名	種 別	時 代	番号	遺跡名	種 別	時 代	番号	遺跡名	種 別	時 代
1	鳥遺跡	集落	弥生、古墳、古代、中世	33	額見町遺跡	集落、その他	縄文、弥生、古墳、古代、中世	64	井口遺跡	散布地	古代
2	ニツ梨遺跡	散布地	古代	34	額見神社前A遺跡	散布地	古墳	65	戸津八幡神社前遺跡	散布地	古代、中世
3	箱宮B遺跡	散布地	中世	35	額見神社前B遺跡	散布地	縄文	66	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世
4	打越A遺跡	散布地	縄文	36	臼のぼろ古墳	古墳	古墳	67	林超勝寺跡	社寺跡	不詳
5	打越B遺跡	散布地	弥生	37	串町遺跡	散布地	縄文、古代	68	林遺跡	窯跡、製鉄跡	古墳～古代
6	打越城跡	城館	中世	38	符津A遺跡	散布地	縄文	69	戸津シンブザワ製鉄跡	窯跡、製鉄跡	平安
7	刀何理遺跡	集落	縄文、古墳、古代、中世	39	符津B遺跡	散布地	縄文	70	戸津古窯跡群	窯跡	古代、鎌倉
8	狐森塚古墳	古墳	古墳	40	符津C遺跡	集落	古墳、古代、中世	71	戸津六字ヶ丘古窯跡群	窯跡	古墳
9	中村古墳	古墳	古墳	41	矢崎宮の下遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世	72	戸津ワクダニ遺跡	窯跡、製鉄跡	平安
10	矢田野神社前遺跡	散布地	古代	42	葉師遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代	73	戸津ショウガダニ遺跡	窯跡、製鉄跡	平安
11	矢田新遺跡	集落	縄文、古代、中世	43	矢崎B古墳	古墳	古墳	74	戸津2号窯跡	窯跡	不詳
12	丸山古墳	古墳	古墳	44	串カンノヤマA遺跡	散布地	古代	75	戸津オオタニ遺跡	窯跡、製鉄跡	奈良
13	無名古墳群	古墳	古墳	45	串カンノヤマB遺跡	散布地	古墳	76	ニツ梨一貫山古窯跡群	窯跡、製鉄跡	古代
14	矢田・矢田野遺跡	集落	縄文、古墳、古代、中世	46	串カンノヤマC遺跡	散布地	古墳	77	ニツ梨豆岡山古窯跡群	窯跡	古墳、古代
15	矢田借屋古墳群	古墳	古墳	47	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	78	ニツ梨豆岡向山古窯跡群	窯跡	古墳～古代
16	矢田野古墳群	古墳	古墳	48	日末瓦窯跡群	窯跡	近世	79	ニツ梨殿様池山古窯跡群	窯跡	古墳、平安
17	百人塚古墳	古墳	古墳	49	串窯跡	窯跡	中世	80	ニツ梨グミノキバラ古窯跡群	窯跡	古代
18	下栗津A横穴群	横穴墓	不詳	50	狐山遺跡	集落	古墳	81	ニツ梨丸山古窯跡群	窯跡、製鉄跡	古墳
19	下栗津2号横穴	横穴墓	不詳	51	狐山古墳	古墳	古墳	82	ニツ梨峠山古窯跡群	窯跡	古墳
20	鳥経塚	経塚	不詳	52	御幸塚古墳	古墳	古墳	83	ニツ梨東山古窯跡群	窯跡	古墳
21	鳥B遺跡	散布地	古代	53	土百古墳	古墳	古墳	84	ニツ梨脇釜遺跡	窯跡、製鉄跡	奈良
22	鳥C遺跡	古墳	古墳	54	土百遺跡	散布地	縄文	85	ニツ梨横川遺跡	窯跡、製鉄跡	奈良
23	石山古墳	古墳	古墳	55	今江五丁目遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世	86	ニツ梨釜谷古窯跡群	窯跡	古代
24	菱輪塚古墳	古墳	古墳	56	今江横穴群	横穴墓	不詳	87	矢田野向山古窯跡群	窯跡	奈良、鎌倉
25	矢田野エジリ古墳	古墳	古墳	57	五郎座貝塚	貝塚	縄文	88	上荒屋サンマイダニ遺跡	窯跡、製鉄跡	平安
26	念仏林遺跡	集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世	58	木場4号墳	古墳	古墳	89	ニツ梨サンマイダニヤマ古窯跡群	窯跡	古墳・奈良
27	念仏林南遺跡	集落	縄文、弥生、古墳	59	大谷山貝塚	貝塚	縄文、古代	90	上荒屋キダシ古窯跡群	窯跡	奈良
28	念仏林古墳	古墳	古墳	60	津波倉ホットジ遺跡	横穴墓	中世	91	上荒屋トリダニ古窯跡群	窯跡、製鉄跡	奈良、鎌倉
29	念仏塚古墳	古墳	古墳	61	津波倉神社遺跡	散布地	中世	92	戸津1～2号製鉄跡	製鉄跡	不詳
30	月津新遺跡	散布地	縄文	62	林館跡	城館	中世	93	矢田野長尾山遺跡	窯跡、製鉄跡	奈良、鎌倉
31	月津A遺跡	散布地	古代	63	林八幡神社経塚	経塚	中世	94	箱宮窯跡群	窯跡	奈良、中世
32	月津オカ遺跡	散布地	古墳、中世								

第2表 遺跡地名表



VI区遺構検出状況（北東から）



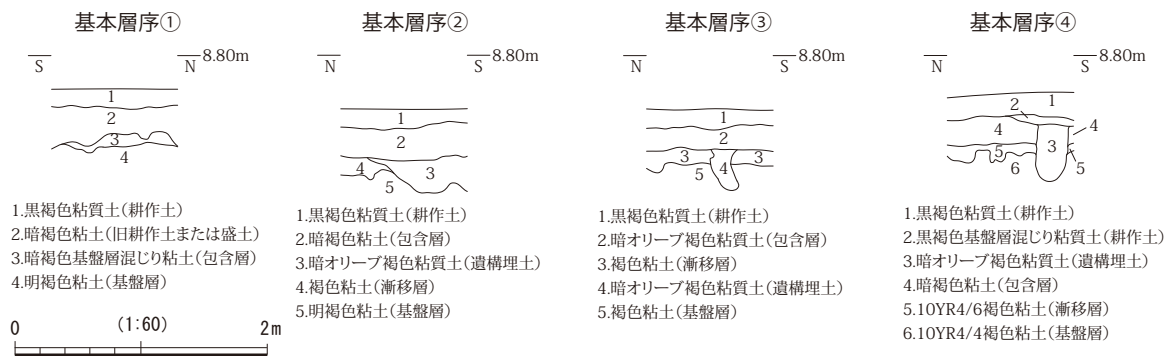
V区遺構検出状況（北東から）

第3章 調査の成果

第1節 調査の概要と基本層序

調査は、Ⅳ区、Ⅴ区、Ⅵ区の3地区に分割して実施した。平成29年度調査区と隣り合わせであり、基本層序は第1次調査のものを再掲しておく。層序は、上位から表土（耕作土、客土）、暗褐色粘土（包含層）、褐色粘土（漸移層）、明褐色粘土（基盤層）を基本としている。基本層序の記録箇所は第6図主要遺構配置図に記した。また、遺構番号は、Ⅳ区・Ⅴ区・Ⅵ区をまとめて付加した関係上、同一調査区内で連番にはならず、次番号が調査区を跨ぐことがある。

遺構検出面は月津台地を形成する黄褐色系の粘土を主体とする基盤層の上面であり、概ねⅣ区で表土下30cm前後、Ⅴ区で30～45cm、Ⅵ区で30～60cmである。検出面は、標高7.7～8.0m前後で高低差がほとんどなく、概ね平坦である。遺構は小穴が大半を占め、前回の調査で検出した掘立柱建物・溝の続き、土坑を検出した。出土遺物から、Ⅰ～Ⅲ区と同様に大きく古墳時代終末～奈良・平安時代と中世（鎌倉・室町時代）に分かれる。



第5図 基本層序 (S=1/60)

第2節 遺 構

各調査区面積はⅣ区(84.4㎡)、Ⅴ区(150.20㎡)、Ⅵ区(60.72㎡)である。第1次調査区の拡張位置にあたり、全ての調査区をまとめて報告する。なお、新たに建物と確認できるピットはなかった。

県埋文センターが行った第1次調査では13棟の掘立柱建物を検出し、そのうち今回の調査ではSB8・SB12の南東に続く柱穴を確認した。また、SB13も南東隅にあたる柱穴が検出されると思われたが、攪乱で確認できなかった。新たに検出した遺構は土坑(SK2)に留まる。

SB8(第9図) Ⅱ区の北側G7・G8グリッド、Ⅳ区G8グリッドで、標高約7.80mを測る。規模は北東方向3間×南東方向3間の総柱建物で、建物軸が若干異なる2棟が存在した可能性がある。建物の主軸はN-48°-EとN-50°-Eである。前者は北東方向6.7m、南東方向5.2mで、柱間寸法は南北方向1.2～2.1m、東西方向1.4～2.6mを測る。後者は北東方向7.1m、南東方向4.1mで、柱間寸法は南北1.0～1.5m、東西1.6～2.8mを測り、両棟ともやや不整形である。柱穴の平面は楕円形や円形を呈し、径25～40cm、検出面からの深さ15～30cmを測る。中世の建物と考えられる。

SB12(第10図) Ⅲ区・Ⅴ区の北端K5グリッドで、標高約7.85～8.0mを測る。規模は南北方向3間×東西方向2間の建物である。ほぼ南北を建物軸とする。南北方向5.7m、東西方向3.5mで、柱間寸法は1.7～2.0mを測る。柱穴の平面は楕円形や円形を呈し、径20～25cm、検出面からの深

第2節 遺 構

さ15～35cmを測る。柱筋は概ね整っている。1次調査の柱穴（P536）から14～15世紀の中世土師器が出土している。

SD 1（第7・10図） VI区北端で確認された南西に向かって直線的に延びる小規模な溝である。現存長1.7 m、幅0.64～0.70 m、検出面からの深さ0.12 mを測る。埋土は黒色粘土を基調とする。底面の高低差は南側が高く、北側が低い。須恵器・瓶（第12図1）が出土している。

SD401（第7・11図） III区南側でN 2・O 2グリッドにかけて確認されたSD1の南北方向に延びる溝の続きをVI区で検出した。現存長約13 m、幅69～98cm、検出面からの深さ15～26cmを測る。埋土はオリーブ褐色粘質土を基調とする。水流による堆積状況は認められなかった。底面の高低差は南側が高く、北側が低い。中世の片口鉢など（第12図3～5）が出土している。

SK 2（第7・11図） IV区H 8グリッドで確認された、長辺80cm、短辺65.7cm、深さ60.2cmの平面形状隅丸方形の土坑である。遺物は古代～中世の土器を主とする（第12図6）。

第3節 遺 物

遺物は、古代の土師器や須恵器を中心に1箱が出土した。遺構に伴う遺物は少なく、攪乱と包含層から出土した遺物が多くを占める（第12～13図、図版2）。

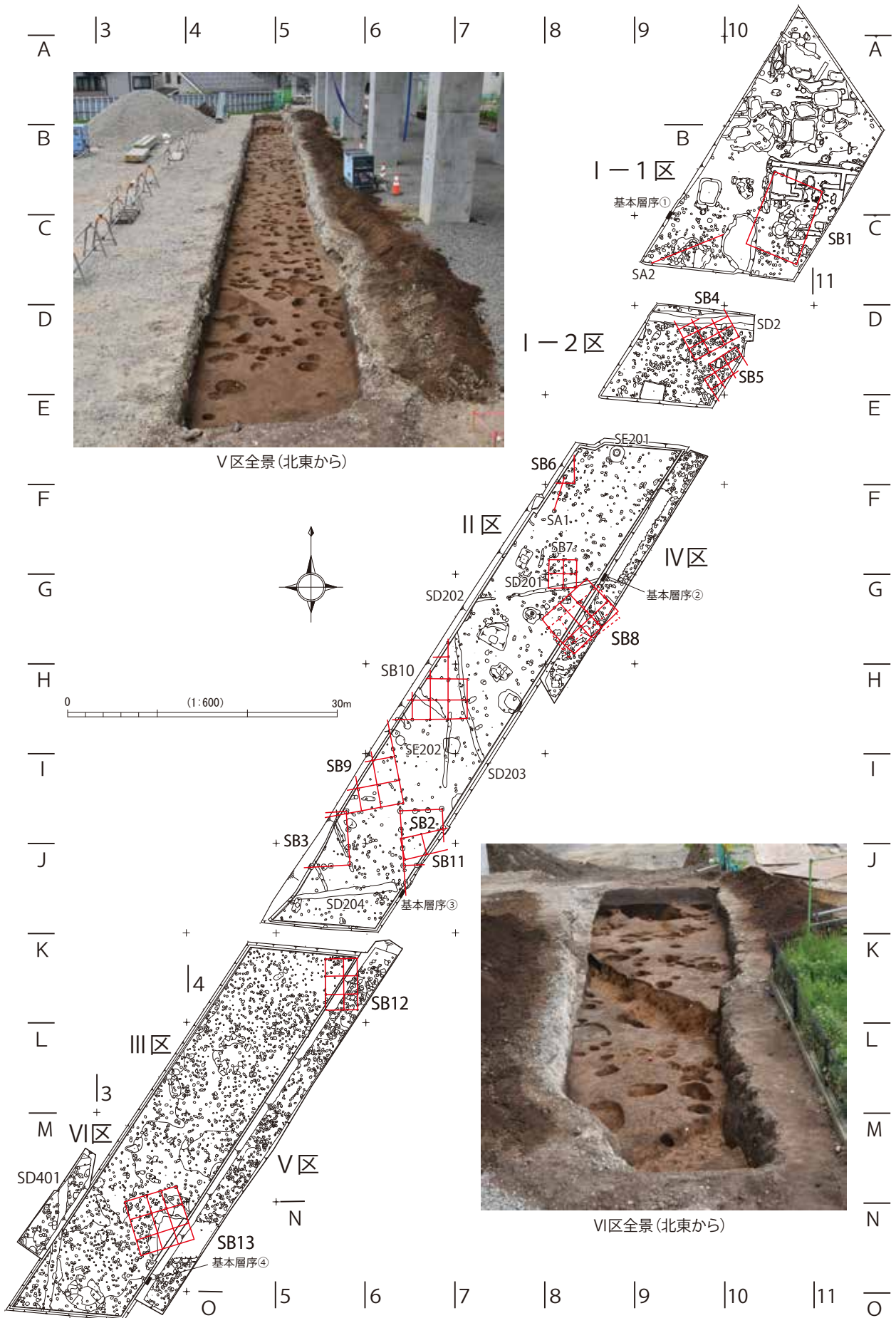
VI区出土遺物（第12図） 1はSD 1出土の須恵器で瓶と思われる。2は包含層出土の須恵器甕の胴部である。3～5はSD401からの出土で、いずれも中世に属する。3は陶器の片口鉢とみられる破片で、輪積み成形のロクロナデで仕上げる。底部の剥離がみられる。内面は自然釉が溜まり、外面も自然釉が一部付着している。4の陶器は内外面にユビオサエが顕著に見られ、内面に釉薬が垂れる。胎土が粗い砂質で、底部を指押さえて成形することから加賀焼の可能性のある壺である。回転糸切りのち高台貼付けを行う。ロクロナデ調整である。

IV区出土遺物（第12図） 6はSK 2出土の須恵器甕の胴部で、内面に同芯円のタタキの痕跡が認められる。7・8は包含層出土。7は須恵器有台坏の口縁部で、重ね焼き痕跡がみられる。8は須恵器の坏蓋である。9は須恵器瓶で内外面共に一部降灰の付着が見える。10はP21から出土した須恵器無台坏である。底部はヘラキリのちナデを施す。

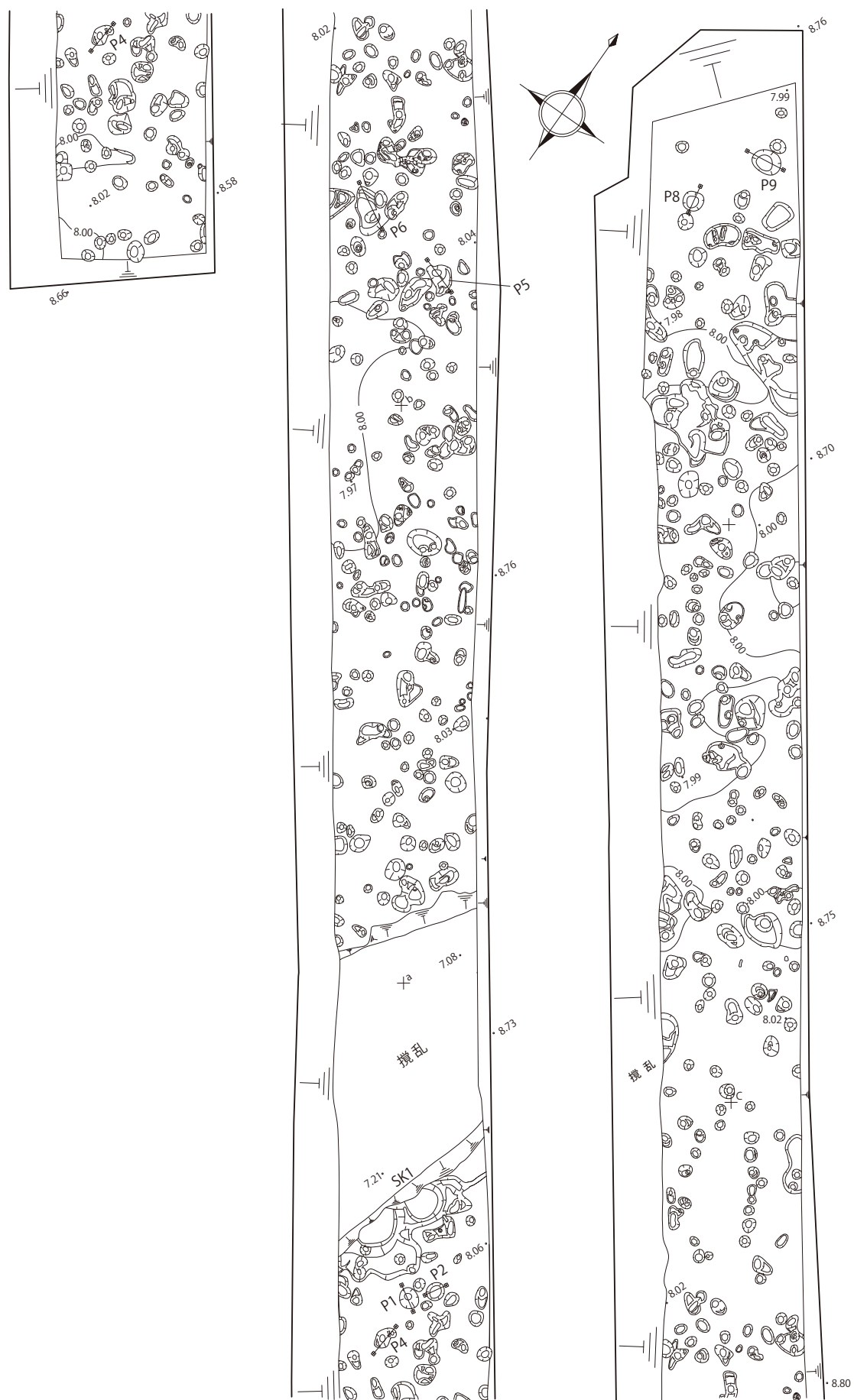
V区出土遺物（第13図） 11～17はSK 1から出土した。11～14は須恵器の坏身である。11は無台坏で、口縁部に重ね焼き痕跡が残る。12は有台坏で、口縁部に重ね焼き痕跡が残る。高台貼付け後にロクロナデ調整を行う。14は底部回転ヘラキリ、高台貼り付けのちロクロナデ調整である。古代の土器が多数を占めるが一部近世の遺物が混在し、15は近世陶器皿の口縁部である。16は高坏（土師器）などの脚部である。内面に黒斑がみられることから、正位置で焼成したものと判断できる。17は土師器甕の口縁である。

18～23、27は攪乱からの出土遺物である。18・19は須恵器坏蓋のつまみ部分、20～23は須恵器有台坏である。20・21・22の3個体はいずれも底部回転ヘラキリ、高台貼り付けのちロクロナデ調整である。23は下部がロクロケズリ、上部と内面がロクロナデ調整である。27は須恵器坏身の口縁部の破片である。

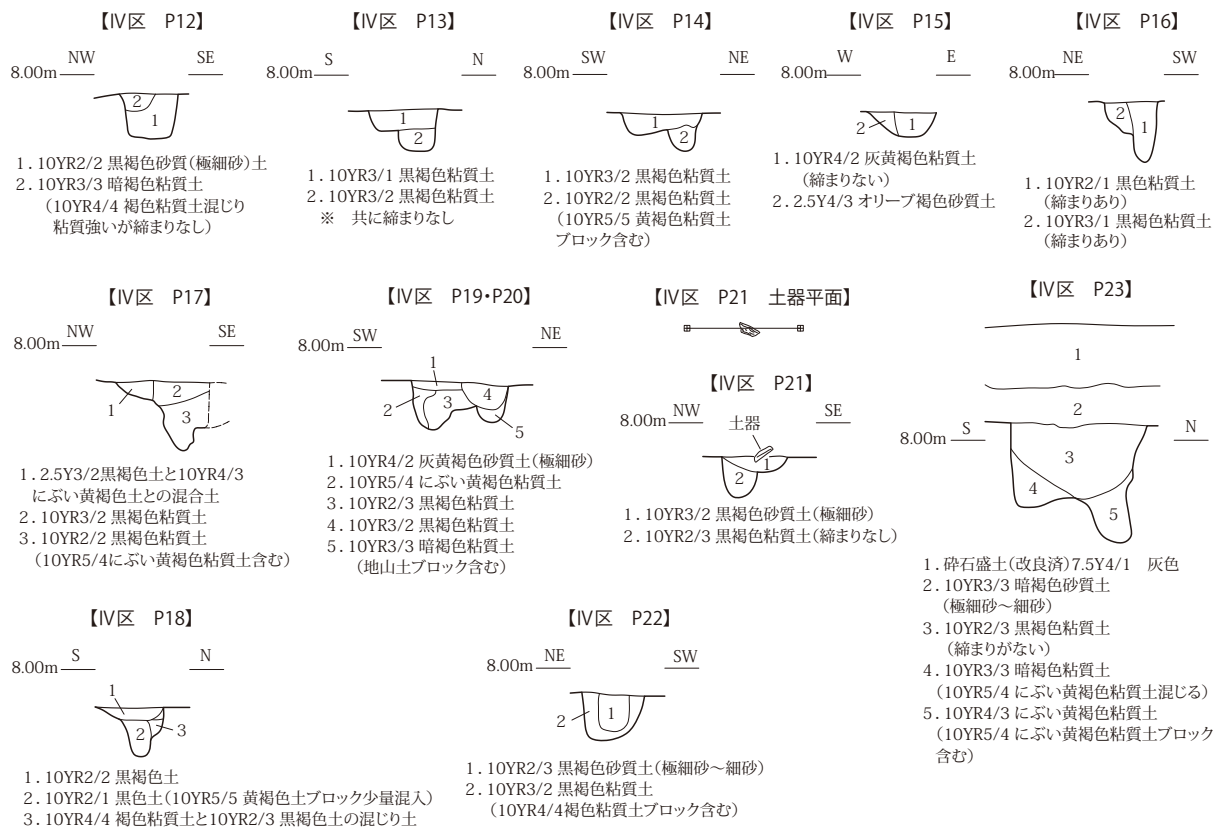
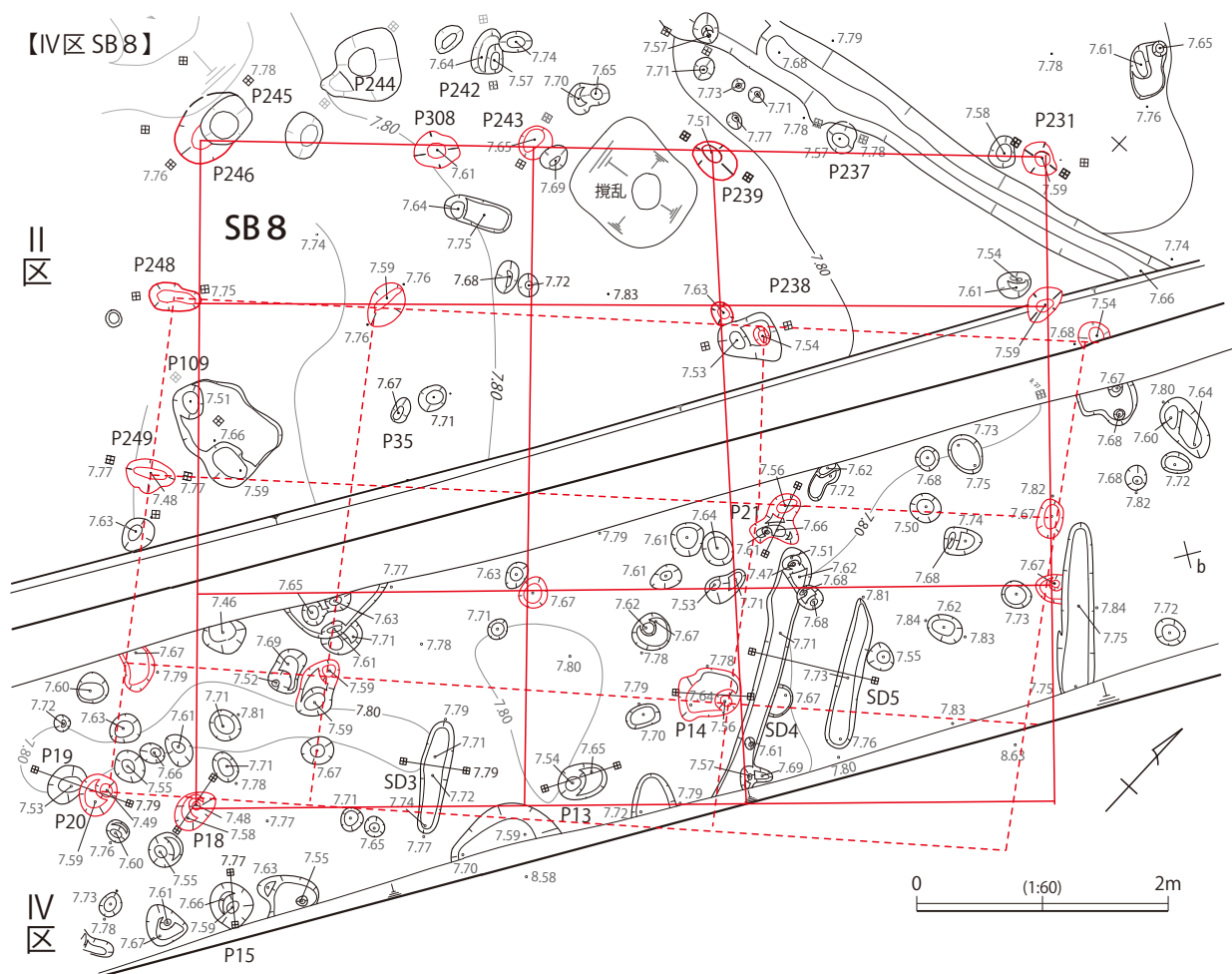
24～26、28、29は包含層から出土した遺物である。24は須恵器有台坏で、口縁部に蓋側の粘土塊が付着していることから、坏蓋と重ねて焼いていたことが想定できる。25は須恵器瓶の口縁部である。内外面共に丁寧なロクロナデ調整である。26は古墳時代後期の土師器甕の口縁部である。外面の摩耗により、調整はほとんどみられず、重ね焼き痕跡もみられない。28・29は須恵器甕の破片で、28は口縁部、29は胴部である。両資料とも内外面共にタタキ工具痕が残る。



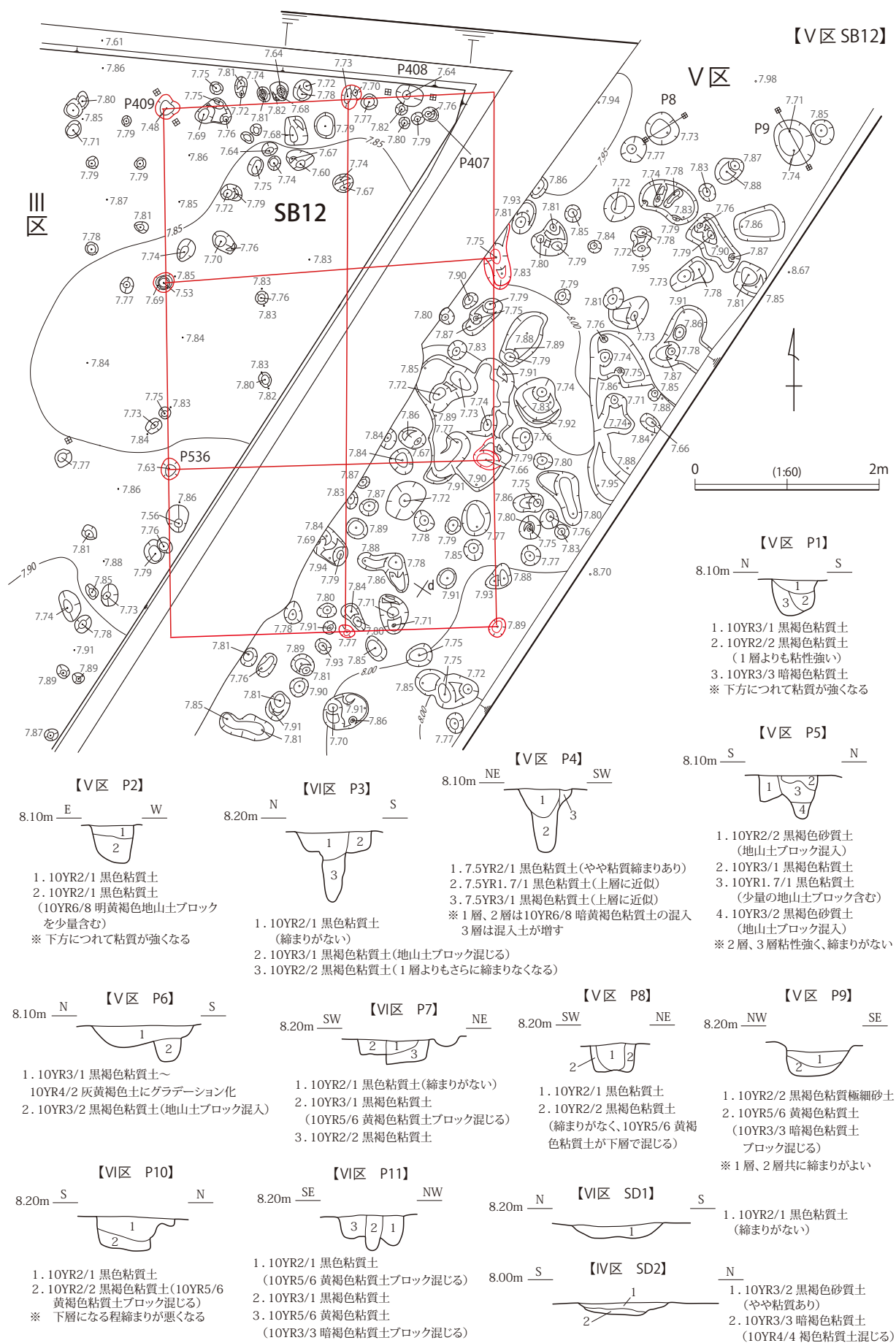
第6図 主要遺構配置図(S=1/600)



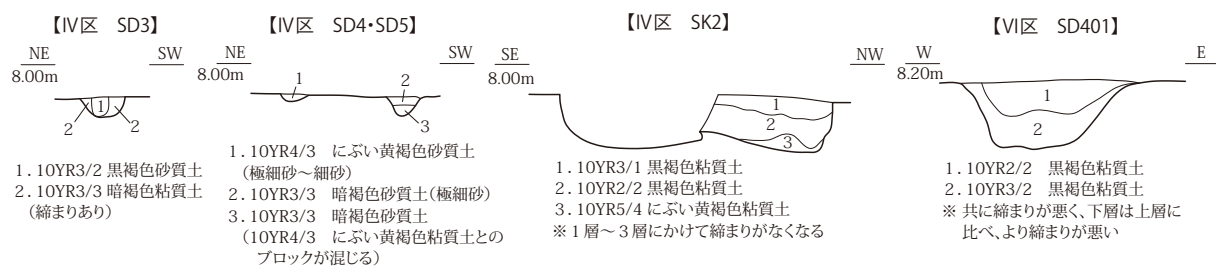
第8図 V区遺構配置図(S=1/100)



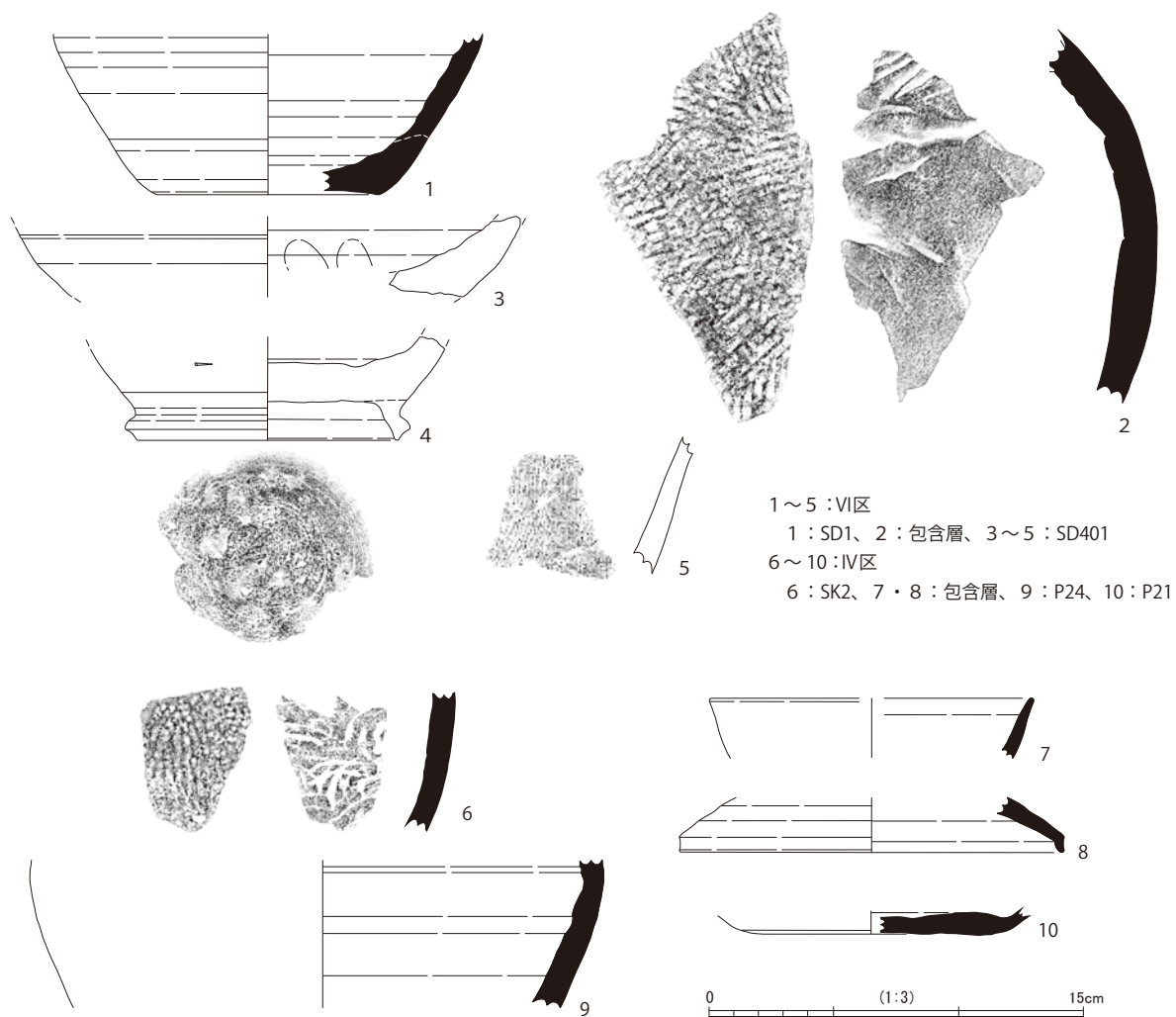
第 9 図 IV区SB8平面図・IV区ピット土層断面図(S=1/60)



第 10 図 V 区 SB12 平面図 ピット・溝土層断面図 (S=1/60)



第11図 IV区・VI区 土層断面図(S=1/60)



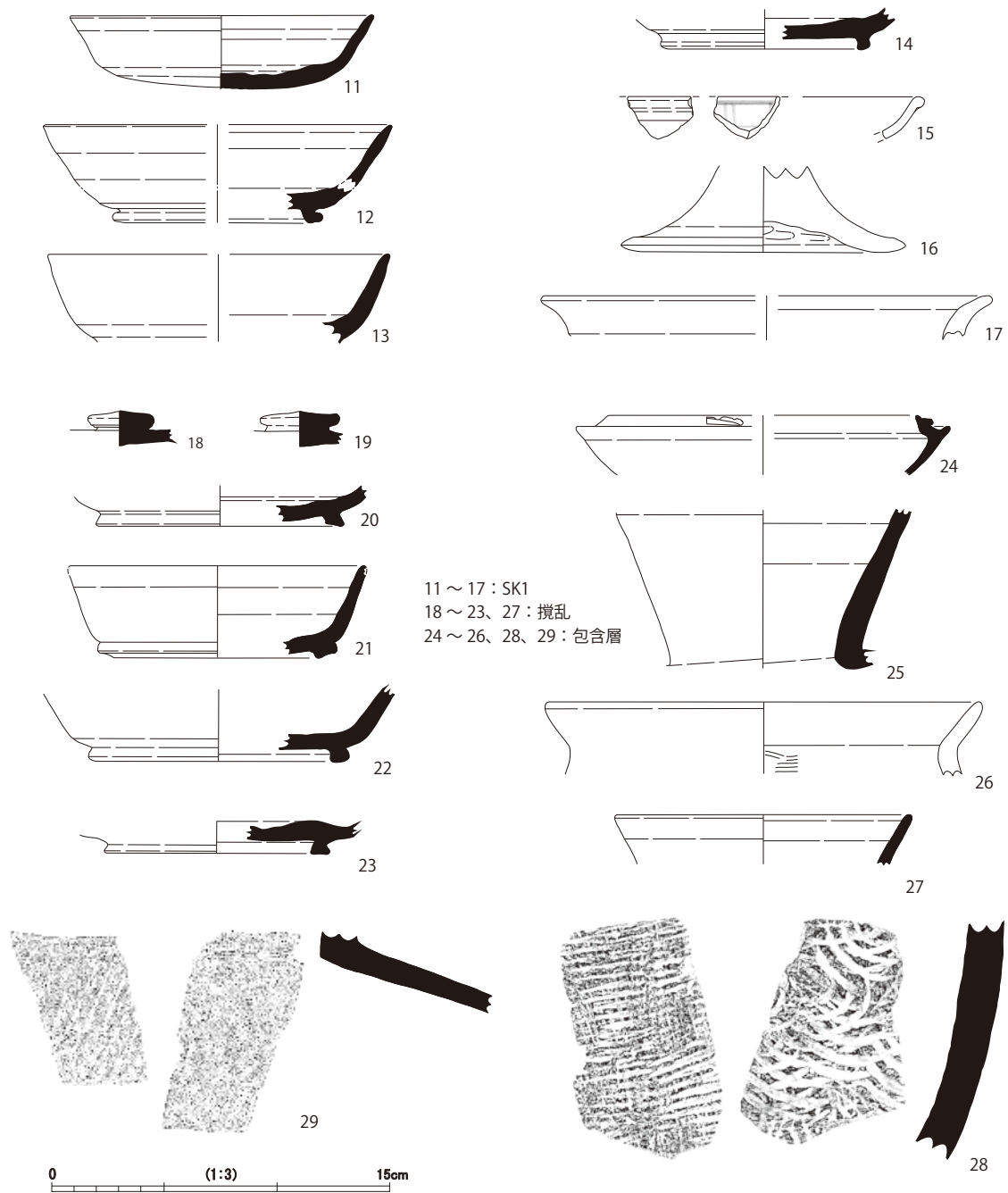
第12図 VI区・IV区出土遺物(S=1/3)



SD401 完掘状況 (南西から)



SD401 土層断面 (南から)



第13図 V区出土遺物 (S=1/3)



IV区 P21 土層断面 (土器出土状況、南西から)



V区 SK1 須恵器出土状況 (東から)

図版 番号	報告 番号	地区	グリ ッド	出土 遺構等	種類	器種	時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	色調 (内)	色調 (外)	胎土	焼成	調整 (内)	調整 (外)	遺存率	管理 番号	遺物 ID	備 考
12	1	VI	O2	SD1	須恵器	瓶	奈良・ 平安	—	(9.0)	(6.5)	明灰	灰～暗灰	明灰～明褐灰 礫少 粗砂並	良	ロクロナデ	ロクロナデ ケズ リナデ	底 2/12	2	MA00000 50711	
12	2	VI	N3	包含層	須恵器	壺か 模瓶	奈良・ 平安	—	—	(15.0)	黄灰	黄灰～灰	明灰 礫少 粗砂並	良	コテあて ナ デ	平行タタキ	小片	3	MA00000 50712	あて具痕ナデ消し
12	3	VI	B10	SD401	陶器	片口鉢	中世	—	—	3.3	にぶい 黄橙	にぶい 黄橙	灰黄褐 粗砂少	良	ロクロナデ 後指環痕	沈線 2 条 ロクロ ナデ	小片	26	MA00000 50735	外面自然釉 内面底部に自 然釉が滲まっている
12	4	VI	O2	SD401	陶器	壺	中世	—	(11.4)	(4.2)	灰黄褐 ～暗灰	暗灰	灰黄褐 粗砂多	良	ロクロナデ 圧痕	ロクロケズリ 高 台貼付 ロクロナ デ 回転糸切り	底 4/12	1	MA00000 50710	内面摩耗し露胎、 加賀焼か
12	5	VI	A11	SD401	土師器	不明	不明	—	—	—	にぶい 橙	にぶい 橙	粗砂微 細砂 雲母並	良	ナデ (摩耗)	ハケ	—	27	MA00000 50736	外面一部スス付着
12	6	IV	N3	SK02	須恵器	甕か	奈良・ 平安	—	—	(5.5)	灰	オリープ 灰	灰 礫少 粗砂並	良	同心円タタキ ヨコナデ	平行タタキ	小片	4	MA00000 50713	降灰、一部剥離
12	7	IV	D9	包含層	須恵器	坏	奈良・ 平安	(12.8)	—	(2.4)	灰	青灰 (口縁部)	細砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片	20	MA00000 50729	口縁部に重ね焼き痕
12	8	IV		包含層	須恵器	蓋	奈良・ 平安	15.3	—	(2.2)	灰	灰	細砂並	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口 1/12	19	MA00000 50728	
12	9	IV	J6	P24	須恵器	瓶	奈良・ 平安	—	—	(5.9)	オリープ 黒	オリープ 黒	粗砂微 細砂並	良	ロクロナデ	ロクロナデ	胴 2/12	6	MA00000 50715	内面降灰 外部一部降灰 胴 部径 22.5
12	10	IV	K5	P21	須恵器	無台坏	奈良・ 平安	—	11	—	明黄灰	明黄灰	浅黄橙～灰白 礫多 粗砂並	良	ロクロナデ	ロクロナデ 回転 ヘラ切り ナデ	底 6/12	5	MA00000 50714	
13	11	V	J6	SK1	須恵器	坏	奈良・ 平安	13.4	9.2	3.2	灰	灰	粒度普通 粗砂少 細砂 多	良	ロクロナデ	ロクロナデ 回転 ヘラ切り	7/12	8	MA00000 50717	底部板の目か 内面一部降 灰 口縁部重ね焼き痕
13	12	V	J5	SK1	須恵器	有台坏	奈良・ 平安	(15.6)	(9.4)	(4.2)	浅黄橙	浅黄橙 ～明灰	浅黄橙 礫少、 精緻だが砂粒 含む	良	ロクロナデ ナデ	ロクロナデ ロク ロケズリ ロクロ ナデ	小片	10	MA00000 50719	高台貼付 重ね焼き
13	13	V	J5	SK1	須恵器	有台坏	奈良・ 平安	(15.0)	—	(3.9)	明黄灰	明黄灰	明黄灰 礫少 粗砂並	良	ロクロナデ	ロクロナデ ロク ロケズリのちロク ロナデ	2/12	11	MA00000 50720	
13	14	V	I6	SK1	須恵器	有台坏	奈良・ 平安	—	(9.4)	(1.8)	明黄灰	明黄灰	にぶい灰白 粗砂だが礫含 む	良	ロクロナデ	ロクロナデ 回転 ヘラ切り	底 2/12	12	MA00000 50721	
13	15	V	J5	SK1	陶器	皿	近世	—	—	(1.9)	灰白	灰白	褐灰密 細砂並	良	釉：乳濁	細かい貫入あり	小片	9	MA00000 50718	施文：にぶい黄褐色を呈 する縞線 2 本、ゴスによ る縦線 3 条
13	16	V	J6	SK1	土師器	(脚部)	古墳	—	12.6	3.8	浅黄橙	浅黄橙	粒度普通 粗砂少 細砂 多	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底 4/12	7	MA00000 50716	底に黒炭か
13	17	V	D9	SK1	土師器	甕	奈良・ 平安	(19.8)	—	(2.0)	浅黄橙	浅黄橙	浅黄橙 礫少 粗砂並 赤色 白色粒少し混 ざる	良	ヨコナデ	ヨコナデ	口 3/12	21	MA00000 50730	
13	18	V	B9	カクラン	須恵器	蓋	奈良・ 平安	—	つまみ 径 2.9	1.5	灰	灰	粒度精緻 細砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ	—	24	MA00000 50733	
13	19	V	C10	カクラン	須恵器	蓋	平安	—	つまみ 径 3.5	(1.6)	明褐灰	オリープ 灰	明褐灰 細砂中	良	ナデ	ナデ	つまみ 10/12	23	MA00000 50732	被熱 自然釉
13	20	V	H6	カクラン	須恵器	有台坏	奈良・ 平安	—	11	(1.8)	褐灰	灰	細砂並	良	ロクロナデ	ロクロナデ	底 2/12	14	MA00000 50723	貼付高台
13	21	V	AB9	カクラン	須恵器	有台坏	奈良・ 平安	13	10.6	4.1	灰白	灰白	にぶい黄橙 細砂多 黒雲母か	良	ロクロナデ	ロクロナデ ロク ロケズリ	底 1/12	15	MA00000 50724	外面自然釉
13	22	V	E8	カクラン	須恵器	有台坏	奈良・ 平安	—	10.8	3.2	灰白	灰	粒度普通 粗砂少 細砂 少	良	ロクロナデ	ロクロナデ 回転 ヘラ切り	底 1/12	16	MA00000 50725	外面にわずかに自然釉
13	23	V		カクラン	須恵器	有台坏	奈良・ 平安	—	9.8	1.4	灰白	褐灰	粒度精緻 細砂中	良	ロクロナデ	ロクロナデ 回転 ヘラ切り	底 2/12	17	MA00000 50726	
13	24	V	J5	包含層	須恵器	坏	奈良・ 平安	(13.7)	—	(2.7)	灰	黄灰	精緻 細砂少	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口 1/12	30	MA00000 50739	外面降灰 重ね焼き痕 荒島！
13	25	V	A10	包含層	須恵器	平瓶	古墳	—	—	7.1	灰白	灰白	粒度精緻 細砂中	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口小片	29	MA00000 50738	外面に降灰
13	26	V	A11	包含層	土師器	甕	奈良・ 平安	19.2	—	(3.4)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂少 細砂 少	やや 良	ナデ ハケ (摩耗)	ナデ (摩耗)	口 1/12	28	MA00000 50737	
13	27	V	N3	カクラン	須恵器	坏	奈良・ 平安	12.8	—	(2.2)	黄灰	灰白	細砂少	やや 良	ロクロナデ	ロクロナデ	口 1/12	25	MA00000 50734	
13	28	V	C10	包含層	須恵器	甕	奈良・ 平安	—	—	(10.5)	灰	暗灰	明灰～灰 礫 少 粗砂並	良	同心円タタキ	平行タタキ	小片	22	MA00000 50731	
13	29	V	H6	包含層	須恵器	甕	奈良・ 平安	—	—	—	黄灰	にぶい黄 橙	にぶい黄橙 細砂多	良	ナデ 当て具 痕	タタキ	小片	13	MA00000 50722	被熱 外面降灰

第3表 出土遺物観察表

第4章 総 括

島遺跡の発掘調査は小松市教育委員会（以下、市教委）によって3回、県埋文センターが2回実施した。その成果をとりまとめ（第18図）、周辺遺跡と本遺跡の性格について述べる。

市教育委員会調査 市教委が実施した調査は、昭和58年度に市道部分（以下、S58調査）、平成7年度に農道部分（以下、H7調査）、平成23年度に個人住宅地（以下、H23調査）である。S58調査では堅穴状土坑5基、掘立柱建物2棟、柵跡3条が検出され、H7調査では堅穴状土坑5基、掘立柱建物1棟が確認された。H23調査では区画溝（SD401）を挟んで西側では、遺構が希薄だと考えられる。S58・H7調査では古墳時代後期～古代にかけての遺構を検出し、8世紀後半～9世紀前半頃の土師器、須恵器を中心に、弥生時代中期から14世紀代までの遺物を確認した。特に硯（透かし高台付円面硯や中空円面硯）や祭祀遺物（土馬）の出土から周辺に役人層の存在が想定される。また、生産関係の遺物（須恵器窯の焼台や轆轤口、鉄滓）が多数出土し、木場潟の対岸から南方の丘陵部に展開する南加賀古窯跡群や製鉄遺跡群との強い関係が指摘されている（川畑1998）。

県埋文センター調査 平成29年度調査（以下、H29調査）では、古墳時代終末期で掘立柱建物1

棟と柵1条を、奈良・平安時代で掘立柱建物2棟と区画溝を、中世では掘立柱建物10棟、柵1条、井戸2基、土坑、溝、小穴などを確認した。遺物の出土は極めて少なく、小破片や後世の混入がほとんどである。

市教委調査区の建物と合わせると、本遺跡における古代の集落の様相は、概ね田嶋編年（田嶋1988）Ⅱ3～Ⅴ1期（8世紀前半～9世紀前半）に最盛期がある。遺構配置や主軸方向などの情報から、Ⅰ期（古墳時代終末期）、Ⅱ期（奈良・平安時代）Ⅲ期（中世は4つに細分）、の計3時期6つの集落変遷を復元した（島田2019）。

令和2年度調査（以下、R2調査）では、Ⅲ期の掘立柱建物（SB8・12）とⅡ期の溝（SD401）の続きと古代～近世の遺物を含む土坑（SK2）を確認した。Ⅳ・Ⅴ区はⅠ～Ⅲ区と同様に小穴が密集する。

出土遺物 H29・R2調査で出土した遺物は、古代～中世の遺物が多くを占め、一部近世の遺物が混在する。SK2では古代～中世の土器と一部近世の陶磁器が確認されことから、長期的な土地利用が想定できる。市教委の調査では、鉄滓が集中する建物や大型掘立柱建物などの存在から手工業生産・政事にかかわる建物との評価ができ、透かし高台付円面硯や中空円面硯の存在から役人層の存在が想定できる。重要なのは須恵器の焼き台や鉄滓などの出土である。周辺の窯跡群操業に関わった工人の関係が示唆される。以上のことから一帯の手工業生産を管理するような人物の存在が想定できる。

立地と古代北陸道との関係 立地は古代の加賀三湖（柴山潟・今江潟・木場潟）の復元図（三浦2018）によると、木場潟は現在よりも倍以上広い範囲である。この内容に沿うと当時の島遺跡は木場潟のそばに位置していたことになる。

古代北陸道に関しては、考古学と文字資料双方からの指摘がある。文字資料では近年、平城京長屋王邸出土木簡の再釈読により「江沼郡淡津駅人神人」「石末呂一石」と報告がされている（渡辺2016）。この成果に伴って従来、潮（塩）津駅とされていた読みが「淡津駅」に訂正された。このことから、従来の認識では南加賀の古代北陸道は927年の延喜式段階では海岸沿いを通るルートが想定されているが、奈良時代前半段階では内陸部を通っていた可能性が指摘されている（鈴木2017）。



第14図 古代江沼郡の駅路と「淡津駅」推定地

考古学的視点から古代北陸道についての成果は近年蓄積されている。小松市に所在する大領遺跡の調査で8世紀後半～9世紀初頭の須恵器や土師器が出土し、幅約9.5m、路面幅約8m、約30mに渡り道路状遺構が検出された。本遺跡は加賀国淡津駅～安宅駅間に位置することを根拠に古代北陸道の一部と判断される（安中2021）。石川県内ではその他に津幡町加茂遺跡、金沢市観法寺遺跡、野々市市三日市A遺跡などでも古代北陸道に比定される路面幅7.5～9.5mの両側側溝を持つ道路状遺構が確認されている。このような遺跡の状況と上記した文字資料での研究成果を踏まえ、島遺跡周辺を

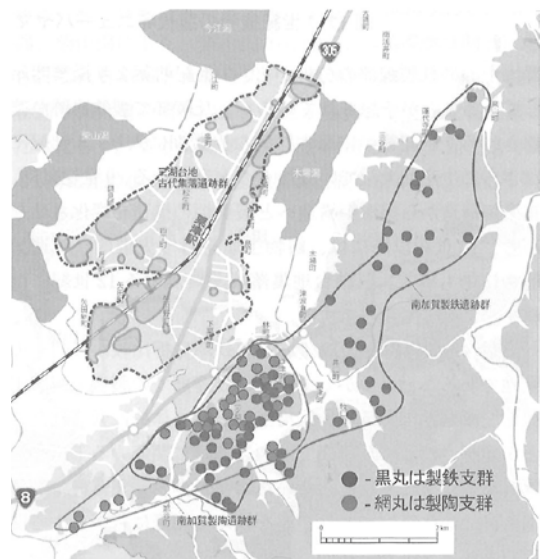
立地的観点から古代北陸道にかかわる駅や湊に関連した遺跡である可能性を想定している（三浦 2018・安中ほか 2022）。

生産関係遺跡 生産関連遺跡の情報から島遺跡の性格について考える。周辺の代表的な手工業生産遺跡は、南加賀古窯遺跡群の存在があげられる。小松市林町～加賀市松山にかけて 200 基以上が所在し、古墳時代後期～室町時代にかけて連綿と営まれた。また、場所を同じくして製鉄遺跡が数多く営まれ、範囲は木場潟東岸部の丘陵部までに及び、古代～中世にかけて営まれる。

三湖台台地では島遺跡を含む遺跡群として、手工業生産にかかわる様々な生産関連遺物が確認されている。このことから立地的な側面とあわせて周辺の手工業生産遺跡の運営を行う立場の人々が存在していた可能性が指摘されている（望月 2021）。

まとめ 以上、島遺跡に関わる周辺の遺跡と調査成果について概観した。これらのことから島遺跡は①官衙的性格を有し、②生産関連遺物の多数出土から周辺の生産遺跡の管理を行う、③立地の面から古代北陸道に関わる内水面交通の要所であった可能性、の以上 3 つの属性を持つことが考えられよう。

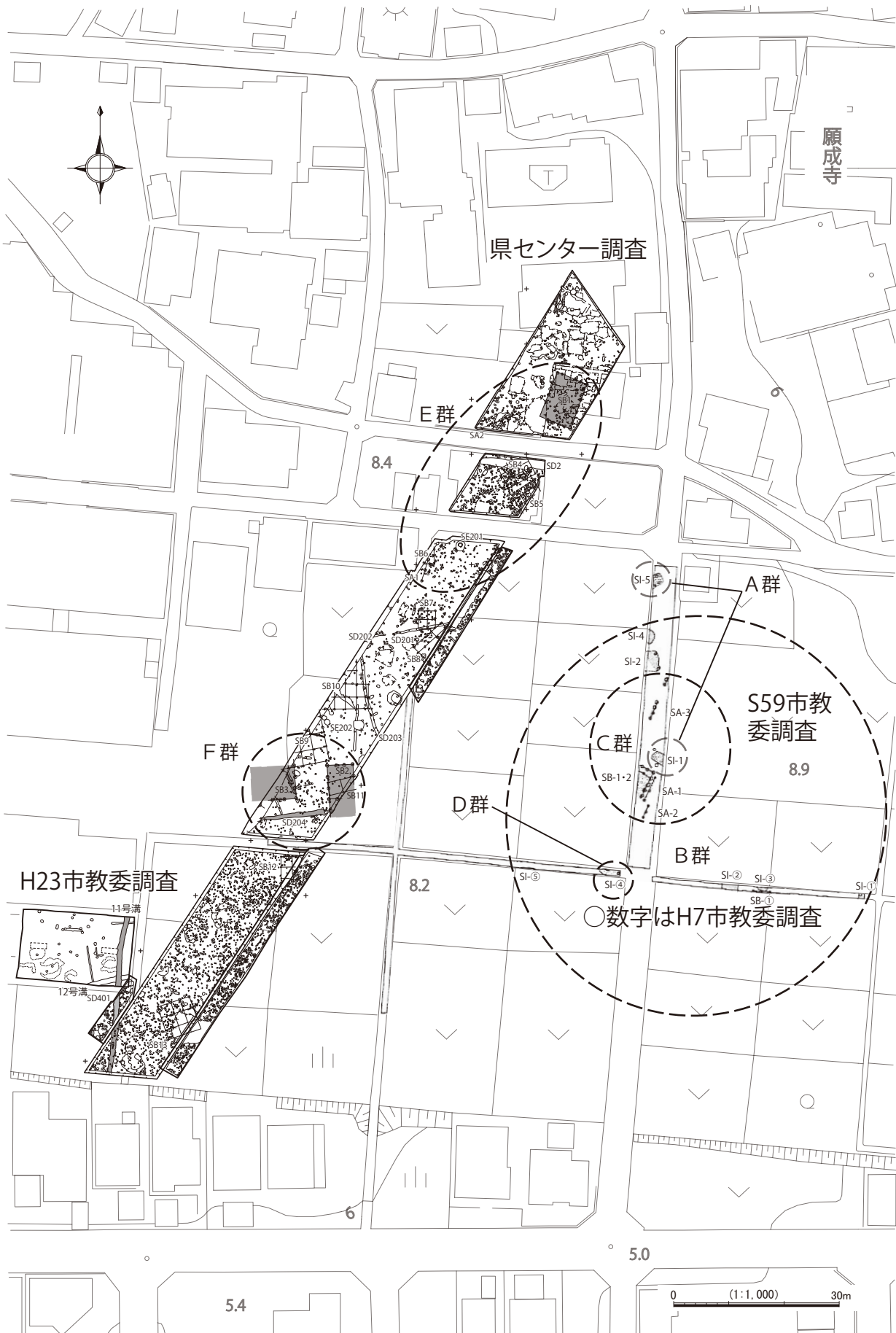
今後の発掘によって、周辺一帯の様相が判明するのを期待したい。



第15図 三湖台地集落群と南加賀製鉄陶遺跡群分布（望月2021）

引用・参考文献

- 川畑謙二ほか 1998 『島遺跡』 小松市教育委員会
- 小村 茂ほか 1979 『南加賀古窯遺跡群詳細分布調査』 小松市教育委員会
- 島田亮仁 2019 『島遺跡』 石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 鈴木景二 2017 「3 北陸道の交通と景観」『日本古代の道路と景観—馬家・官衙・寺—』 八木書店 435 - 452 頁
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定 加賀地域にみる 7 世紀から 11 世紀中頃にかけての土器群の推移」
『シンポジウム 北陸古代土器研究の現状と課題 報告篇』 1 - 4 頁
- 出越茂和 2021 「加賀の古代津湊と交通」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会 2021 年度金沢大会資料集』
143 - 150 頁
- 望月精司 1993 『ニッ梨豆岡向山古窯跡』 小松市教育委員会
- 望月精司 2021 「南加賀の渡来人集落と古代手工業生産～飛鳥時代のミヤケ的経営を探る～」『北陸と世界の考古学：
日本考古学協会 2021 年度金沢大会資料集』 151 - 158 頁
- 安中哲徳 2021 「古代北陸道はどこか？—小松市大領遺跡の道路状遺構から—」『北陸と世界の考古学：日本考古学協会
2021 年度金沢大会資料集』 435 頁
- 安中哲徳ほか 2022 『大領遺跡』 石川県教育委員会・（公財）石川県埋蔵文化財センター
- 三浦純夫 2018 「北陸道淡津駅と江沼郡の駅路」『実証の考古学（同志社大学考古学シリーズⅫ）』 461 - 472 頁
- 宮下幸夫・田嶋正和・藤田邦雄・垣内光次郎 1990 「中世加賀の窯業研究—加賀焼の現状と課題—」
『石川考古学研究会誌』 第 33 号 石川考古学研究会
- 宮田 明 2014 「島遺跡発掘調査」『小松市内遺跡発掘調査報告書 X』 石川県小松市教育委員会
- 渡辺晃宏 2016 「平城宮・京跡出土駅家関係木簡の再釈読」『奈良文化財研究所紀要（2016）』 独立行政法人国立文化財
機構奈良文化財研究所 34 - 35 頁



第16図 島遺跡の古代主要遺構図 (S=1/1,000)

報告書抄録

ふりがな	こまつし しまいせき2							
書名	小松市 島遺跡2							
副書名	北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号	11							
編著者名	新美祥人夢、山川史子							
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920 - 1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL (076) 229 - 4477							
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2025年3月21日							
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	面積	原因
しま 島遺跡	いしかわけんこまつし 石川県小松市 島町地内	17203	324900	36度 20分 54秒	136度 25分 50秒	20200413 ～ 20200521	290㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
しま 島遺跡	集落	奈良・平安時代	掘立柱建物、溝、 小穴	土師器、須恵器				
		鎌倉・室町時代	掘立柱建物、土 坑、溝、小穴	土師器、陶磁器、 石製品				
要約	月津台地上に営まれた集落跡で、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代を中心とする遺構を確認した。鎌倉・室町時代は集落が盛期となり、掘立柱建物などを確認した。出土遺物の大部分は奈良・平安時代に属する。							



(木場潟)

遺跡遠景（南東から・V区）



調査区俯瞰（IV区）



調査区俯瞰（V区）



調査区俯瞰（VI区）



能美市 西任田遺跡、中ノ庄遺跡 2
小松市 島遺跡 2

発行日 令和 7 年（2025）年 3 月 21 日

発行者 石川県教育委員会

〒 920-8575 石川県金沢市鞍月 1 丁目 1 番地
電話 076-225-1842（文化財課）

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒 920-1336 石川県金沢市中戸町 18 番地 1
電話 076-229-4477

E-mail daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社ショセキ